福島県文化財調査報告書第530集

一般国道115号相馬福島道路遺跡発掘調査報告７

上ノ台館跡（２次調査）
中室内遺跡（１・２次調査）
日照田遺跡
舘ノ前遺跡

２０１９年

福島県教育委員会
公益財団法人 福島県文化振興財団
国土交通省東北地方整備局福島河川国道事務所

一般国道115号相馬福島道路遺跡発掘調査報告７

上ノ台館跡（２次調査）
中室内遺跡（１・２次調査）
日照田遺跡
舘ノ前遺跡

序　　文

福島県教育委員会では、開発事業による埋蔵文化財の消失を避けるため、関係機関と協議を行い埋蔵文化財の保護と記録に努めております。

一般国道115号相馬福島道路は、常磐自動車道と東北縦貫自動車道を結ぶ約45kmの高規格幹線道路(自動車専用道路)であり、東日本大震災からの被災地の早期復興を図るリーディングプロジェクトとして位置づけられています。震災前に国道115号バイパスとして整備されていた相馬山上ＩＣ～霊山ＩＣ間を含む福島市から相馬市までの全線が、緊急整備されることになりました。

一般国道115号相馬福島道路建設用地内には、新発見のものを含む埋蔵文化財包蔵地が数多くあり、先人の貴重な文化遺産が所在しております。

埋蔵文化財は、それぞれの地域の歴史と文化に根ざした歴史的遺産であると同時に、我が国の歴史・文化等の正しい理解の基礎をなすものです。

福島県教育委員会では、相馬福島道路建設予定地内で確認された埋蔵文化財の保護・保存について開発機関と協議を重ね、遺跡の範囲や性格を確かめるための分布調査を行った結果をもとに、現状保存の困難な埋蔵文化財については記録として保存することとし、平成25年度から本発掘調査を実施してきました。

本報告書は、一般国道115号相馬福島道路(霊山～福島)の建設に伴い、平成29年度に行った伊達市霊山町下小国地区に所在する上ノ台館跡(２次調査)、伊達市保原町上保原地区に所在する中室内遺跡(1次調査)、桑折町松原地区に所在する日照田遺跡・舘ノ前遺跡、平成30年度に行った伊達市保原町上保原地区に所在する中室内遺跡(２次調査)の本発掘調査の成果をまとめたものです。この報告書が県民の皆様の文化財に対する理解を深め、地域の歴史を解明するための基礎資料として、さらには生涯学習などの資料として広く活用されますれば幸いです。

最後に、本発掘調査から報告書の作成にあたり、御協力・御尽力いただいた国土交通省東北地方整備局福島河川国道事務所、伊達市教育委員会、桑折町教育委員会、公益財団法人福島県文化振興財団をはじめとする関係機関及び関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成31年３月

福島県教育委員会

教育長　　鈴　木　淳　一

あ い さ つ

公益財団法人福島県文化振興財団では、福島県教育委員会からの委託により、県内の大規模な開発に先立ち、開発対象地内にある埋蔵文化財の調査を実施しています。

本報告書は、一般国道115号相馬福島道路(霊山～福島)の建設に伴い、平成29年度に本発掘調査を行った伊達市霊山町下小国地区に所在する上ノ台館跡(２次調査)、伊達市保原町上保原地区に所在する中室内遺跡(１次調査)、桑折町松原地区に所在する日照田遺跡・舘ノ前遺跡、平成30年度に本発掘調査を行った伊達市保原町上保原地区に所在する中室内遺跡(２次調査)の調査成果をまとめたものです。

上ノ台館跡(２次調査)では、中世の建物跡及び柵列や塀の跡を確認しました。

中室内遺跡(１・２次調査)では、古墳時代前期の集落跡、堀跡で区画された中世の屋敷跡が確認され、当該地域にとって貴重な成果を得ることが出来ました。

日照田遺跡では、縄文時代の落し穴や中世の建物跡が見つかり、流路跡からは平安時代の土師器・須恵器が多く出土しました。

舘ノ前遺跡では、縄文時代の落し穴が見つかり、縄文時代の狩猟の場であったとことがわかりました。

今後、この報告書を郷土の歴史研究の基礎資料として、広く活用していただければ幸いに存じます。

おわりに、この調査に御協力いただきました国土交通省東北地方整備局福島河川国道事務所、伊達市、桑折町ならびに地域住民の皆様に深く感謝申し上げますと共に、当財団の事業の推進につきまして、今後とも一層の御理解と御協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成31年３月

公益財団法人　福島県文化振興財団
理事長　杉　昭　重

緒　　言

1　本書は、平成29・30年度に実施した一般国道115号相馬福島道路（霊山～福島）遺跡発掘調査報告書である。

2　本書には以下に記す遺跡の調査成果を収録した。

上ノ台館跡	福島県伊達市霊山町下小国字上ノ台	埋蔵文化財番号　0721300654
中室内遺跡	福島県伊達市保原町上保原字中室内	埋蔵文化財番号　0721300329
日照田遺跡	福島県伊達郡桑折町大字松原字日照田	埋蔵文化財番号　0730100107
舘ノ前遺跡	福島県伊達郡桑折町大字松原字舘ノ前	埋蔵文化財番号　0730100106

3　本事業は、福島県教育委員会が国土交通省東北地方整備局福島河川国道事務所の委託を受けて実施し、調査にかかる費用は国土交通省東北地方整備局福島河川国道事務所が負担した。

4　福島県教育委員会は、本発掘調査を公益財団法人福島県文化振興財団に委託して実施した。

5　公益財団法人福島県文化振興財団では、遺跡調査部の下記の職員を配置して調査にあたった。

平成29年度

専門文化財主査　丹治　篤嘉　　文化財主査　渡邉　春喜　　文化財主査　廣川　紀子

文化財主査　　草野　潤平（公益財団法人山形県埋蔵文化財センターより出向）

文化財主事　　鶴見　諒平　　主　　事　枝松　雄一郎

平成30年度

専門文化財主査　丹治　篤嘉

文化財主査　　初山　孝行（公益財団法人とちぎ未来づくり財団より出向）

文化財副主査　　鶴見　諒平　　主　　事　枝松　雄一郎

6　本書の執筆は、担当職員が分担して行い、各文末に文責を記した。

7　本書に使用した地図は、国土交通省国土地理院発行の縮尺1/50,000の地形図（関、桑折、福島、保原）、縮尺1/200,000の地勢図（福島）を複製したもの、並びに同省東北地方整備局福島河川国道事務所が製作した工事用地図を基としたものである。

8　本書に掲載した自然科学分析、上ノ台館跡の地形測量は、次の機関に委託して実施し、その結果を掲載している。

出土加工材・炭化材の樹種同定・放射性炭素年代測定：株式会社　加速器分析研究所

上ノ台館跡の地形測量：株式会社　ふたば

9　本書に収録した調査記録および出土資料は、福島県教育委員会が保管している。

10　発掘調査および報告書の作成に際して、次の機関等から協力・助言を頂いた。

伊達市教育委員会　　桑折町教育委員会

用　　例

1　本書における遺構図版の用例は、以下のとおりである。

(1) 方　　位　遺構図・地形図の方位は世界測地系で設定した座標北を示す。座標は、国土座標第Ⅸ系に基づき、数値はその座標値である。また、表記がない遺構図はすべて本書の天を北とした。

(2) 標　　高　高度は、標高で示した。

(3) 縮　　尺　各挿図中に縮小率を示した。

(4) ケ　　バ　遺構内の傾斜部は「 ⅏ 」、相対的に緩傾斜の部分には「 ⅏ 」、後世の撹乱部や人為的な削土部は「 ⅏ 」の記号で表現した。

(5) 土　　層　遺構外堆積土は大文字のＬとローマ数字で、遺構内堆積土は小文字のℓと算用数字で表記した。

（例）遺構外堆積土…ＬⅠ・ＬⅡ　　遺構内堆積土…ℓ１・ℓ２

(6) 土　　色　土層注記に使用した土色は、小山正忠・竹原秀雄編著、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』を用いた。

(7) 網　　点　各挿図中に用例を示した。

(8) 遺 構 番 号　当該遺構は正式名称、その他の遺構は記号化した略称で記載した。

2　本書における遺物図版の用例は、以下のとおりである。

(1) 縮　　尺　各挿図中に縮小率を示した。

(2) 土 器 断 面　須恵器の断面は黒塗り、灰釉陶器はグレーとした。粘土積み上げ痕を一点鎖線で示した。

(3) 網　　点　　は黒色処理を示す。それ以外は各挿図中に用例を示した。

(4) 遺 物 番 号　挿図ごとに通し番号を付し、本文中では下記のように省略した。

（例）図１の２番の遺物…図１－２

遺物写真中で遺物に付した番号は、挿図中の遺物番号と一致する。

（例）１－２…図１－２

(5) 遺物計測値　（　）内の数値は推定値、［　］内の数値は遺存値を示す。

3　本書で使用した略号は、以下のとおりである。

伊達市……ＤＴ	桑折町……ＱＲ	上ノ台館跡…ＫＮＴ	中室内遺跡…ＮＭＵ
日照田遺跡…ＨＤＤ	舘ノ前遺跡…ＴＮＭ	グリッド……Ｇ	遺構外堆積土……Ｌ
遺構内堆積土……ℓ	竪穴住居跡……ＳＩ	掘立柱建物跡…ＳＢ	柱列跡……ＳＡ
土坑……ＳＫ	溝跡・堀跡……ＳＤ	井戸跡……ＳＥ	特殊遺構……ＳＸ
小穴……Ｐ			

4　引用・参考文献は執筆者の敬称を略し、各編末に掲載した。

目　　次

序章　遺跡の環境と調査経過

第１節　調査に至る経緯……1
第２節　地理的環境……7
第３節　歴史的環境……11
第４節　調 査 方 法……20

第１編　上ノ台館跡（２次調査）

第１章　遺跡の位置と調査経過

第１節　遺跡の位置と現況……23
第２節　調 査 経 過……23

第２章　発見された遺構と遺物

第１節　調査成果の概要と基本土層……25
調査成果の概要(25)　基本土層(28)
第２節　竪 穴 住 居 跡……28
１号住居跡(28)
第３節　掘立柱建物跡……30
１号建物跡(30)　２号建物跡(32)
第４節　土　　坑……34
４号土坑(34)　５号土坑(34)　６号土坑(34)　７号土坑(35)
８号土坑(35)　９号土坑(35)
第５節　溝　　跡……36
３号溝跡(36)　４号溝跡(38)
第６節　柱 列 跡……38
１・２号柱列跡(38)　３号柱列跡(40)　４号柱列跡(41)　５号柱列跡(42)
６号柱列跡(43)　７号柱列跡(45)
第７節　特 殊 遺 構……46
１号特殊遺構(46)　２号特殊遺構(47)　３号特殊遺構(48)
第８節　小　　穴……50

第３章　総　　括……52

第２編　中室内遺跡（１・２次調査）

第１章　遺跡の位置と調査経過

第１節　遺跡の位置と現況……55
第２節　調 査 経 過……55

第２章　発見された遺構と遺物
第１節　調査成果の概要と基本土層……58
調査成果の概要(58)　基本土層(58)
第２節　竪 穴 住 居 跡……61
１号住居跡(61)　２号住居跡(62)　３号住居跡(63)　４・６号住居跡(65)
５号住居跡(69)　７号住居跡(73)　８号住居跡(77)
第３節　掘立柱建物跡……78
１号建物跡(80)　２号建物跡(80)　３号建物跡(83)　４号建物跡(84)
５号建物跡(86)　６号建物跡(88)
第４節　土　　坑……89
１号土坑(89)　２号土坑(89)　３号土坑(89)　４号土坑(90)
５号土坑(90)　６号土坑(90)　７号土坑(92)　８号土坑(92)
９号土坑(92)　10 号土坑(93)　11 号土坑(93)　12 号土坑(93)
13 号土坑(93)　14 号土坑(95)　15 号土坑(95)　16 号土坑(96)
17 号土坑(96)　18 号土坑(96)　19 号土坑(96)　20 号土坑(98)
21 号土坑(98)　22 号土坑(98)　23 号土坑(98)　24 号土坑(100)
25 号土坑(100)　26 号土坑(100)　27 号土坑(102)
第５節　堀 跡 ・ 溝 跡 …… 102
１号堀跡(102)　２号溝跡(108)　３号溝跡(111)
４・８・９・13 号溝跡(113)　５号溝跡(115)　６号溝跡(115)
７号溝跡(116)　10 号溝跡(117)　11 号溝跡(117)　12 号溝跡(117)
14 号溝跡(119)　15 号溝跡(121)　16 号溝跡(122)　17 号溝跡(122)
第６節　井　戸　跡…… 124
１号井戸跡(124)　２号井戸跡(125)
第７節　特 殊 遺 構…… 126
１号特殊遺構(126)
第８節　小　穴　群…… 127
第９節　遺構外出土遺物…… 138
第３章　総　　括……139

第３編　日 照 田 遺 跡

第１章　遺跡の位置と調査経過
第１節　遺跡の位置と現況…… 145
第２節　調 査 経 過…… 145
第２章　発見された遺構と遺物
第１節　調査成果の概要と基本土層…… 148
調査成果の概要(148)　基本土層(148)
第２節　掘立柱建物跡…… 150
１号建物跡(150)

第３節　土　　坑…… 152
１号土坑(152)　２号土坑(152)　３号土坑(153)　４号土坑(153)
５号土坑(153)　６号土坑(155)　７号土坑(155)　８号土坑(156)
９号土坑(156)　10 号土坑(156)　11 号土坑(158)　12 号土坑(158)
13 号土坑(160)
第４節　溝　　跡…… 160
１号溝跡(160)
第５節　特 殊 遺 構…… 162
１号特殊遺構(162)　２号特殊遺構(164)　３号特殊遺構(166)
第６節　小 穴 群…… 168
第７節　流 路 跡…… 171
第３章　総　　括……191

第４編　舘 ノ 前 遺 跡

第１章　遺跡の位置と調査経過
第１節　遺跡の位置と現況…… 197
第２節　調 査 経 過…… 198
第２章　発見された遺構と遺物
第１節　調査成果の概要と基本土層…… 199
調査成果の概要(199)　基本土層(199)
第２節　土　　坑…… 199
１号土坑(199)　２号土坑(201)　３号土坑(202)　４号土坑(203)
第３節　溝　　跡…… 203
１号溝跡(203)　２号溝跡(205)
第４節　特 殊 遺 構…… 205
１号特殊遺構(205)
第５節　流 路 跡…… 206
第６節　遺構外出土遺物…… 209
第３章　総　　括……210

付　編　自然科学分析

第１章　日照田遺跡出土炭化材の自然科学分析
第１節　樹 種 同 定…… 213
第２節　放射性炭素年代（ＡＭＳ測定）…… 218
第２章　舘ノ前遺跡出土炭化材の自然化学分析
第１節　樹 種 同 定…… 223
第２節　放射性炭素年代（ＡＭＳ測定）…… 224

挿図・表目次

序章　遺跡の環境と調査経過

［挿図］

図１　一般国道115号相馬福島道路位置図 ……１
図２　道路工事計画図……２
図３　上ノ台館跡周辺地形分類図……８
図４　中室内・日照田・舘ノ前遺跡周辺地形分類図……10
図５　上ノ台館跡周辺の遺跡位置図……12
図６　中室内・日照田・舘ノ前遺跡周辺の遺跡位置図……15

［ 表 ］

表１－１　上ノ台館跡周辺の遺跡一覧……13
表１－２　上ノ台館跡周辺の遺跡一覧……14
表２－１　中室内・日照田・舘ノ前遺跡周辺の遺跡一覧……17
表２－２　中室内・日照田・舘ノ前遺跡周辺の遺跡一覧……18
表２－３　中室内・日照田・舘ノ前遺跡周辺の遺跡一覧……19

第１編　上ノ台館跡（２次調査）

［挿図］

図１　調査区位置図……24
図２　遺構配置図・基本土層……26
図３　上ノ台館跡１・２次調査区全体図……27
図４　１号住居跡・出土遺物……29
図５　１号建物跡……31
図６　２号建物跡……33
図７　４～９号土坑、出土遺物……36
図８　３・４号溝跡……37
図９　１・２号柱列跡……39
図10　３・４号柱列跡……41
図11　５号柱列跡……43
図12　６号柱列跡……44
図13　７号柱列跡……45
図14　１号特殊遺構……47
図15　２号特殊遺構……48
図16　３号特殊遺構・出土遺物……49
図17　小穴・出土遺物……51

［ 表 ］

表１　小穴一覧……50

第２編　中室内遺跡（１・２次調査）

［挿図］

図１　調査区位置図……56
図２　遺構配置図……59
図３　基本土層……60
図４　１号住居跡・出土遺物……61
図５　２号住居跡……63
図６　３号住居跡……64

図７　４・６号住居跡（１）……65
図８　４・６号住居跡（２）……66
図９　４・６号住居跡（３）……67
図10　５号住居跡（１）……70
図11　５号住居跡（２）……71
図12　５号住居跡出土遺物状況……72
図13　５号住居跡出土遺物……73
図14　７号住居跡（１）……74
図15　７号住居跡（２）……75
図16　７号住居跡（３）、出土遺物……76
図17　８号住居跡（１）……78
図18　８号住居跡（２）……79
図19　１号建物跡……81
図20　２号建物跡……82
図21　３号建物跡……83
図22　４号建物跡……85
図23　５号建物跡……87
図24　６号建物跡……88
図25　１～７号土坑……91
図26　８～13・15・16号土坑……94
図27　14・17・18号土坑……97
図28　19～24号土坑……99
図29　25～27号土坑、土坑出土遺物…… 101
図30　１号堀跡（１）…… 103
図31　１号堀跡（２）…… 104
図32　１号堀跡（３）…… 105
図33　１号堀跡（４）…… 106
図34　１号堀跡出土遺物…… 107
図35　２・３・５・14～17号溝跡全体図…… 109
図36　２号溝跡…… 110
図37　２号溝跡出土遺物…… 111
図38　３号溝跡…… 112
図39　４・８・９・13号溝跡…… 114
図40　５号溝跡…… 116
図41　６・７・10号溝跡、６号溝跡出土遺物… 118
図42　11・12号溝跡…… 119
図43　14号溝跡（１）…… 120
図44　14号溝跡（２）…… 121
図45　15～17号溝跡、15号溝跡出土遺物…… 123
図46　１・２号井戸跡、１号井戸跡出土遺物… 124
図47　１号特殊遺構…… 126
図48　小穴群全体図…… 128
図49　小穴群①…… 129
図50　小穴群②…… 130
図51　小穴群③…… 131
図52　小穴群④…… 132
図53　小穴群⑤…… 133
図54　小穴群⑥…… 134
図55　小穴群⑦、Ｇ２Ｐ２出土遺物…… 135
図56　遺構外出土遺物…… 138
図57　中室内遺跡周辺の地籍図…… 140
図58　堀跡推定図…… 141

［ 表 ］

表１　小穴一覧（西部）…… 136
表２　小穴一覧（東部）…… 137

第３編　日 照 田 遺 跡

［挿図］

図１　調査区位置図…… 146
図２　基本土層…… 148
図３　遺構配置図…… 149
図４　１号建物跡・出土遺物…… 151
図５　１～６号土坑…… 154
図６　７～10号土坑…… 157
図７　11～13号土坑、土坑出土遺物…… 159
図８　１号溝跡・出土遺物…… 161
図９　１号特殊遺構…… 162
図10　１号特殊遺構出土遺物…… 163
図11　２号特殊遺構・出土遺物…… 165
図12　３号特殊遺構・出土遺物…… 167

図13　小穴群・出土遺物…… 169
図14　流路跡（１）…… 172
図15　流路跡（２）…… 173
図16　流路跡（３）…… 174
図17　流路跡（４）…… 175
図18　流路跡出土遺物（１）…… 177
図19　流路跡出土遺物（２）…… 178
図20　流路跡出土遺物（３）…… 180
図21　流路跡出土遺物（４）…… 181
図22　流路跡出土遺物（５）…… 182
図23　流路跡出土遺物（６）…… 183
図24　流路跡出土遺物（７）…… 185
図25　流路跡出土遺物（８）…… 186
図26　流路跡出土遺物（９）…… 188
図27　流路跡出土遺物(10)…… 189
図28　流路跡出土遺物(11)…… 190
図29　日照田遺跡周辺の須恵器窯跡・社寺跡… 193

［ 表 ］

表１　小穴一覧…… 170

第４編　舘ノ前遺跡

［挿図］

図１　調査区位置図…… 197
図２　Ⅰ区遺構配置図・基本土層…… 200
図３　Ⅱ区遺構配置図・基本土層…… 201
図４　１～４号土坑…… 202
図５　１・２号溝跡…… 204
図６　１号特殊遺構・出土遺物…… 206
図７　流路跡（１）…… 207
図８　流路跡（２）・出土遺物…… 208
図９　遺構外出土遺物…… 209

付　編　自然科学分析

［挿図］

図１　日照田遺跡出土木材の顕微鏡写真（１）… 214
図２　日照田遺跡出土木材の顕微鏡写真（２）… 215
図３　日照田遺跡出土木材の顕微鏡写真（３）… 216
図４　日照田遺跡出土木材の顕微鏡写真（４）… 217
図５　暦年較正年代グラフ（１）…… 221
図６　暦年較正年代グラフ（２）…… 222
図７　暦年較正年代グラフ
（マルチプロット図、参考）…… 222
図８　舘ノ前遺跡出土木材の顕微鏡写真…… 224
図９　暦年較正年代グラフ…… 226
図10　暦年較正年代グラフ
（マルチプロット図、参考）…… 226

［ 表 ］

表１　日照田遺跡出土炭化材・木材の樹種…… 214
表２　放射性炭素年代測定結果（１）…… 220
表３　放射性炭素年代測定結果（２）…… 220
表４　舘ノ前遺跡出土木材の樹種…… 223
表５　放射性炭素年代測定結果（１）…… 226
表６　放射性炭素年代測定結果（２）…… 226

写真目次

第１編　上ノ台館跡（２次調査）

1　調査区全景…… 229
2　調査区全景…… 230
3　調査区遠景…… 230
4　１号住居跡全景…… 231
5　１号住居跡…… 231
6　１号建物跡…… 232
7　２号建物跡…… 233
8　４～９号土坑…… 234
9　３号溝跡検出…… 235
10　１号特殊遺構…… 235
11　２号特殊遺構全景…… 236
12　３号特殊遺構全景…… 236
13　１・２号柱列跡…… 237
14　４号柱列跡全景…… 238
15　１号住居跡、８号土坑、３号特殊遺構、小穴出土遺物…… 238

第２編　中室内遺跡（１・２次調査）

1　調査区遠景…… 241
2　調査区遠景…… 241
3　調査区全景…… 242
4　基本土層…… 242
5　調査区西部全景…… 243
6　調査区西部竪穴住居跡集中箇所…… 243
7　調査区東部…… 244
8　調査区東部１号堀跡…… 244
9　１号住居跡全景…… 245
10　２号住居跡全景…… 245
11　２号住居跡…… 246
12　３号住居跡…… 246
13　４号住居跡全景…… 247
14　４号住居跡…… 247
15　４～６号住居跡掘形…… 248
16　４・６号住居跡掘形…… 248
17　４～６号住居跡…… 249
18　４・６号住居跡掘形…… 249
19　４・６号住居跡柱穴…… 250
20　５号住居跡全景…… 250
21　５号住居跡P１遺物出土状況…… 251
22　５号住居跡…… 251
23　５号住居跡柱穴…… 252
24　５号住居跡掘形全景…… 252
25　７号住居跡…… 253
26　７号住居跡掘形全景…… 253
27　７・８号住居跡…… 254
28　８号住居跡掘形全景…… 254
29　１号建物跡全景…… 255
30　１号建物跡…… 255
31　２号建物跡全景…… 256
32　２号建物跡…… 256
33　３号建物跡全景…… 257
34　３号建物跡…… 257
35　４・５号建物跡全景…… 258
36　４号建物跡…… 258
37　５号建物跡…… 259
38　６号建物跡全景…… 260
39　６号建物跡…… 260
40　１・２・４・９～11・22号土坑…… 261
41　12～14号土坑…… 262
42　15～19・21・23号土坑…… 263
43　24～26号土坑…… 264
44　１号堀跡検出…… 264
45　１号堀跡北西部…… 265
46　１号堀跡南西部…… 265
47　１号堀跡南部…… 266
48　１号堀跡南部…… 266
49　１号堀跡…… 267
50　２号溝跡…… 267

51　２号溝跡…… 268
52　３号溝跡…… 268
53　４・８・９号溝跡全景…… 269
54　４・８・９・13号溝跡全景…… 269
55　４・８・９・13号溝跡…… 270
56　６・７号溝跡…… 270
57　10・11号溝跡…… 271
58　14号溝跡全景…… 271
59　15～17号溝跡全景…… 272
60　１・２号井戸跡…… 272
61　１号特殊遺構全景…… 273
62　１号特殊遺構、１号堀跡・３号溝跡断面… 273
63　調査区西部南端小穴群全景…… 274
64　調査区東部小穴群全景…… 274
65　調査区東部小穴群全景…… 275
66　小穴群断面（１）…… 275
67　小穴群断面（２）…… 276
68　１・５・７号住居跡出土遺物…… 277
69　１・９・14号土坑出土遺物…… 278
70　１号堀跡出土遺物…… 278
71　２・６・15号溝跡、１号井戸跡、小穴出土遺物…… 279
72　遺構外出土遺物…… 280

第３編　日 照 田 遺 跡

1　Ⅰ区全景…… 283
2　Ⅱ区北部全景…… 283
3　Ⅱ区南部全景…… 284
4　Ⅲ区全景…… 284
5　１号建物跡（１）…… 285
6　１号建物跡（２）…… 286
7　１～８号土坑…… 287
8　９～13号土坑…… 288
9　１号溝跡全景…… 289
10　１号特殊遺構…… 289
11　２号特殊遺構…… 289
12　３号特殊遺構…… 289
13　Ⅱ区小穴群検出…… 290
14　Ⅱ区小穴群全景…… 290
15　小穴群…… 291
16　流路跡（１）…… 292
17　流路跡（２）…… 293
18　作業風景…… 294
19　１号建物跡出土遺物…… 295
20　３・12・13号土坑・１号溝跡出土遺物…… 295
21　１号特殊遺構出土遺物…… 296
22　２・３号特殊遺構出土遺物…… 297
23　小穴群出土遺物…… 298
24　流路跡（Ⅱ区南部）出土遺物（１）…… 298
25　流路跡（Ⅱ区南部）出土遺物（２）…… 299
26　流路跡（Ⅱ区南部）出土遺物（３）…… 300
27　流路跡（Ⅱ区南部）出土遺物（４）…… 301
28　流路跡（Ⅱ区南部）出土遺物（５）…… 302
29　流路跡（Ⅲ区）出土遺物（１）…… 303
30　流路跡（Ⅲ区）出土遺物（２）…… 304
31　流路跡（Ⅲ区）出土遺物（３）…… 305
32　流路跡（Ⅲ区）出土遺物（４）…… 306
33　流路跡（Ⅲ区）出土遺物（５）…… 307
34　流路跡（Ⅲ区）出土遺物（６）…… 308

第４編　舘 ノ 前 遺 跡

1　Ⅰ区全景…… 311
2　Ⅱ区全景…… 311
3　Ⅰ区基本土層Ａ－Ａ′断面 …… 312
4　Ⅱ区基本土層Ｃ－Ｃ′断面 …… 312
5　１～４号土坑…… 312
6　１・２号溝跡、１号特殊遺構…… 313
7　１号特殊遺構、流路跡、遺構外出土遺物…… 314

序章　遺跡の環境と調査経過

第１節　調査に至る経緯

一般国道115号相馬福島道路は、常磐自動車道と東北縦貫自動車道を結ぶ約45kmの高規格道路であり、東日本大震災からの早期復興を図るリーディングプロジェクトとして、国土交通省東北地方整備局により、緊急整備されている。全５区間のうち、相馬西道路と阿武隈東道路の２区間は国土交通省東北地方整備局磐城国道事務所が、阿武隈東～阿武隈と霊山道路と霊山～福島の３区間は同省同局福島河川国道事務所が事業を進めている。

その建設予定地に関わる遺跡発掘調査は、福島県教育委員会との委託契約に基づき、震災前の平成16年度から公益財団法人（平成24年10月以前は財団法人）福島県文化振興財団遺跡調査部が実施している。平成29年度は伊達市霊山町下小国地区、同市保原町上保原地区、桑折町松原地区に所在する以下の４遺跡の本発掘調査を実施し、上保原地区の中室内遺跡のみ平成30年度当初に２次調査を実施した。

◎伊達市霊山町下小国地区　霊山～福島…上ノ台館跡（２次調査）

◎伊達市保原町上保原地区　霊山～福島…中室内遺跡（１・２次調査）

◎桑折町松原地区　　霊山～福島…日照田遺跡・舘ノ前遺跡

公益財団法人福島県文化振興財団では、平成29年４月１日付の福島県教育委員会との委託契約に基づき、遺跡調査部の職員６名を配置して本発掘調査を実施した。４月当初は、上ノ台館跡、日照田遺跡、舘ノ前遺跡の本発掘調査が確定していた。その調査面積は、日照田遺跡2,800㎡、舘ノ前遺跡1,600㎡が確定していたものの、上ノ台館跡は条件整備が整っていなかったことから調査面積

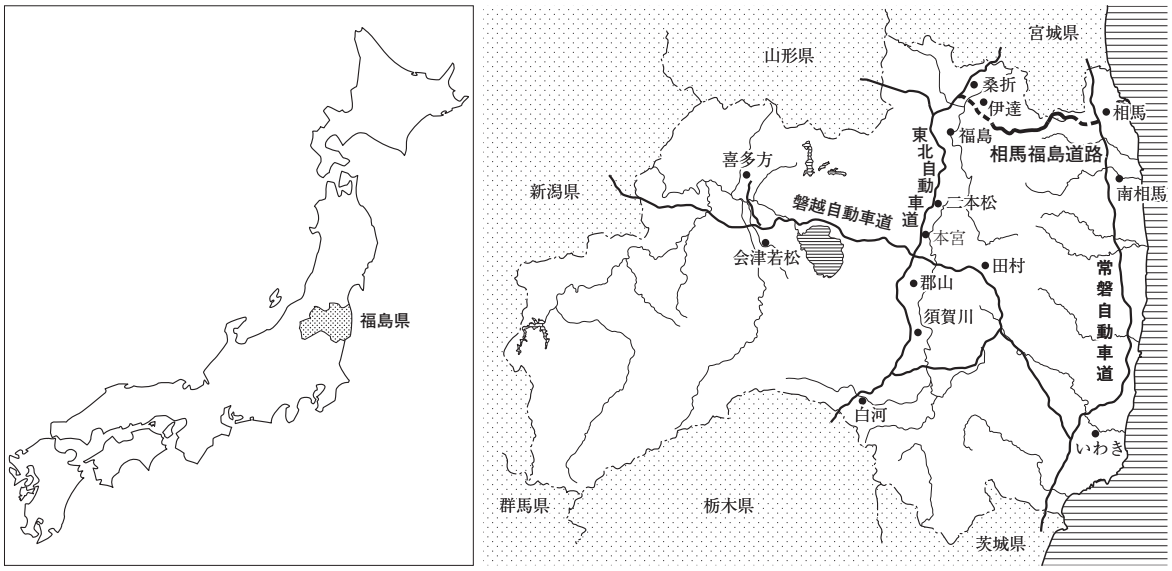


図１　一般国道115号相馬福島道路位置図

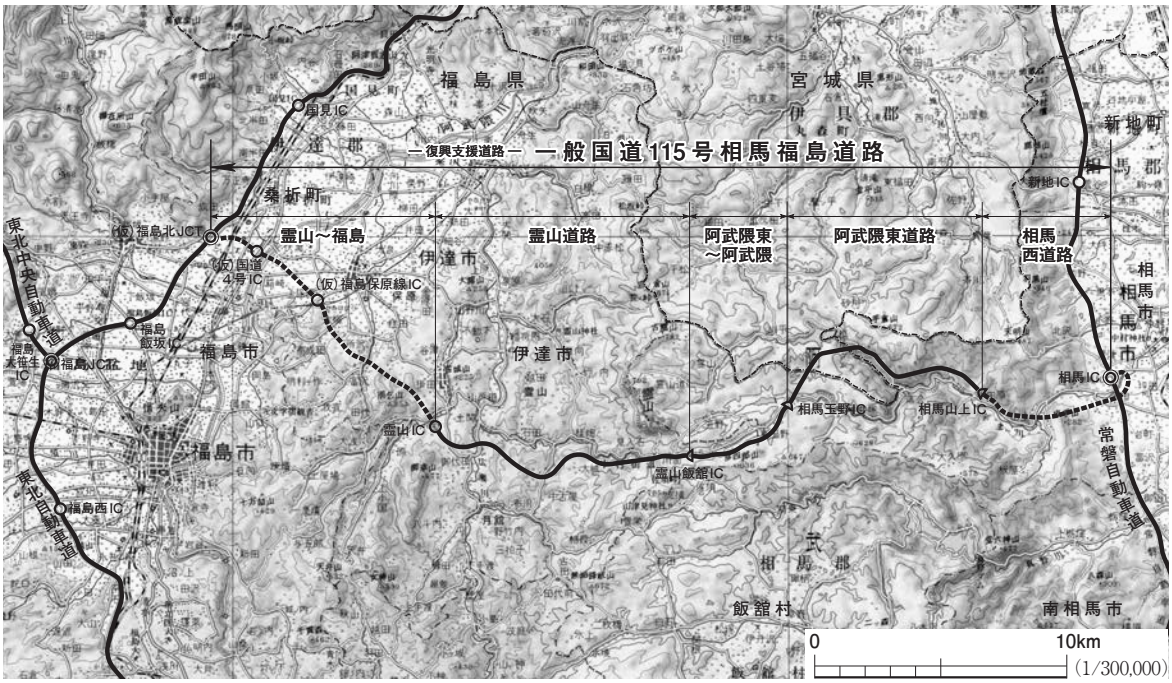


図２　道路工事計画図

は確定していなかった。中室内遺跡は、平成29年度に実施した試掘・確認調査で要保存面積が確定した遺跡で、平成29年度途中で追加となった。

以下では、伊達市霊山町下小国地区、伊達市保原町上保原地区、桑折町松原地区に分け、調査経過を記述する。なお、中室内遺跡に関しては平成30年度当初に実施した２次調査の経過も併せて報告する。

伊達市霊山町下小国地区

上ノ台館跡は、平成27年度の測量調査、平成27・28年度の試掘・確認調査の結果、15,600㎡の要保存範囲が確定していた。このうち、平成28年度に8,700㎡の１次調査を実施した。このため、平成29年度当初で、本発掘調査が必要な残りの範囲は6,900㎡であった。

この6,900㎡の発掘調査範囲は、丘陵の急傾斜地を含むため、一度に表土除去を実施すると、土砂等が流出する危険性が極めて高く、調査にあたり排土搬出路が確保できない等の問題があった。４月中に調査範囲の一部を除いて伐採が終了したため、５月の連休明けに現地確認を行った。その結果、一度に表土除去を実施するのではなく、段階を踏んで調査を実施する必要があることを確認し、その旨を５月26日の第２回連絡調整会議で国交省側に伝えた。その後、６月28日の第３回連絡調整会議で、条件整備に進展があったため、８月後半の調査開始を目標とすること、段階を踏んだ調査を実施する必要があることから、丘陵上部の1,500㎡から調査を着手することが決まった。

７月５日付で福島県教育委員会から1,500㎡の本発掘調査の指示が出された。７月中は調査に向けた事務手続き等の準備を行い、８月21日から現地での作業を開始した。

8月23日からは重機による表土除去を開始した。表土除去作業は起伏の激しい丘陵上での作業の

ため、事故や土砂の流出等に備えながら実施し、９月５日には終了した。

９月７日にはプレハブ・仮設トイレを設置し、８日には発掘器材をプレハブに搬入して調査の準備を行った。９月11日から、作業員の雇用を開始するとともに、国交省側で急傾斜地に設置した仮設階段の確認を、県文化財課・国交省・財団の三者で行った。プレハブから調査箇所である丘陵上までのルートは、この仮設階段を利用することとなったが、毎日の階段の昇り降りに気を配りながらの調査となった。また、遺構の検出に入る前に、調査区周辺の草刈りや、調査区までの通路の整備等、安全に調査ができる環境を整える作業を行った。

本格的な遺構の検出を９月19日から開始した。調査は尾根上の平らな場所から着手し、複数の小穴や土坑、竪穴住居跡等を確認した。26日からは遺構の検出作業と並行して、土坑の調査を開始した。尾根上の遺構の検出は順調に進み、小穴や溝跡を検出した。小穴は、掘立柱建物跡や柱列跡等の柱穴であることが判明し、遺跡の内容が明らかになってきた。

10月４日からは、斜面部の遺構の検出作業を開始した。尾根上に比べ遺構は少なかったが、柱列跡を検出した。11日には遺構の検出が終了し、その後は遺構の精査に重点を移した。

11月１日からは、小穴以外の遺構の精査が終了したため、遺構の記録作業と小穴の調査を中心に行った。小穴の調査は順調に進み、17日には終了した。

11月20日以降は、調査区全体の清掃及び写真撮影と、調査区からプレハブへの発掘器材撤収及びプレハブ内の整理を行い、30日には作業員の雇用を終了した。

残る作業は航空写真測量とプレハブからの発掘器材の撤収となったが、器材の撤収は、航空写真測量の日程に併せて後日行うこととした。

12月13日には仮設トイレの汲み取りとプレハブからの発掘器材の撤収を行った。12月15日には、航空写真測量を実施するとともに、残っていた発掘器材を撤収し、プレハブ・仮設トイレも撤去した。

現地の引き渡しは、県文化財課及び国交省の立ち会いの下、年が明けた1月22日に行った。

伊達市保原町上保原地区

当該地区では、６月上旬に実施した遺跡推定地であるＤＴ－Ｂ29の試掘調査を受け、ＤＴ－Ｂ29の一部が新たに田向遺跡として登録された。1,300㎡が要保存範囲とされたが、盛土工法による工事範囲内にあるため、復興支援道路に関する埋蔵文化財の弾力的運用が適用されることとなった。田向遺跡の要保存範囲1,300㎡は、盛土を行った場合の圧密沈下の計算の結果、本発掘調査を要しないこととなった。

その後、６月中旬～下旬及び８月下旬には中室内遺跡の試掘・確認調査の結果、4,500㎡の要保存範囲が確定した。この試掘・確認調査の結果を受け、７月24日の第４回連絡調整会議では、すでに要保存範囲が確定していた伊達市伏黒地区の荒屋敷遺跡よりも中室内遺跡の方が調査の優先順位が高いことが示された。また、８月29日の第５回連絡調整会議では、中室内遺跡に関して、10

月中旬の調査開始を目標とすること、調査区内に生えている竹の伐採は国交省側で９月中に行うこと、調査区西部の一部は10月下旬まで工事用道路として使用するため、その部分の表土は工事用道路の使用が終了してから行うこと等が決まった。

中室内遺跡の要保存範囲4,500㎡の一部は、盛土工法の工事範囲内であるため、復興支援道路に関する埋蔵文化財の弾力的運用が適用された。調査範囲に関しては、掘削ラインと盛土ラインの境界から盛土側に10ｍのマージンを取ることが了解された。この結果を受け、福島県教育委員会より９月５日付で2,400㎡、10月24日付で300㎡、計2,700㎡の本発掘調査の指示が出された。

10月中旬からの表土除去に向けて事務手続き等の調査準備を進め、10月５日にプレハブ・仮設トイレを設置し、発掘器材の搬入を行った。10日には重機によるプレハブ前の作業員駐車場の整備を行った。11日からは先行して６名の作業員を雇用し、調査区周辺の環境整備を行った。12日からは調査区の縄張りと表土除去を開始した。表土除去は調査区東部から実施し、作業が進むと、先の試掘・確認調査で検出された１号土坑や１号堀跡の一部が確認された。

翌週の17日から新規作業員27名の雇用を開始し、本格的な遺構検出作業に取り掛かろうとした。しかし、翌々日から天候が暗転し、10月後半は度重なる降雨による調査区内への浸水が著しく、その排水作業が進まなかったことから作業日がほとんど確保できなかった。その間、重機による表土除去は可能な限り継続し、19日には調査区東部1,300㎡分を終了し、24日には調査区西部に移り、25日には工事用道路部分を除いて終了した。

11月に入ると快晴が続き、遅延していた調査は大きく進展した。遺構検出が進むと、調査区東部では１号堀跡がＬ字状に巡り、その内側には多数の柱穴とみられる小穴群や、１号堀跡に平行して延びる数条の溝跡が認められた。１日より１号堀跡、２号溝跡の掘り下げを行い、適宜断面図を作成した。それらの掘り下げの見通しが立つと、６日より一部作業員を割いて調査区東端から小穴群等の遺構精査の準備に取りかかった。

一方、調査区西部は11月７・８日に工事用道路部分の表土除去を行って、９・10日には調査区全体の遺構検出を行った。その結果、数軒が重複した大小の竪穴住居跡、柱穴とみられる複数の小穴が一部竪穴住居跡を掘り込んでいる様子が認められた。重複する遺構の調査に相応の時間が見込まれることから、翌週14日から順次、小穴や竪穴住居跡の精査に入った。小穴の位置関係から１～３号建物跡を確認し、小穴群の半裁及び断面図の作成を行った。

11月後半になると日の入りも早くなり作業時間が制限されたが、作業員の出勤率も高く、調査は順調に推移した。しかしながら、当初の想定よりも検出された遺構数が多かったため、年内での収束に向けてより一層効率的な調査を心掛けた。22日には追加で指示のあった調査区東部の北端部300㎡の表土除去を行い、１号堀跡がさらに北方向に延び、小穴群が広がることが確認された。11月末までには、それらを含めたほとんどの遺構の精査に着手し、12月からは掘り上げた遺構の記録と、重複した竪穴住居跡の掘り下げと柱穴の確認が主な作業となる見通しとなった。

12月に入ると気温が下がり、小雪が舞い、時雨れる等、厳しい調査環境の日々が続いたが、職

員及び作業員の体調管理に努め、作業を実施した。また、調査は竪穴住居跡の重複関係の把握に苦慮したが、作図を効率的に進め、予定通り調査を進めることができた。14・15日に調査区全体の清掃を行い、15日に調査区の全景、遠景等の空中写真撮影を実施した。18日からの調査を実施する最終週には、地形測量、竪穴住居跡等の図面作成を行い、並行して調査区からプレハブへ発掘器材を運び入れ、22日に調査を終了した。

年が明けた１月９日よりプレハブからの発掘器材の撤収を行い、19日にはプレハブ・仮設トイレを撤去し、翌週の22日に県文化財課及び国交省の立ち会いの下、現地引き渡しを行った。

平成30年度は、調査区を東西に分断する市道中室内大師堂線及び調査区の南側に隣接する市道保原箱崎線範囲について、平成30年４月３日に県文化財課による工事立会がなされた。その結果、100㎡の本発掘調査が必要とされ、平成30年４月９日付で福島県教育委員会から本発掘調査の指示が出された。調査は４月11日に開始し、溝跡を中心とした遺構の精査・作図・写真撮影、調査区の地形測量を適宜行い、13日には終了した。また、13日には県文化財課及び国交省の立会いの下、現地引渡しを行った。

桑折町松原地区

平成29年度に本発掘調査を実施した伊達郡桑折町松原地区に所在する遺跡は、日照田遺跡、舘ノ前遺跡の２遺跡である。平成28年度の試掘調査の結果、日照田遺跡は3,900㎡、舘ノ前遺跡は3,600㎡の要保存範囲が確定していたが、両遺跡とも、要保存範囲の一部が盛土工法による工事範囲内であるため、復興支援道路に関する埋蔵文化財の弾力的運用が適応されることとなった。調査範囲に関しては、掘削ラインと盛土ラインの境界から盛土側に10ｍのマージンを取ることが了解され、本発掘調査が必要な範囲は、日照田遺跡が2,800㎡、舘ノ前遺跡が1,600㎡と整理されていた。

平成29年度に入り、福島県教育委員会より４月３日付で日照田遺跡2,800㎡、舘ノ前遺跡1,600㎡の本発掘調査の指示が出された。調査は、工事計画上優先度の高い箇所から、日照田遺跡Ⅰ区（100㎡）、舘ノ前遺跡Ⅰ区（900㎡）、日照田遺跡Ⅱ・Ⅲ区（2,700㎡）、舘ノ前遺跡Ⅱ区（700㎡）の順に行うこととなった。

日照田遺跡Ⅰ区は、４月17日から調査を開始し、作業員駐車場脇に仮設トイレを設置した。翌18日には作業員の雇用を開始し、並行して舘ノ前遺跡Ⅰ区の調査区の縄張り等を開始した。21日には２遺跡共用となるプレハブを設置した。

日照田遺跡Ⅰ区の遺構検出作業は、４月19日から開始し、１号溝跡を検出した。春先の強風により仮設トイレが倒れるなどのアクシデントもあったが、翌週中には１号溝跡を完掘した。26日に基本土層図の作成、27日に地形測量を行い、28日には日照田遺跡Ⅰ区の調査を終了した。

その後、作業員は５月１日から舘ノ前遺跡Ⅰ区の調査に移り、遺構検出作業を行った。９日からは検出した土坑の精査を開始するとともに、並行して地形測量を行った。11日には基本土層図を

作成した。調査前半は時折吹く強風に悩まされたものの後半は天候が安定し、土坑の精査や地形測量等の記録作成は順調に進んだ。23日に調査区全体の写真撮影を行い、翌24日には舘ノ前遺跡Ⅰ区の調査を終了した。

５月29日には、県文化財課及び国交省の立ち会いの下、日照田遺跡Ⅰ区(100㎡)と舘ノ前遺跡Ⅰ区(900㎡)について現地引き渡しを行った。また、同日、日照田遺跡Ⅱ・Ⅲ区の調査に入り、Ⅱ区北部より表土除去を開始した。Ⅱ区北部の表土除去を終えた後、６月８日から作業員の雇用を再開した。遺構検出が始まると、Ⅱ区北部に小穴群が集中することが確認された。14日からⅢ区の表土除去に入ったため、遺構検出作業はⅡ区南部に移った。Ⅱ区南部では、検出された流路跡から土師器・須恵器が出土し、16日からは流路跡の掘り下げを開始した。Ⅲ区は、20日までに表土除去が終了し、23日から作業員の一部が遺構検出作業に入った。Ⅲ区では、縄文時代の落し穴と考えられる土坑群が検出され、この段階で、調査区全体のおおよその遺構数を把握することができた。

７月初めは降雨が続いたことから、調査区内の排水作業にかなりの労力が割かれることとなった。このため、比較的排水作業が短時間で実施できるⅢ区の調査を集中して行うこととした。Ⅲ区では縄文時代の落し穴以外に、多くの土師器片が折り重なって出土した１号特殊遺構や、羽口や鉄滓が出土した２号特殊遺構等が検出された。Ⅲ区の調査を鋭意進め、見通しが立った段階で、Ⅱ区北部の遺構精査、Ⅱ区南部の流路跡の調査へと展開したが、例年にない猛暑となり、高温多湿の環境下での厳しい作業となった。７月後半に入り、Ⅱ区北部では集中する小穴群、１号建物跡、土坑の精査・記録、Ⅱ区南部では流路跡の掘り下げ及び断面図作成を行った。Ⅲ区は検出遺構の精査・記録が完了し、21日には全体写真撮影を行った。

８月になるとやや気温は低下したが、連日の猛暑の中での作業による疲労が蓄積していたため、作業員の体調管理に気を配るとともに、引き続き熱中症の注意喚起に努めた。８月第１週には、Ⅱ区北部の遺構精査の目途が立ち、４日にはⅡ区北部の全体写真撮影を行った。７日以降はⅡ区南部の調査に集約し、10日には流路跡から検出された杭列の取り上げを行った。お盆休み明けの21日からⅡ区南部の全体写真撮影のための清掃に着手し、23日に撮影を行った。その間、並行して地形測量、基本土層図作成等を行った。24日には発掘器材をプレハブに移動し、日照田遺跡の全調査を終了した。日照田遺跡Ⅱ・Ⅲ区の現地引き渡しは、県文化財課及び国交省の立ち会いの下、９月４日に行った。

舘ノ前遺跡Ⅱ区の調査は、翌週の８月28日から作業員を雇用した。遺構検出を行うと、蛇行する流路跡と流路跡に沿う溝跡が確認された。それらの掘り下げを行うのと並行して地形測量の作業を進めた。９月に入っても天候が大きく崩れることはなく、11日には検出した１・２号溝跡、１号特殊遺構の全景写真撮影まで終了した。13日には流路跡の断面図作成、14日には調査区全体の写真撮影を行い、15日には調査を終了した。舘ノ前遺跡Ⅱ区の現地引き渡しは、県文化財課及び国交省の立ち会いの下、10月２日に行った。　（丹　治）

第２節　地 理 的 環 境

福島県は東北地方の南東端に位置している。面積は13,782㎢で、北海道、岩手県に次ぐ全国３番目の広さを有するが、南北に併行する越後山脈、奥羽山脈、阿武隈高地等、約８割は山地で占められている。県土は、奥羽山脈と阿武隈高地により３地方に区分されていて、西から順に会津地方、中通り地方、浜通り地方と呼称されている。

相馬福島道路は浜通りと中通りとを結ぶ道路として計画されていて、平成29年度に調査を実施した４遺跡は、中通り北部の伊達市と伊達郡桑折町に所在している。以下、伊達市霊山町下小国地区、伊達市保原町上保原地区、伊達郡桑折町松原地区の地区ごとに記述する。

伊達市霊山町下小国地区

伊達市は、平成18年に伊達町、梁川町、保原町、霊山町、月舘町が合併して成立した市で、伊達市霊山町は現在の市域のおおよそ中央付近を占める。大半が阿武隈高地の山中にあり、四方を山に囲まれている。地形は、町域東部にある標高825ｍの霊山山塊を最高峰として、標高200ｍ～500ｍクラスの山々が連なり、その谷間には東北第２位の大河川である阿武隈川に合流する広瀬川と、その支流（大石川、祓川、石田川、小国川等）が開析した狭い平坦地が形成されている。気候は夏が暑く、冬は降雪量が少ないものの寒冷で、年間平均気温は12℃、年間降水量は約1,100㎜である。こうした土地柄を利用して、近世～近代には養蚕業・絹織物業、葉タバコ生産が盛んに行われ、1970～1980年代以降は、牧畜・段々畑・果樹栽培地への転換がなされてきた。

調査対象の上ノ台館跡が所在する下小国地区は、標高532ｍの天井山北西麓から流れ出る小国川流域にある。福島市と相馬市を結ぶ国道115号（中村街道）に面し、隣接の掛田地区は国道115号と国道349号が南北に交差する交通の要衝地である。この地理的特性は、周囲の歴史的環境を考える上で、重要と思われる。

地質の面では、下小国地区を含む霊山山塊の南側～西側は、風化が著しい雲母系花崗岩類を基盤層として、新第三紀の火山砕屑堆積物（霊山層、月舘層等）が広く覆う。そして、高地・丘陵地間の谷部には、第四紀の未固結堆積物（岩石化していない礫・砂・泥等）が堆積し、斜面部等には、西方の吾妻・安達太良火山群からもたらされた更新世後半期の火山灰や風成二次堆積物（火山灰を母材とする黄褐色土壌）層が散在するところもある。

伊達市保原町上保原地区

伊達市保原町は市域のおおよそ西部にあたり、北半部と南半部で地形・地質の特徴が異なる。北半部は、福島盆地内部の低地で、盆地内部を北東に流れる阿武隈川東岸の沖積地となっている。標高は45～55ｍ前後で、平坦な土地が広がるが、阿武隈川の蛇行によって削り残された自然堤防、

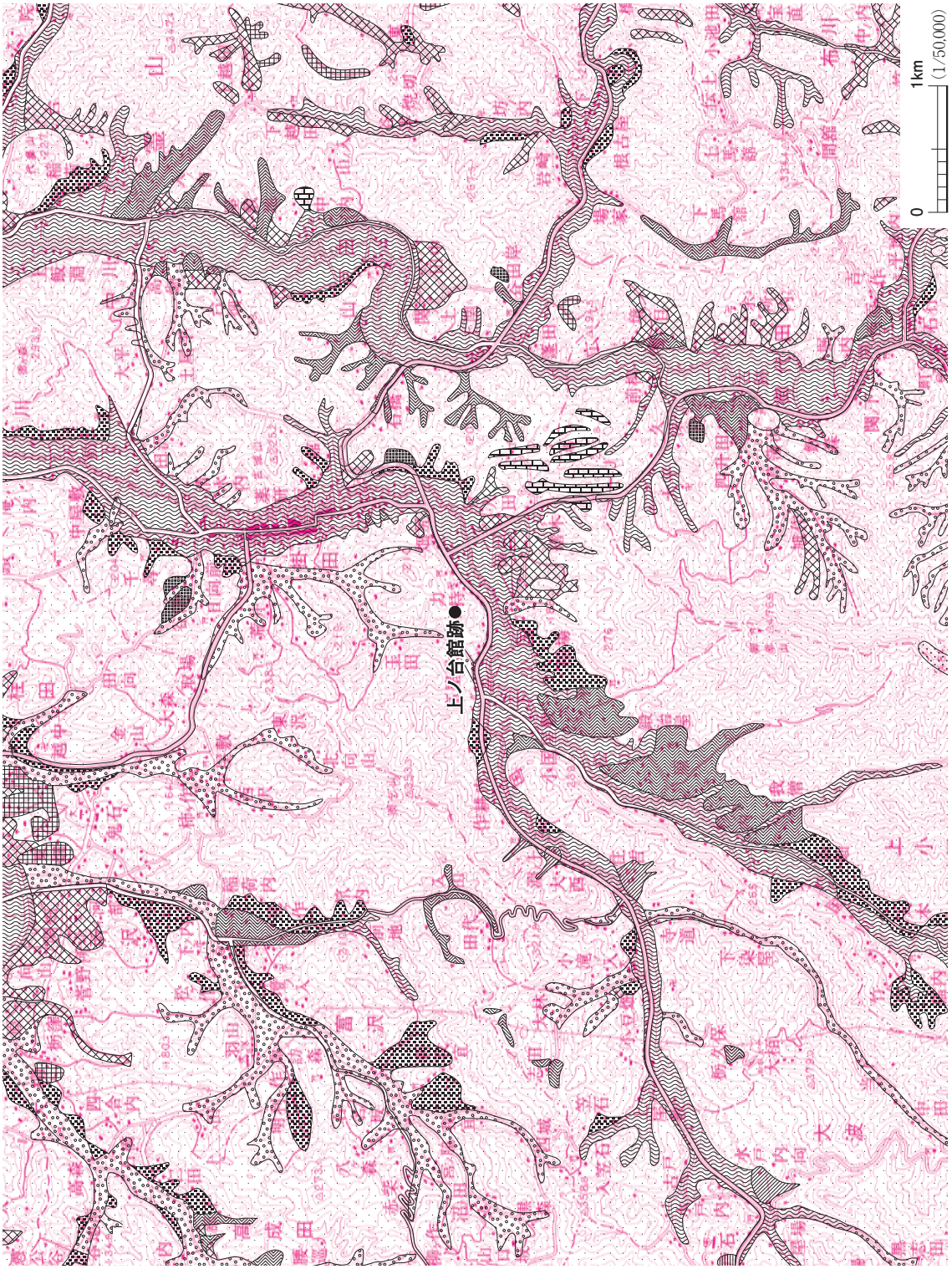


図3　上ノ台館跡周辺地形分類図

阿武隈川やその支流の旧河道や浸食崖、それらに伴う後背湿地といった微地形も発達している。自然堤防等の微高地上を中心に居住域が形成されていて、果樹園としても利用されている。それに対し、旧河道等の低地部は水田として利用されている。地質面では、礫・砂・泥等の氾濫堆積物や完新世の低位段丘堆積物等で広く覆われている。調査対象の中室内遺跡は、この伊達市保原町北半部に位置し、阿武隈川の旧河道に挟まれた自然堤防上に立地している。

南半部は阿武隈高地から伸びる丘陵性山地と段丘面で構成されている。丘陵性山地は伊達市保原町域南縁の標高350ｍ前後の地点を最高として、北に向かい低くなっていく。丘陵性山地の標高80～120ｍの山麓には、南北約１㎞、東西約６㎞にわたる段丘面が帯状に連なっている。丘陵性山地の谷間には、伝桶川・東根川・古川等の小河川によって開析された狭い平坦部が形成されていて、谷間の平坦地は水田として、その周辺や段丘面は畑地として利用されている。南半部の地質を見ると、丘陵性山地や段丘面は新第三紀中新世の凝灰岩や凝灰角礫岩といった火山破屑性堆積物（霊山層上部層）が堆積している。

伊達郡桑折町松原地区

伊達郡桑折町は、福島盆地の北東部に位置し、南から東は伊達市に、北は国見町に、西は福島市に、北西は宮城県白石市に接している。年間平均気温は13℃、年間降水量は1,166㎜である。

地形は、町域西部に奥羽山脈の支脈である山地が連なり、町域南東辺には阿武隈川が北東に向かって沿うように流れる。また、町域北部の大字北半田にある丘から国見町厚樫山にかけては、丘陵が断続的かつ一列に並び、国見丘陵列と呼称されている。

町域西部の標高が130～180ｍと、他地域より60～80ｍ高く、おおむね北西から南東に向かって傾斜している。町域最高点は北西部に位置する標高863.1ｍの半田山であり、最低点は阿武隈川が伊達市梁川町に流れ込む地点である。

町域全域は、全て阿武隈川水系に属する。町域を流れる阿武隈川の主な支流としては、産ヶ沢川、佐久間川、普蔵川、新堀川等があり、山地から土砂を運んで現桑折市街地が形成されている藤田面を堆積させたと考えられる。

藤田面の縁辺部は、阿武隈川等の浸食により急な段丘崖を成している。段丘崖には、小規模な開析谷が数多く発達しており、この段丘崖より下位が低位段丘面であり、調査対象の日照田遺跡・舘ノ前遺跡は低位段丘面上に立地している。低位段丘面には、自然堤防が多数形成され、古来より繰り返されてきた阿武隈川の蛇行・氾濫の跡をうかがわせる。

次に、地質を概観する。町域西部の山地は、新生代第三紀の堆積岩を基盤としている。半田山周辺では、中期中新世～後期中新世の非アルカリ珪長質火山岩類が分布している。山地の縁辺部には、第四紀後期更新世の堆積段丘面である田中面、梅津面がある。

町域東部の低地は、山地側に分布している後期更新世の低位段丘堆積物層と阿武隈川沿いの後期更新世～完新世の海成または非海成堆積岩類が堆積する地層に、おおまかに分けられる。（枝　松）

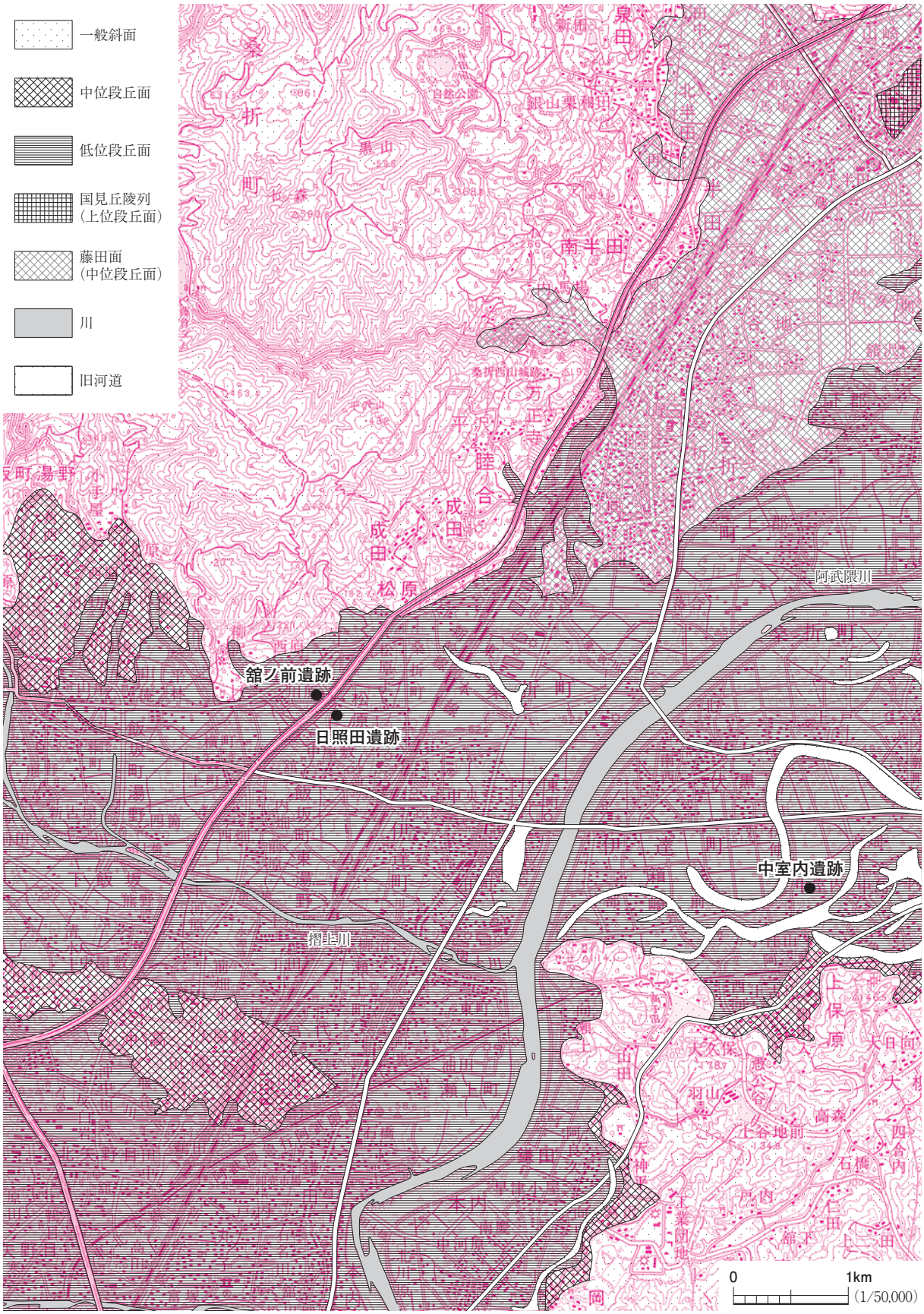


図４　中室内・日照田・館ノ前遺跡周辺地形分類図

第３節　歴 史 的 環 境

伊達市霊山地区

伊達市霊山町域では、旧石器時代から中世までの遺跡が確認されている。以下では、時代ごとに主要な遺跡を概観してみたい。なお、霊山地区の代表的遺跡については、図５に示した範囲外についても記載している。

旧石器時代　万田川遺跡(18)では、細石刃の出現以前のものとみられている時期の石刃と剝片が採取されている。

縄文時代　縄文時代は、早期～前期では、早期後半の土器が霊山寺跡(８)から、前期前葉の土器が川向遺跡、行人田遺跡(78)から少量出土しているのみである。中期～後期になると遺跡数が増加し、橋本遺跡(34)、倉波入遺跡、松ヶ倉遺跡(42)、古谷地遺跡、箋ノ内遺跡、久保田遺跡、武ノ内遺跡等が知られている。このうち、武ノ内遺跡では中期末葉～後期の竪穴住居跡、配石遺構、屋外埋設土器、土坑が発見されており、松ヶ倉遺跡でも縄文時代中期末葉～後期中葉の埋甕、土坑が検出されている。続く晩期はさらに遺跡数が増加する。川向遺跡、熊屋敷Ａ遺跡(15)、熊屋敷Ｂ遺跡(16)、千石平遺跡、岩平Ｂ遺跡(24)、家ノ入遺跡(28)、小坂遺跡、漆方遺跡(41)、大石台遺跡(43)、根古屋遺跡(87)、三斗蒔遺跡、武ノ内遺跡等が知られ、根古屋遺跡では、晩期終末の完形土器が多数出土している。

弥生時代　弥生時代では、根古屋遺跡(87)と武ノ内遺跡で再葬墓が見つかっている。根古屋遺跡の再葬墓は弥生時代前期後半～中期前半における県内の代表的な資料の１つと評価されている。

古墳時代　集落遺跡・古墳ともに確認されていないが、行合道Ｂ遺跡(13)では、中期後葉～後期前葉の土師器が１点出土している。

古　　代　急峻な霊山山塊に営まれた霊山寺跡(８～10)は、貞観元年(859年)に慈覚大師円仁が開基したと伝えられる(「霊山寺縁起」)。山頂ではいくつかの伽藍群が確認されていて、古代には霊山寺玉野川上流伽藍群(９)が寺院の主要機能を担い、出土遺物から９世紀後半から10世紀中葉には成立していたと考えられている。集落遺跡は、行合道Ｂ遺跡(13)で、９世紀末～10世紀初頭の竪穴住居跡１軒が確認されているが、他に集落遺跡が調査された事例はなく、様相は不明である。

中　　世　霊山寺跡(８～10)は中世まで継続していて、山頂伽藍群から中国龍泉窯の青磁花盆・皿、中世瓦、鉄製錫杖等の遺物が発見されていることから、13世紀～14世紀中葉が最盛期と考えられている。また、南北朝期の建武四年(1337年)には、北畠顕家が、陸奥国府を多賀城から霊山寺に一時的に移し、山頂伽藍群に国司館を設置したことで、城郭としての機能が整備される。霊山城跡は、貞和三年(1347年)には落城したと推定されており、その後に霊山寺跡も廃絶したと考えられるが、落城時に廃絶したかは定かではない。国指定史跡の宮脇遺跡(39)は、伊達氏が再興した霊山寺跡の可能性が指摘されており、軒瓦文様は京都の鹿苑寺や相国寺の影響が確認できる。

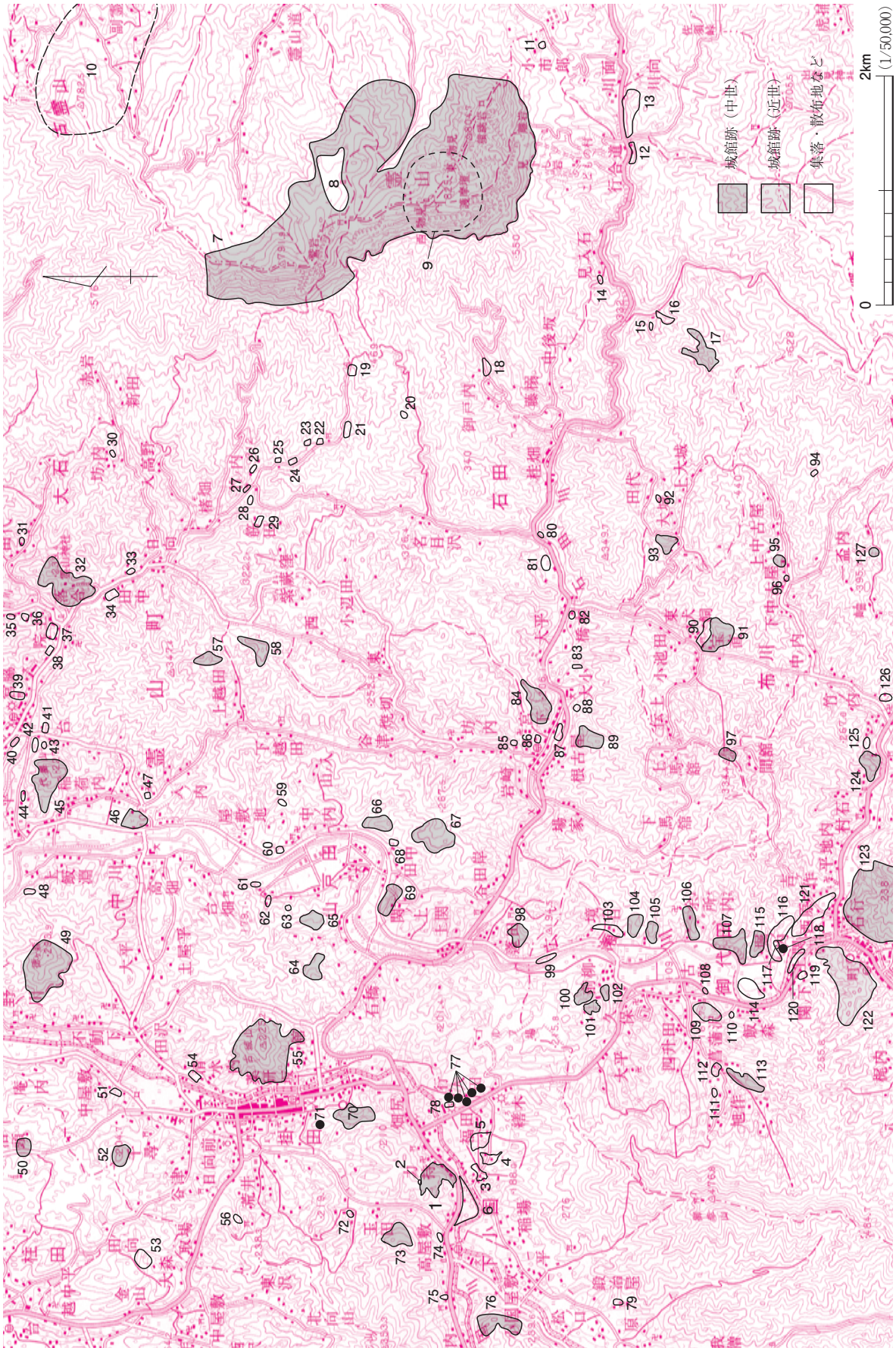


図5　上ノ台館跡周辺の遺跡位置図

表１－１　上ノ台館跡周辺の遺跡一覧

No.	遺跡名	所在地	種　別	時　期
1	**上ノ台館跡**	霊山町下小国	城館跡	中世
2	上ノ台遺跡	霊山町下小国	遺物包含層	縄文・中世以降
3	下小国荒屋敷遺跡	霊山町下小国	散布地	縄文
4	沼ヶ入遺跡	霊山町下小国	集落跡・城館跡	中世
5	福田遺跡	霊山町下小国	集落跡・城館跡	中世
6	山岸遺跡	霊山町下小国	散布地	縄文・平安
7	霊山城跡	霊山町石田	城館跡	中世
8	霊山寺跡 （山頂伽藍群）	霊山町石田・ 相馬市玉野	社寺跡	古代～中世
9	霊山寺跡 （玉野川上流伽藍群）	相馬市玉野	社寺跡	古代～中世
10	霊山寺跡 （古霊山伽藍群）	相馬市玉野	社寺跡	古代～中世
11	小市郎遺跡	霊山町石田	散布地	縄文
12	行合道Ａ遺跡	霊山町石田	散布地	縄文
13	行合道Ｂ遺跡	霊山町石田	木炭窯	平安・中世
14	見入石遺跡	霊山町石田	散布地	縄文・古墳
15	熊屋敷Ａ遺跡	霊山町石田	散布地	縄文
16	熊屋敷Ｂ遺跡	霊山町石田	集落跡	縄文・中世
17	熊屋敷館跡	霊山町石田	城館跡	中世
18	万田川遺跡	霊山町石田	散布地	旧石器
19	霊山閣遺跡	霊山町石田	散布地	縄文
20	蛇冠遺跡	霊山町石田	製鉄跡	中世
21	千石平遺跡	霊山町大石	散布地	縄文
22	弁天入遺跡	霊山町大石	散布地	奈良
23	岩平Ａ遺跡	霊山町大石	散布地	縄文
24	岩平Ｂ遺跡	霊山町大石	散布地	縄文
25	岩平Ｃ遺跡	霊山町大石	散布地	縄文
26	竹ノ内Ａ遺跡	霊山町大石	散布地	縄文・奈良
27	竹ノ内Ｂ遺跡	霊山町大石	散布地	縄文
28	家ノ入遺跡	霊山町大石	散布地	縄文
29	筋田遺跡	霊山町大石	散布地	縄文
30	坊ノ内遺跡	霊山町大石	散布地	縄文
31	田代遺跡	霊山町大石	散布地	縄文
32	小屋館跡	霊山町大石	城館跡	中世
33	小坂遺跡	霊山町大石	散布地	縄文
34	橋本遺跡	霊山町大石	散布地	縄文
35	藤本Ａ遺跡	霊山町大石	散布地	縄文・奈良
36	藤本Ｂ遺跡	霊山町大石	散布地	縄文
37	院主遺跡	霊山町大石	散布地	縄文
38	近江屋敷遺跡	霊山町大石	散布地	弥生・奈良
39	宮脇遺跡	霊山町大石	寺院跡	中世～近世
40	西舘遺跡	霊山町大石	散布地	弥生
41	漆方遺跡	霊山町大石	散布地	縄文
42	松ヶ倉遺跡	霊山町大石	散布地	縄文
43	大石台遺跡	霊山町大石	散布地	縄文・奈良・平安
44	平遺跡	霊山町大石	散布地	縄文
45	代皇山館跡	霊山町大石	城館跡	中世
46	瀬成田館跡	霊山町中川	城館跡	中世
47	中川台遺跡	霊山町中川	散布地	縄文
48	下飯渕遺跡	霊山町中川	散布地	古墳
49	篤ヶ森館跡	霊山町山野	城館跡	中世
50	小屋館跡	保原町金原田	城館跡	中世
51	千尋遺跡	霊山町掛田	散布地	平安
52	愛宕館跡	霊山町掛田	城館跡	中世
53	芳沼入遺跡	保原町柱田	散布地	平安
54	台山遺跡	霊山町掛田	散布地	奈良
55	懸田城跡	霊山町掛田	城館跡	中世
56	荒井遺跡	霊山町掛田	散布地	平安
57	よし館跡	霊山町石田	城館跡	中世
58	冠城館跡	霊山町石田	城館跡	中世
59	五郎内遺跡	霊山町山戸田	散布地	奈良
60	花水遺跡	霊山町山戸田	散布地	平安
61	道作Ａ遺跡	霊山町山戸田	散布地	奈良
62	道作Ｂ遺跡	霊山町山戸田	散布地	縄文
63	北田遺跡	霊山町山戸田	散布地	平安
64	愛宕館跡	霊山町山戸田	城館跡	中世
65	八島館跡	霊山町山戸田	城館跡	中世
66	酒井館跡	霊山町山戸田	城館跡	中世
67	大條館跡	霊山町山戸田	城館跡	中世
68	堀ノ内遺跡	霊山町山戸田	散布地	平安
69	本館跡	霊山町山戸田	城館跡	中世
70	明正寺館跡	霊山町掛田	城館跡	中世
71	明正寺板碑	霊山町掛田	石造物	中世
72	宮内遺跡	霊山町掛田	散布地	縄文
73	愛宕大館跡	霊山町下小 国・掛田	城館跡	中世
74	高屋敷遺跡	霊山町下小国	散布地	縄文・奈良
74	沢川遺跡	霊山町下小国	散布地	縄文
76	小国城跡	霊山町下小国	城館跡	中世
77	行人田塚	霊山町下小国	塚	中世
78	行人田遺跡	霊山町下小国	散布地	縄文
79	宮遺跡	霊山町下小国	散布地	平安
80	水滴遺跡	霊山町石田	散布地	縄文
81	孫老内遺跡	霊山町石田	散布地	縄文・弥生
82	橋本遺跡	霊山町石田	散布地	縄文
83	大小遺跡	霊山町石田	散布地	奈良・平安
84	大館跡	霊山町石田	城館跡	中世
85	北畑遺跡	霊山町石田	散布地	縄文・古墳
86	中瀬遺跡	霊山町石田	散布地	縄文
87	根古屋遺跡	霊山町石田	散布地	縄文・弥生
88	神明前遺跡	霊山町石田	散布地	縄文
89	小館跡	霊山町石田	城館跡	中世
90	宝直遺跡	月舘町布川	散布地	

表１－２　上ノ台館跡周辺の遺跡一覧

№.	遺跡名	所在地	種　別	時　期
91	宝直館跡	月舘町布川	城館跡	中世
92	田代遺跡	霊山町石田	散布地	縄文
93	大城館跡	霊山町石田	城館跡	中世
94	金子坂遺跡	月舘町布川	製鉄跡	中世・近世
95	五郎兵衛館跡	月舘町布川	城館跡	中世
96	上中古屋遺跡	月舘町布川	散布地	縄文
97	間館跡	月舘町御代田	城館跡	中世
98	中城館跡	霊山町石田	城館跡	中世
99	蛇王下遺跡	月舘町御代田	散布地	縄文
100	渋谷館跡	月舘町御代田	城館跡	中世
101	前柳館跡	月舘町御代田	城館跡	中世
102	殿城館跡	月舘町御代田	城館跡	中世
103	深田遺跡	月舘町御代田	散布地	古墳～平安
104	関ノ沢館跡	月舘町御代田	城館跡	中世
105	深田入館跡	月舘町御代田	城館跡	中世
106	女鹿山館跡	月舘町御代田	城館跡	中世
107	白山館跡	月舘町御代田	城館跡	中世
108	西遺跡	月舘町御代田	散布地	奈良・平安
109	春山館跡	月舘町御代田	城館跡	近世
110	飯森遺跡	月舘町御代田	散布地	古墳～平安
111	旭作遺跡	月舘町御代田	散布地・製鉄跡	不明
112	菖蒲沢遺跡	月舘町御代田	散布地	縄文
113	花館跡	月舘町御代田	城館跡	中世
114	川原遺跡	月舘町御代田	散布地	縄文
115	堀ノ内入山館跡	月舘町御代田	城館跡	中世
116	箋ノ内山遺跡	月舘町布川	散布地	不明
117	箋ノ内遺跡	月舘町布川	集落跡	縄文
118	箋塚古墳	月舘町布川	古墳	古墳
119	関ノ下Ａ遺跡	月舘町御代田	散布地	奈良・平安
120	関ノ下Ｂ遺跡	月舘町御代田	散布地	奈良・平安
121	西原遺跡	月舘町布川	散布地	縄文
122	殿上館跡	月舘町月舘	城館跡	近世
123	月見館跡	月舘町月舘	城館跡	中世
124	三郎内館跡	月舘町布川	城館跡	中世
125	竹ノ内遺跡	月舘町布川	散布地	縄文
126	小鉢内遺跡	月舘町布川	散布地	縄文
127	岫館跡	月舘町布川	城館跡	中世

広瀬川とその支流域には南北朝期～戦国期の城館跡が多い。調査を実施した上ノ台館跡（１）の他、大館跡(84)、小館跡(89)、懸田城跡(55)、愛宕大館跡(73)、小国城跡(76)等、多くの中世城館跡が確認されている。上ノ台館跡の南には、15世紀から16世紀頃の屋敷跡が確認された沼ヶ入遺跡（４）や福田遺跡（５）があり、密接な関係を有していた可能性が考えられる。

伊達市保原地区

伊達市保原町では、旧石器時代から近世までの遺跡が確認されている。以下では、時代ごとに主要な遺跡を概観してみたい。なお、代表的遺跡については、図６の範囲外についても記載した。

旧石器時代　釈典Ｂ遺跡で、旧石器時代の可能性がある剝片が採取されている。

縄文時代　全時期を通じて確認されている遺跡が少なく、保原町域内の縄文時代については不明な点が多い。大鳥城跡(167)では、早期の土器が出土している。舟橋遺跡(199)では、早期～前期の可能性が高い石器製作跡と考えられる石器集中地点が確認された。中期は遺跡数が少なく、我宜遺跡で土器が採集されているだけである。後期以降は、北前遺跡(239)・一本杉Ｂ遺跡(221)で後期の埋設土器が見つかっているが、晩期は確認されていない。

弥生時代　弥生時代では、前期の遺跡は確認されていない。また、大半の遺跡では土器が出土しているのみだが、中期の土器が出土した大鳥城跡(167)、一本杉Ｂ遺跡(221)、榎内遺跡(151)、平遺跡(205)、後期の土器が出土した大泉みずほ遺跡(232)、舟橋遺跡(199)等がある。大泉みずほ遺跡では、土坑等の遺構も確認されていて、付近に集落跡が存在する可能性がある。

古墳時代　伊達市保原町周辺は福島盆地北部の中でも古墳が集中する地域である。前期では、大

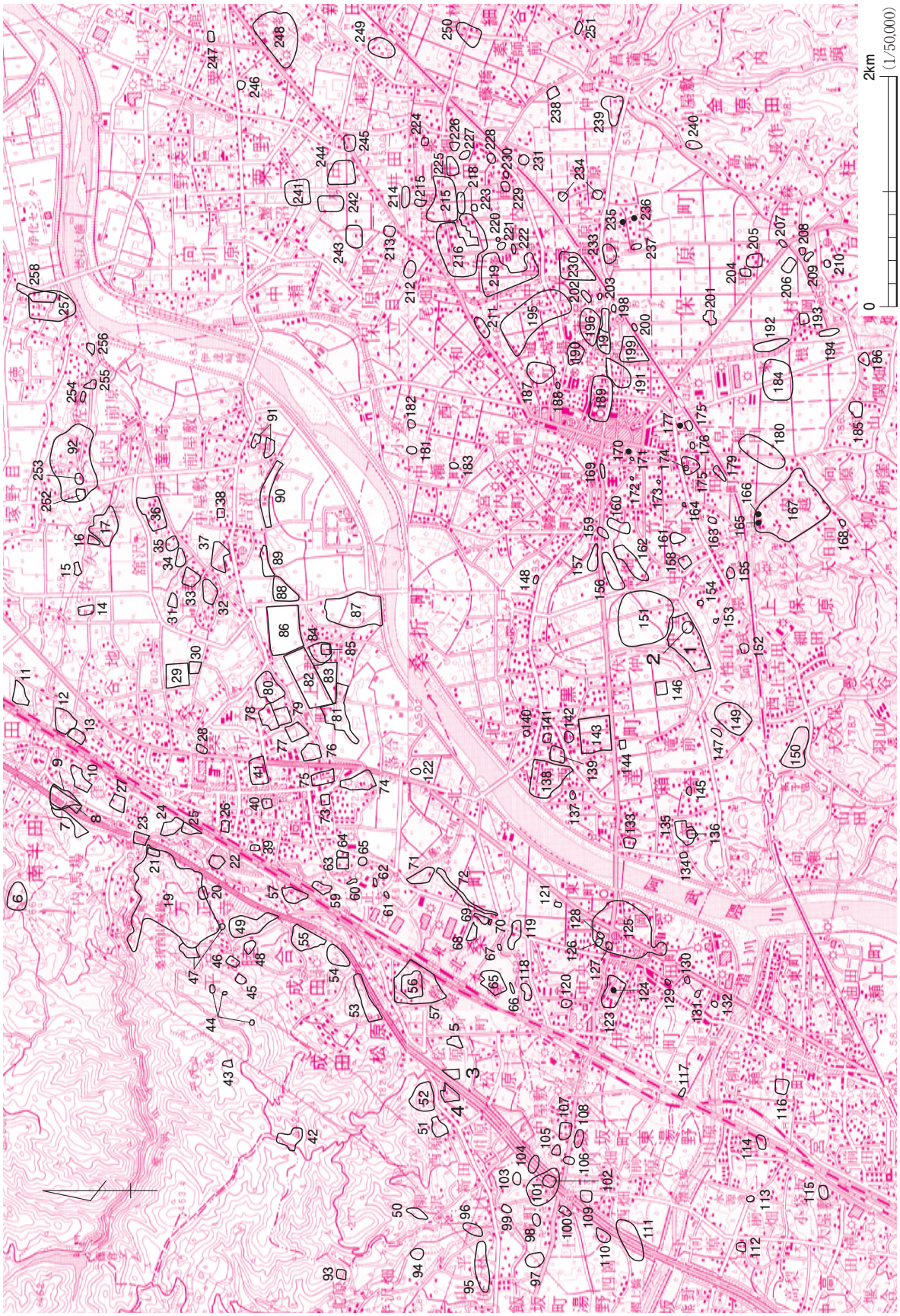


図6　中室内・日照田・舘ノ前遺跡周辺の遺跡位置図

泉みずほ遺跡(232)で10基の方形周溝墓が確認された。菖蒲沢Ａ遺跡(196)では墳丘等があったのかは不明だが、埋葬施設だけが見つかっている。中期は、大泉みずほ遺跡で円墳が見つかっている。また、粘土槨を埋葬施設として持つ高野古墳(240)も中期と推定されている。

後期から終末期にかけては、大泉みずほ遺跡で後期末頃と推定される前方後円墳が、大塚古墳群(237)では横穴式石室を持つ円墳が確認されている。愛宕山古墳では単龍環頭大刀が、内山古墳(165)では蕨手刀と勾玉が出土している。

集落遺跡では、今回報告する中室内遺跡(１)を初め、大鳥城跡(167)、大泉みずほ遺跡(232)等で前期の竪穴住居跡が確認されている。中期は、保原城跡(189)で竪穴住居跡を検出している。また、栄町Ｃ遺跡、宮下遺跡(191)では溝跡から多量の土器が出土していて、付近に集落跡がある可能性が高い。後期から終末期では、桐ノ木遺跡(216)、牡丹原遺跡(217)、宮下遺跡で竪穴住居跡や溝跡が確認されている。

古　　代　古代の遺跡は多数確認されているが、奈良時代は、牡丹原遺跡(217)と五斗蒔Ｂ遺跡(223)で遺構・遺物が確認されている程度で、多くが平安時代の遺跡である。平安時代の遺跡は、保原城跡(189)、一本杉Ｂ遺跡(221)、桐ノ木遺跡(216)、五斗蒔Ｂ遺跡(223)等が調査されている。五斗蒔Ｂ遺跡では、井戸跡から「漆原」と書かれた墨書土器が出土しているが、近隣には現在でも「漆内」、「前原」といった地名が見られ、平安時代における地名を示している可能性がある。

中　　世　保原町域では、城館に関わる遺跡が多い。中室内遺跡(１)から南東に600m程の場所には、伊達氏初代伊達朝宗が居城としたと伝わる高子館跡(149)がある。城館跡としては、保原城跡(189)、大鳥城跡(167)、富沢城跡等で調査が実施されている。保原城跡は、14～16世紀頃には在地領主の館または宗教関連施設として機能し、16世紀中葉頃に戦国期の城館として機能が変化すると推定されている。この他、舟橋遺跡(199)では城館跡または寺院跡と推定される区画施設が見つかっている。大地内Ａ遺跡(197)でも屋敷や寺院地と考えられる区画溝があり、井戸跡内からは板碑や板碑の未成品が出土している。これ以外にも、大河内館跡(174)、大立目館跡、高成田館跡、中島館跡(161)、平館跡(204)等が存在する。城主が明らかなものは少ないが、伊達氏の家臣やその配下との関連が考えられている。

近　　世　近世初期には、信夫郡・伊達郡は蒲生領、上杉領、幕府領、本多領、幕府領と移り変わり安定しない。そして、寛保２年(1742年)に、松平定賢が白河藩主となった後に、保原地方の17村が白河藩の飛地領とされ、出張所である保原陣屋(189)が保原城跡に置かれた。

伊達郡桑折町

桑折町では、旧石器時代から近世までの遺跡が確認されている。以下では、時代ごとに主要なものを概観してみたい。

旧石器時代　平林遺跡(７)からは、県内最古級の後期旧石器時代前半期の石器が出土している。

縄文時代　川原田遺跡(５)では、早期・前期・後期・晩期の土器が少量出土し、落し穴を確認し

表２－１　中室内・日照田・舘ノ前遺跡周辺の遺跡一覧

No.	遺跡名	所在地	種別	時期
1	**中室内遺跡**	保原町上保原	集落	古墳・古代・中世
2	**中室内館跡**	保原町上保原	城館跡	中世
3	**日照田遺跡**	桑折町松原	集落・狩場	縄文・平安・中世
4	**舘ノ前遺跡**	桑折町松原	狩場	縄文・平安
5	川原田遺跡	桑折町松原	集落	縄文・平安
6	輪王寺跡	桑折町半田	社寺跡	中世・戦国
7	平林遺跡	桑折町南半田	散布地	旧石器
8	古矢館跡	桑折町南半田	城館跡・散布地	旧石器・中世
9	古矢館遺跡	桑折町南半田	散布地	旧石器
10	大梅寺館跡	桑折町南半田	城館跡	中世
11	円明寺遺跡	桑折町南半田	散布地・社寺跡	縄文・中世
12	八幡阿部館跡	桑折町南半田	城館跡	中世
13	八幡神社跡	桑折町南半田	城館跡・社寺跡	中世
14	御堂内屋敷跡	桑折町谷地	城館跡	中世
15	上り館跡	桑折町谷地	城館跡	中世
16	後猪ノ馬場遺跡	桑折町伊達崎	散布地	縄文・奈良・平安
17	猪ノ馬場遺跡	桑折町伊達崎	城館跡	中世
18	台遺跡	桑折町伊達崎	散布地	縄文・古墳～平安
19	桑折西山城跡	桑折町万正寺他	城館跡	中世
20	観音寺境内	桑折町万寺	社寺跡・散布地	中世・近世
21	万正寺遺跡	桑折町万正寺	散布地	縄文
22	大榧遺跡	桑折町万正寺	集落跡	平安・中世
23	駿河館跡	桑折町南半田	城館跡	
24	薩摩遺跡	桑折町南半田	散布地	縄文・弥生
25	二本木遺跡	桑折町南半田	散布地	縄文・中世
26	大隅館跡	桑折町西大隅	城館跡	中世
27	桐ヶ窪館跡	桑折町南半田	城館跡	中世
28	堰上古城跡	桑折町上郡	城館跡	中世
29	日暮遺跡	桑折町下郡	散布地	縄文
30	下郡遺跡	桑折町下郡	散布地	縄文
31	中丸館跡	桑折町下郡	城館跡	中世
32	館ノ内下郡館遺跡・下郡館跡	桑折町下郡	散布地・城館跡	縄文・中世
33	下郡古館跡	桑折町下郡	城館跡	中世
34	下郡小館跡	桑折町下郡	城館跡	中世
35	下西館跡	桑折町伊達崎	城館跡	中世
36	伊達崎城跡	桑折町伊達崎	城館跡	中世
37	榎遺跡	桑折町下郡	散布地	古墳～平安
38	中屋敷跡	桑折町伊達崎	城館跡	中世
39	桑島遺跡	桑折町万正寺	散布地	縄文・平安
40	道場前遺跡	桑折町道場前	城館跡	中世
41	町裏遺跡	桑折町町裏・上郡	散布地	縄文・弥生
42	朱渕・大久保遺跡	桑折町松原	散布地	縄文
43	花水寺跡	桑折町平沢・成田	社寺跡	平安
44	平沢寺跡	桑折町平沢	社寺跡・塚	平安
45	上城跡	桑折町平沢	城館跡	中世
46	仲城跡	桑折町平沢	城館跡	中世
47	平沢遺跡	桑折町平沢	散布地	旧石器
48	本屋敷館跡	桑折町平沢	城館跡	
49	常陸館跡	桑折町万正寺	城館跡	中世
50	柳沢遺跡	桑折町松原	散布地	縄文
51	松原下館跡	桑折町松原	城館跡	中世
52	松原館跡	桑折町松原	集落跡・城館跡	平安・中世
53	成田西館跡	桑折町成田	城館跡	中世
54	成田古館跡	桑折町成田	城館跡	中世
55	寺山遺跡	桑折町平沢	散布地・社寺跡	縄文・中世
56	坊ノ内館跡	桑折町成田	城館跡	中世
57	坊ノ内遺跡	桑折町成田	散布地	平安・中世
58	万正寺中屋敷遺跡	桑折町万正寺	城館跡・社寺跡	中世
59	倉本館跡	桑折町万正寺	城館跡	中世
60	つつじヶ岡遺跡	桑折町万正寺	社寺跡	中世・近世
61	田植地蔵遺跡	桑折町成田	石造物	中世・近世
62	大五輪遺跡	桑折町万正寺	墓	中世
63	下万正寺遺跡	桑折町万正寺	社寺跡	中世
64	上ノ台遺跡	桑折町万正寺	散布地	平安
65	土井ノ内遺跡	桑折町成田	集落跡	中世
66	成田窯跡	桑折町成田	窯跡	平安
67	成田前窯跡	桑折町松原	窯跡	平安
68	馬場遺跡	桑折町成田	集落跡	中世・近世
69	新宿遺跡	桑折町成田	集落跡	奈良・中世・近世
70	赤坂窯跡	桑折町赤坂	窯跡	近世
71	光福寺跡	桑折町興福寺	社寺跡	中世
72	桑折台遺跡	桑折町台	散布地・窯跡	平安・近世
73	法円寺館跡	桑折町北町	城館跡	中世
74	播磨館跡	桑折町庫場	城館跡	中世・近世
75	桑折代官所・本町遺跡	桑折町陣屋・本町	城館跡・集落跡	中世・近世
76	神十郎館跡	桑折町舘	城館跡	中世
77	左衛門館跡	桑折町上郡	城館跡	中世
78	林泉寺前遺跡	桑折町上郡	散布地	縄文
79	文吾館跡	桑折町上郡	城館跡	中世
80	弁慶館跡	桑折町上郡	城館跡	中世
81	佐野遺跡	桑折町上郡	散布地	古墳～平安
82	細町塚田遺跡	桑折町上郡	散布地	古墳～平安
83	中郷遺跡	桑折町上郡	散布地	古墳～平安
84	宮前遺跡	桑折町上郡	城館跡・散布地	古墳～中世
85	宮前館跡	桑折町上郡	城館跡	古墳～中世
86	沖沢田遺跡	桑折町上郡	散布地	古墳～平安
87	沖船場遺跡	桑折町上郡	集落跡	古墳～平安
88	長者畑遺跡	桑折町上郡	散布地	古墳～平安
89	吉沼遺跡	桑折町伊達崎	散布地	古墳～平安
90	柳ノ目遺跡	桑折町伊達崎	散布地	古墳～平安
91	大畑遺跡	桑折町伊達崎	散布地	古墳～平安
92	塚野目古墳群	国見町塚野目・桑折町伊達崎	古墳	古墳
93	高寺廃寺跡	福島市飯坂町	社寺跡	平安
94	柳沢遺跡	福島市飯坂町	散布地	平安
95	平林遺跡	福島市飯坂町	散布地	縄文
96	樫裏遺跡	福島市飯坂町	散布地	縄文
97	小姓前寺西遺跡	福島市飯坂町	散布地	古墳～平安
98	塩野目館跡	福島市飯坂町	城館跡	中世
99	堤前遺跡	福島市飯坂町	散布地	縄文
100	外屋敷遺跡	福島市飯坂町	散布地	平安

表２－２　中室内・日照田・舘ノ前遺跡周辺の遺跡一覧

No.	遺跡名	所在地	種別	時期
101	上岡遺跡	福島市飯坂町	散布地	縄文～平安
102	上岡館跡	福島市飯坂町	城館跡	旧石器・縄文・平安・中世
103	反町遺跡	福島市飯坂町	散布地	平安
104	堰上遺跡	福島市飯坂町	散布地	縄文・平安
105	増田石塚群	福島市飯坂町	塚	中世
106	久保遺跡	福島市飯坂町	散布地	縄文
107	増田館跡	福島市飯坂町	城館跡	中世
108	堂の前遺跡	福島市飯坂町	散布地	縄文・平安
109	欅下遺跡	福島市飯坂町	散布地	縄文・平安
110	平野廃寺跡	福島市飯坂町	社寺跡	平安
111	八景腰巻遺跡	福島市飯坂町	散布地	縄文～平安
112	館屋敷跡	福島市下飯坂	城館跡	中世
113	鳥ノ目遺跡	福島市宮代	散布地	奈良・平安
115	孫六橋遺跡	福島市宮代	散布地	弥生・平安・近世
115	大屋敷遺跡	福島市宮代	散布地	奈良・平安
116	宮代館跡	福島市宮代	城館跡	平安
117	前田遺跡	前田	散布地	奈良・平安
118	伊達窯跡群	瀬戸場	窯跡	奈良・平安・近世
119	瀬戸場窯跡群	瀬戸場	窯跡	奈良・平安・近世
120	根田館跡	根田	城館跡	中世
121	一本木遺跡	一本木	散布地	平安
122	東本場遺跡	伏黒	散布地	奈良・平安
123	長倉館跡	舘ノ内	城館跡	中世
124	舘ノ内古墳	舘ノ内	古墳	古墳
125	金秀寺遺跡	広前	散布地	縄文・平安
126	修験伊達家極楽院旧跡	中畑	社寺跡	中世・近世
127	三島屋敷跡	北島	城館跡	中世
128	中畑遺跡	中畑	散布地	平安・中世
129	中志和田遺跡	中志和田	散布地	縄文
130	姥川遺跡	姥川	散布地	奈良・平安
131	新町Ｂ遺跡	川原町	散布地	平安
132	川原町遺跡	川原町	散布地	奈良・平安
133	原遺跡	箱崎	散布地	奈良・平安
134	宝玄遺跡	箱崎	散布地	奈良・平安
135	箱崎大舘館跡	箱崎	城館跡	中世
136	大舘遺跡	箱崎	散布地	平安
137	川岸遺跡	伏黒	散布地	奈良・平安
138	荒屋敷遺跡	伏黒	散布地	奈良・平安
139	舘ノ内遺跡	伏黒	集落跡・散布地	奈良・平安・近世
140	北屋敷遺跡	伏黒	散布地	古墳・奈良
141	南屋敷遺跡	伏黒	散布地	奈良・平安
142	伏黒館跡	伏黒	城館跡	中世
143	宮本遺跡	伏黒	散布地	奈良・平安
144	宮本前遺跡	伏黒	散布地	平安
145	漆宝遺跡	箱崎	散布地	奈良・平安
146	沖ノ原遺跡	伏黒	散布地	奈良・平安
147	岩ノ下遺跡	伏黒	散布地	奈良・平安
148	薬師堂遺跡	伏黒	散布地	奈良・平安
149	高子館跡	保原町上保原	城館跡	縄文・中世
150	高子金山跡	保原町上保原	その他	中世・近世
151	榎内遺跡	保原町上保原	散布地	古墳～平安
152	岩谷遺跡	保原町上保原	散布地	古墳・奈良
153	田向遺跡	保原町上保原	散布地	中世・近世
154	京口遺跡	保原町上保原	散布地	古墳・奈良
155	上ノ原館跡	保原町上保原	城館跡	中世
156	下ノ台遺跡	保原町上保原	散布地	古墳～平安
157	大割遺跡	保原町上保原	散布地	古墳～平安
158	高畑遺跡	保原町上保原	散布地	奈良
159	名場ノ内遺跡	保原町上保原	散布地	古墳～平安
160	深呂内遺跡	保原町上保原	散布地	古墳
161	中島館跡	保原町上保原	城館跡	中世
162	星の宮遺跡	保原町上保原	散布地	縄文～古墳
163	神明町遺跡	保原町上保原	散布地	奈良・平安
164	正地内遺跡	保原町上保原	散布地	縄文～中世
165	内山古墳	保原町上保原	古墳	古墳
166	首塚	保原町上保原	塚	中世
167	大鳥城跡	保原町大柳	城館跡	縄文・古墳～中世
168	大日向遺跡	保原町大柳	散布地	古墳～平安
169	弥生町Ａ遺跡	保原町弥生町	散布地	古墳～平安
170	観音塚古墳	保原町五丁目	古墳	古墳
171	五丁目遺跡	保原町五丁目	散布地	古墳
172	弥生町Ｂ遺跡	保原町弥生町	散布地	古墳～平安
173	実町遺跡	保原町実町	散布地	古墳～平安
174	大河内館跡	保原町前田町	城館跡	中世
175	前田町遺跡	保原町前田町	散布地	縄文・古墳・奈良
176	市柳遺跡	保原町一柳	散布地	古墳～平安
177	野崎観音塚古墳	保原町下野崎	古墳	古墳
178	吾妻館跡	保原町東宮下	城館跡	中世
179	京門遺跡	保原町京門	散布地	縄文～平安
180	早稲田遺跡	保原町早稲田	散布地	古墳～平安
181	小蓋Ｂ遺跡	保原町小蓋	散布地	平安・中世
182	東小蓋遺跡	保原町東小蓋	散布地	中世
183	古川端遺跡	保原町古川端	散布地	中世
184	郡山遺跡	保原町所沢	散布地	奈良
185	久保畑遺跡	保原町所沢	散布地	古墳～平安
186	八光内遺跡	保原町所沢	散布地	奈良・平安
187	久保遺跡	保原町久保	散布地	古墳
188	栄町Ｂ遺跡	保原町栄町	散布地	平安・中世
189	保原城跡・保原陣屋跡	保原町宮下	城館跡・その他	中世・近世
190	道城場遺跡	保原町大泉	散布地	古墳
191	宮下遺跡	保原町宮下	散布地	古墳～中世
192	岡代遺跡	保原町岡代	散布地	古墳～平安
193	村岡館跡	保原町村岡	城館跡	中世
194	村岡遺跡	保原町村岡	散布地	古墳～平安
195	大館遺跡	保原町大泉	集落跡	古墳・中世
196	菖蒲沢Ａ遺跡	保原町大泉	集落跡	古墳・中世
197	大地内Ａ遺跡	保原町大泉	集落跡・散布地	縄文～中世
198	大地内Ｃ遺跡	保原町大泉	散布地	古墳～平安
199	舟橋遺跡	保原町舟橋	集落跡・散布地	縄文～中世
200	大地内Ｂ遺跡	保原町大泉	散布地	古墳～平安
201	大田中遺跡	保原町大田中	散布地	古墳
202	愛宕塚古墳群	保原町大泉	古墳	古墳

表２－３　中室内・日照田・舘ノ前遺跡周辺の遺跡一覧

No.	遺跡名	所在地	種別	時期
203	菖蒲沢Ｂ遺跡	保原町大泉	古墳	古墳
204	平館跡	保原町柱田	城館跡	中世
205	平遺跡	保原町柱田	散布地	弥生～平安
206	宮ノ内Ｄ遺跡	保原町柱田	散布地	弥生・古墳・平安
207	宮ノ内Ｃ遺跡	保原町柱田	散布地	古墳
208	宮ノ内Ａ遺跡	保原町柱田	散布地	古墳～平安
209	宮ノ内Ｂ遺跡	保原町柱田	散布地	平安
210	兎山遺跡	保原町柱田	散布地	古墳～平安
211	六万坊遺跡	保原町六万坊	散布地	古墳～平安
212	大安寺跡	保原町大立目	社寺跡	中世
213	北の館跡	保原町大立目	城館跡	中世
214	加古内Ａ遺跡	保原町二井田	散布地	奈良・平安
215	加古内Ｂ遺跡	保原町二井田	集落跡	古墳～平安
216	桐ノ木遺跡 桐ノ木古墳群	保原町二井田	古墳	古墳
217	牡丹原遺跡	保原町二井田	集落跡	古墳～平安
218	五斗蒔Ａ遺跡	保原町二井田	散布地	古墳～平安
219	小作逢遺跡	保原町大泉	散布地	古墳～平安
220	一本杉Ｃ遺跡	保原町二井田	散布地	縄文～平安
221	一本杉Ｂ遺跡	保原町二井田	散布地	縄文～近世
222	一本杉Ａ遺跡	保原町二井田	散布地	古墳～中世
223	五斗蒔Ｂ遺跡	保原町二井田	集落跡	奈良・平安
224	仁井田館跡	保原町二井田	城館跡	中世
225	小島Ａ遺跡	保原町二井田	散布地	奈良・平安
226	大釜遺跡	保原町二井田	散布地	古墳～平安
227	正監遺跡	保原町二井田	散布地	古墳～平安
228	正監館跡	保原町二井田	城館跡	中世
229	山守遺跡	保原町二井田	散布地	縄文・古墳～中世
230	南遺跡	保原町二井田	散布地	古墳
231	前原館跡	保原町二井田	城館跡	中世
232	大泉みずほ遺跡	保原町大泉	古墳・散布地	弥生～近世
233	高野Ｂ遺跡	保原町大泉	散布地	古墳～平安
234	北原館跡	保原町金原田	城館跡	中世
235	大塚Ａ古墳	保原町大泉	古墳	古墳
236	大塚Ｂ古墳	保原町大泉	古墳	古墳
237	大塚古墳群	保原町大泉	古墳	古墳
238	寄居館跡	保原町金原田	城館跡	中世
239	北前遺跡	保原町金原田	散布地	古墳～中世
240	高野古墳群	保原町金原田	古墳	古墳
241	矢矧伝遺跡	梁川町粟野	古墳	古墳
242	並柳遺跡	梁川町柳田	散布地	中世
243	萱場館跡	梁川町柳田	城館跡	中世
244	東郷内遺跡	梁川町柳田	散布地	奈良～中世
245	町頭遺跡	梁川町柳田	散布地	縄文～平安
246	太宰屋敷跡	梁川町粟野	城館跡	中世
247	大舘遺跡	梁川町大舘	城館跡・散布地	平安・中世
248	東土橋遺跡	梁川町東土橋	集落跡・散布地	平安～近世
249	新田台遺跡 蓮沼館跡	梁川町新田	城館跡・散布地	縄文・奈良～中世
250	花立遺跡	梁川町細谷	散布地	縄文・平安・中世
251	北沢遺跡	梁川町細谷	製鉄跡	中世・近世
252	塚野目城跡	国見町塚野目	城館跡	中世
253	正法寺館跡	国見町塚野目	城館跡	中世
254	反町祭祀	国見町徳江	散布地	古墳
255	反畑館跡	国見町徳江	城館跡	中世
256	東原館跡	国見町徳江	城館跡	中世
257	徳江廃寺跡	国見町徳江	社寺跡	平安
258	徳江館跡	国見町徳江	城館跡	中世

た。林泉寺前遺跡(78)では、中期の土器・土偶・石器等が出土した。薩摩遺跡(24)では、晩期の土器・土偶・石器が出土し、27基の配石遺構が確認された。

弥生時代　確認されている弥生時代の遺跡は少なく、集落の様相等は明らかではない。現状では、薩摩遺跡(24)と隣接する二本木遺跡(25)及び川原田遺跡(５)から中期の土器が出土している。

古墳時代　町域北東の大字伊達崎から国見町塚野目にかけて、塚野目古墳群(92)が５世紀から７世紀初頭の間に造営される。また、沖船場遺跡(87)や長者畑遺跡(88)等、後期から終末期にかけての遺跡が阿武隈川の自然堤防上の伊達崎地区を中心に分布する。

古　　代　奈良・平安時代に入ると、新宿遺跡(69)、大榧遺跡(22)、坊ノ内遺跡(57)、松原館跡(52)等で集落の一部が確認されている。川原田遺跡(５)では、２棟の掘立柱建物跡が確認されていて、１棟には廂が伴う可能性がある。また、緑釉陶器、灰釉陶器、耳皿、土鈴等、一般集落ではあまり見られない遺物が出土していて、有力者の屋敷の可能性がある。

生産遺跡では、町域南端の伊達市との境に、奈良・平安時代の須恵器窯跡である成田前窯跡(67)等があり、伊達市伊達窯跡群(118)等とともに窯跡群を形成している。

中　　世　中世の遺跡は、城館跡が多い。代表的な桑折西山城跡(19)は、戦国時代の天文元年

(1532年)、伊達氏14代稙宗が居城として築城した山城である。平場・堀切・土塁等の遺構がよく残っており、国の史跡に指定されている。また、この頃新たに、西山城麗の大榧遺跡(22)や二本木遺跡(25)に屋敷遺構が現れ、本町遺跡(75)に町屋状の建物がつくられるようになる。

その他にも、寺院跡と考えられる下万正寺遺跡(63)、中世前期の屋敷跡とみられる土井ノ内遺跡(65)、坊ノ内遺跡(57)等が存在する。新宿遺跡(69)では、堀跡、道跡が見つかっていて、道跡は近世に奥州街道が整備される以前の主要街道の可能性が高い。

近　　世　近世に入ると、本町遺跡(75)の南に隣接する地には、幕領代官所である桑折代官所(75)が置かれた。また、町域北部には、かつては佐渡金山、石見銀山とともに日本三大鉱山といわれた半田銀山があり、昭和25年まで採掘が行われていた。　(鶴　見)

第4節　調 査 方 法

上ノ台館跡、中室内遺跡、日照田遺跡、舘ノ前遺跡の発掘調査では、原則的に公益財団法人福島県文化振興財団で踏襲されてきた調査方法を用いている。そこで、以下に一括して述べる。

遺跡や遺構の位置は、世界測地系に基づく国土座標Ⅸ系の座標で示している。また、遺構や遺物の大まかな地点を示すために、10ｍ単位のグリッドを設定した。グリッドの呼称は、北から南に１・２・３…と算用数字、西から東にＡ・Ｂ・Ｃ…とアルファベットを用い、これを組み合わせてＡ１・Ｂ２・Ｃ３…とした。

表土と盛土の除去は重機を用い、それ以外の遺構外堆積土及び遺構内堆積土の掘削は、基本的に人力で行った。遺構の精査は、その特性や規模・遺存状態等に応じて土層観察用畔を残し、土層の堆積状況や遺物の出土状況に留意して進めた。具体的には、竪穴住居跡・特殊遺構の一部は４分割法、その他の遺構は２分割法を採用した。掘立柱建物跡の柱穴では柱痕跡と掘形の識別を行った。

遺構の記録は、実測図作成と写真撮影を行った。実測図は、平面図と土層断面図の作成を原則とし、平面図については、測量基準点をもとに光波測距儀を使用し、部分的に簡易遣方で測量し、現場で結線した。断面図は、遺跡内に移動した簡易水準点をもとに作図した。各遺構の図化は、1/20の縮尺を原則とし、遺構の規模・性格に合わせて1/40の縮尺も適宜使用した。また、上ノ台館跡では、等高線の入った遺構配置図や丘陵地形の横断面図の作成等を航空写真測量で実施した。

遺物は、遺構及びグリッド単位で取り上げを行い、出土層位を記録している。

写真は35㎜判のモノクロームとカラーリバーサルフィルムカメラ、デジタルカメラを使用し、同一被写体の撮影を行った。また、中室内遺跡では、無人航空機搭載カメラによる空中写真撮影も行っている。

これらの調査記録及び出土遺物については、報告書刊行後に公益財団法人福島県文化振興財団の定める基準に従って整理を行い、福島県教育委員会へ移管した後、福島県文化財センター白河館に収蔵される予定である。　(丹　治)

第１編　上ノ台館跡（２次調査）

かみ　の　だいたてあと

遺跡記号	ＤＴ－ＫＮＴ２
所在地	伊達市霊山町下小国字上ノ台
時代・種類	中世の城館跡
調査期間	平成29年８月21日～12月15日
調査員	鶴見諒平・枝松雄一郎

第１章　遺跡の位置と調査経過

第１節　遺跡の位置と現況

上ノ台館跡は、福島県伊達市霊山町下小国字上ノ台に所在する。小国川北岸の丘陵部に位置する城館跡で、平成24年度に実施した分布調査で新たに発見された(福島県教育委員会2014)。上ノ台館跡は、平成27年度の測量調査、平成27・28年度の試掘・確認調査の結果、15,600㎡の要保存範囲が確定していた(福島県教育委員会2016・2017)。このうち、8,700㎡は平成28年度に１次調査を実施し、報告書が刊行されている(福島県教育委員会2018)。

今回の調査は、平成28年度に続く２次調査で、南北に延びる尾根上及び東側斜面の一部が調査区にあたり、１次調査区の南側に位置する。開始前の状況は山林である。

遺跡周辺の地形は、小国川よりも南側は傾斜が緩やかで比較的平坦な土地が広がっている。それに対し、小国川より北側は平坦な場所が少なく、急傾斜の丘陵が迫っている。

周辺には中世城館やその関連遺跡が多く分布している。上ノ台館跡のすぐ北側には遺跡範囲が一部重複する上ノ台遺跡、小国川を挟んで南側には沼ヶ入遺跡、福田遺跡等が所在する。　（鶴　見）

第２節　調 査 経 過

上ノ台館跡の２次調査は、７月５日付で福島県教育委員会から本発掘調査の指示を受け、1,500㎡を対象に平成29年8月21日～12月15日まで、延べ58日間実施した。以下に、調査の経過について週ごとに記す。

８月第４週　：21日(月)から調査区の草刈りや縄張りを実施する。23日(水)から重機による表土除去を開始する。

８月第５週～９月第１週　：重機による表土除去を継続する。表土除去が軌道に乗り始め、遺構とみられる輪郭が見えてきた。

９月第２週　：５日(火)で表土除去が終了する。７日(木)にプレハブ・仮設トイレを設置し、８日(金)にはプレハブに器材を搬入する。

９月第３週　：11日(月)から作業員の雇用を開始し、調査区までの通路の整備等を実施する。

９月第４週　：19日(火)から尾根上の遺構検出作業を開始する。複数の小穴や土坑、竪穴住居跡を検出する。

９月第５週　：26日(火)から土坑の調査を開始する。遺構検出作業では、小穴が掘立柱建物跡や柱列跡の柱穴であることが判明する。

10月第１週　：４日(水)から斜面部の遺構検出作業を開始し、柱列跡を検出する。

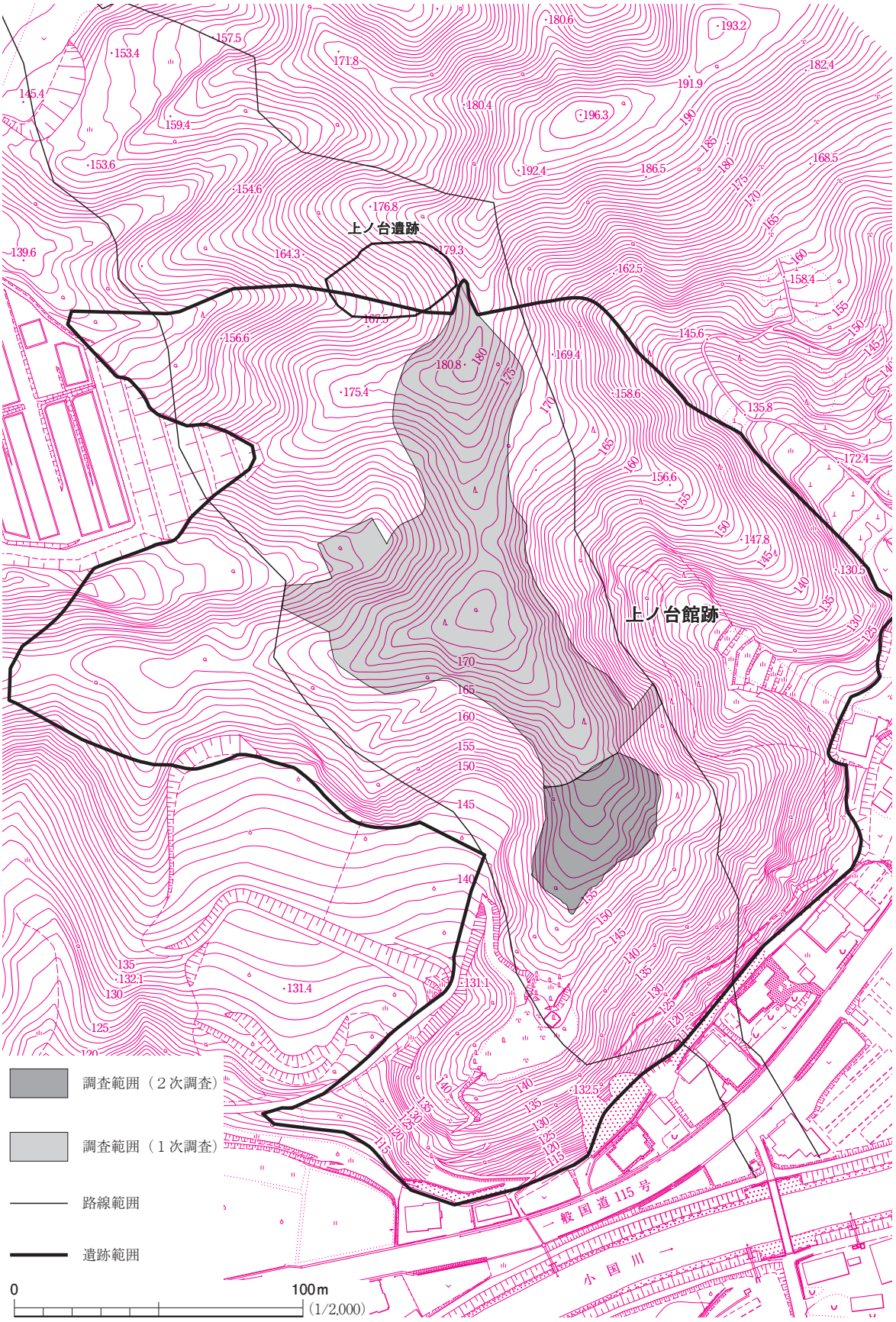

上ノ台遺跡
上ノ台館跡
一般国道115号
小国川
調査範囲（２次調査）
調査範囲（１次調査）
路線範囲
遺跡範囲
0
100m
(1/2,000)

図１　調査区位置図

10月第２～５週：11日(水)に遺構検出作業が終了する。以後は、遺構の精査と記録作業を行う。
11月第１・２週：１日(水)に小穴以外の遺構の精査が終了する。遺構の記録作業と、小穴の調査を中心に行う。
11月第３週　　：17日(金)に小穴の調査が終わり、全ての検出遺構の調査が終了する。
11月第４・５週：調査区の写真撮影、現場からプレハブへの器材の撤収を行う。30日(木)で作業員の雇用を終了する。
12月第３週　　：13日(水)に仮設トイレの汲み取り、プレハブからの器材の撤収を行う。15日(金)には、航空写真測量を実施するとともに、プレハブ・仮設トイレを撤去する。
１月第４週　　：22日(月)に、県文化財課及び国交省の立ち会いの下、現地引き渡しを行った。

（鶴　見）

第２章　発見された遺構と遺物

第１節　調査成果の概要と基本土層

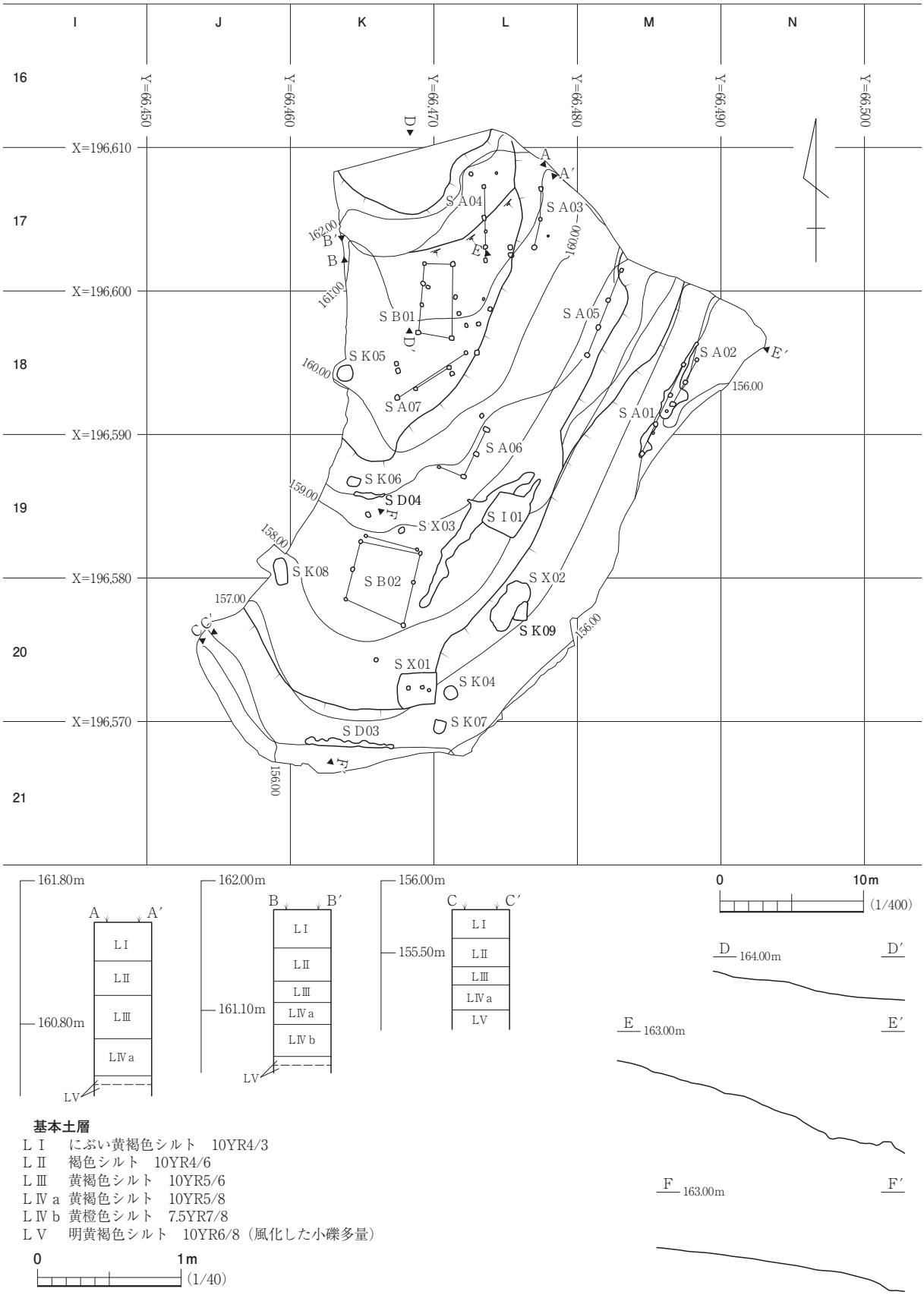
調査成果の概要

今回の２次調査区は、城館跡として登録されている範囲全体の中では南部にあたり、１次調査区の南側に隣接する箇所である。調査開始前の観察では、尾根上に複数の平場と思われる箇所が確認され、城館跡の本体部と推定されていた。

調査区内は、尾根上の比較的平坦な箇所と、東向きの斜面部とに分けられる。調査区は、北端が最高点、東端付近が最低点で、最高点と最低点との比高は７ｍ程である。尾根筋は、傾斜はあるが比較的緩やかで、平坦部が階段状に続いている。遺構は、多くが尾根上に分布しているが、斜面部にも少数認められる。

今回の調査で確認された遺構は、竪穴住居跡１棟、掘立柱建物跡２棟、土坑６基、溝跡２条、柱列跡７列、特殊遺構３基、小穴13基である。遺物がほとんど出土しなかったため、各遺構の時期や城館が機能していた時期については判断できなかった。また、測量調査時の観察で平場とされていた平坦部では、図２の横断面に示すように、明確な切岸や平場の造成は確認できなかった。一部に手を加えて利用している可能性はあるが、１次調査で確認された１号平場とした箇所以外では、もともとの地形に近い状態であると判断した。

なお、今回の調査で確認した遺構の番号は、１次調査からの連番としている。グリッドも、１次調査時に設定したグリッドから連続する番号を付している。



基本土層

ＬⅠ　にぶい黄褐色シルト　10YR4/3
ＬⅡ　褐色シルト　10YR4/6
ＬⅢ　黄褐色シルト　10YR5/6
ＬⅣａ　黄褐色シルト　10YR5/8
ＬⅣｂ　黄橙色シルト　7.5YR7/8
ＬⅤ　明黄褐色シルト　10YR6/8（風化した小礫多量）

図２　遺構配置図・基本土層

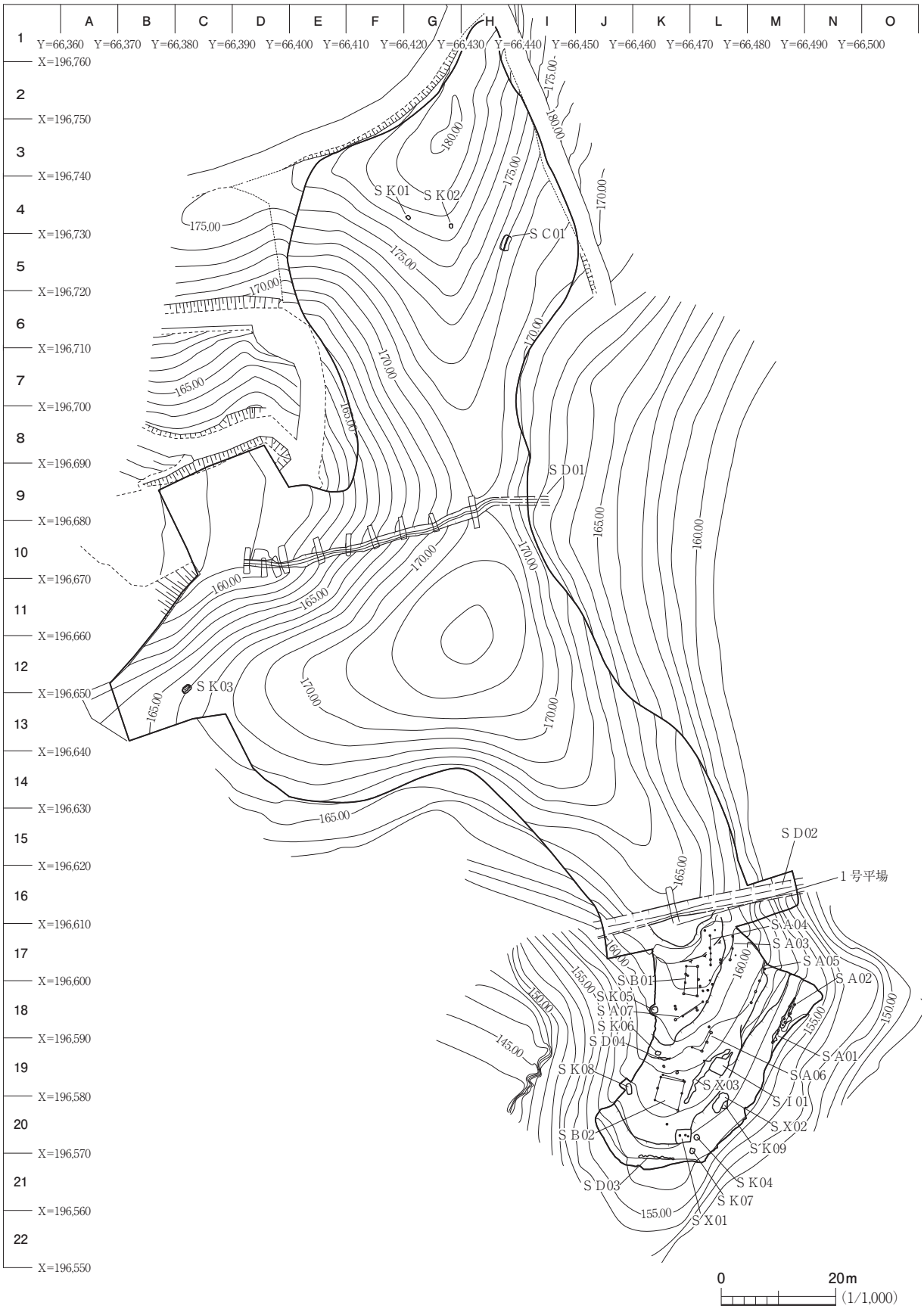


図３　上ノ台館跡１・２次調査区全体図

基本土層（図２）

基本土層は、調査区内の３地点（Ａ－Ａ′、Ｂ－Ｂ′、Ｃ－Ｃ′）で土層を確認し、色調・土質の諸特徴からＬⅠ～Ⅴの５層に分層した。

ＬⅠは、表土とその直下の腐植土を一括した。

ＬⅡは、褐色シルト層で、層厚は20～25㎝である。ＬⅢへの漸移的な層で、一部の遺構内部にはこのＬⅡに起因する土が堆積している状況が確認できた。

ＬⅢは、黄褐色シルト層で、層厚はＢ－Ｂ′・Ｃ－Ｃ′地点では約13㎝であるが、Ａ－Ａ′地点では約30㎝と厚く堆積する。一部の遺構は、この層の上面で検出できた。

ＬⅣは、２層に細分した。その内、ＬⅣａとした黄褐色シルト層が、今回の調査で確認した大半の遺構の検出面である。層厚は15～25㎝である。ＬⅣｂは、調査区内の一部でのみ確認できる黄橙色シルト層である。ＬⅣａに比べ、風化が進行している。層厚は、約22㎝である。

ＬⅤは、遺跡が立地する丘陵の基盤層である。（鶴　見）

第２節　竪 穴 住 居 跡

今回の調査区では、竪穴住居跡を１軒検出した。出土遺物は僅かだが、その年代観から古代のもので、丘陵が城館として利用される以前の遺構と判断している。

１号住居跡　ＳＩ01

遺　　構（図４、写真４・５）

調査区中央付近のＬ19グリッドで検出した竪穴住居跡である。遺構検出面はＬⅣａ上面で、尾根上の平坦部と斜面部との境付近に位置している。３号特殊遺構と重複していて、本遺構の方が古い。南に３ｍには２号特殊遺構、南西に５ｍには２号建物跡、北西に2.5ｍには６号柱列跡がある。

平面形は方形を基調とするが、カマド付近で僅かに外側に膨らむ。南東部は壁の立ち上がりを確認することができなかった。規模は、北辺で2.51ｍ、西辺で2.36ｍ、検出面からの深さは最大で42㎝である。

住居内の堆積土は２層で、いずれも自然堆積土と判断した。傾斜地に立地しているため、斜面下位の東に行くほど堆積土が薄くなっている。特に、住居跡南東部では非常に薄いか確認できない状況で、検出段階での輪郭は不明瞭であった。住居跡の東～南東壁の大半は、後世に土砂の流出で失われたと考えられるが、城館跡として利用された際に削平を受けた可能性もある。

床面では、カマドの前面で小穴を１基検出した。Ｐ１の平面形は隅がやや丸い方形で、一辺約27㎝、床面からの深さは18㎝である。堆積土は褐色シルトの単層である。Ｐ１が柱穴だったとすると、その位置関係からカマドでの作業時に邪魔になるとみられる。柱痕も確認できなかったた

図４　１号住居跡・出土遺物

め、Ｐ１の具体的な性格は不明である。この他、床面から周溝等は確認できなかった。

カマドは住居跡の北東角につくられていた。燃焼部が住居跡の壁面よりも外側にある点が特徴的だが、底面付近が遺存するのみで、上部の大半が失われているため、詳しい構造は不明である。燃焼部は被熱により赤色化しており、特に中央付近が強く火を受けたことにより硬化していた。燃焼部の長さは58㎝、幅は最大で61㎝である。また、燃焼部の前面では、長軸60㎝、短軸38㎝、深さ12㎝の楕円形の窪みを確認した。作業場とするには狭すぎるため、燃焼部から灰をかき出して集める箇所としてつくられたのであろうか。煙道部は、長さが106㎝、煙道幅は最大で32㎝で、煙出部の方に向かって底面標高が高くなっている。

カマド内の堆積土は、４層に分層した。ℓ１が燃焼部、ℓ２・４が燃焼部前面の窪み、ℓ３が煙道部に堆積した土である。いずれの層も具体的な堆積要因は判然としない。なお、ℓ３について

は、住居跡内堆積土のℓ１と近似した暗褐色シルトであるため、煙出部からの流入土の可能性がある。

遺　　物（図４、写真15）

遺物は土師器が１点出土した。図４－１はロクロ成形の杯の口縁部で、内面に黒色処理が施されている。小片だが、９世紀代のものと考えられる。

ま と め

本遺構は平安時代の住居跡である。規模が小さく、周辺で他に竪穴住居跡を確認できないことや、丘陵上に立地すること等から、日常的に利用するものではなく、何らかの作業小屋的な性格が想定される。（鶴　見）

第３節　掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は２棟確認した。所属時期は明確ではないが、城館跡に関わる建物跡の可能性が高いと考えている。

１号建物跡　ＳＢ01

遺　　構（図５、写真６）

本遺構は、調査区北部のＫ17・18、Ｌ17・18グリッド、尾根上の比較的平坦な箇所で検出した掘立柱建物跡である。検出面はＬⅣａ上面で、重複する遺構はない。東に２ｍには４号柱列跡、南に２ｍには７号柱列跡がある。

建物跡は、南北３間×東西１間で南北に長く、西側の柱列を主軸とするとＮ５°Ｅを指す。東側の柱列のＰ５～８が直線的に並んでいないため、やや不整な長方形となっている。

桁行は、東西ともに４個の柱穴で構成されていて、東側のＰ５～８までの長さは5.18ｍ（約17.1尺）、西側のＰ１～４までの長さは4.86ｍ（約16.0尺）となっている。

各柱穴の柱間の寸法は、西側では、Ｐ１・２間が1.42ｍ（約4.7尺）、Ｐ２・３間が1.49ｍ（約4.9尺）、Ｐ３・４間が1.95ｍ（約6.4尺）となり、Ｐ３・４間が他に比して長い。東側では、Ｐ５・６間が2.30ｍ（約7.6尺）、Ｐ６・７間が1.18ｍ（約3.9尺）、Ｐ７・８間が1.81ｍ（約6.0尺）で、間隔が一定しない。梁行は南北とも柱穴は２本で、長さは北側で2.00ｍ（約6.6尺）、南側で2.44ｍ（約8.1尺）である。なお、Ｐ２に隣接して確認したＰ９は、Ｐ６・Ｐ７と同様の規模であり、関連する柱穴と推測されることから本遺構に含めて報告する。

各柱穴の平面形は、方形または隅が丸い方形で、一辺22～30㎝である。検出面からの深さは、Ｐ６・７・９は12～20㎝であるのに対し、それ以外の柱穴では40～62㎝と深く掘り込まれたものが多い。

各柱穴の堆積土をみると、柱痕が確認できた柱穴はＰ５だけである。Ｐ５は、ℓ１が柱痕で太さ

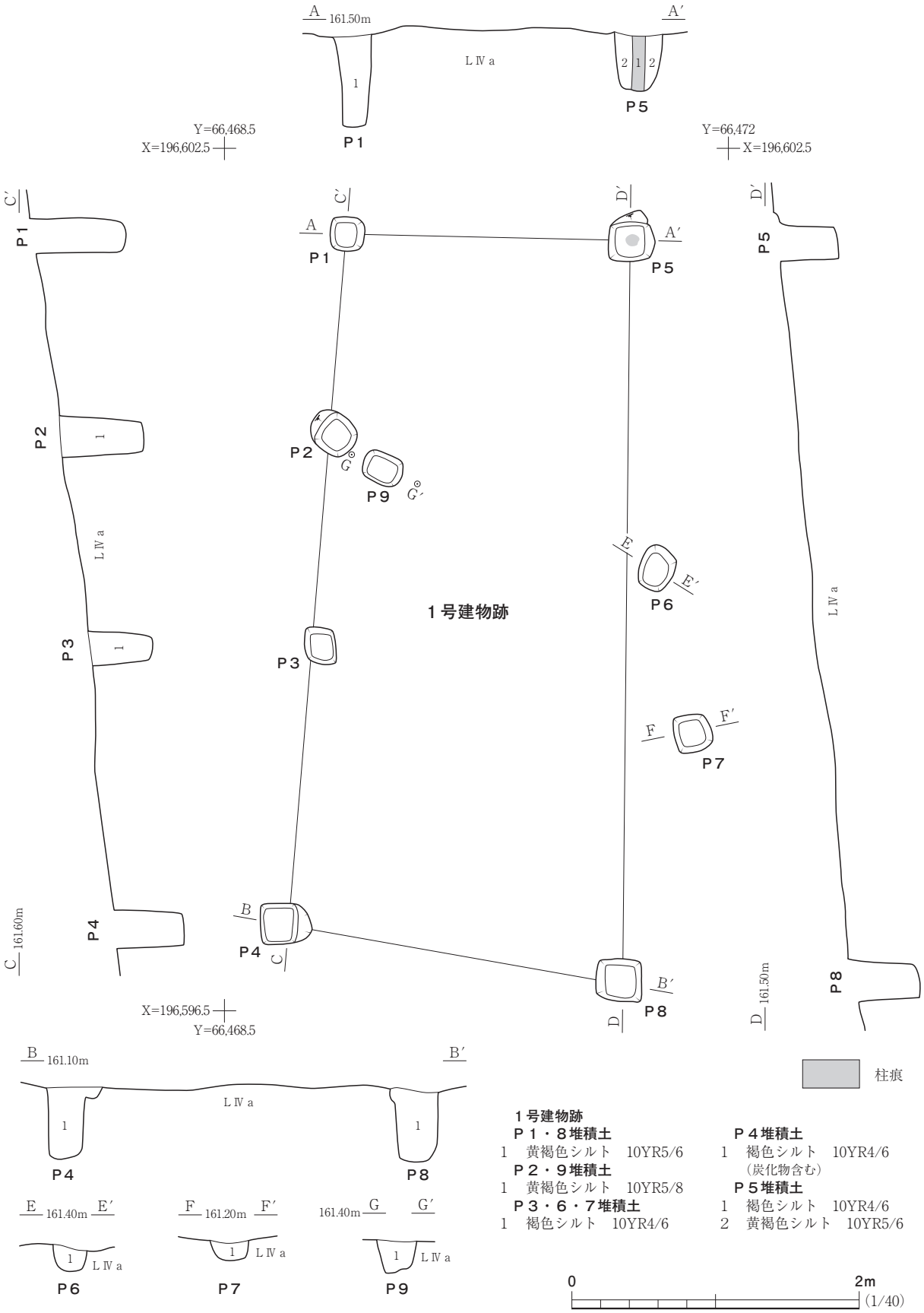

A 161.50m
A′
LⅣa
P1
P5
Y=66,468.5
X=196,602.5
Y=66,472
X=196,602.5
P2
P3
P4
P6
P7
P8
P9
1号建物跡
X=196,596.5
Y=66,468.5
B 161.10m
B′
C 161.60m
D 161.50m
E 161.40m
E′
F 161.20m
F′
161.40m G
G′
柱痕
1号建物跡
P１・８堆積土
1　黄褐色シルト　10YR5/6
P２・９堆積土
1　黄褐色シルト　10YR5/8
P３・６・７堆積土
1　褐色シルト　10YR4/6
P４堆積土
1　褐色シルト　10YR4/6
（炭化物含む）
P５堆積土
1　褐色シルト　10YR4/6
2　黄褐色シルト　10YR5/6
0
2m
(1/40)

図５　１号建物跡

は約10㎝、その周囲にはℓ２とした黄褐色シルトを充填している。Ｐ５以外の柱穴は柱が抜き取られた後に、自然に埋没したものと推定される。なお、いずれの柱穴からも遺物は出土していない。

ま と め

本遺構は、南北方向に桁行をもつ南北３間×東西１間の掘立柱建物跡である。出土遺物がなく遺構の所属時期を厳密に特定することはできないが、２号建物跡や周囲の柱列跡とともに城館跡を構成する建物跡と推測される。（鶴　見）

２号建物跡　ＳＢ02

遺　　構（図６、写真７）

本遺構は、調査区南部のＫ19・20グリッドで検出した掘立柱建物跡である。尾根上の平坦部に立地し、検出面はＬⅣａである。重複する遺構はないが、北に３ｍには４号溝跡、東に１ｍには３号特殊遺構、南西に３ｍには１号特殊遺構、西に４ｍには８号土坑がある。

建物跡は、南北２間×東西１間で南北に長く、東側の柱列を主軸とするとＮ13°Ｅを指す。桁行は東西ともに３個の柱穴で構成される。東側のＰ１～３までの長さは5.14m（約17.0尺）、西側のＰ４～６までの長さは4.16ｍ（約13.7尺）と東側がやや長い。そのため、全体的にはやや歪んだ長方形を呈する。

各柱穴の柱間の寸法は、東側ではＰ４・５間が2.06ｍ（約6.8尺）、Ｐ５・６間が3.08ｍ（約10.2尺）、西側ではＰ１・２間が2.02ｍ（約6.7尺）、Ｐ２・３間が2.14ｍ（約7.1尺）となっており、Ｐ５・６間が他に比して長い。梁行は、北側のＰ１・４間が4.27ｍ（約14.1尺）、南側のＰ３・６間が4.43ｍ（約14.6尺）となっている。

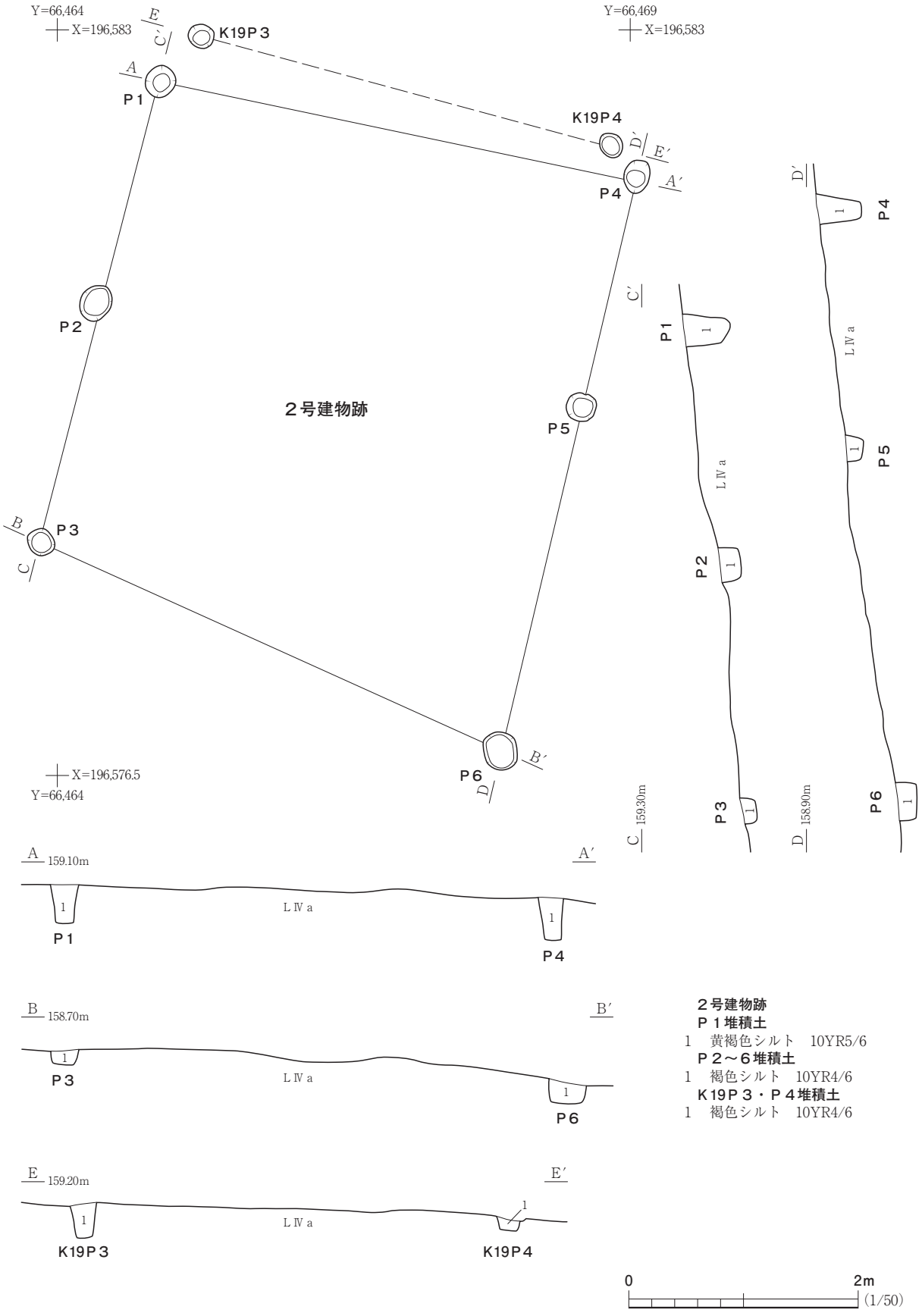
各柱穴の平面形は、概ね歪んだ円形ないし隅が丸い方形で、規模は直径や一辺が24～30㎝である。検出面からの深さは、Ｐ１・４は35㎝前後であるのに対し、Ｐ２・３・５・６は10～20㎝と浅い。

各柱穴の堆積土をみると、いずれの柱穴でも柱痕は確認できなかった。柱が抜き取られた後に、自然に埋没したものと推定される。なお、いずれの柱穴からも遺物は出土していない。

本遺構の北側で確認したＫ19Ｐ３・４は、その位置関係から本建物跡と関連する可能性があることから、本建物跡で報告する。Ｋ19Ｐ３とＰ４との柱間は3.70ｍ（12.2尺）で、本建物跡の梁行よりもやや狭い。平面形は円形を基調とし、直径が20㎝前後で、本建物跡の柱穴よりもやや小さい。検出面からの深さは、Ｋ19Ｐ３が30㎝、Ｋ19Ｐ４が12㎝である。遺物は出土していない。

ま と め

本遺構は、南北方向に桁行をもつ南北２間×東西１間の掘立柱建物跡である。出土遺物がなく遺構の所属時期を厳密に特定することはできないが、１号建物跡や周囲の柱列跡とともに城館跡を構成する建物跡と推測される。（鶴　見）



２号建物跡
Ｐ１堆積土
1　黄褐色シルト　10YR5/6
Ｐ２～６堆積土
1　褐色シルト　10YR4/6
Ｋ19Ｐ３・Ｐ４堆積土
1　褐色シルト　10YR4/6

図６　２号建物跡

第４節　　土　　坑

今回の調査では、６基の土坑を確認した。８号土坑は平安時代以降と考えられるが、その他の土坑は、明確な所属時期や性格等を判断できる所見は得られなかった。

４号土坑　ＳＫ04（図７、写真８）

本遺構は、調査区南端付近のＬ20グリッド、緩斜面で検出した土坑である。重複する遺構はないが、西には１号特殊遺構が隣接し、南に１ｍには７号土坑がある。検出面はＬⅣａ上面である。

平面形は円形で、規模は東西96㎝、南北98㎝、検出面からの深さは10㎝である。底面は、ほぼ平坦である。

堆積土は褐色シルトの単層で、自然堆積土と判断した。なお、遺物は出土していない。

本遺構の所属時期や性格については不明だが、隣接する１号特殊遺構と関連する可能性がある。

（鶴　見）

５号土坑　ＳＫ05（図７、写真８）

本遺構は、調査区中央付近のＫ18グリッド、尾根上の平坦部で検出した土坑である。重複する遺構はないが、北東に4.5ｍには１号建物跡、東に３ｍでは７号柱列跡がある。検出面はＬⅢ上面である。

平面形は歪んだ円形で、規模は東西109㎝、南北110㎝である。底面は二段になっていて、北部は掘り込みが浅い。検出面からの深さは南部で30㎝であるが、北部では８～14㎝である。

堆積土は２層に分層し、いずれも自然堆積土と判断した。ℓ２にはＬⅣに起因する明黄褐色シルト塊が認められるため、壁の崩落土も含まれると考えられる。

本遺構からは出土遺物もなく、遺構の所属時期や性格等については不明である。（鶴　見）

６号土坑　ＳＫ06（図７、写真８）

本遺構は、調査区中央付近のＫ19グリッド、尾根上の緩斜面で検出した土坑である。重複する遺構はないが、南に隣接して４号溝跡がある。検出面はＬⅣａ上面である。

平面形は歪んだ長方形で、規模は東西91㎝、南北68㎝、検出面からの深さは33㎝である。断面形は擂鉢状になっている。

堆積土は２層に分層し、いずれも自然堆積土と判断した。ℓ２は黄褐色シルトで、壁の崩落土を主体とした層と考えられる。

本遺構からは出土遺物もなく、遺構の所属時期や性格等については不明である。（鶴　見）

７号土坑　ＳＫ07（図７、写真８）

本遺構は、調査区南端のＬ20・21グリッド、南向きに傾斜する斜面で検出した土坑である。重複する遺構はないが、北に隣接して２号特殊遺構と４号土坑がある。検出面はＬⅣａ上面である。

平面形は、歪んだ長方形である。規模は、東西78㎝、南北92㎝、検出面からの深さは36㎝である。底面は、若干の凹凸があるがほぼ平坦である。

堆積土は３層に分層した。いずれも自然堆積土で、斜面上位から遺構内部に流入した状況が観察された。遺物は出土していない。

本遺構の所属時期や性格については不明である。（鶴　見）

８号土坑　ＳＫ08（図７、写真８・15）

本遺構は、調査区南部の西端のＪ19・20グリッドで検出した土坑である。重複する遺構はないが、東に５ｍには２号建物跡がある。検出面はＬⅢ上面である。

平面形は長方形で、主軸方向はＮ８°Ｗである。規模は、南北183㎝、東西90㎝、検出面からの深さは15㎝である。底面は、若干の凹凸があるがほぼ平坦である。

堆積土は褐色シルトの単層で、自然堆積土と判断した。

本遺構からはℓ１より古銭が１枚出土した。図７－１は、半分が欠けているが、宋銭の政和通宝または宣和通宝である。前者が1111年、後者が1119年の初鋳とされている。

古銭の示す年代からすれば、本遺構の所属時期は平安時代以降と考えられる。ただし、この古銭が伝世された可能性を考慮すると、本遺跡が城館跡として利用されていた時期の遺構の可能性もある。（鶴　見）

９号土坑　ＳＫ09（図７、写真８）

本遺構は調査区南部のＬ20グリッドに位置し、東向きの斜面に立地する土坑である。２号特殊遺構と重複していて、本遺構の方が古い。検出面はＬⅣａ上面である。

平面形は不整形で、南北の長さは132㎝である。東西の長さは、南辺では98㎝だが、北辺では38㎝と狭くなっている。

堆積土は褐色シルトの単層で、自然堆積土と判断した。なお、遺物は出土していない。

本遺構は、重複関係から２号特殊遺構より古いと判断されるが、詳細な所属時期や性格等については不明である。（鶴　見）

図７　４～９号土坑、出土遺物

第５節　　溝　　跡

溝跡は、２条検出した。いずれの溝跡も、斜面上位からの流水を排水する目的でつくられたと考えられ、掘立柱建物跡とともに城館跡に伴う遺構と推測される。

３号溝跡　ＳＤ03（図８、写真９）

本遺構は、調査区南端のＫ21グリッド、斜面部から平坦部に移行する傾斜変換線上に立地する溝跡である。検出面はＬⅣａ上面である。重複する遺構はないが、北東に2.5ｍには１号特殊遺構、東に３ｍには７号土坑がある。

溝跡は傾斜変換線に沿うように東西に延びていて、確認できた長さは6.18ｍである。南壁は直線

的だが、北壁は崩落のためか一定しない。構築時の状況を保っていると判断できる場所での幅は、14～30㎝である。検出面からの深さは、最大で10㎝程と浅い。

堆積土は２層に分層した。いずれも自然堆積土と判断した。ℓ２はＬⅣに近似した明黄褐色砂質シルトで､壁の崩落土を主体とした層と考えられる。ℓ１は斜面上位から流入した状況が観察された。

本遺構は、斜面部から平坦部に移行する傾斜変換線上に立地すること、そして、この傾斜変換線に沿うようにつくられていることから、斜面上方から流れてきた水を排水する機能が想定される。出土遺物がないため、厳密な所属時期は不明だが、同様の特徴を持った４号溝跡と同時期と考えられる。そして、４号溝跡が２号建物跡と関連を持っていたと考えられることから、城館跡が機能していた時期のものと推測される。（鶴　見）

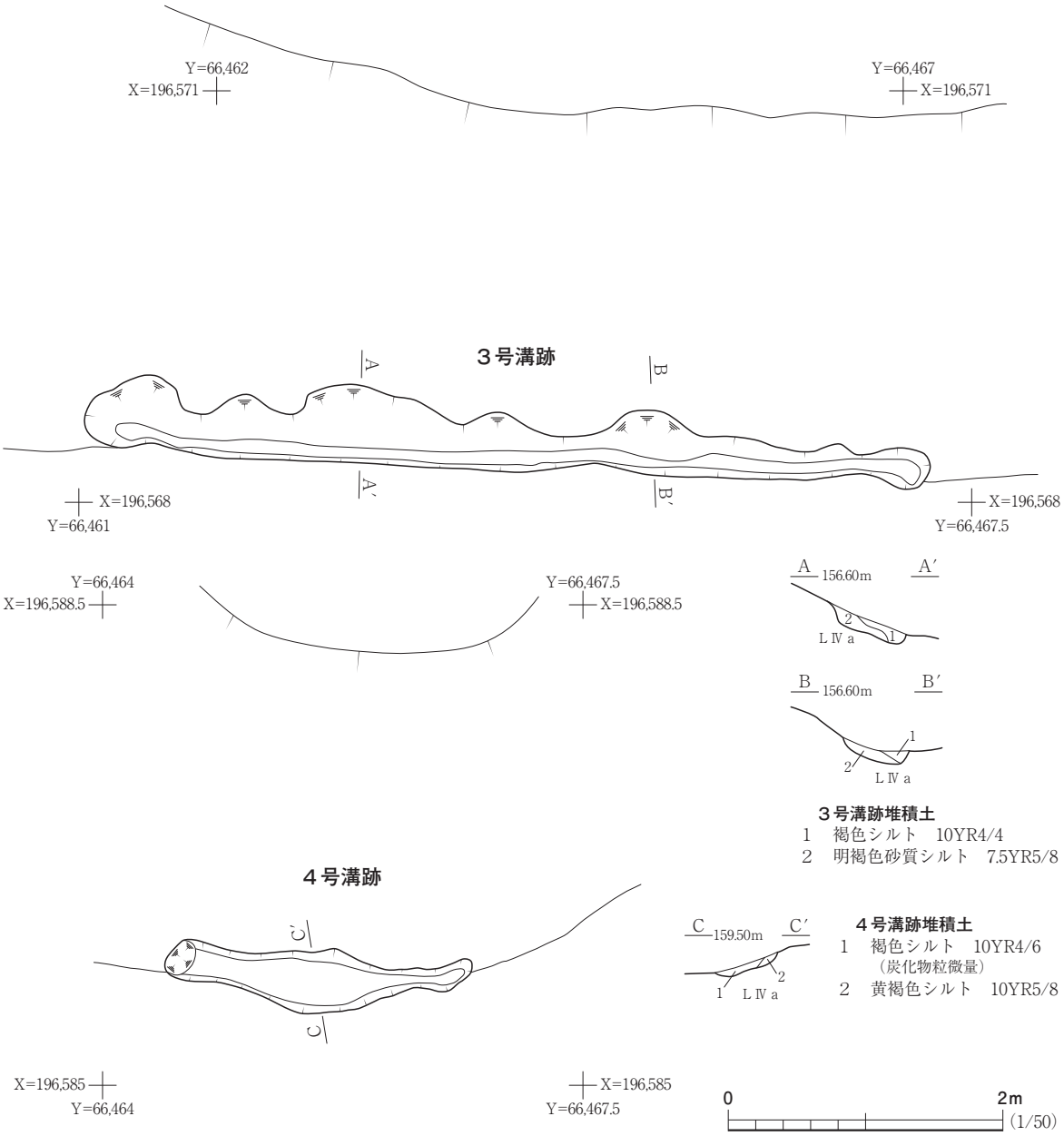


図８　３・４号溝跡

４号溝跡　ＳＤ04（図8）

本遺構は、調査区中央部付近のＫ19グリッド、斜面部から平坦部に移行する傾斜変換線上に立地する溝跡である。検出面はＬⅣａ上面である。重複する遺構はないが、北に６号土坑が隣接し、南に３ｍには２号建物跡がある。

溝跡は傾斜変換線に沿うように東西に延びていて、確認できた長さは2.21ｍである。幅は16～43㎝で、中央付近が広い。検出面からの深さは６㎝前後と非常に浅い。

堆積土は２層に分層した。いずれも自然堆積土で、斜面上位から遺構内部に流入した状況が観察された。

本遺構は、斜面部から平坦部に移行する傾斜変換線上に立地すること、そして、この傾斜変換線に沿うようにつくられていることから、斜面上方から流れてきた水を排水する機能が想定される。排水の目的は、本遺構の下方にある２号建物跡へ直接水が流れて行かないようにするためと思われる。ただ、排水の機能を考えると、もう少し長くかつ深い方が望ましい。このため、後世の土砂の流出あるいは表土除去の際に一部を掘り下げ過ぎて部分的に失われた可能性も考えられる。出土遺物がないため、厳密な所属時期は不明だが、同様の特徴を持った３号溝跡と同時期と考えられる。そして、２号建物跡と関連を持った遺構と考えられることから、城館跡が機能していた時期のものと推測される。（鶴　見）

第６節　柱　列　跡

柱列跡は、７列検出した。いずれも柵または塀等として機能していたと考えられる。年代を示す遺物は出土していないが、掘立柱建物跡とともに城館跡に伴う遺構と推測される。

１・２号柱列跡　ＳＡ01・02

遺　　構（図９、写真13）

１・２号柱列跡は、調査区東端のＭ18・19グリッドで検出した柱列跡である。これらの遺構は、東向きの斜面の途中、標高156ｍ付近の僅かな平坦部とそれより下位の斜面部との傾斜変換線にあたる箇所に立地している。検出面はＬⅣａ上面である。柱穴同士は重複していないが、１号柱列跡に伴う布掘りと２号柱列跡の一部が重複している。

１号柱列跡は４個の柱穴から構成され、南から北にＰ１～４と呼称した。Ｐ１～４の総長は7.16ｍ（約23.6尺）である。各柱穴の柱間の寸法は、Ｐ１・２間が2.26ｍ（約7.5尺）、Ｐ２・３間が2.26ｍ（約7.5尺）、Ｐ３・４間が2.33ｍ（約7.7尺）とほぼ揃っている。

各柱穴の平面形は、方形ないし歪んだ円形で、規模は直径や一辺が26～28㎝である。検出面からの深さは、49～59㎝で、底面の標高は155.6ｍ前後と揃っている。

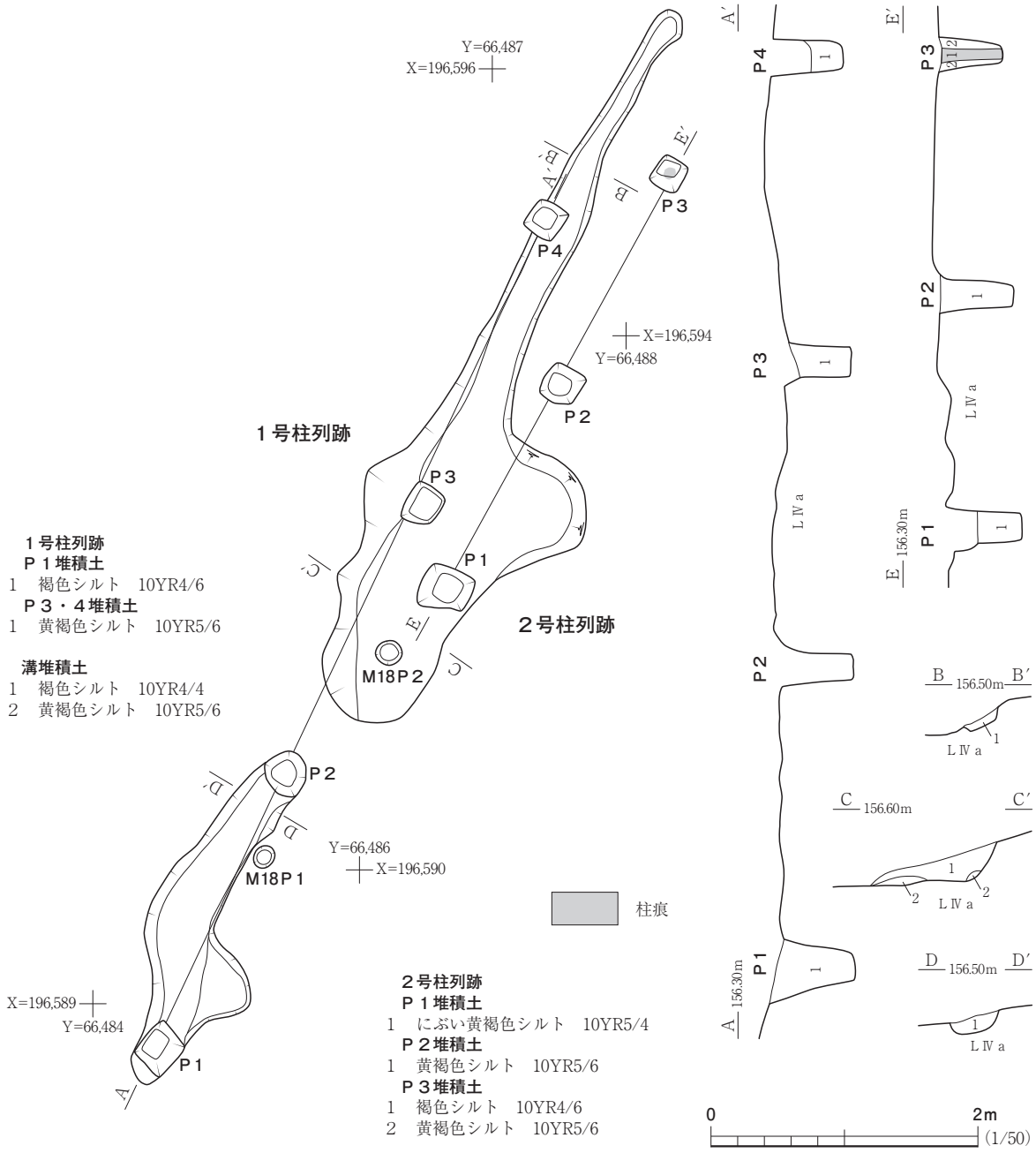


図９　１・２号柱列跡

各柱穴の堆積土は、Ｐ１・３・４は褐色シルトないし黄褐色シルトの単層で、柱痕は確認できなかった。各柱穴は柱が抜き取られた後に、自然に埋没したものと推定される。Ｐ２は、調査時に崩落したため土層の記録を行うことができなかったことから、不明である。

なお、１号柱列跡には長さ8.56ｍの布掘り状の溝跡が伴う。中央部付近と南端部付近には木の根による攪乱があり、構築時の状態を留めていない。それ以外の箇所の計測値は最小15㎝、最大47㎝、検出面からの深さは最大で28㎝である。底面は東に向かって僅かに傾斜している。堆積土は２層に分層した。Ｐ１～４に伴う布掘りの溝だとすれば、人為的に埋め戻した状況が観察されると予想していたが、明瞭な人為堆積であるという所見は得られなかった。そのため、機能時は埋

められずに窪んだ状況であった可能性もある。

２号柱列跡は３個の柱穴から構成され、南から北にＰ１～３と呼称した。Ｐ１～３の総長は3.83ｍ(約12.6尺)である。各柱穴の柱間の寸法は、Ｐ１・２間が1.76ｍ(約5.8尺)、Ｐ２・３間が1.80ｍ(約5.9尺)とほぼ揃っている。

各柱穴の平面形は、方形を基調とし、Ｐ１が１辺35㎝前後、Ｐ２が１辺28㎝前後、Ｐ３が１辺23㎝前後とばらつきがある。検出面からの深さは、Ｐ１・２が55㎝前後、Ｐ３が47㎝で、底面の標高は151.3ｍ前後と揃っている。

各柱穴の堆積土をみると、柱痕が確認できた柱穴はＰ３だけである。Ｐ３は、ℓ１が柱痕で太さは約10㎝、その周囲にはℓ２とした黄褐色シルトを充填している。Ｐ３以外の柱穴は柱が抜き取られた後に、自然に埋没したものと推定される。

なお、１・２号柱列跡からは、遺物は出土していない。

Ｍ18Ｐ１・２は、円形の小穴で、周辺には他に遺構が認められないことから、１号柱列跡または２号柱列跡に関係する可能性がある。規模は、Ｍ18Ｐ１は直径14㎝、検出面からの深さ36㎝、Ｍ18Ｐ２は直径18㎝、検出面からの深さ24㎝である。堆積土はどちらも単層の自然堆積土で、柱痕は認められなかった。なお、遺物は出土していない。

ま と め

１・２号柱列跡は並列する柱列跡で、東向き斜面中腹の僅かな平坦部に構築されている。１・２号柱列跡は他の柱列跡と同様、柵または塀等の機能が想定される。１号柱列跡は、布掘状の溝跡を伴うが、機能時に埋められていたかどうかは判然としなかった。ただ、底面標高が揃えられていること、布掘り状の溝跡が伴うことから、他の柱列跡よりも丁寧につくられていると推測される。出土遺物がないため、厳密な所属時期は不明だが、掘立柱建物跡や他の柱列跡とともに城館跡が機能していた時期のものと推測される。（鶴　見）

３号柱列跡　ＳＡ03

遺　　構（図10）

本遺構は、調査区北部のＬ17グリッド、尾根上の平坦部から僅かに斜面を下った場所で検出した柱列跡である。検出面はＬⅣａ上面である。重複する遺構はないが、西に３ｍには４号柱列跡がある。

３号柱列跡は３個の柱穴から構成され、南から北にＰ１～３と呼称した。Ｐ１～３の総長は4.44ｍ(約14.7尺)である。各柱穴の柱間の寸法は、Ｐ１・２間が2.02ｍ(約6.6尺)、Ｐ２・３間が2.12ｍ(約7.0尺)である。

各柱穴の平面形は隅丸方形で、Ｐ２がやや小さく一辺20㎝前後、Ｐ１・３は25㎝前後となっている。検出面からの深さは、Ｐ１が38㎝、Ｐ２・３が20㎝前後である。柱穴の底面標高はＰ２・３が160.8ｍ前後なのに対し、Ｐ１は160.4ｍ前後と低くなっている。

各柱穴の堆積土をみると、柱痕が確認できた柱穴はＰ１だけである。Ｐ１の柱痕は、掘形の中心

からは少し東にずれている。柱痕の太さは約10cmで、周囲には黄褐色シルトを充填している。なお、いずれの柱穴からも遺物は出土していない。

ま と め

本遺構は、３個の柱穴で構成される柱列跡である。出土遺物がないため、厳密な所属時期は不明だが、西側に隣接する４号柱列跡とともに柵または塀等の機能が考えられ、城館跡が機能していた時期のものと推測される。（鶴　見）

４号柱列跡　ＳＡ04

遺　　構（図10、写真14）

本遺構は、調査区北部のＬ17・18グリッド、尾根上の平坦部とそれより下位の斜面部との傾斜変換線付近で検出した柱列跡である。検出面はＬⅣａ上面である。重複する遺構はないが、東に

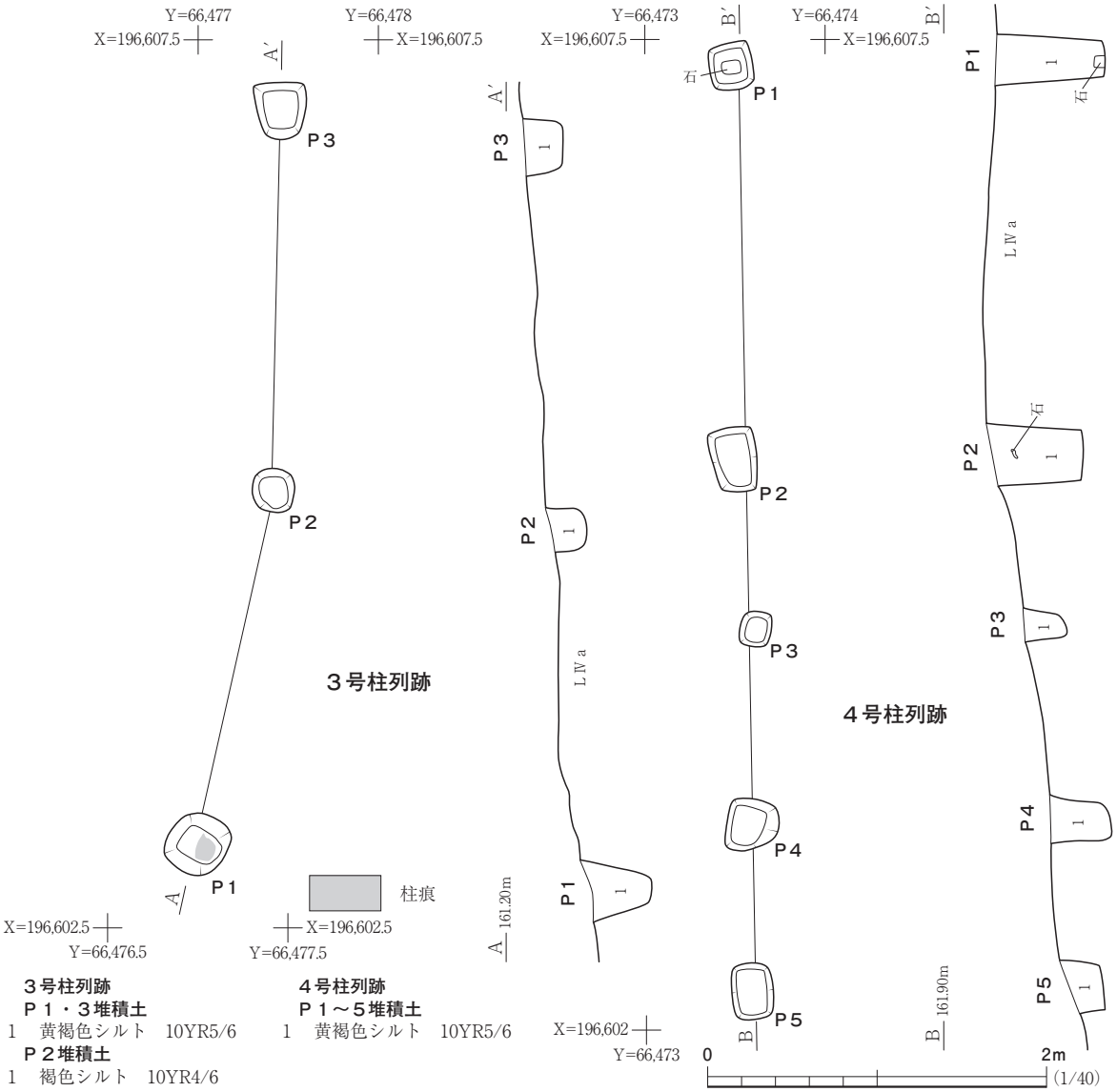


図10　３・４号柱列跡

４ｍには３号柱列跡、西に２ｍには１号建物跡がある。

４号柱列跡は５個の柱穴から構成され、北から南にＰ１～５と呼称している。Ｐ１～５の総長は5.44ｍ(約18.0尺)である。各柱穴の柱間の寸法は、Ｐ２・３間が0.96ｍ(約3.2尺)、Ｐ３・４間が1.1ｍ(約3.6尺)、Ｐ４・５間が0.95ｍ(約3.1尺)とほぼ揃っているのに対し、Ｐ１・２間は2.2ｍ(約7.3尺)と他に比べ長い。

各柱穴の平面形は、方形または隅丸方形を基調とするが、Ｐ４はやや不整形である。規模は、Ｐ３がやや小さく一辺18㎝前後、他は25～33㎝前後となっている。検出面からの深さは、22～60㎝とばらつきがあるが、斜面上位のＰ１・２が深く、斜面下位のＰ３～５が浅い傾向にある。柱穴の底面標高は、161.0～161.4ｍでばらつきがある。

各柱穴の堆積土は、いずれも黄褐色シルトの単層で、柱痕は確認できなかった。各柱穴は、柱が抜き取られた後に自然に埋没したものと推定される。また、Ｐ１の底面には、長さ10㎝前後の根石とみられる石が置かれていた。なお、いずれの柱穴からも遺物は出土していない。

ま と め

本遺構は、尾根上の平坦部と斜面部との傾斜変換線付近に位置する５個の柱穴で構成される柱列跡である。その位置関係から、尾根上の平坦部及び１号建物跡を囲む柵または塀等の機能を有していたと考えられる。出土遺物がないため、厳密な所属時期は不明だが、１号建物跡とともに城館跡が機能していた時期のものと推測される。（鶴　見）

５号柱列跡

遺　　構（図11）

本遺構は、M7・18グリッドで検出した柱列跡である。調査区東部の東向き斜面の中腹、標高159ｍ付近で傾斜が僅かに緩くなる箇所があり、本遺構はそこに立地している。重複する遺構はないが、北西に５ｍには３号柱列跡、南西に６ｍには１・２号柱列跡がある。

５号柱列跡は４個の柱穴から構成され、南から北にＰ１～４と呼称した。Ｐ１～４の総長は6.47ｍ(約21.4尺)である。各柱穴の柱間の寸法は、Ｐ１・２間が2.11ｍ(約7.0尺)、Ｐ２・３間が2.03ｍ(約6.7尺)、Ｐ３・４間が2.31ｍ(約7.6尺)となっている。

各柱穴の平面形は、隅丸方形を基調とする。規模は一辺26～36㎝である。検出面からの深さは、Ｐ１～３は30～42㎝であるが、Ｐ４は他に比べて15㎝と浅い。底面の標高は、Ｐ１～３が158.4～158.5ｍとほぼ揃っているのに対し、Ｐ４は掘り込みが浅いため、他より高く158.7ｍである。

各柱穴の堆積土は、褐色シルトないし黄褐色シルトの単層で、柱痕は確認できなかった。各柱穴は柱が抜き取られた後に、自然に埋没したものと推定される。なお、いずれの柱穴からも遺物は出土していない。

ま と め

本遺構は、４個の柱穴で構成される柱列跡である。出土遺物がないため、厳密な所属時期は不明

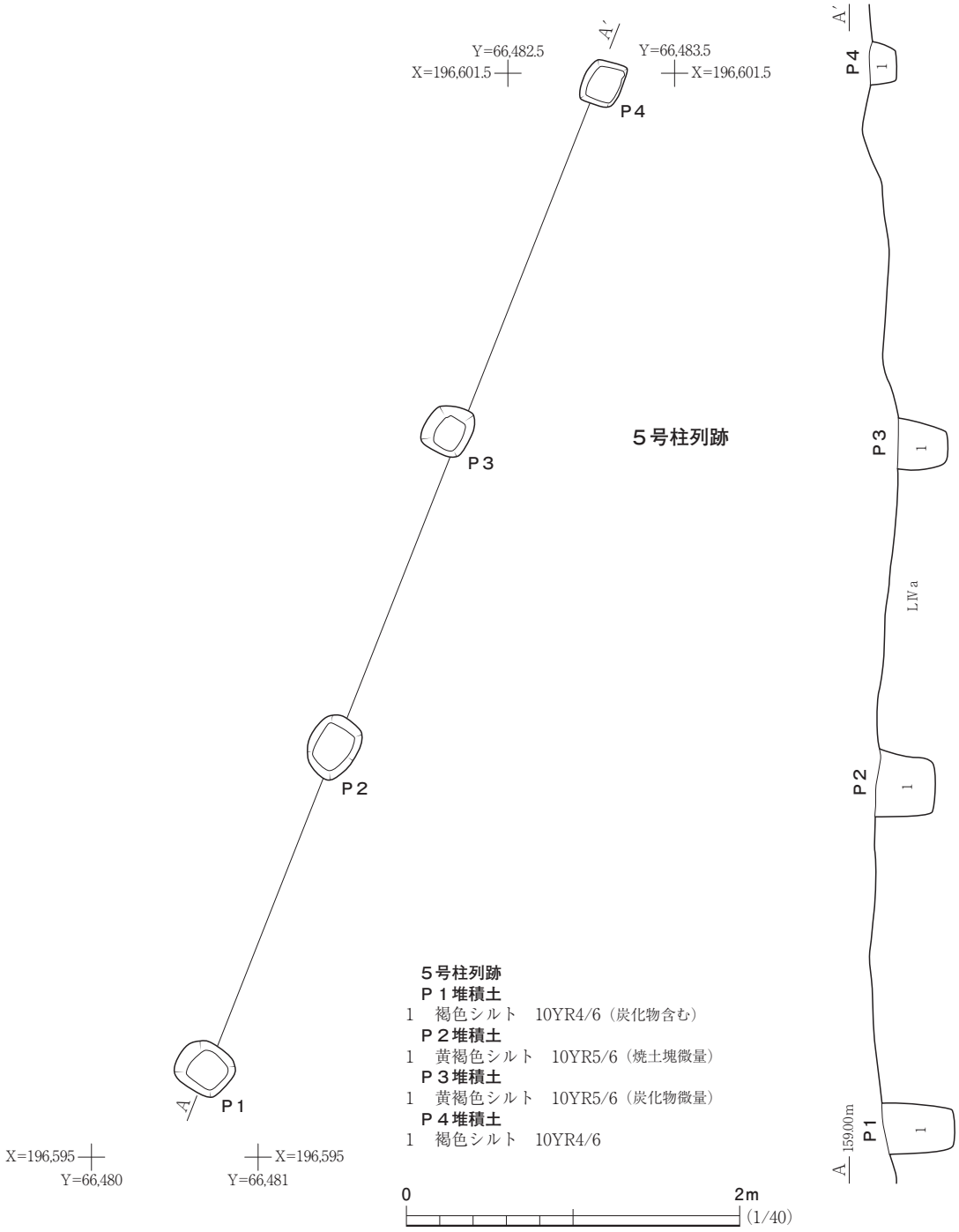


図11　５号柱列跡

だが、柵または塀等の機能が考えられ、城館跡が機能していた時期のものと推測される。（鶴　見）

６号柱列跡　ＳＡ06

遺　　構（図12）

本遺構は、調査区中央付近のＬ18・19グリッドで検出した柱列跡である。重複する遺構はないが、北西に５ｍには７号柱列跡、南東に２ｍには３号特殊遺構と１号住居跡がある。検出面はＬⅣ

ａ上面である。

６号柱列跡は３個の柱穴から構成され、北から南にＰ１～３と呼称した。Ｐ１～３の総長は3.66ｍ(約12.1尺)である。各柱穴の柱間の寸法は、Ｐ１・２間が1.86ｍ(約6.2尺)、Ｐ２・３間が1.80ｍ(約5.9尺)である。

各柱穴の平面形は、隅丸方形で、規模は一辺26～44㎝である。検出面からの深さは18～26㎝で、底面の標高は159.2～159.3ｍ前後とほぼ揃っている。

各柱穴の堆積土は、褐色シルトの単層で、柱痕は確認できなかった。各柱穴は柱が抜き取られた後に、自然に埋没したものと推定される。なお、いずれの柱穴からも遺物は出土していない。

Ｐ３より西にあるＬ19Ｐ１は、Ｐ３との間は1.85m（6.1尺)で、本柱列跡の柱間とほぼ同じ間隔となっている。柱列跡に直行する位置にあるため、関連が想定されるが、Ｌ19Ｐ１は一辺が18～20㎝で、Ｐ１～３と比べてやや規模が小さく本柱列に伴うものかは断定はできない。

ま と め

本遺構は、３個の柱穴で構成される柱列跡である。出土遺物がないため、厳密な所属時期は不明だが、他の柱列跡とともに柵または塀等の機能が考えられ、城館跡が機能していた時期のものと推測される。また、Ｌ19Ｐ１とともに、Ｌ字形を呈する遺構であった可能性もある。　（鶴　見）

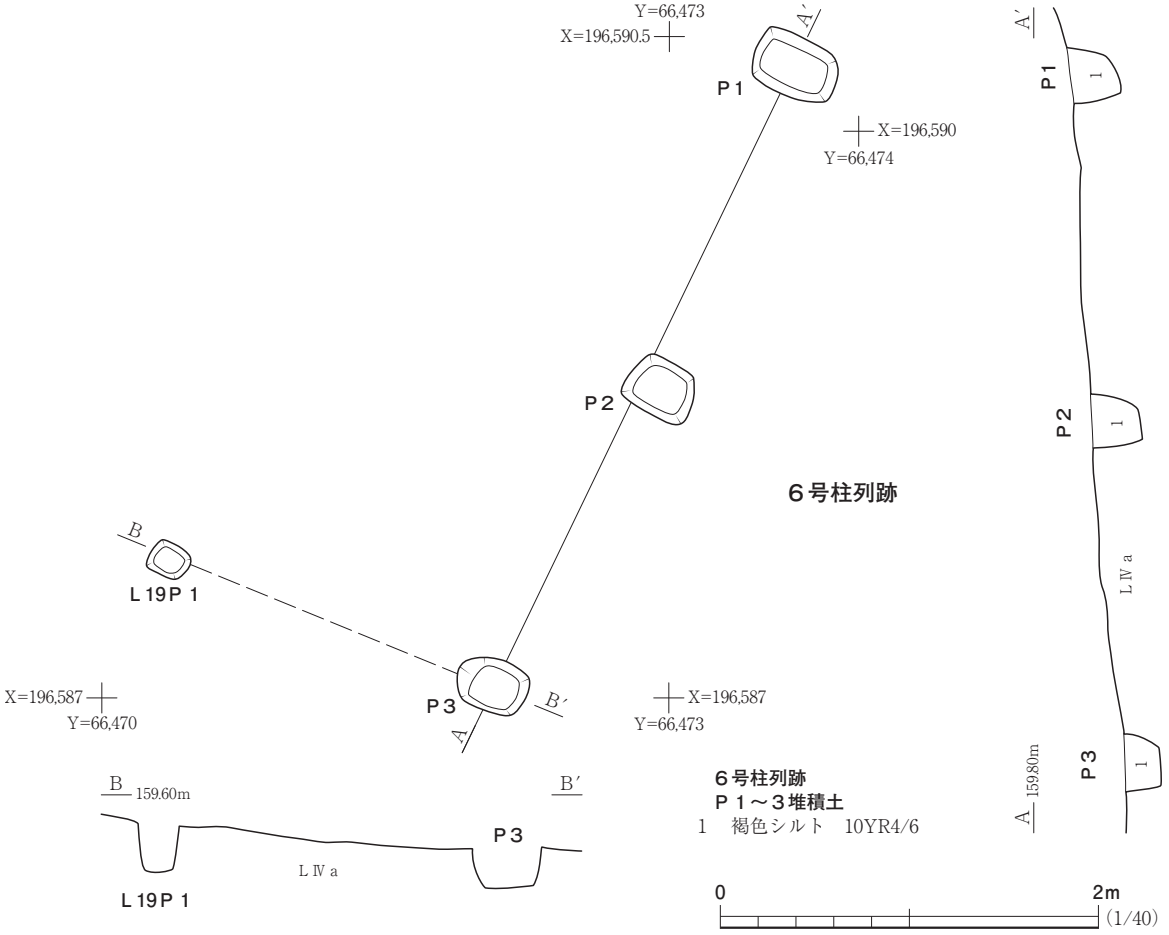


図12　６号柱列跡

７号柱列跡　ＳＡ07

遺　　構（図13）

本遺構は、調査区中央付近のＫ18・Ｌ18グリッドで検出した柱列跡である。重複する遺構はないが、北に２ｍには１号建物跡、北東に３ｍには４号柱列跡、南に５ｍには６号柱列跡、西に３ｍには５号土坑がある。検出面はＬⅣａ上面である。

７号柱列跡は４個の柱穴から構成され、東から西にＰ１～４と呼称した。Ｐ１～４の総長は5.72ｍ（約18.9尺）である。各柱穴の柱間の寸法は、Ｐ１・２間が1.55ｍ（約5.1尺）、Ｐ２・３間が

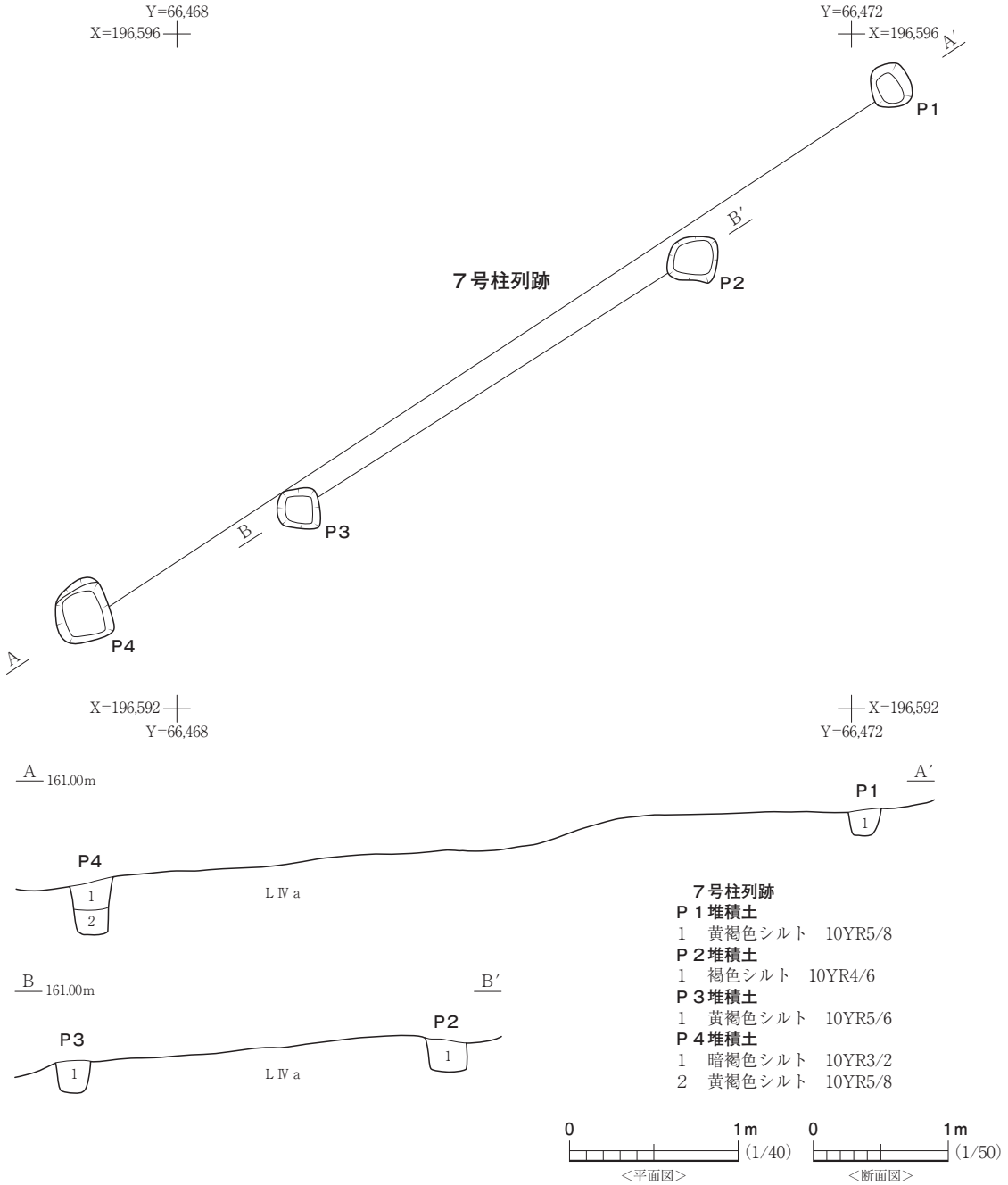


図13　７号柱列跡

2.78ｍ(約9.1尺)、Ｐ３・４間が1.39ｍ(約4.6尺)である。

各柱穴の平面形は、隅丸方形を基調とし、規模は一辺20～30㎝である。検出面からの深さは22～44㎝で、底面の標高は159.2～159.3ｍ前後とほぼ揃っている。

各柱穴の堆積土は、Ｐ１～Ｐ３は、いずれも黄褐色シルトの単層で、柱痕は確認できなかった。Ｐ４は、２層に分けたが、柱痕は確認できなかった。各柱穴は柱が抜き取られた後に、自然に埋没したものと推定される。なお、いずれの柱穴からも遺物は出土していない。

ま と め

本遺構は、４個の柱穴で構成される柱列跡である。出土遺物がないため、厳密な所属時期は不明だが、他の柱列跡とともに柵または塀等の機能が考えられ、城館跡が機能していた時期のものと推測される。（鶴　見）

第７節　特 殊 遺 構

特殊遺構は３基確認した。１号特殊遺構は性格を特定することはできなかったが、２号特殊遺構は木炭焼成遺構、３号特殊遺構は踏跡または字限溝等の性格が想定される。

１号特殊遺構　ＳＸ01

遺　　構（図14、写真10）

本遺構は、調査区南端のＫ20グリッド、尾根上の平坦部の突端で検出した遺構である。小穴が３基重複していて、本遺構の方が古い。また、東に１ｍには４号土坑、南東に１ｍには７号土坑が、南西に３ｍには３号溝跡がある。検出面はＬⅣａ上面である。

遺構の平面形は方形を基調とし、規模は南北2.44ｍ、東西2.71ｍ、検出面からの深さは最大で12㎝である。遺構の東・南辺は斜面の下方に位置するため、遺存状態が悪く、壁の立ち上がりをほとんど確認できなかった。また、南辺は斜面下方に向かって開口していた可能性もある。底面はほぼ平坦だが、東と南に向かって緩やかに傾斜している。

堆積土は２層に分層した。ℓ１には焼土塊、ℓ２には炭化物が含まれているが、遺構の底面や壁に被熱の痕跡は認められなかった。なお、遺物は出土していない。

ま と め

本遺構の所属時期や性格については不明であるが、尾根上の平坦部の突端にあることから、中世の城館跡を構成する何らかの施設の可能性が想定される。あるいは、平面形や規模が１号住居跡に近似するため、平安時代に機能していた竪穴住居跡等の施設の可能性も考えられる。（鶴　見）

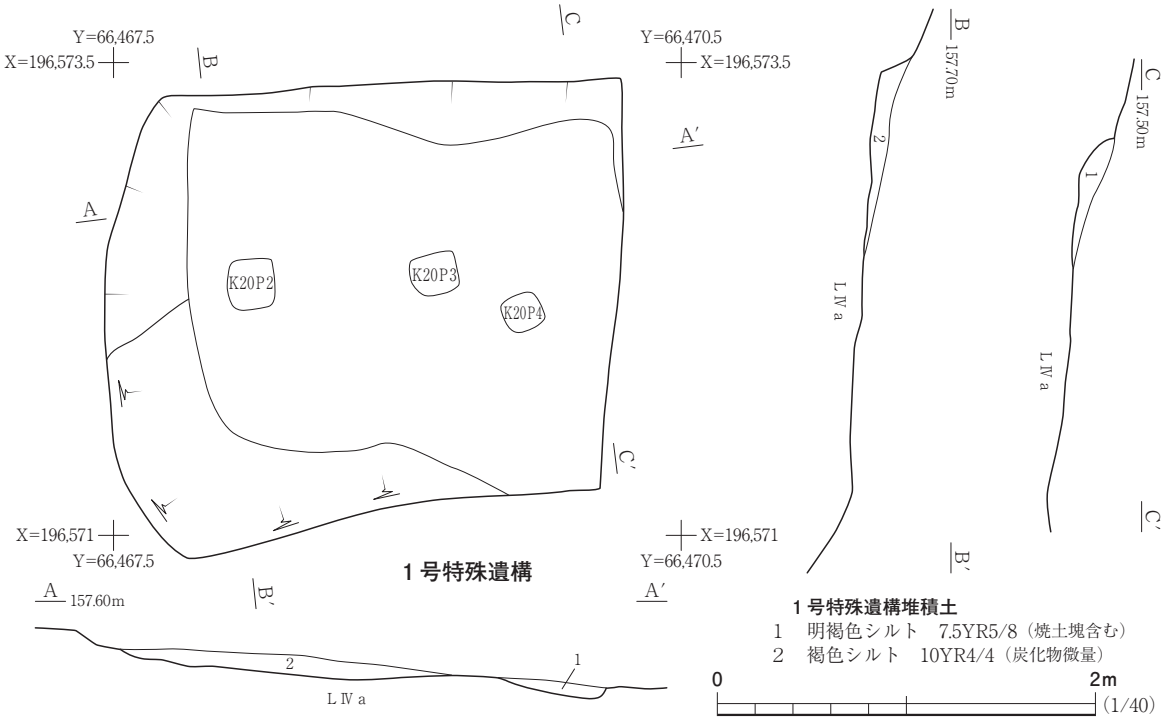


図14　１号特殊遺構

２号特殊遺構　ＳＸ02

遺　　構（図15、写真11）

本遺構は、調査区南部のＬ20グリッド、平坦部から斜面部への落ち際付近で検出した遺構である。検出面はＬⅣａ上面である。９号土坑と重複していて、本遺構の方が新しい。また、北に３ｍには１号住居跡がある。

遺構の平面形は、隅丸長方形を基調としている。規模は、長軸で3.92ｍ、短軸で1.60ｍ、検出面からの深さは最大で26㎝である。遺構は斜面の一部を浅く掘り込んで、平坦な箇所を作り出している。北壁の遺存状態がよく、壁の立ち上がりは垂直に近い。斜面の下方にあたる東部では、壁の立ち上がりは見られないが、土砂が流出したためか、もともと開放状態であったのかは判断できない。底面は平坦で、被熱により赤色化した箇所も確認できる。

堆積土は３層に分層した。いずれも自然堆積土と判断した。各層から炭化物が出土しているが、特にℓ２の下層、遺構の底面付近からの出土が多い。平面的には、南東部を中心に分布する。なお、遺物は出土していない。

ま と め

本遺構は、底面に被熱の痕跡が認められ、底面付近からは多くの炭化物が検出された。以上のような状況から、木炭を焼成した遺構と考えられる。土器等が出土していないため、遺構の所属時期は不明である。なお、１次調査区で確認した１号木炭窯跡は、底面から平安時代の土器が検出され、出土した炭化材の放射性炭素年代測定では、13世紀前半という測定結果が出ている。ただ、

図15　２号特殊遺構

１号木炭窯跡と本遺構とでは平面形等の特徴が異なる。遺構の機能が同様であることを踏まえると、本遺構は古代以降のものと推定される。　（鶴　見）

３号特殊遺構　ＳＸ03

遺　　構（図16、写真12）

本遺構は、調査区南部の尾根上から斜面部のＫ19・20、Ｌ19・20グリッドで検出した遺構である。遺構の南部は比較的傾斜が緩やかな場所に立地するが、北部は南部よりも傾斜がきつい。１号住居跡と重複していて、本遺構の方が新しい。検出面はＬⅣａ上面である。

平面形は直線的ではなく、緩やかに屈曲している。遺構の長さは12.25m、幅は0.4～１ｍで、一定ではない。検出面からの深さもばらつきがあり、南東部では10㎝、中央部では18㎝、北部で20㎝前後である。底面は平坦ではなく、凹凸が多く見られる。

堆積土は褐色シルトの単層で、斜面上方からの自然流入土と判断した。

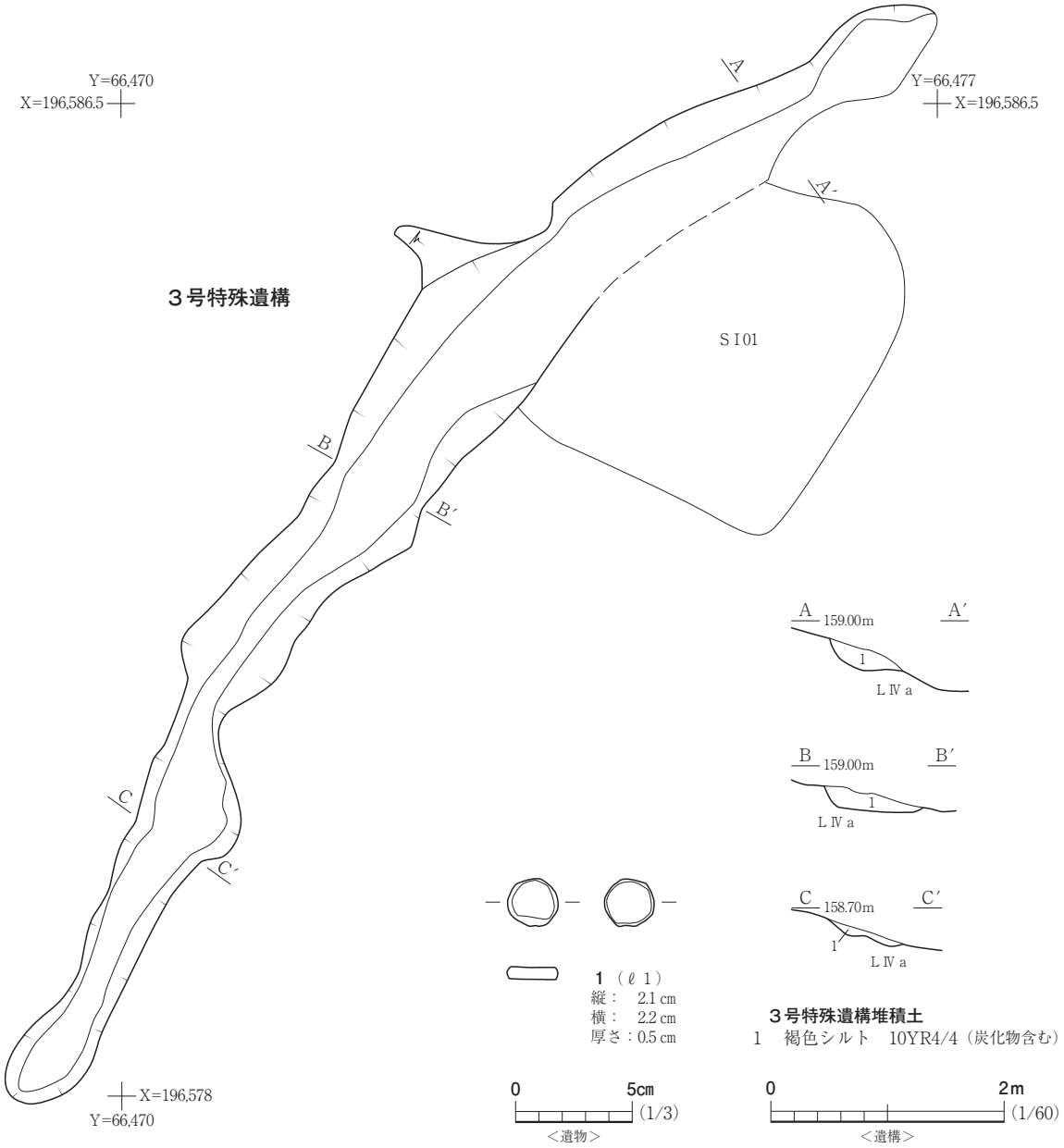


図16　３号特殊遺構・出土遺物

遺　　物（図16、写真15）

遺物は１点出土した。図16－１は泥面子と考えられる。土製で、円形を呈する。

ま と め

本遺構は、尾根上で検出した溝状の遺構である。溝状の遺構ではあるが、３・４号溝跡とは立地が異なっており、排水溝のような機能は想定されない。また、調査開始前には、尾根上に踏跡や字限を示すと推定される溝状の地形が確認されていた。このことから、本遺構は、踏跡や字限に掘られた溝等の可能性がある。所属時期は、遺構の重複関係から平安時代の１号住居跡よりも新しいこと、泥面子が出土していることから、近世以降と推定される。（鶴　見）

第８節　　小　　穴（図17、写真15）

小穴は、尾根上の平坦部を中心に検出した。小穴は、掘立柱建物跡や柱列跡との関連が想定されるものを除き20基検出した。小穴同士に重複は認められなかった。

これらの小穴は、平面形は方形を基調とし、大きさは一辺20～30㎝前後のものが多い。検出面からの深さは最小で５㎝、最大で60㎝だが、大半は20～40㎝の間に収まる。

堆積土は、ほとんどが単層で、明瞭な柱痕は確認できなかった。

出土遺物は、Ｌ18Ｐ６から、鉄製刀子が１点出土したのみである。図17－１は、２つに分かれているが、形状や厚さから同一個体と判断した。

これらの小穴は、掘立柱建物跡や、柱列跡等の柱穴と考えられるが、組み合わせは不明である。年代を明瞭に示す遺物は出土しなかったが、１・２号建物跡、１～７号柱列跡と同様に城館跡に伴う遺構の可能性が高い。（鶴　見）

表１　小穴一覧

グリッド	Ｐ番号	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	堆積土	備考
K18	1	31	25	21	10YR4/6　褐色シルト	
	2	31	30	21	10YR4/4　褐色シルト	
K19	1	38	35	60	10YR4/6　褐色シルト	
	2	47	37	44	10YR4/6　褐色シルト	
	3	22	20	29	10YR4/6　褐色シルト	
	4	20	19	12	10YR4/6　褐色シルト	
K20	1	25	22	35	10YR4/6　褐色シルト	
L17	1	13	13	24	10YR4/6　褐色シルト	
	2	36	30	9	10YR5/6　黄褐色シルト	
	3	33	28	21	10YR5/6　黄褐色シルト	
	4	30	26	12	欠	
	5	16	14	11	10YR5/8　黄褐色シルト	
L18	1	19	15	23	10YR4/6　褐色シルト	
	2	28	20	33	10YR4/6　褐色シルト	
	3	32	28	25	ℓ１　10YR3/2　暗褐色シルト ℓ２　10YR5/8　黄褐色シルト	
	4	29	25	45	10YR5/6　黄褐色シルト	
	5	28	26	14	10YR5/6　黄褐色シルト	
	6	34	33	34	10YR4/6　褐色シルト	刀子出土
	7	29	25	26	10YR4/6　褐色シルト	
L19	1	28	19	27	10YR4/6　褐色シルト	
M18	1	18	14	37	10YR5/6　黄褐色シルト	
	2	18	17	25	10YR5/6　黄褐色シルト	

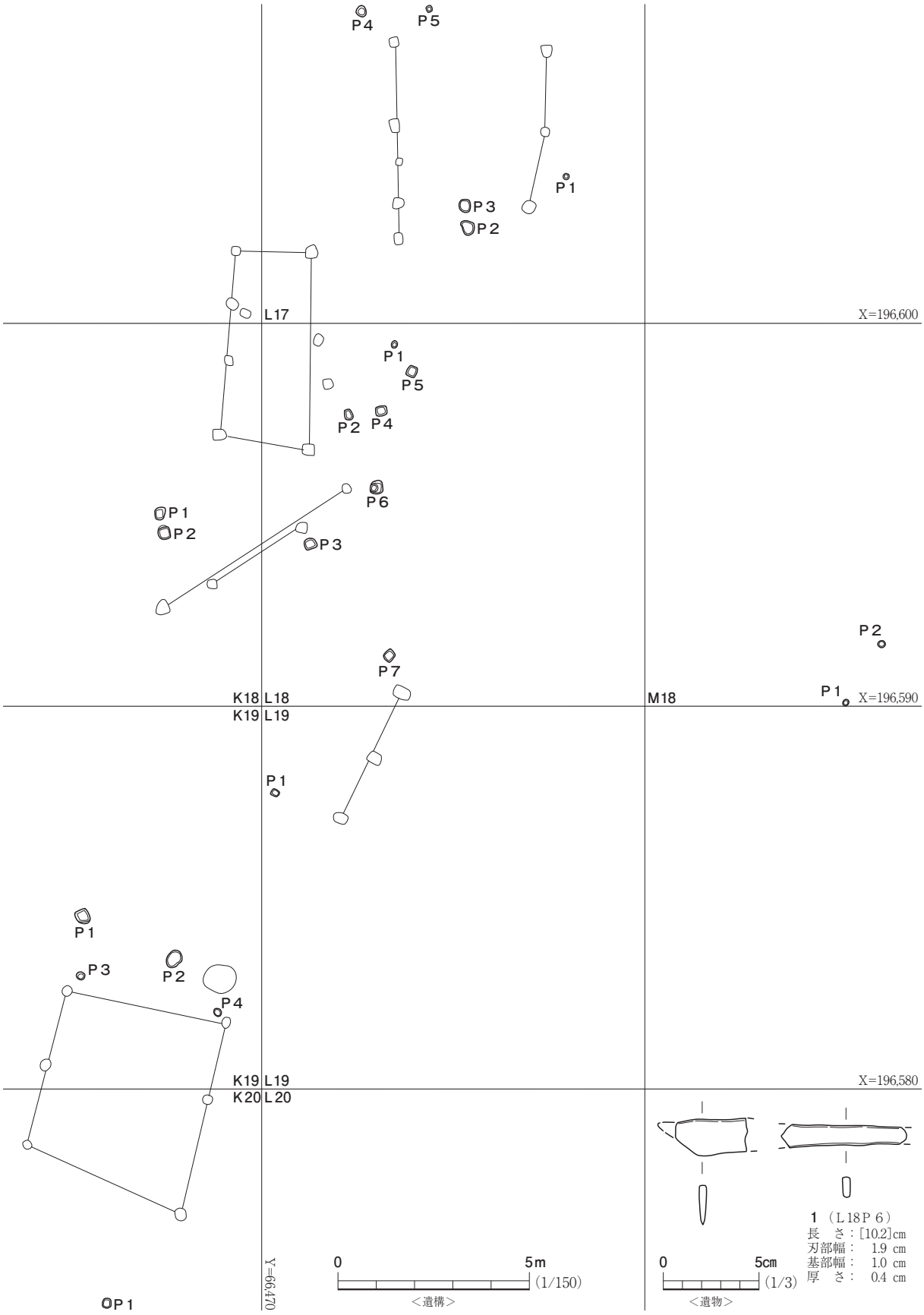

P4
P5
P1
P3
P2
L17
X=196,600
P1
P5
P2
P4
P6
P1
P2
P3
P2
P7
K18 L18
K19 L19
M18
P1
X=196,590
P1
P1
P3
P2
P4
K19 L19
K20 L20
X=196,580
Y=66,470
P1
0
5m
(1/150)
＜遺構＞
0
5cm
(1/3)
＜遺物＞
1（L18P６）
長　さ：[10.2]cm
刃部幅：　1.9 cm
基部幅：　1.0 cm
厚　さ：　0.4 cm

図17　小穴・出土遺物

第３章　　総　　括

上ノ台館跡の２次調査では、１次調査区の南側に隣接する箇所1,500㎡の調査を実施した。調査区の地形は、南北に延びる尾根上及び東側斜面となっている。調査の結果、城館跡を構成していたと考えられる掘立柱建物跡・柱列跡・溝跡等を確認した。この他、平安時代や近世以降とみられる遺構も確認した。なお、１次調査で検出した１号平場周辺は、人工的に地山を削って切岸をつくり出した状況が伺えるが、今回の調査区では、切岸や整地土等の明瞭な痕跡は確認されなかった。一部に手を加えて利用している可能性はあるが、もともとの自然地形に近い状態であると判断している。以下、中世城館跡に伴うと考えられる遺構についてまとめる。

尾根上の比較的平坦な箇所で掘立柱建物跡を２棟確認した。この２棟の掘立柱建物跡は、いずれも尾根の延びる南北方向に桁行を持ち、主軸もほぼ揃っている。掘立柱建物跡の周囲では、７列の柱列跡を確認した。このうち、１号柱列跡には布掘状の溝が伴い、隣接する２号柱列跡とともに、柱間の寸法や柱穴の底面標高が揃っている等、丁寧につくられている。７列の柱列跡は、平坦部から斜面部への落ち際付近や、斜面部でも傾斜が僅かに緩くなる箇所で検出されている。斜面部の傾斜が緩やかになる箇所は、柱列跡以外の遺構は確認できないことから、柱列跡を構築するためだけに若干地形を改変した可能性がある。また、これらの柱列跡は、掘立柱建物跡と同様、尾根筋と同じ方向につくられていることから、掘立柱建物跡と密接な関連を持ち、柵または塀等の機能が考えられる。なお、１～５号柱列跡は、高低差をもってつくられているため、東側の街道筋から見上げた際は、何重にも柵や塀が巡って見え、城館跡として一定の視覚的な効果があったと推測される。

斜面部から平坦部に移行する傾斜変換線上では、溝跡を２条確認した。これらの溝跡は、斜面上方から流れてきた水を排水する機能が想定される。具体的には、４号溝跡は、下方に立地する２号建物跡へ直接水が流れて行かないようにするために構築されたと思われる。

今回の調査では、城館跡の時期を示す遺物は出土していない。平成30年度に実施する３次調査の成果を踏まえて城館跡の年代等について判断したい。　　（鶴　見）

引用・参考文献

福島県教育委員会　2014 『福島県内遺跡分布調査報告 21』福島県文化財調査報告書第 502 集
福島県教育委員会　2016 『福島県内遺跡分布調査報告 23』福島県文化財調査報告書第 512 集
福島県教育委員会　2017 『福島県内遺跡分布調査報告 24』福島県文化財調査報告書第 521 集
福島県教育委員会　2018 「第２編　上ノ台館跡」『一般国道 115 号相馬福島道路遺跡発掘調査報告６』福島県文化財調査報告書第 523 集

第２編　中室内遺跡（なかむろうち）（１・２次調査）

遺跡記号	ＤＴ－ＮＭＵ、ＤＴ－ＮＭＵ２
所在地	伊達市保原町上保原字中室内
時代・種類	古墳時代の集落・中世の城館跡
調査期間	平成29年10月10日～12月22日（１次調査） 平成30年４月11日～４月13日（２次調査）
調査員	１次調査 丹治篤嘉・渡邉春喜・廣川紀子・草野潤平 鶴見諒平・枝松雄一郎 ２次調査 丹治篤嘉・初山孝行・鶴見諒平・枝松雄一郎

第１章　遺跡の位置と調査経過

第１節　遺跡の位置と現況

中室内遺跡は、福島県伊達市保原町上保原字中室内に所在する。旧保原町内でも旧伊達町境に近い箇所で、福島市瀬上方面から伊達市保原町へと抜ける阿武隈急行線の上保原駅から北西方向に約１㎞のところに位置する。遺跡の南端に沿って市道保原箱崎線が東西方向に延び、そこから調査区を縦断するように市道中室内大師堂線が南北方向に延びている。

遺跡は、阿武隈川の旧河道に沿って形成された標高50ｍほどの自然堤防上に立地する。調査区の現況は宅地や耕作地で、周囲では水稲耕作や果樹栽培等の営農が行われている。

遺跡から南西に約700ｍの位置には、伊達氏初代朝宗が築いたとされる高子館跡がある。また、遺跡から南に約300ｍ離れた丘陵頂部には奈良時代頃の祭祀遺跡とされる岩谷遺跡があり、付近には榎内遺跡や京口遺跡といった古墳時代～平安時代頃の遺物散布地が認められる。　（廣　川）

第２節　調 査 経 過

中室内遺跡の調査は、２次にわたり実施している。

１次調査は、平成29年度に９月５日、10月24日付の福島県教育委員会の指示に基づき、2,700㎡の本発掘調査を実施した。調査に係った作業日数は延べ48日である。

２次調査は、平成30年４月５日付の指示に基づき、100㎡の本発掘調査を実施した。調査に係った作業日数は延べ３日間である。以下に調査の経過について、平成29年度は週ごと、平成30年度は非常に短期間であったため日ごとに記す。

平成29年度（１次調査）

10月第２週：10日（火）に重機を搬入し、プレハブ前駐車場の整備を始める。翌11日（水）に先行して６名の作業員を雇用し、周辺環境の整備を行う。12日（木）から調査区東部の表土除去を開始する。

10月第３週：表土除去が進み、試掘･確認調査で報告されていた１号土坑、１号堀跡が認められる。17日（火）に新規作業員27名の雇用を開始した。19日（木）に調査区東部1,300㎡の表土除去を終え、引き続き調査区西部の表土除去に着手した。

10月第４週：先週末からの降雨で調査区内への浸水が著しく、作業員による当面の作業を中止する。25日（水）に工事用道路部分を除いた調査区西部の表土除去を終える。

10月第５週：ようやく天候が回復し、31日（火）から本格的な遺構検出作業に入る。その結果、１号堀跡がＬ字状に巡ること、その内側には多数の柱穴とみられる小穴や、１号堀跡

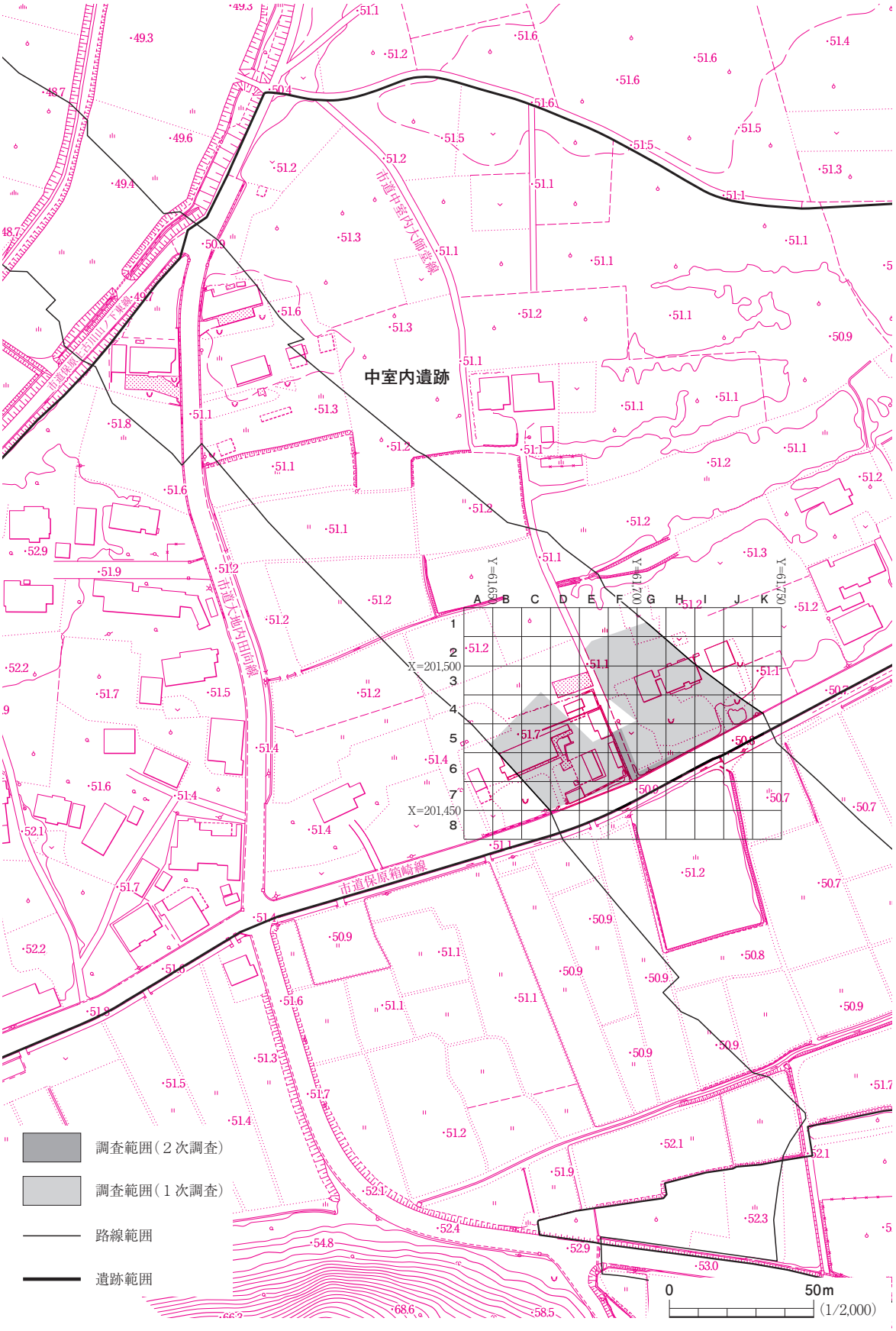

中室内遺跡
市道中室内大師堂線
市道大地内田向線
市道保原箱崎線
A B C D E F G H I J K
1 2 3 4 5 6 7 8
X=201,500
X=201,450
Y=61,650
Y=61,700
Y=61,750
調査範囲（２次調査）
調査範囲（１次調査）
路線範囲
遺跡範囲
0
50m
(1/2,000)

図１　調査区位置図

に平行して延びる数条の溝跡があることが確認された。

11月第１週：１日(水)から１号堀跡、２号溝跡の掘り下げを開始し、適宜断面図の作成を行った。

11月第２週：７日(火)・８日(水)に調査区西部の工事用道路部分の表土除去を行う。９日(木)から調査区西部の遺構検出を行い、複数の竪穴住居跡と小穴群の広がりが確認された。

11月第３週：調査区東部では土坑や溝跡等、検出された遺構の数が徐々に増えていったが、順次それらの精査に着手した。調査区西部では、14日(火)から他の遺構と重複していない竪穴住居跡の精査に入り、並行して小穴群の調査に取りかかる。16日(木)には基本土層図を作成する。

11月第４週：引き続き、検出した遺構の精査を行う。21日(火)・22日(水)に調査区東部の追加分300㎡の表土除去を行う。追加箇所からは１号堀跡の延長部分と小穴の広がりが認められる。調査区西部では小穴群を掘り上げ、それらと重複する竪穴住居跡の調査に入る。

11月第５週：天候が安定し、作業員の出勤率が高いことから、遺構の掘り下げ作業が順調に進み、11月末までにほとんどの遺構の調査に着手する。

12月第２週：年内での調査収束に向けて、調査区東部では遺構の作図、調査区西部では重複する竪穴住居跡の掘り下げが主要な作業となる。

12月第３週：13日(水)に調査区東部ではおおよそ遺構の作図が終了する。14日(木)に調査区東部から空中写真撮影のための清掃に入り、15日(金)に調査区全体の空中写真撮影を行う。

12月第４週：引き続き、調査区西部の遺構精査を行う。19日(火)から調査区の地形測量に入る。21日(木)に地形測量の補足、重複する４～６号住居跡の作図を行い、調査現場から不要な道具類を引き上げる。22日(金)は作業員雇用の最終日となり、残務を処理して調査を終了する。

１月第２週：年が明けた１月９日(火)よりプレハブからの発掘器材の撤収を開始する。

１月第３週：19日(金)にはプレハブ・仮設トイレを撤去した。

１月第４週：22日(月)に県文化財課及び国交省の立ち会いの下、現地引き渡しを行った。

平成30年度(２次調査)

４月11日(水)：遺構の検出作業を行い、土坑・溝跡を確認。検出状況の写真撮影後、遺構の掘り下げを開始する。その後、順次、記録作成を行う。

４月12日(木)：遺構の掘り下げと記録作成の継続。

４月13日(金)：調査区内の地形測量を行い、調査が終了する。また、県文化財課・国交省の立ち会いの下、現地引き渡しを行う。

(廣川・鶴見)

第２章　発見された遺構と遺物

第１節　調査成果の概要と基本土層

調査成果の概要

中室内遺跡は伊達市保原町上保原字中室内に所在する。遺跡は自然堤防上に立地していて、遺跡周辺はほぼ平坦な土地だが、北側に向かって緩やかに下っていく。調査前の１・２次調査区は、宅地や、畑、市道として利用されていた。遺跡の南側には旧河道があり、現在でも周辺よりも低い土地のため、水田として利用されている。

調査は、１次調査を平成29年度に、２次調査を平成30年度に実施した。

１次調査区は、南北に延びる市道中室内大師堂線を挟んで東西に分かれていて、それぞれ調査区東部・西部と呼称している。２次調査区は、１次調査区東部・西部の境界となった市道部分を中心とした箇所である。

検出された遺構は、竪穴住居跡８軒、掘立柱建物跡６棟、土坑27基、堀跡・溝跡17条、井戸跡２基、特殊遺構１基、小穴253基である。このうち、竪穴住居跡は、いずれも調査区西部に位置し、出土遺物から古墳時代前期の所産と考えられる。

また、調査区東部で確認した１号堀跡は、中世の屋敷跡を区画する堀と考えられる。１号堀跡の内部で確認された掘立柱建物跡は、屋敷跡に伴うものと考えられ、小穴も同時期のものを含む可能性が高い。

基本土層（図３、写真４）

基本土層は、色調・土質の諸特徴からＬⅠ～Ⅵの６層に分層した。

ＬⅠは、表土及び盛土層である。調査区内での層厚は85～100㎝と厚く堆積している。

ＬⅡは、調査区東部で部分的に確認された黒褐色シルト層である。層厚は10～15㎝と薄い。大半の遺構には、本層に由来する土が堆積している。そのため、本来は広範囲に堆積していたと考えられるが、後世の造成により失われたとみられる。なお、断面観察により、本層の上面で検出される遺構があることを確認した。

ＬⅢは、灰黄褐色シルト層で、層厚は10～15㎝である。ＬⅡからＬⅣへの漸移的な層で、本層に由来する土が堆積する遺構も多い。調査区東部の北半では、砂質シルト層や砂層となっている。ＬⅡ同様、後世の造成により失われている箇所が大半である。

ＬⅣは、調査区全域で確認される褐色シルト層である。今回の調査で確認した大半の遺構の検出面である。調査区内での層厚は、５～25㎝である。調査区東部の北半では、ＬⅢと同様、砂質シ

J
I
H
G
F
E
D
C
B
Y=61,730
Y=61,720
Y=61,710
Y=61,690
Y=61,680
Y=61,670
Y=61,660
X=201,510
X=201,500
X=201,490
X=203,600
X=203,600
1
2
3
4
6
7
0
10m
(1/400)
SD13
SK10
SK22
SK23
SD09
SD08
SD04
SB05
SB04
SD06
SD10
SB06
SD11
SK14
SK19
SD05
SK20
SD12
SK21
SK18
SK17
SK11
SK13
SK16
SK15
SK09
SK08
SK12
SX01
SD03
SD01
SD16
SD15
SD17
SD14
SK27
電柱
SK01
SE01
SK06
SK07
SD07
SD02
SK24
SD14
水道管
SK03
SK26
SK25
SB02
SI02
SI03
SK02
SE02
SI07
SB03
SB01
SI08
SI05
SI06
SI04
SI01
SK04
SK05
50.20m
50.40m
50.60m

図２　遺構配置図

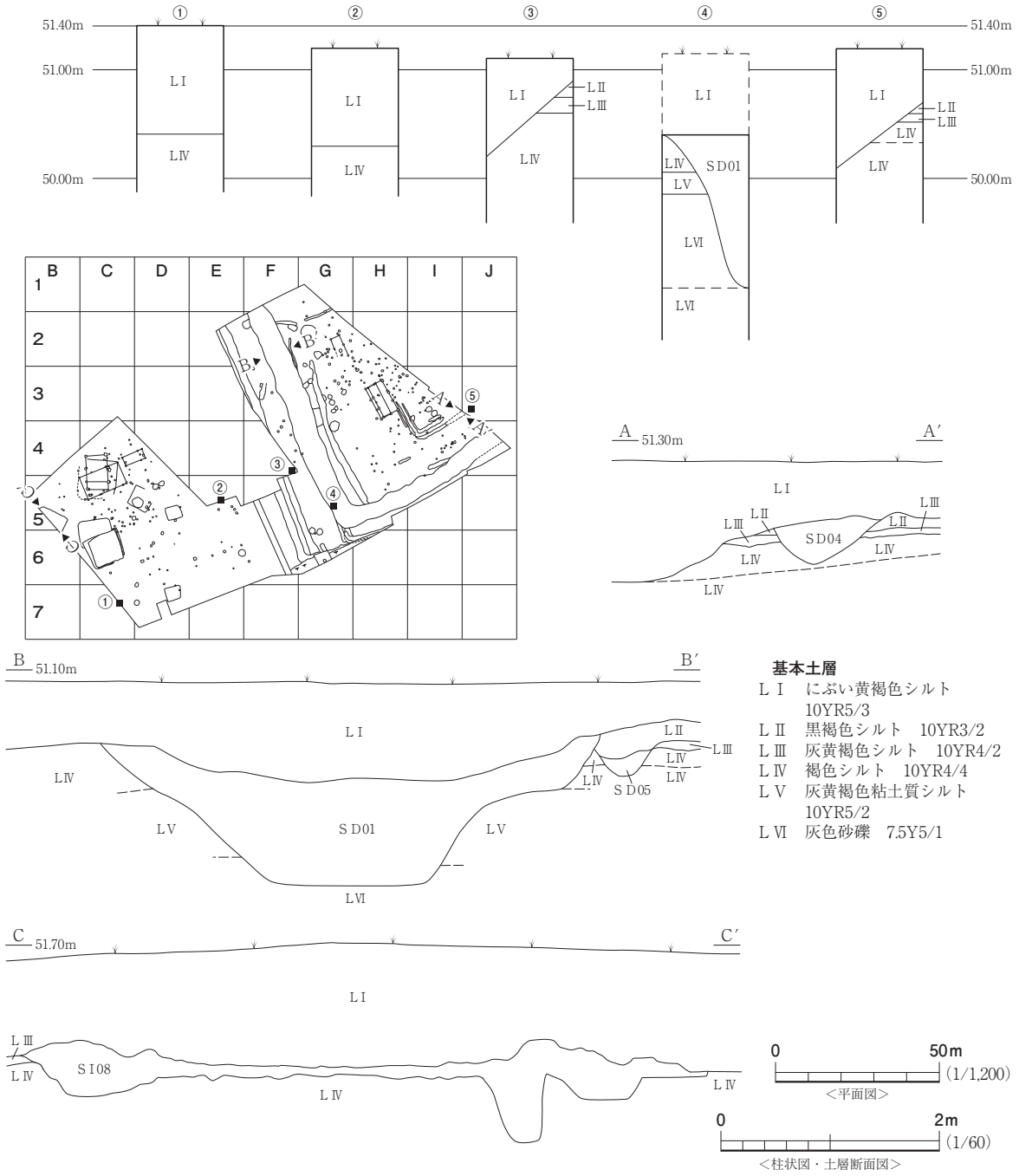


図３　基本土層

ルト層や砂層となっている。

ＬⅤは、灰黄褐色粘土質シルト層で、層厚は20～70㎝である。堀跡や井戸跡等の深く掘り込まれた遺構の断面で確認した。

ＬⅥは、灰色を呈する基盤の砂礫層である。　（鶴　見）

第２節　竪 穴 住 居 跡

今回の調査で発見された竪穴住居跡は８軒である。いずれも調査区西部から検出された。住居跡はカマド導入前の古墳時代前期の所産と考えられ、平面形は方形を基調とする。そのうちの４～６号住居跡は重複しており、同じ地点で建て替えないし拡張が繰り返されている。また、住居跡は宅地等の造成を受け、周壁の立ち上がりは数cmしか認められなかったが、柱穴や掘形を良好な状態で確認することができたものもある。出土遺物は乏しいが、５・７号住居跡の南西隅に設けられた貯蔵穴からは土師器がまとまって出土した。

１号住居跡　ＳＩ01

遺　　構（図４、写真９）

本遺構は、調査区西部南端のＤ７グリッドに位置する竪穴住居跡である。検出面はＬⅣ上面である。１辺約2.5ｍの小型の住居跡で、周壁はほとんど残っていない。Ｄ７Ｐ２と重複し、本遺構の方が古い。本遺構の周囲には他にも小穴が散在し、西に約５ｍ離れた位置では４・５号土坑が検出されている。同規模の２号住居跡は、北に約12ｍ離れている。

遺構内堆積土は、僅かに床面上に堆積するℓ１と、貼床土と考えられるℓ２の２層を確認した。ℓ１はＬⅡに由来するものとみられ、周囲からの自然流入土と推測される。貼床土としたℓ２にはしまりがあり、住居跡北西部と北東部で認められた。

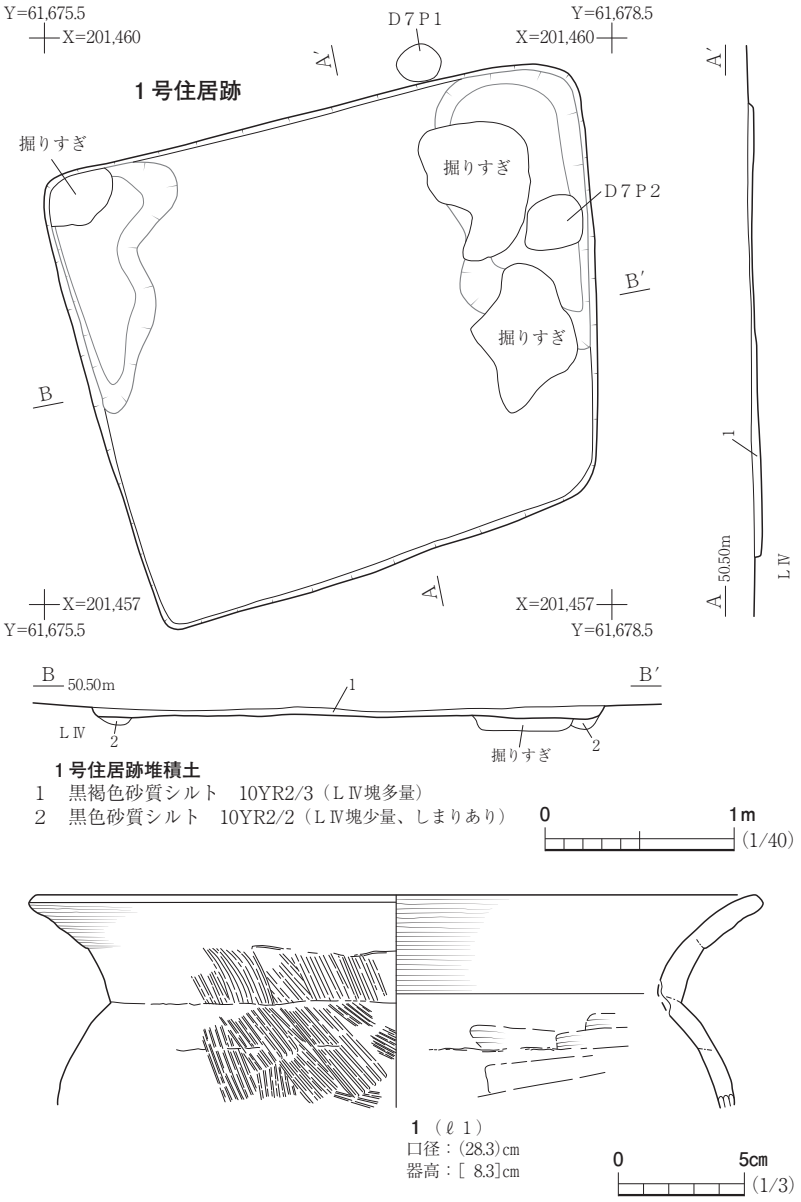


図４　１号住居跡・出土遺物

住居跡の平面形は、北東隅がやや張り出た歪んだ方形である。規模は北壁がやや長く約2.9ｍ、西壁約2.5ｍ、東壁約2.3ｍ、南壁約2.4mを測る。主軸方向は、西壁でＮ15°Ｗを示す。検出面からの深さは10㎝未満である。床面は平坦で、柱穴等は認められなかった。掘形は、床面から一段低い不整な窪みとして確認された。

遺　　物（図４、写真68）

出土遺物は図４－１に示した１点である。

１は土師器甕で、口縁部から胴部上半にかけて残存していたものである。頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁部が外反する。外面の調整は、口縁部は、横方向のナデ、頸部から胴部は、縦や斜め方向のハケメである。内面は、横方向のナデで調整されているが、胴部では輪積み痕が残る。

ま と め

本遺構は小型の住居跡で、出土遺物から古墳時代前期の所産と考えられる。周囲から検出された複数の住居跡とともに集落を構成していたものと推察される。その中でも２号住居跡と形状や規模、主軸方向が一致していることから、古墳時代前期のものでも２号住居跡と同時期に営まれていたものと想定される。（廣　川）

２号住居跡　ＳＩ02

遺　　構（図５、写真10・11）

本遺構は、調査区西部のＤ５グリッドに位置する竪穴住居跡である。検出面はＬⅣ上面である。１辺約2.5ｍの小型の住居跡で、周壁はほとんど残っていない。重複する遺構はないが、南西隅部分は撹乱を受けている。本遺構の北東約３ｍに３号住居跡、南約12ｍに同規模の１号住居跡がある。また、周囲には掘立柱建物跡の柱穴とみられる小穴が散在する。

遺構内堆積土は、僅かに床面上に堆積するℓ１と、貼床土と考えられるℓ２の２層に分層した。ℓ１はＬⅡに由来するものとみられ、周囲からの自然流入土と推測される。貼床土としたℓ２にはしまりがあり、周壁際を中心に認められた。

住居跡の平面形は隅が丸い方形で、規模は北壁が約2.5ｍ、西壁約2.4ｍ、東壁約2.4ｍ、南壁約2.4mである。主軸方向は、遺存する西壁でＮ16°Ｗを示す。検出面からの深さは10㎝未満である。床面は平坦で、柱穴等は認められなかった。掘形は、床面から一段低い不整な窪みとして確認された。

遺物は土師器甕８点が出土したが、いずれも細片のため図示できなかった。

ま と め

本遺構は小型の住居跡で、出土遺物から古墳時代前期の所産と考えられる。周囲からは複数の住居跡が検出されるが、その中でも１号住居跡と形状や規模、主軸方向が一致していることから、古墳時代前期のものでも１号住居跡と同時期に営まれていたものと想定される。（廣　川）

３号住居跡　ＳＩ03

遺　　構（図６、写真12）

本遺構は、調査区西部のＣ５・Ｄ５グリッドに位置する竪穴住居跡である。検出面はＬⅣ上面である。１辺約４ｍの住居跡で、東半分の周壁は遺存しない。２号井戸跡とＤ５Ｐ６･７･13と重複し、本遺構の方が古い。本遺構の南東約３ｍに２号住居跡、南西約５ｍに４～６号住居跡、北西約３ｍに７号住居跡がある。また、北側には１～３号建物跡が近接する他、周辺には小穴が数多く分布する。

遺構内堆積土は３層に分層した。ℓ１・２はＬⅡに由来するものとみられ、レンズ状堆積をしていることから自然堆積土と考えられる。ℓ１には炭化物や焼土粒が含まれている。ℓ３は貼床土で、床面下から認められた。

住居跡の平面形は正方形に近い形状と推測され、規模は西壁が約3.7ｍ、南壁が約3.8ｍである。主軸方向は、西壁でＮ26°Ｅを示す。検出面からの深さは最深約20㎝で、遺存状態の良い西壁は直立する。床面は平坦である。

床面には間仕切りとみられる溝が認められ、南東隅から約

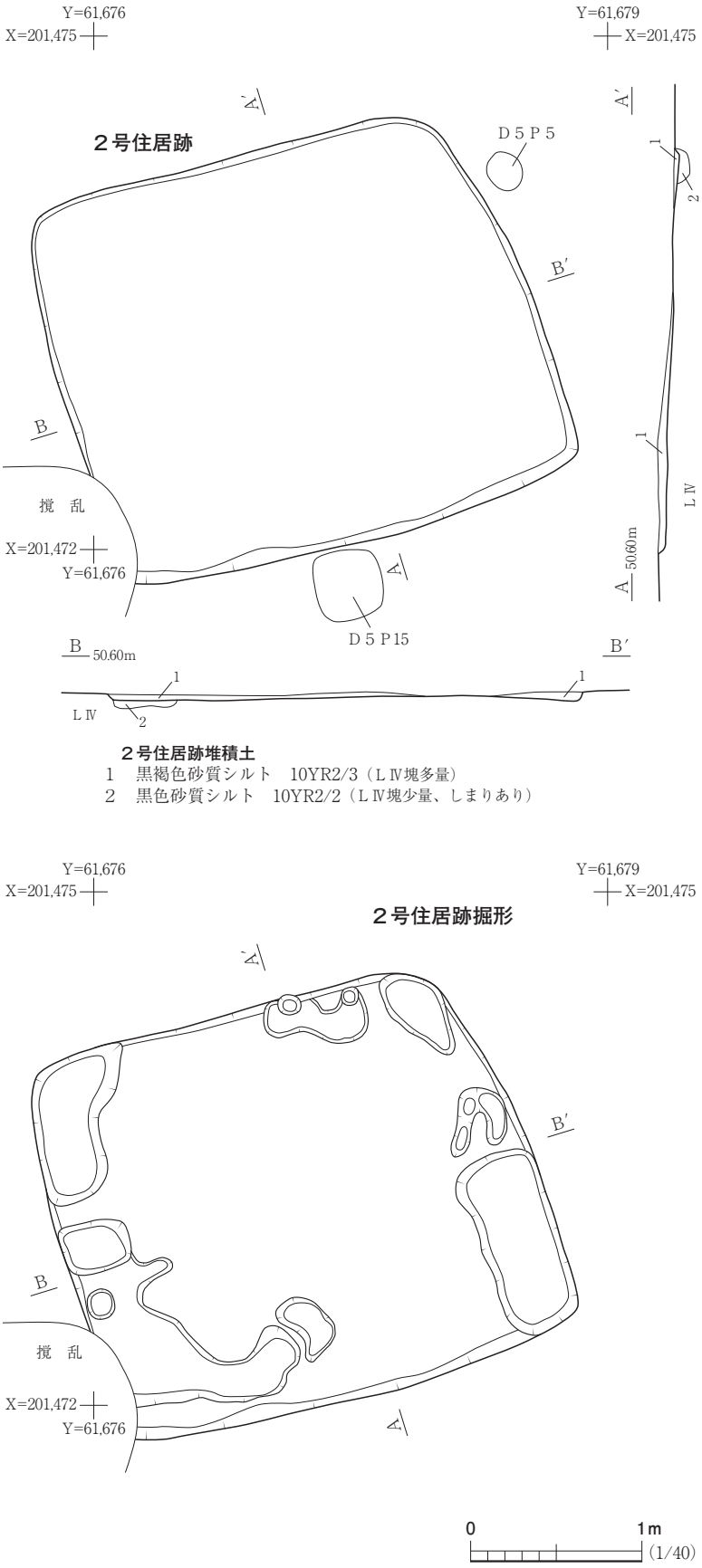


図５　２号住居跡

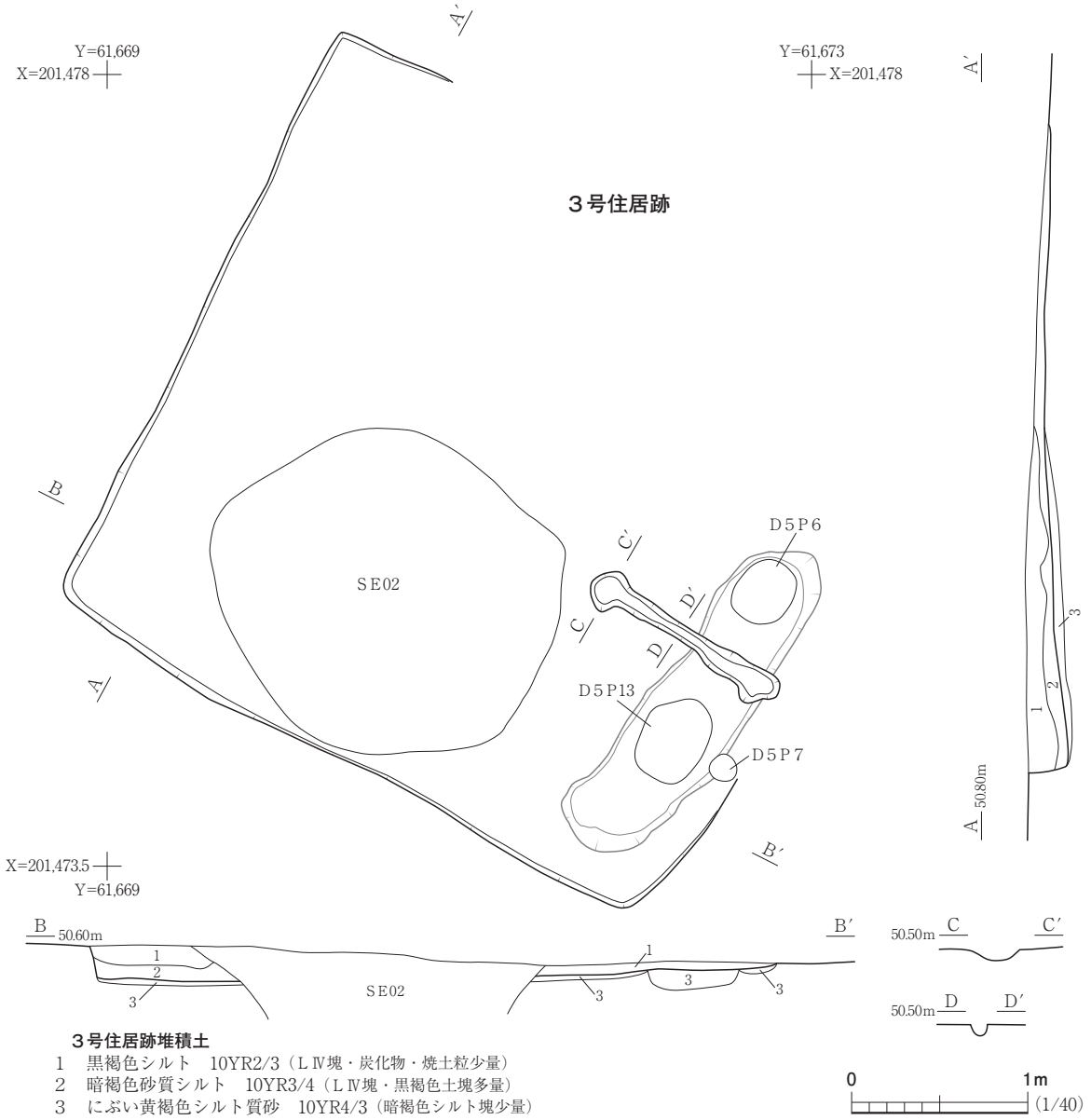


図６　３号住居跡

1.5ｍ離れた東壁際から垂直方向に1.3ｍほど延びている。幅は約８～24㎝で、両端の平面形は丸みを帯びている。深さは約３～６㎝で、西端にかけて深くなっている。断面はＵ字状である。

掘形は、遺存状態の悪い北部は不明だが、南部では細かい凹凸が認められ、南東隅が東壁に沿って一段深く掘り込まれている。

遺物は土師器甕１点が出土したが、細片のため図示できなかった。

ま と め

本遺構は、今回検出された中では中規模の住居跡である。出土遺物から、他の住居跡と同じく古墳時代前期の所産と考えられる。近接する４～６号住居跡の重複関係から、集落内では数時期の変遷が認められるが、主軸方向が一致する８号住居跡と同時期に営まれていた可能性がある。

（廣　川）

４・６号住居跡　ＳＩ04・06

遺　　構（図７～９、写真13～19）

４・６号住居跡は、調査区西部のＣ５・６グリッドに位置する竪穴住居跡である。検出面はＬⅣ上面である。４～６号住居跡は重複関係があり、古い方から６号住居跡→５号住居跡→４号住居跡の順につくられている。６号住居跡は、４号住居跡の貼床土を掘り下げていった段階で、４号住居跡の西壁よりも40～90㎝内側で一段下がる直線的な掘形が検出されたため、６号住居跡の重複関係を認識することができた。なお、多数検出された柱穴についても、４号住居跡の床面では貼床土

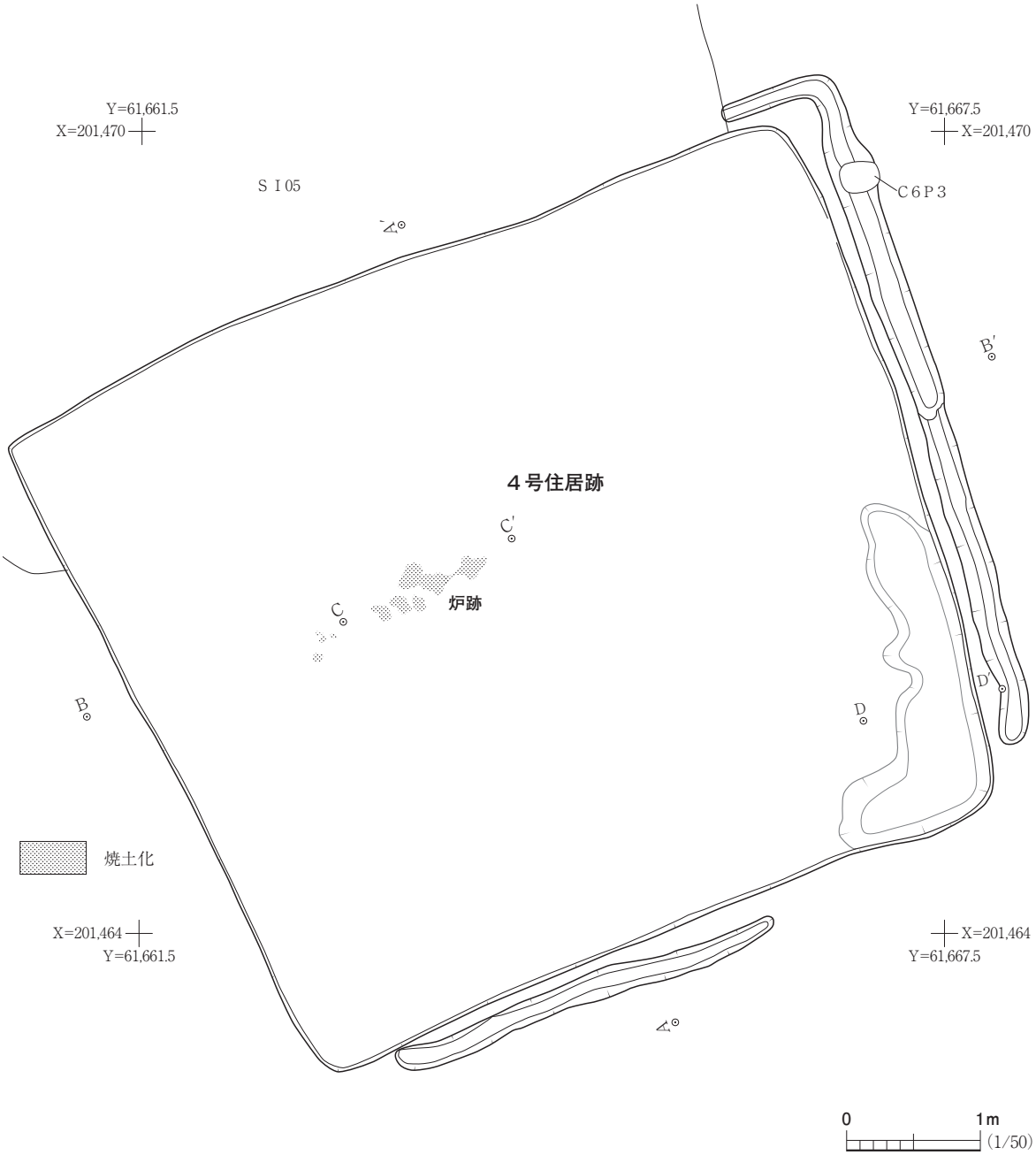


図７　４・６号住居跡（１）

との識別がつかず、大半が４号住居跡の貼床土を掘り下げていく過程で認識することができた。このことから、いずれの住居跡の柱穴か断定できないため、４・６号住居跡を合わせて報告する。

４・６号住居跡の周囲には３・７・８号住居跡があり、掘立柱建物跡の柱穴とみられる複数の小穴も認められる。小穴の一部は４号住居跡の堆積土を掘り込む形で検出されたことから、本住居跡の方が古い。

遺構内堆積土は５層に分層した。ℓ１は４号住居跡の床面上に薄く堆積し、ＬⅡに由来する自然流入土とみられる。ℓ２～４は貼床土で平坦に床面を整えている。このうち、ℓ４はさらに細分され、４号住居跡と６号住居跡の貼床土を区別できる可能性があるが、土層観察では認識することができなかった。ℓ５は壁溝内堆積土で、ℓ２と近似した土で埋められていた。

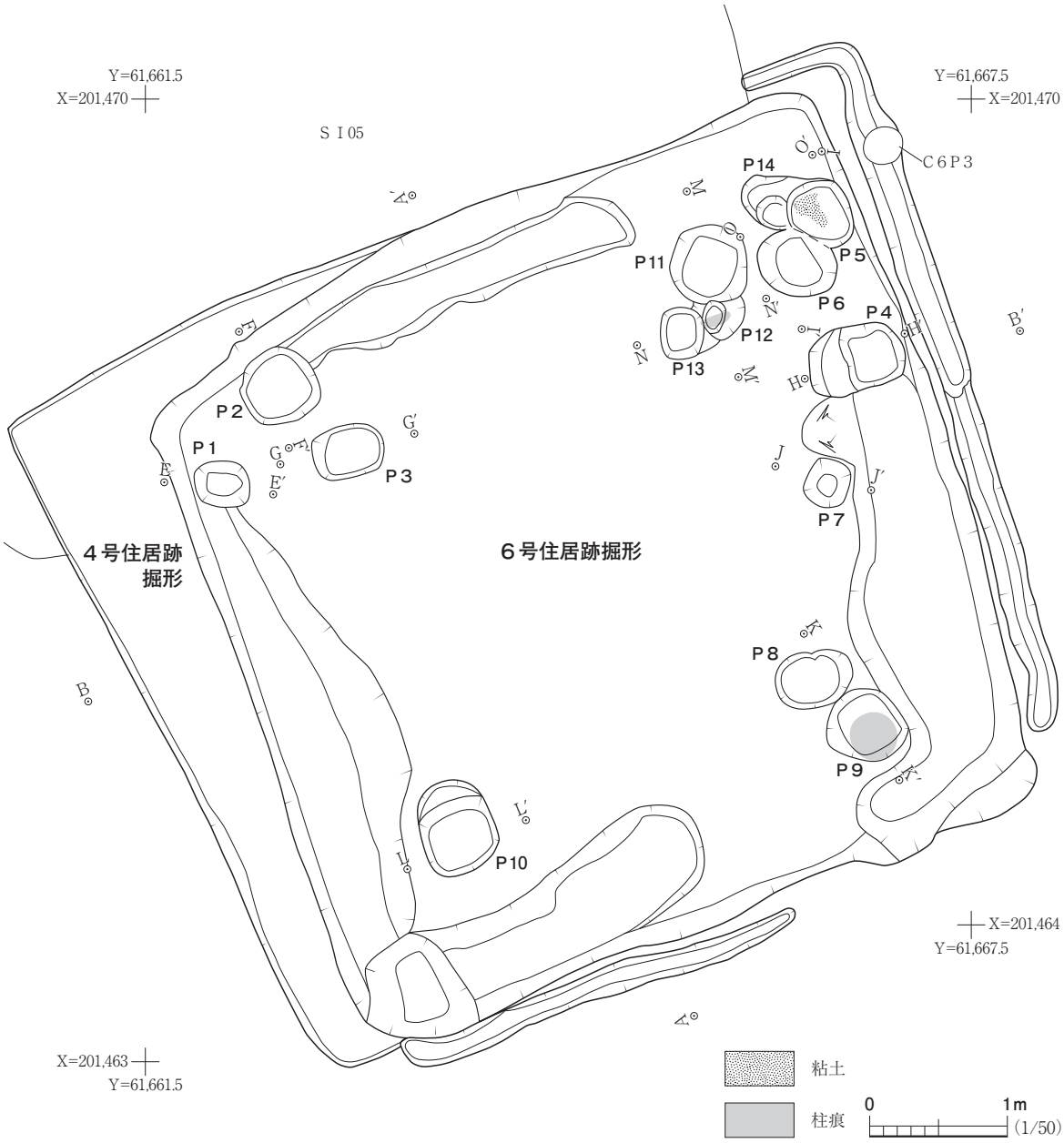
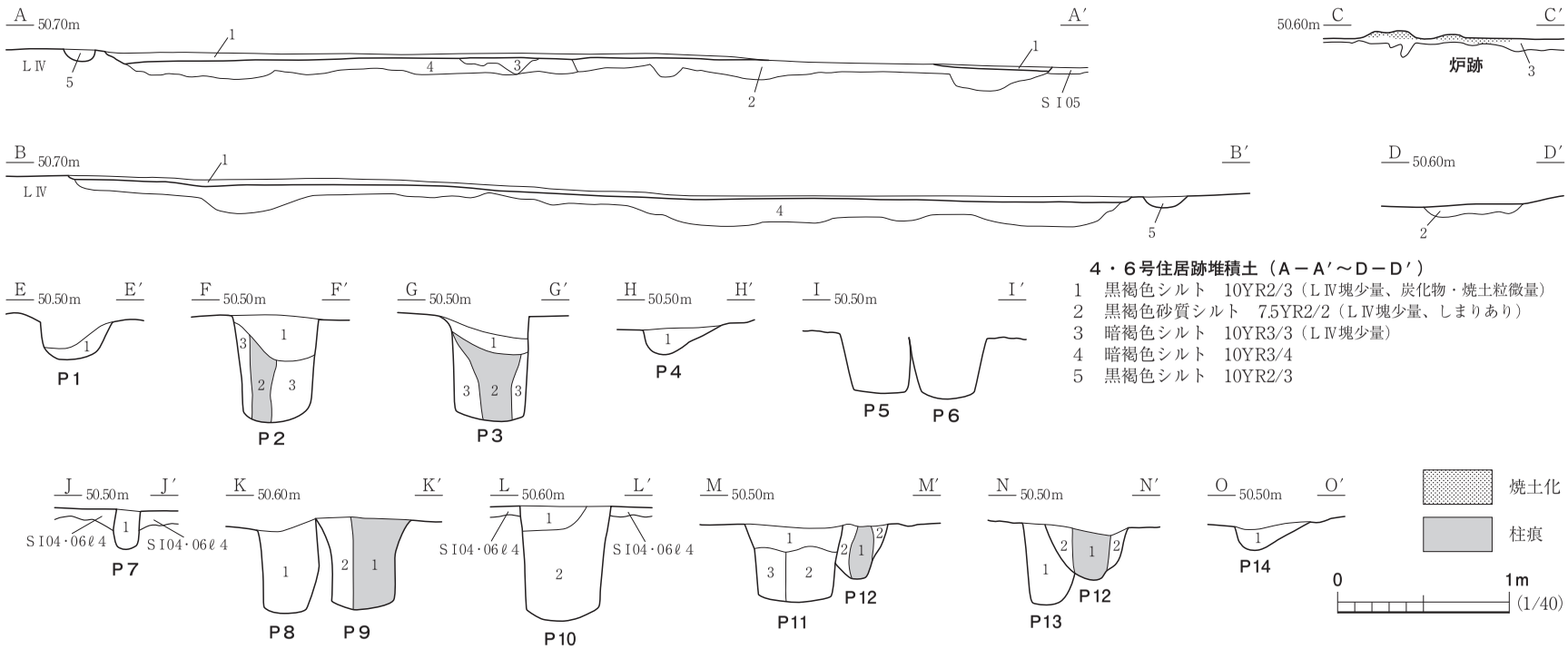


図８　４・６号住居跡（２）



４・６号住居跡堆積土（Ａ－Ａ′～Ｄ－Ｄ′）

1　黒褐色シルト　10YR2/3（ＬⅣ塊少量、炭化物・焼土粒微量）
2　黒褐色砂質シルト　7.5YR2/2（ＬⅣ塊少量、しまりあり）
3　暗褐色シルト　10YR3/3（ＬⅣ塊少量）
4　暗褐色シルト　10YR3/4
5　黒褐色シルト　10YR2/3

図９　４・６号住居跡（３）

Ｐ１堆積土
1　暗褐色シルト　10YR3/4（褐色シルト少量）

Ｐ２堆積土
1　褐色シルト　10YR4/4
2　暗褐色シルト　10YR3/4（ＬⅣ少量、焼土微量）
3　褐色シルト　10YR4/6（暗褐色シルト少量）

Ｐ３堆積土
1　褐色シルト　10YR4/4
2　黒褐色シルト　10YR2/3（褐色シルト微量）
3　褐色シルト　10YR4/4（暗褐色シルト少量）

Ｐ４堆積土
1　黒褐色シルト　10YR2/3（暗褐色シルト少量）

Ｐ７堆積土
1　暗褐色シルト　10YR3/3（ＬⅣ塊・炭化物・焼土少量）

Ｐ８堆積土
1　暗褐色シルト　10YR3/3（ＬⅣ塊少量）

Ｐ９堆積土
1　暗褐色シルト　10YR3/3（ＬⅣ塊多量）
2　暗褐色シルト　10YR3/3（ＬⅣ少量）

Ｐ10堆積土
1　暗褐色シルト　10YR3/4（ＬⅣ塊少量）
2　暗褐色シルト10YR3/4（ＬⅣ塊多量）

Ｐ11堆積土
1　黒褐色粘土質シルト　10YR2/3（暗褐色シルト塊少量）
2　にぶい黄褐色シルト　10YR3/2（黒褐色シルト少量）
3　褐色シルト　10YR3/3（暗褐色シルト少量）

Ｐ12堆積土
1　暗褐色シルト　10YR3/3（ＬⅣ少量）
2　黒褐色シルト　10YR2/3（ＬⅣ少量）

Ｐ13堆積土
1　黒褐色シルト　10YR2/3（ＬⅣ少量）

Ｐ14堆積土
1　暗褐色シルト　10YR3/4（ＬⅣ少量）

４号住居跡の平面形は北壁がやや長い方形で、規模は北壁約6.3ｍ、西壁約5.3ｍ、東壁約5.4ｍ、南壁約5.5mを測る。主軸方向は、西壁でＮ27°Ｗを示す。検出面からの深さは２～４㎝である。床面の中央西寄りには東西幅約１ｍ、南北幅約50㎝の範囲が熱変し、焼土塊が散ることから、炉跡と判断した。断ち割ったところ、厚さ５㎝ほどの熱硬化が認められた。

４号住居跡は、建て替えないし拡張の可能性が考えられ、外側の壁沿いに確認された溝状の痕跡は、ℓ５とした貼床土と近似した土で埋められているため、古い段階の４号住居跡の壁溝と判断した。壁溝は住居跡の北東隅から東壁に沿い、一度途切れて南壁沿いに延びている。壁溝の規模は、遺存する部分で、東壁沿いが約5.8ｍ、南壁沿いが約3.1ｍを測り、幅が約20～30㎝、深さが３㎝前後で、断面がＵ字状である。壁溝の範囲から、古い段階の４号住居跡の規模は、推定で一辺約５ｍである。

一方、６号住居跡は、４号住居跡の貼床土を掘り下げていった段階で、４号住居跡の西壁よりも40～90㎝内側で一段下がる直線的な掘形が検出されたことにより確認することができた。６号住居跡は、西壁の長さから一辺約５ｍの大きさと推定され、西壁の傾きから主軸方向はＮ20°Ｗを示す。４号住居跡の貼床土を掘り下げていったところ、掘形の西半部は壁際が一段低く、中央部分が島状に高く残っている。掘形の東半部は４号住居跡の周壁とほぼ重なるものとみられる。そして、６号住居跡の掘形のおよそ４隅に分散される形で14基の柱穴と考えらえるＰ１～14が検出された。

Ｐ１～14の掘形堆積土の内、柱痕と判断したのはＰ２・３のℓ２及びＰ９・12のℓ１で、暗褐色シルトを基調とする。Ｐ２・３では柱材の上部が切り取られた後に褐色シルトで埋めている様子が観察された。なお、Ｐ５の底面近くからは白色粘土塊が認められたが、柱材の補強等に使われたものと考えられる。

柱穴の平面形は円形ないし楕円形である。柱穴の規模については、１基ずつ個別に示す。Ｐ１が長軸約38㎝×短軸約34㎝×深さ約24㎝、Ｐ２が長軸約56㎝×短軸約55㎝×深さ約60㎝、Ｐ３が長軸約52㎝×短軸約48㎝×深さ約59㎝、Ｐ４が長軸約70㎝×短軸約47㎝×深さ約31㎝、Ｐ５が長軸約53㎝×短軸約45㎝×深さ約34㎝、Ｐ６が長軸約58㎝×短軸約48㎝×深さ約37㎝、Ｐ７が長軸約36㎝×短軸約32㎝×深さ約22㎝、Ｐ８が長軸約59㎝×短軸約42㎝×深さ約56㎝、Ｐ９が長軸約56㎝×短軸約54㎝×深さ約44㎝、Ｐ10が長軸約66㎝×短軸約54㎝×深さ約64㎝、Ｐ11が長軸約61㎝×短軸約59㎝×深さ約57㎝、Ｐ12が長軸約35㎝×短軸約28㎝×深さ約31㎝、Ｐ13が長軸約38㎝×短軸約32㎝×深さ約16.5㎝、Ｐ14が長軸約33㎝×短軸約48㎝×深さ約22㎝である。全体的にある程度の深さがあり、底面は皿状に窪み、周壁が直立して立ち上がる。

柱穴はその位置関係から、北西部の３基、北東部の８基、南西部の１基、南東部の２基に大別される。そのうち重複関係があるものは、北東部ではＰ14→Ｐ６→Ｐ５、南東部ではＰ13→Ｐ12→Ｐ11の順に掘り込まれている。この状況から、住居跡は４本の主柱穴を持つ構造で、柱穴あるいは柱材を共用しながら建て替え、拡張が繰り返されていたものと推察される。また、柱穴の中では、北西部のＰ２、北東部のＰ11、南東部のＰ９、南西部Ｐ10の４基が、掘形の平面形や、40～

60㎝と他と比べて深いこと等の類似点が認められる。この４基の柱穴は、Ｐ11の重複関係も考慮すると、新しい段階の４号住居跡の主柱穴の可能性があるが、Ｐ２は褐色シルトで埋められているため断定はできない。また、Ｐ３・８についても、深さがそれぞれ59㎝、56㎝と深いことから、古い段階の４号住居跡ないし６号住居跡の主柱穴を構成していた可能性がある。

遺物は、４号住居跡から土師器103点が出土したが、いずれも細片のため図示できなかった。

ま と め

４・６号住居跡は、出土遺物から他の住居跡と同じく古墳時代前期の所産と考えられる。今回検出された住居跡の中では大型であること、同地点での建て替えまたは拡張が繰り返されたことも考慮すると、集落内の主要な住居跡の一つと推定される。（廣　川）

５号住居跡　ＳＩ05

遺　　構（図10・11、写真15・17・20～24）

本遺構は、調査区西部のＢ５・６、Ｃ５・６グリッドに位置する竪穴住居跡である。検出面はＬⅣ上面である。本遺構と４・６号住居跡は重複関係があり、古い方から６号住居跡→５号住居跡→４号住居跡の順につくられている。本遺構の南部は４号住居跡と重複するため床面が遺存しないが、４号住居跡の掘形から検出された貯蔵穴と柱穴２基については、位置関係から本遺構に所属するものと判断し、後述するＰ１及びＰ４・５とした。本遺構の周囲には、３・７・８号住居跡があり、掘立柱建物跡の柱穴とみられる小穴群が広がっている。Ｃ５Ｐ34とも重複し、本遺構の方が古い。

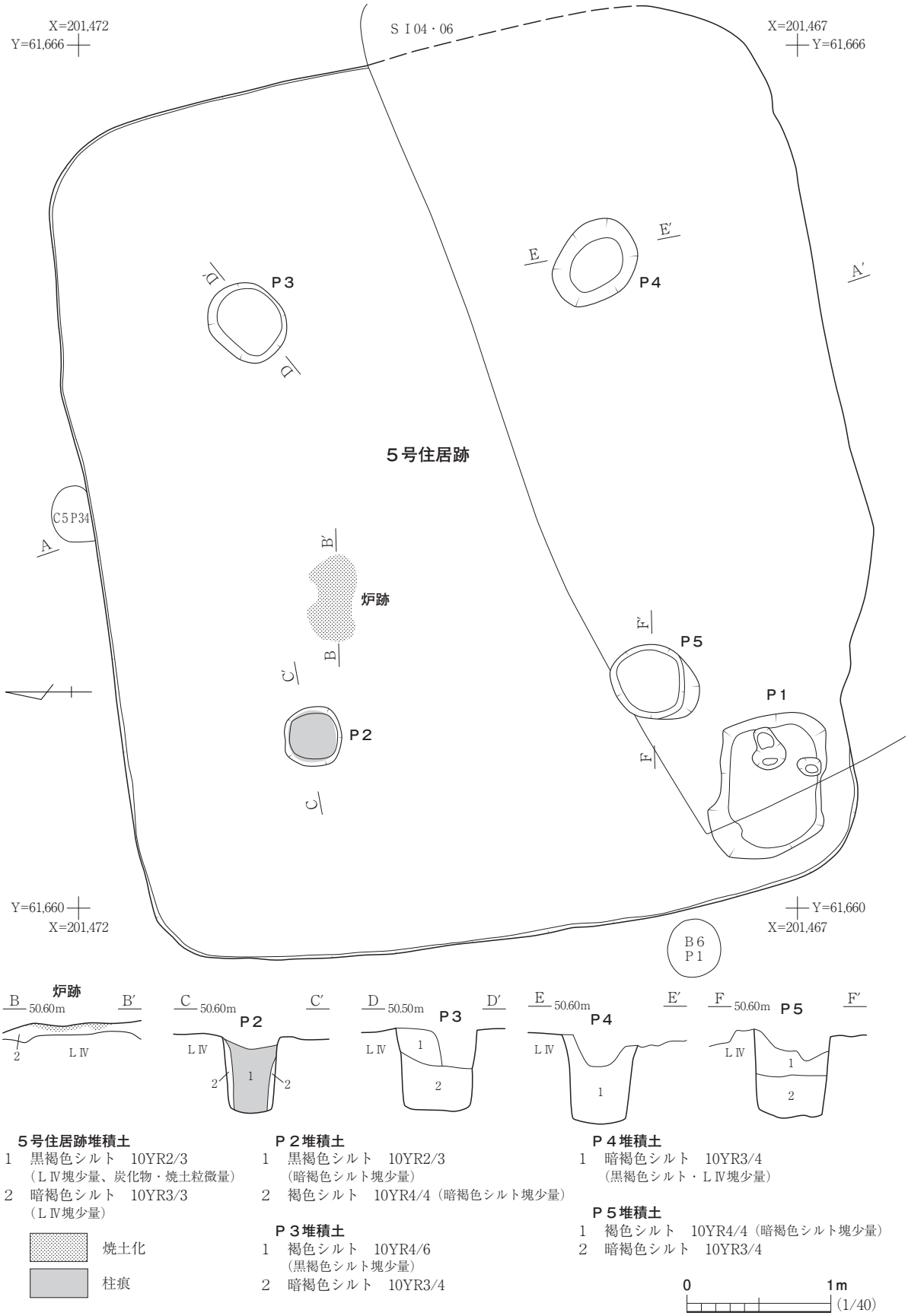
遺構内堆積土は２層に分層した。ℓ１は床面上に薄く堆積し、ＬⅡに由来する自然流入土とみられる。ℓ２は貼床土でその上面は平坦に床面を整えている。

本遺構の形状は、東西にやや長い隅丸方形である。規模は長軸約６ｍ、短軸約５ｍで、遺存する北壁では約5.5ｍ、西壁では約4.6ｍを測る。主軸方向は、西壁でＮ８°Ｗを示す。検出面からの深さは２～４㎝である。床面からは、炉跡、貯蔵穴、柱穴４基を確認した。

炉跡は、床面の中央北西寄りに位置し、東西幅約60㎝、南北幅約30㎝の範囲が被熱している。中央が強く熱を受けた様子が観察され、最大５㎝ほどの厚さで熱硬化が認められた。

Ｐ１は貯蔵穴と考えられ、南西隅で確認された。平面形は隅が丸い方形で、規模は長軸約１ｍ、短軸約70㎝である。床面からの深さは約50㎝で、底面は凹凸が認められるが、周壁は直立する。堆積土は炭化物を少量含んだ暗褐色シルトの単層で、堆積土中からは数個体分の土師器がまとまって出土した。

Ｐ２～５は柱穴と考えられ、それぞれ壁際から１ｍほど内側の箇所に位置し、平面形は円形ないし楕円形である。規模は、Ｐ２が長軸約42㎝×短軸約40㎝×深さ約52㎝、Ｐ３が長軸約58㎝×短軸約48㎝×深さ約58㎝、Ｐ４が長軸約66㎝×短軸約52㎝×深さ約64㎝、Ｐ５が長軸約64㎝×短軸約52㎝×深さ約60㎝を測る。柱穴の堆積土は暗褐色シルトを基調とする。Ｐ２は他よりも小規



５号住居跡堆積土

1　黒褐色シルト　10YR2/3
（ＬⅣ塊少量、炭化物・焼土粒微量）

2　暗褐色シルト　10YR3/3
（ＬⅣ塊少量）

焼土化

柱痕

Ｐ２堆積土

1　黒褐色シルト　10YR2/3
（暗褐色シルト塊少量）

2　褐色シルト　10YR4/4（暗褐色シルト塊少量）

Ｐ３堆積土

1　褐色シルト　10YR4/6
（黒褐色シルト塊少量）

2　暗褐色シルト　10YR3/4

Ｐ４堆積土

1　暗褐色シルト　10YR3/4
（黒褐色シルト・ＬⅣ塊少量）

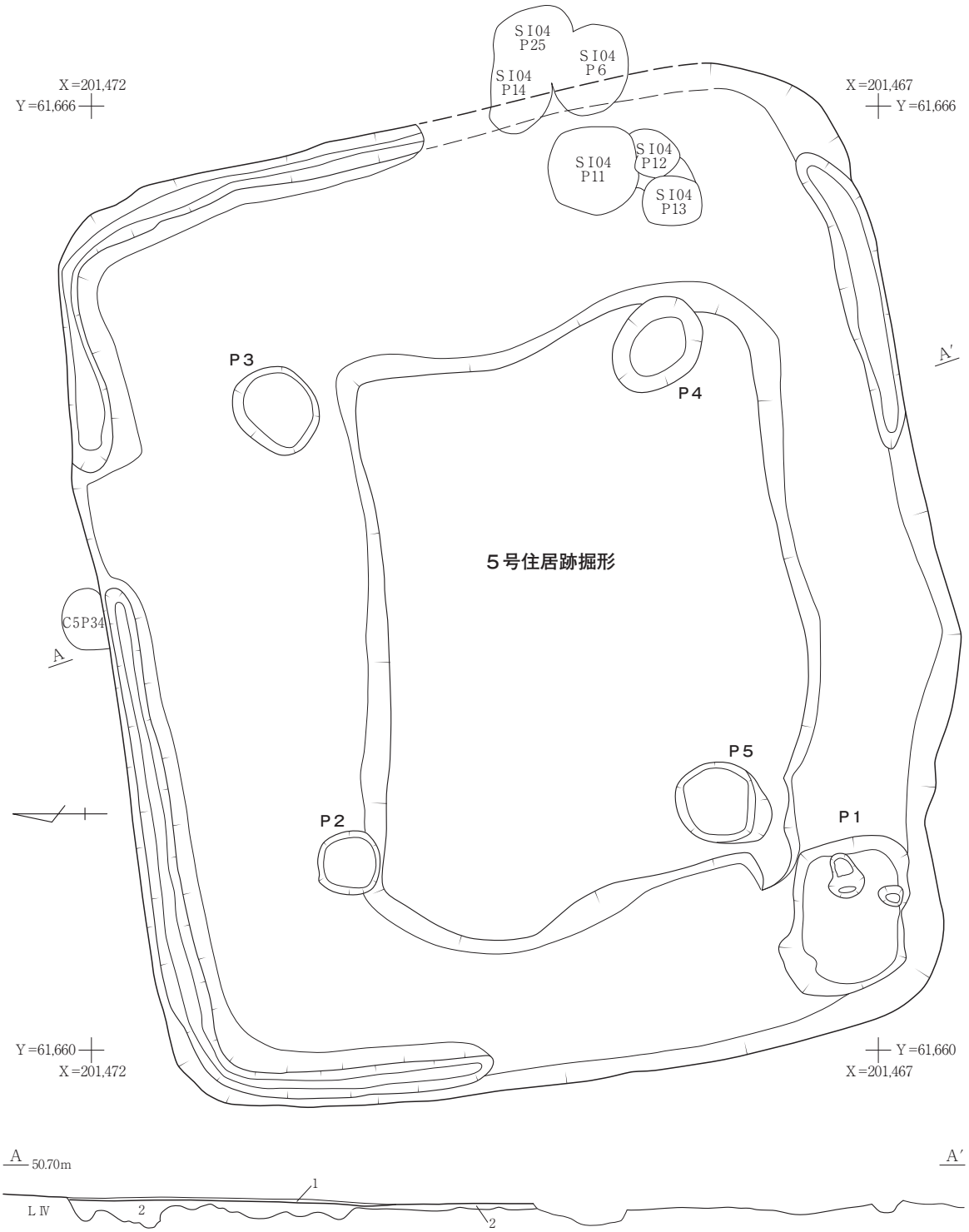
Ｐ５堆積土

1　褐色シルト　10YR4/4（暗褐色シルト塊少量）

2　暗褐色シルト　10YR3/4

0　1m
（1/40）

図10　５号住居跡（１）



５号住居跡堆積土
1　黒褐色シルト　10YR2/3（ＬⅣ塊少量、炭化物・焼土粒微量）
2　暗褐色シルト　10YR3/3（ＬⅣ塊少量）

0　1m
(1/40)

図11　５号住居跡（２）

模だが、掘形いっぱいに柱痕が認められた。

掘形は、西・南壁際から幅約１ｍ、北・東壁際から幅約1.4ｍが一段低くなっており、中央が島状に高く残っている。また、北半部と南壁の一部には壁溝と考えられる窪みが確認された。壁溝が確認された長さは、北西隅が約4.2ｍ、北東隅が約3.8ｍ、南壁が約２ｍを測る。幅は約20㎝、深さは約10～20㎝で、底面には凹凸が認められる。

遺　　物（図13、写真68）

出土遺物は土師器172点で、そのうち６点を図示した。

図13－１・２は底部が上げ底となっている小型の鉢である。いずれも外面全体に赤彩が観察され、１では内面の口縁部にも認められた。調整は、外面はハケメの後に横方向のヘラミガキを丁寧に施している。口縁部が遺存する１の内面調整は、外面と同様、横方向のヘラミガキである。

３は高杯の脚部で、３方向に円形の透かし孔が穿たれている。調整は磨滅のため不明である。

４・５は壺で、いずれも口縁部が折り返されている。口縁部は内外面とも横～斜め方向のハケ

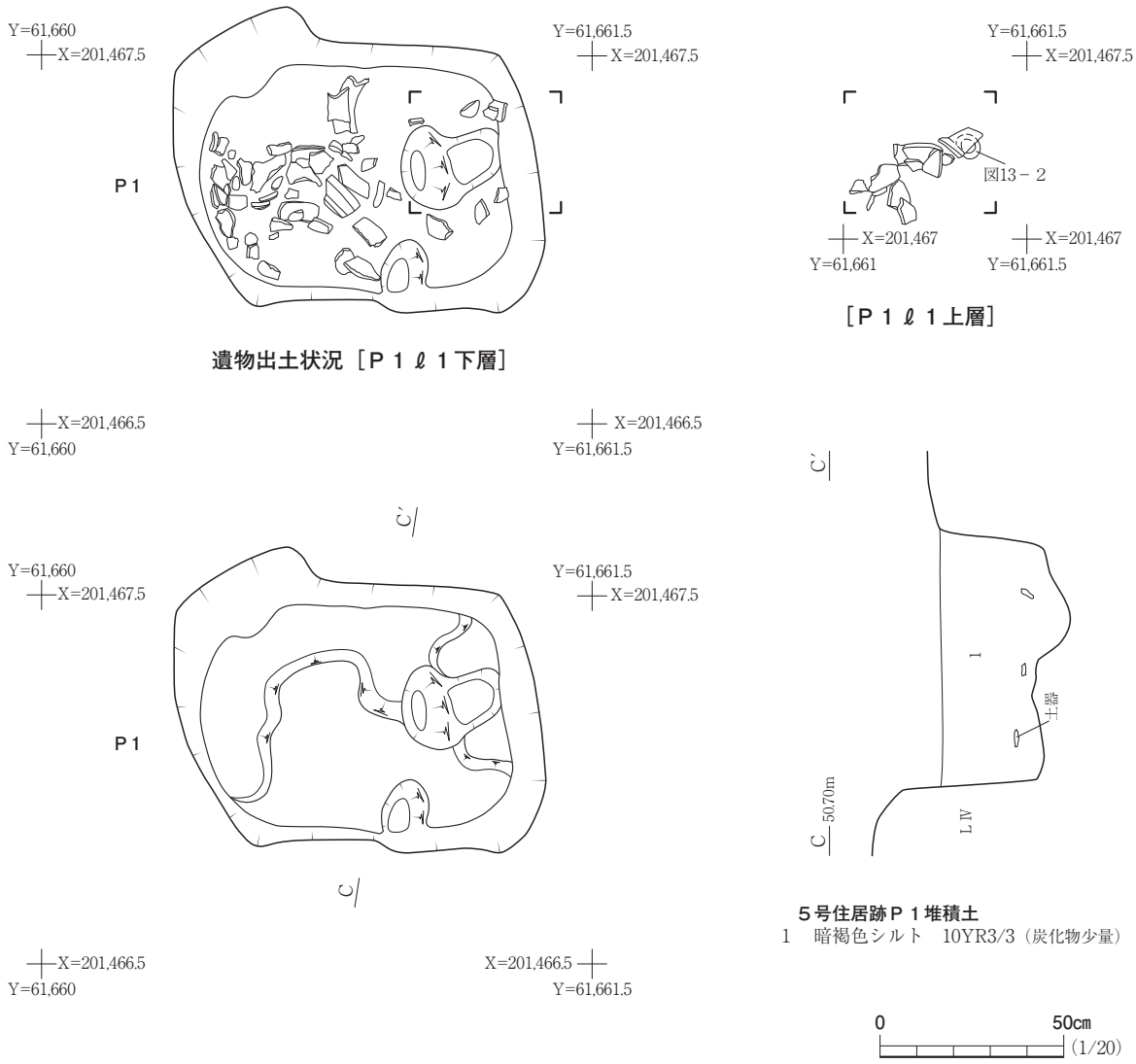


図12　５号住居跡遺物出土状況

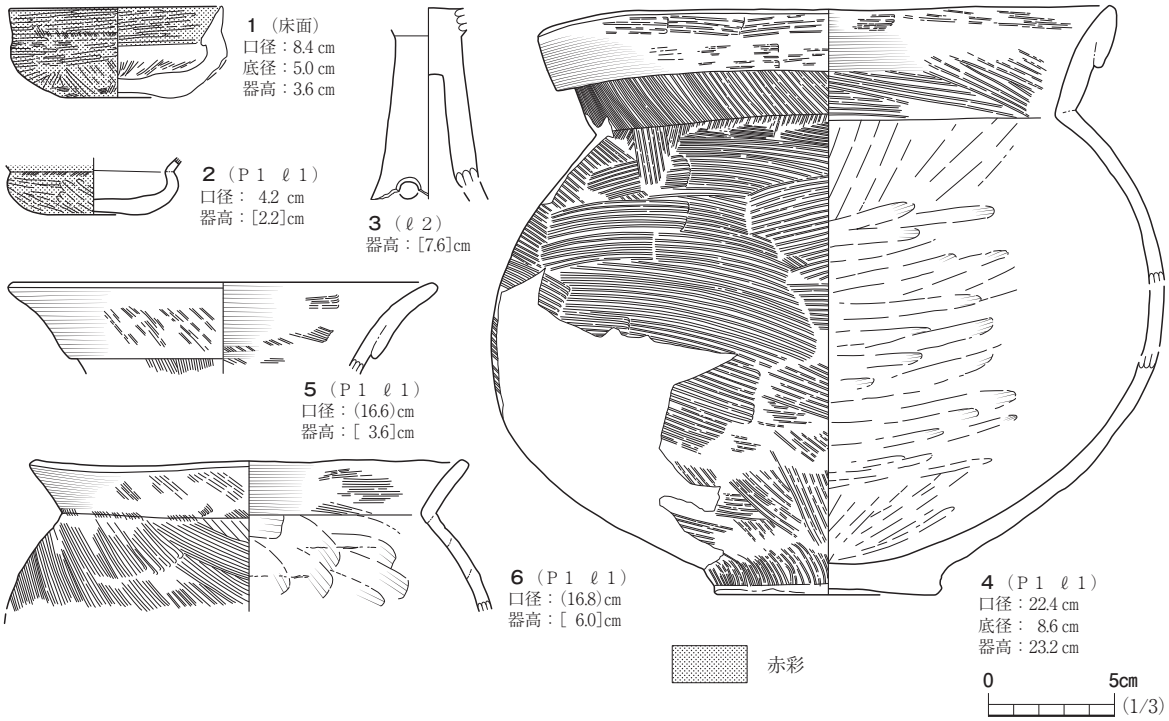


図13　５号住居跡出土遺物

メの後に横方向のナデが施されている。頸部の調整は、縦～斜め方向のハケメである。

６は甕で、内外面とも横～斜め方向のハケメの後に横方向のナデが観察される。胴部は外面が斜め方向のハケメ、内面が横方向のナデが施されている。

ま と め

本住居跡は、出土遺物から他の住居跡と同じく古墳時代前期の所産と考えられる。南半部は４号住居跡に掘り込まれていたが、当該箇所から貯蔵穴と柱穴が検出されたため、住居跡の構造を把握することができた。本遺構の北に位置する７号住居跡からも貯蔵穴が確認されたが、住居跡の南西隅に設けられていることが共通する特徴として指摘できる。（廣　川）

７号住居跡　ＳＩ07

遺　　構（図14～16、写真25～27）

本遺構は、調査区西部北寄りのＢ４・５、Ｃ４・５グリッドに位置する竪穴住居跡である。検出面はＬⅣ上面である。本遺構は、複数の遺構と重複し、撹乱を受けているため遺存状態が悪い。ただ、遺存する周壁部分と掘形の範囲から想定される住居跡の規模は一辺約７ｍと、検出された住居跡の中では最も大きい。本遺構の周辺には掘立柱建物跡の柱穴とみられる小穴群が広がり、その一部や１・３号建物跡と重複し、本遺構の方が古い。検出された他の住居跡とは重複せず、それらの中では最も北に位置する。

遺構内堆積土は４層に分層した。ℓ１は床面上に薄く堆積し、ＬⅡに由来する自然流入土とみられる。ℓ２は壁溝内堆積土である。ℓ３・４は貼床土である。いずれもＬⅣ塊を少量含む暗褐色シ

ルトだが、色調が若干異なるため分層した。

本遺構の平面形は正方形に近く、規模は北壁と南壁間で約7.1ｍ、東壁と西壁間で約6.9ｍを測り、１辺約７ｍである。主軸方向は、東壁でＮ10°Ｅを示す。検出面からの深さは２～４㎝である。床面は平坦で、貯蔵穴、間仕切り溝、柱穴３基を確認した。なお、床面からは炉跡と考えられる明瞭な被熱痕跡はなかったが、中央やや南東寄りの位置で炭化物の広がりが確認された。

Ｐ１は貯蔵穴と考えられ、西壁際から約70㎝、南壁際から約40㎝内側の南西隅で確認された。平面形は隅が丸い長方形で、規模は長軸約76㎝、短軸約58㎝である。床面からの深さは最大17㎝で、底面は平坦で、周壁は直立する。堆積土は黒褐色シルトの単層で、堆積土中からは数個体分の

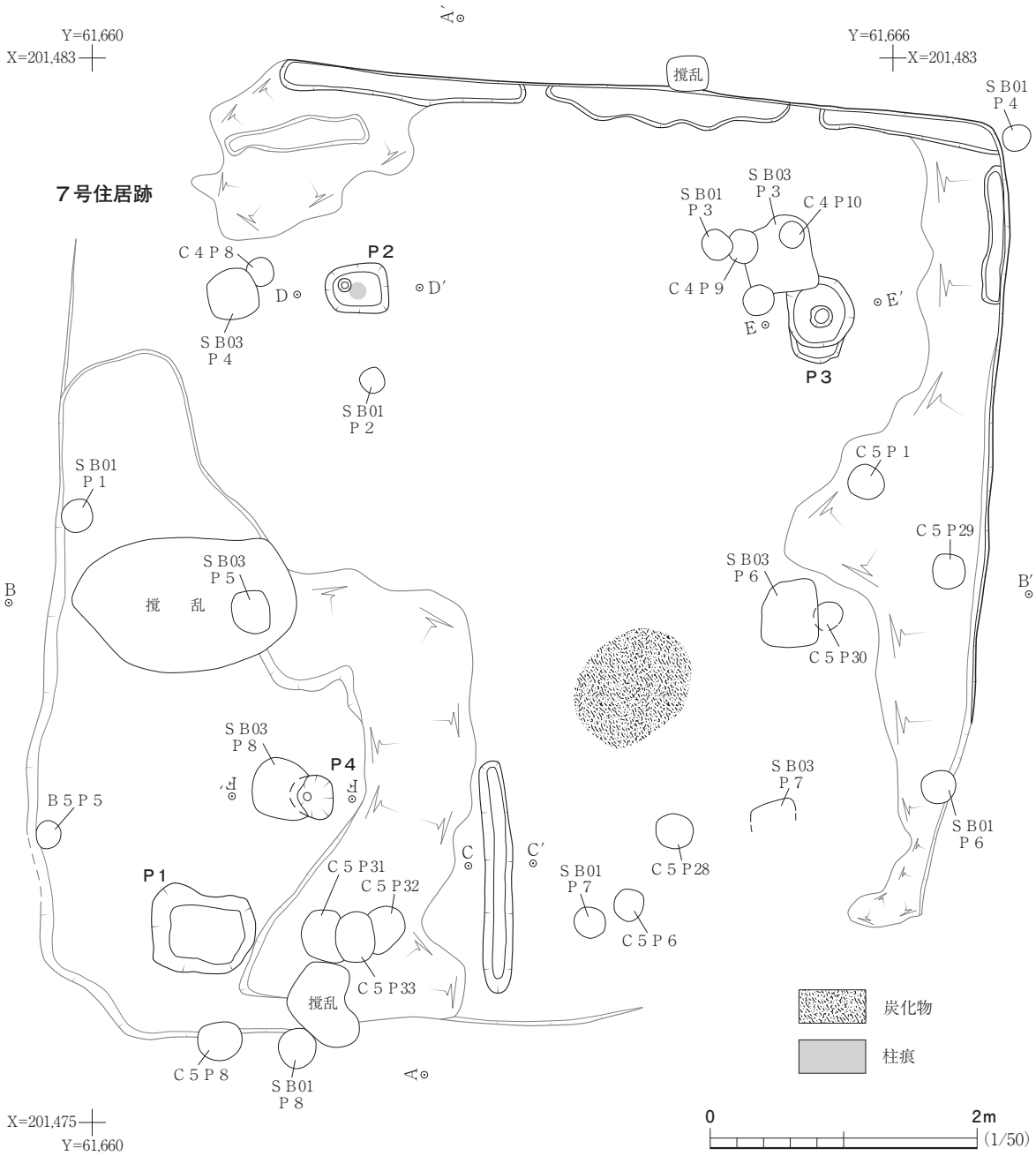


図14　７号住居跡（１）

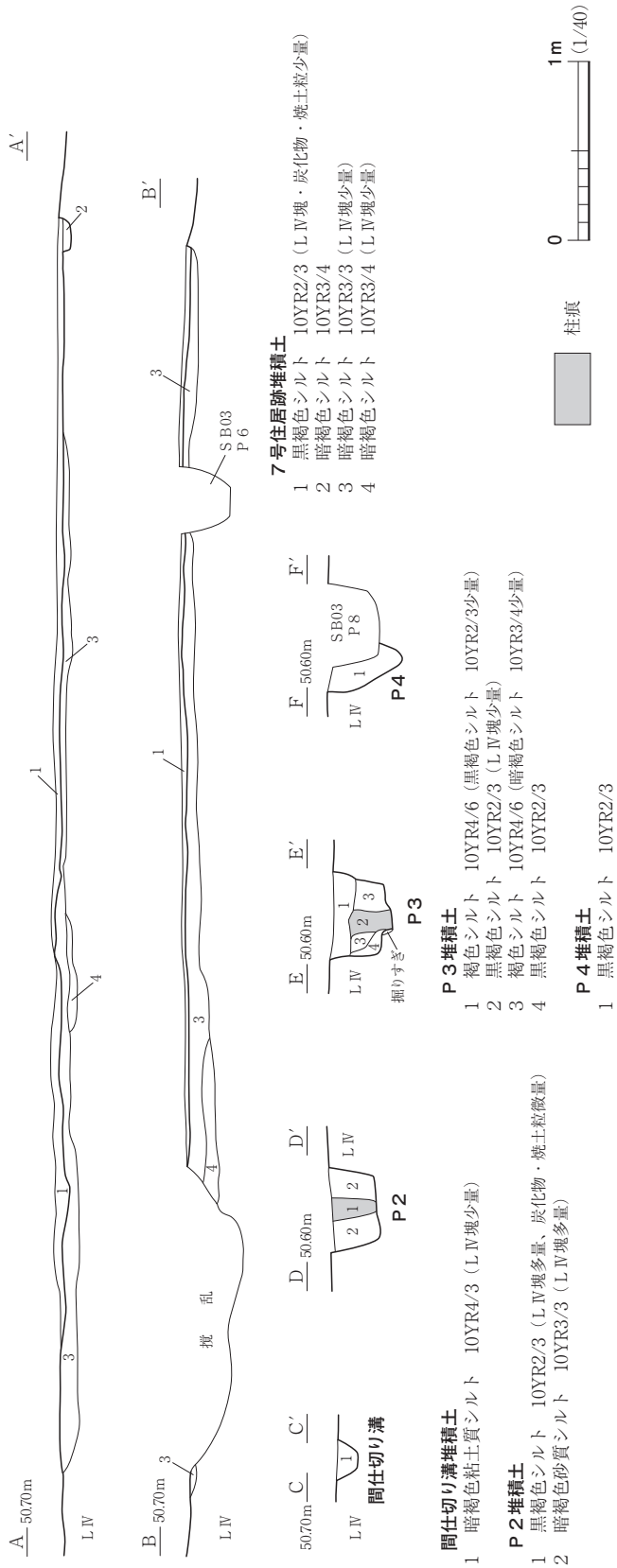


図15　７号住居跡（２）

土師器が出土した。

間仕切り溝は、南壁のほぼ中央から北に向かって延びている。規模は、長さ約２ｍ、幅約20㎝、深さ約10㎝で、断面の形状はＵ字形である。

Ｐ２～４は柱穴と考えられる。４本の主柱穴を持つ住居跡と推測されるが、南東部は撹乱を受けているため柱穴は確認できなかった。柱穴の平面形は隅丸方形ないし楕円形である。規模は、Ｐ２が長軸約46㎝×短軸約38㎝×深さ約30㎝、Ｐ３が長軸約54㎝×短軸約48㎝×深さ約32㎝、Ｐ４が長軸約34㎝×短軸約28㎝×深さ約30㎝を測る。Ｐ２ℓ１とＰ３ℓ２は柱痕とみられ、直径は約20～30㎝である。Ｐ２・３とも、柱痕の周囲は暗褐色砂質シルトや褐色砂質シルトを基調とした土で埋められている。

掘形は、一段低くなっている不整な窪みとして、周壁際を中心に認められた。

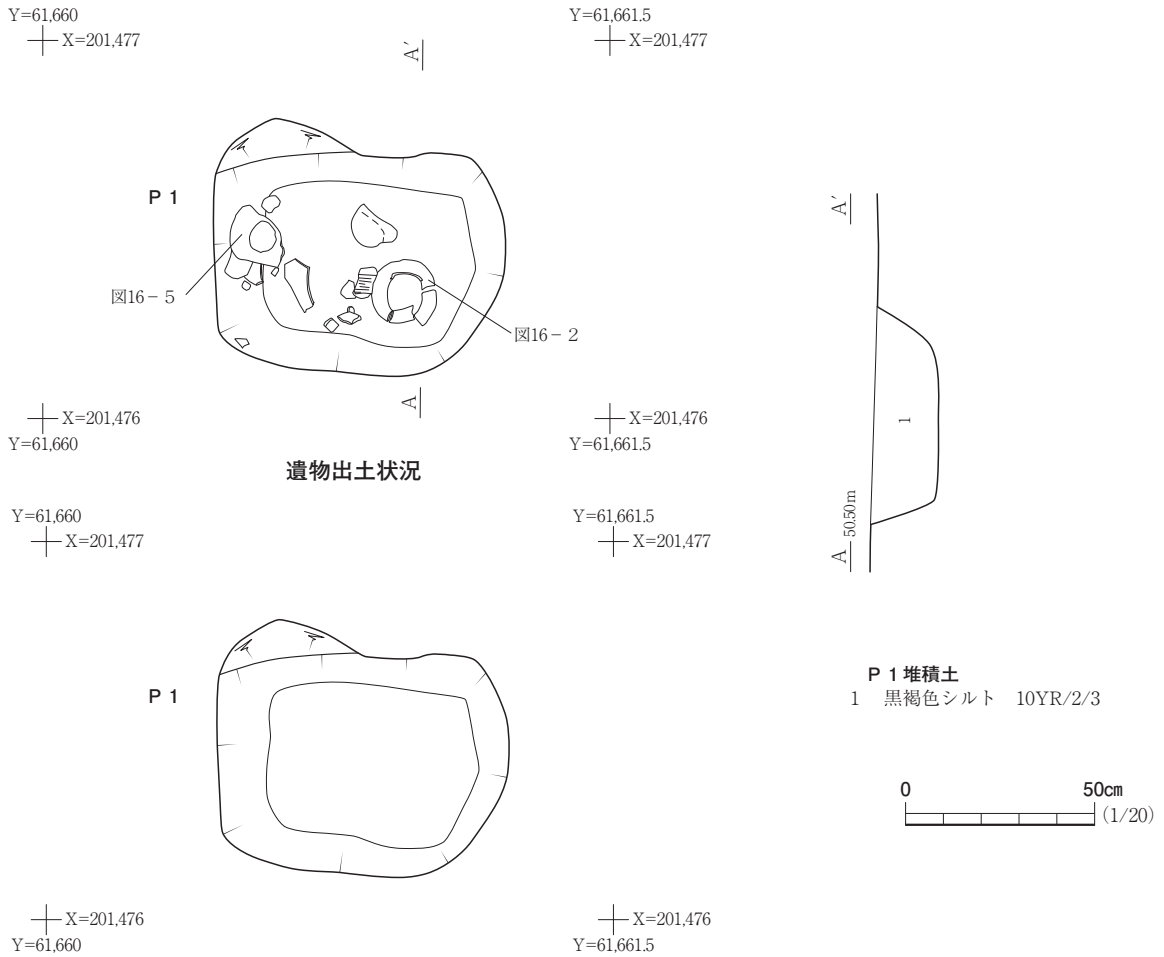
遺　　物（図16、写真68）

出土遺物は土師器59点、縄文土器１点で、そのうち７点を図16に示した。

１は小型の土師器鉢で、内外面とも丁寧なヘラミガキが施されている。底部はやや上げ底となっている。

２は土師器の二重口縁壺である。外面の頸部は縦方向のヘラミガキが施されている。口縁部は磨滅のため調整の観察は困難である。内面は、口縁部が縦～斜め方向のヘラミガキ、頸部が横方向のナデが観察される。

３は土師器壺の小片で、口縁部が折り



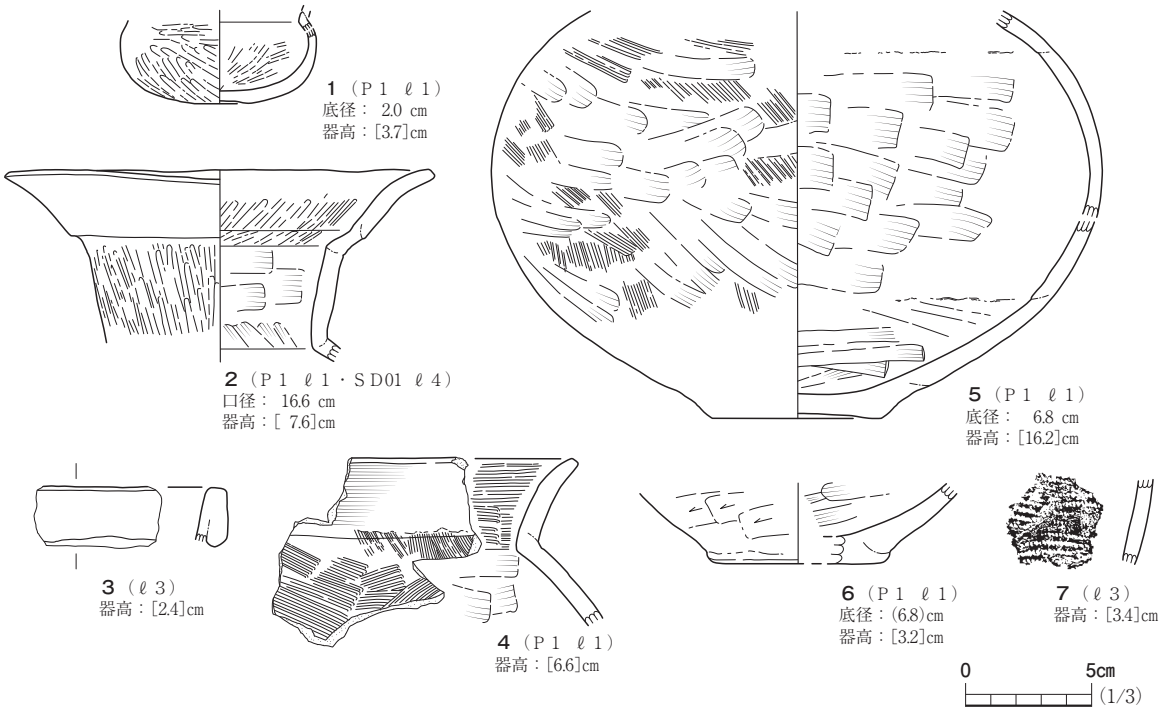


図16　７号住居跡（３）、出土遺物

返されている。

４は土師器甕の口縁部～頸部付近を中心とした破片である。外面は、口縁部が横方向のナデ、頸部付近が縦～斜め方向のハケメ、内面は、口縁部が横方向のハケメ、頸部より下は横方向のナデが施されている。

５・６は土師器甕とした。５の上半部と下半部は接合しなかったが、図上で復元した。外面はハケメの後にナデが施されている。内面は横方向のヘラナデで、部分的に粘土紐の積み上げ痕が観察される。６は底部片で、外面はヘラケズリ、内面にはナデが施されている。

７は縄文土器の胴部片である。貼床土中から出土したため、住居跡の構築段階で混入したものと判断される。

ま と め

本住居跡は、出土遺物から他の住居跡と同じく古墳時代前期の所産と考えられる。遺存する範囲から１辺約７ｍの住居跡で、検出された住居跡の中では最も大型である。このため、集落の中心的な住居跡とみられる。また、本遺構の南に位置する５号住居跡からも貯蔵穴が確認されたが、住居跡の南西隅に設けられていることが共通する特徴として指摘される。（廣　川）

８号住居跡　ＳＩ08

遺　　構（図17・18、写真27・28）

本遺構は、調査区西部のＢ５・６グリッドに位置する竪穴住居跡である。検出面はＬⅣ上面である。１辺約5.5ｍの住居跡で、南西部分は工区外となるため未調査である。重複する遺構はないが、東に約２ｍ離れて５号住居跡、さらに４・６号住居跡がある。主軸方向が一致する３号住居跡は西に約11ｍ離れている。

遺構内堆積土は４層に分層した。ℓ１はＬⅡに由来するものとみられ、レンズ状堆積をしていることから自然堆積土と考えられる。また、ℓ１には炭化物や焼土粒が僅かに含まれている。ℓ２～４は貼床土及び掘形埋土である。

住居跡は北東部1/3程であるが、北壁が約5.3ｍを測り、一辺約5.5ｍの方形の住居跡が想定される。主軸方向は、遺存する東壁でＮ25°Ｅを示す。検出面からの深さは最深15㎝ほどで、僅かに残る周壁は直立する。床面は平坦で、Ｐ１・２とした柱穴２基を検出した。

Ｐ１・２は、検出された位置から４基の主柱穴のうちの２基とみられる。平面形はやや不整な隅丸方形である。規模は、上端の長軸、短軸とそこからの深さを測った。Ｐ１が遺存する部分で一辺約60㎝、深さ約58㎝、Ｐ２が長軸約62㎝、短軸約58㎝、深さ約57㎝である。堆積土は、Ｐ１は黒色シルト、Ｐ２は暗褐色シルトの単層で、柱痕は確認されなかった。

掘形は、中央部分が島状に高く残り、周壁に沿って幅約40～90㎝の一段低い溝状となっている。中央部分と周壁際との高低差は10～20㎝ほどで底面には凹凸が認められる。

遺物は土師器甕10点が出土したが、いずれも細片のため図示できなかった。

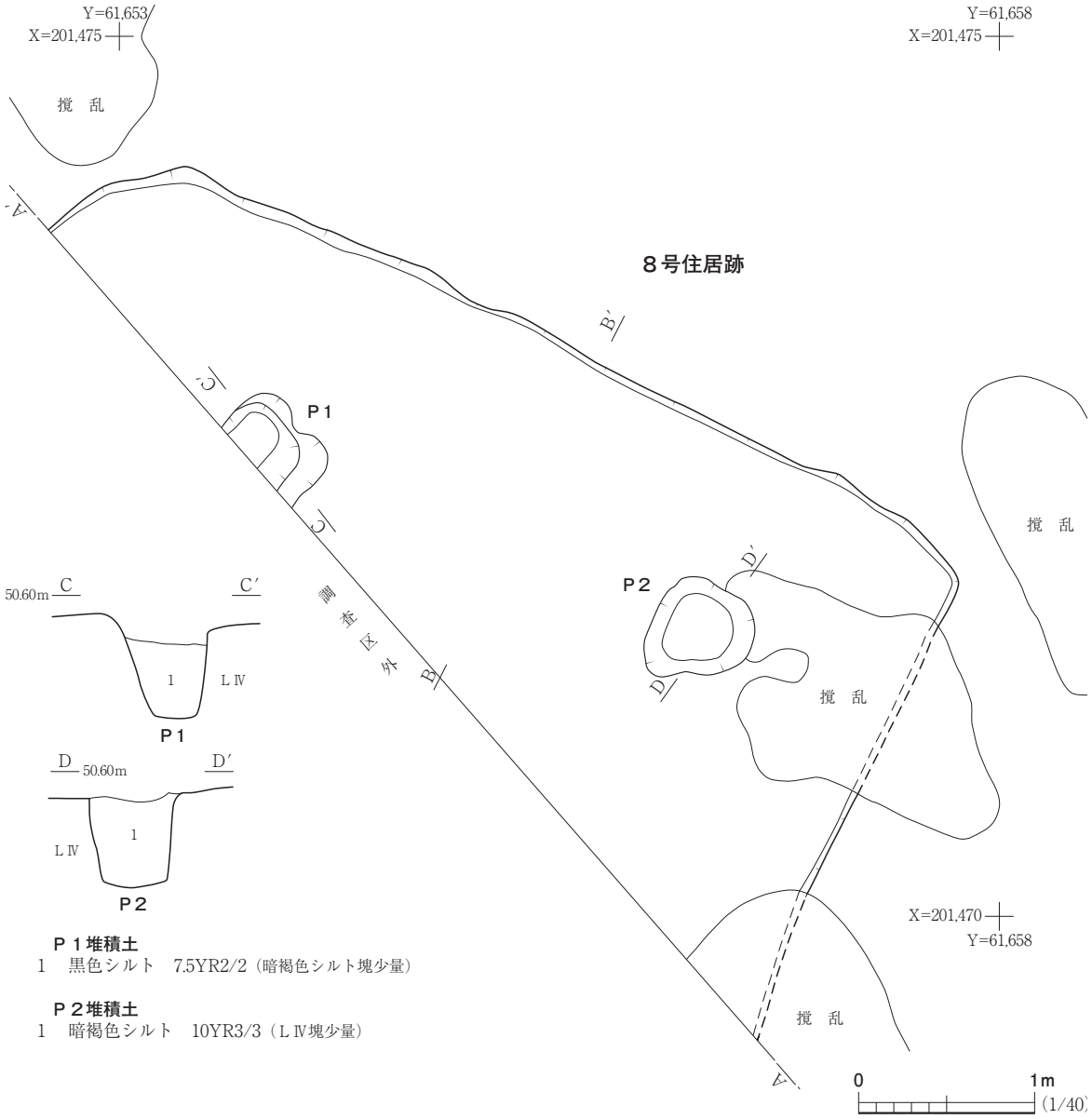


図17　８号住居跡（１）

ま と め

本遺構は、検出した中では中～大型の住居跡である。出土遺物から、他の住居跡と同じく古墳時代前期の所産と考えられる。近接する４～６号住居跡の重複関係から集落内では数時期の変遷が認められるが、主軸方向が一致する３号住居跡と同時期に営まれていた可能性がある。　（廣　川）

第３節　掘立柱建物跡

検出された掘立柱建物跡は、調査区西部で３棟、調査区東部で３棟の計６棟である。３号建物跡を除いた建物跡は、Ｌ字形に屈曲する１号堀跡と主軸方向が概ね一致することから、堀跡で区画された中世の屋敷跡を構成する、あるいはそれと関連する建物跡と考えられる。３号建物跡は、これ

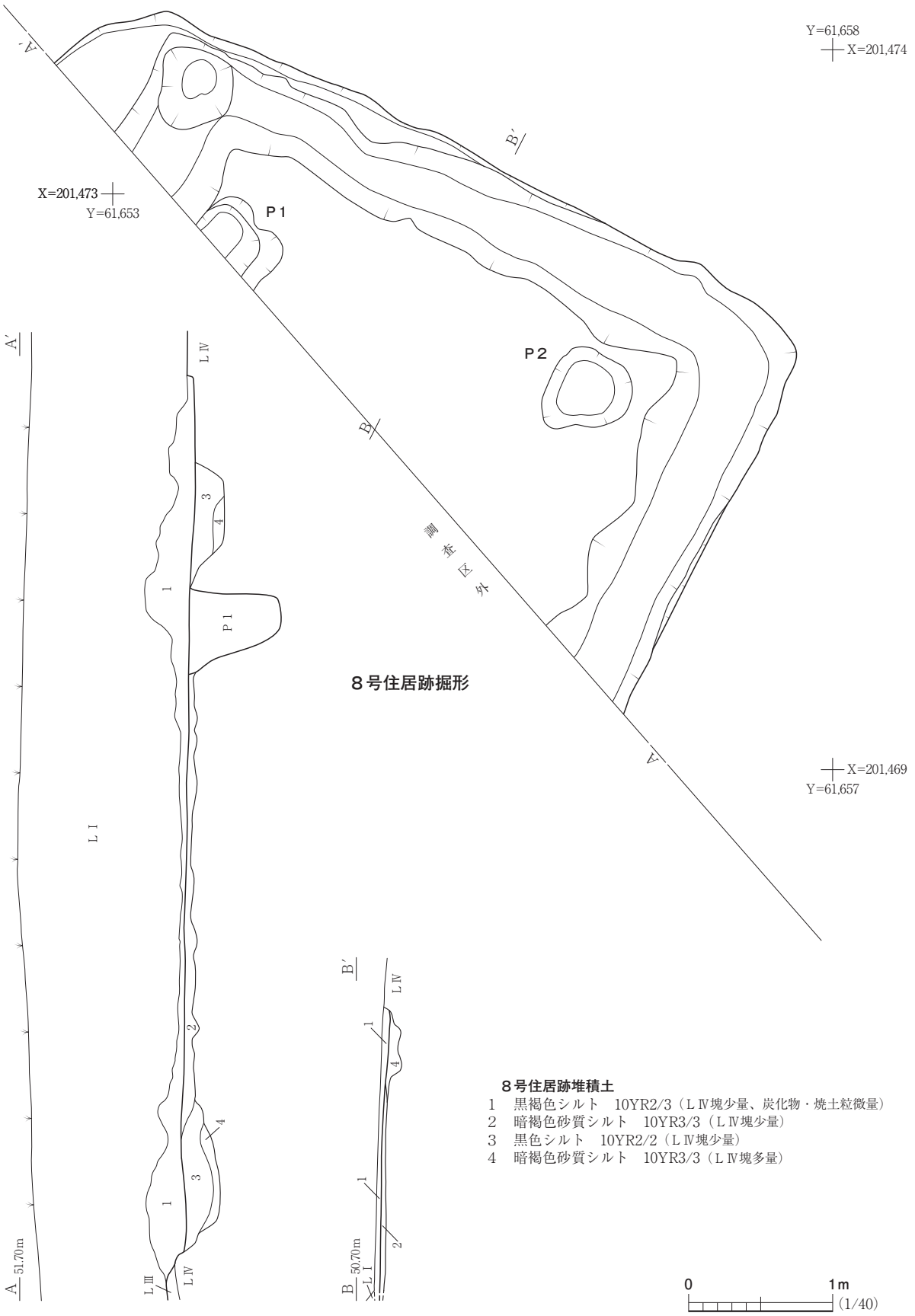

Y=61,658
X=201,474
X=201,473
Y=61,653
P１
P２
A
A'
B
B'
調査区外
８号住居跡掘形
X=201,469
Y=61,657
L Ⅳ
L Ⅲ
L Ⅰ
51.70m
50.70m
８号住居跡堆積土
1　黒褐色シルト　10YR2/3（L Ⅳ塊少量、炭化物・焼土粒微量）
2　暗褐色砂質シルト　10YR3/3（L Ⅳ塊少量）
3　黒色シルト　10YR2/2（L Ⅳ塊少量）
4　暗褐色砂質シルト　10YR3/3（L Ⅳ塊多量）
0
1m
(1/40)

図18　８号住居跡（２）

らとは異なるため、時期や性格が異なるものとみられる。また、建物跡の付近からは柱穴とみられる小穴が多数検出されることから、同様の建物跡が他にも存在していたと考えられる。

１号建物跡　ＳＢ01

遺　　構（図19、写真29・30）

本遺構は調査区西部のＢ５、Ｃ４・５グリッドで検出した掘立柱建物跡である。検出面はＬⅣ上面である。本遺構の西側に約１ｍ離れて２号建物跡が並列し、周辺には同様の建物跡の柱穴とみられる小穴群が広がっている。本遺構は、７号住居跡、３号建物跡、Ｃ４Ｐ９と重複している。これらの遺構との新旧関係は、本遺構の柱穴やＣ４Ｐ９及び３号建物跡のＰ３が７号住居跡の堆積土上面から確認されること、３号建物跡のＰ３を掘り込んでいるＣ４Ｐ９を、さらに本遺構のＰ３が掘り込んでいることから、古い順に７号住居跡→３号建物跡→Ｃ４Ｐ９→本遺構と判断される。

本遺構は東西３間×南北１間の東西棟の建物跡で、柱穴８基を検出した。南北の柱間に対して東西の柱間の間隔が狭い。また、東西の柱間のうち、中央部がやや長い。芯々間での柱間の間隔は、北側柱列が西から1.62ｍ＋1.84ｍ＋1.56ｍ、南側柱列が西から1.58ｍ＋1.86ｍ＋1.66ｍ、西側柱列が2.86ｍ、中央西寄りの柱列が2.88ｍ、中央東寄りの柱列が2.89ｍ、東側柱列が2.68ｍを測る。およそ東西５ｍ×南北３ｍの建物跡である。主軸方向は、北東隅を起点とした北側柱列でＮ67°Ｅである。なお、南西隅を基点とした西側柱列はＮ24°Ｗである。

柱穴の掘形の平面形は楕円形ないし円形で、平面規模は直径20～25㎝を基本とし、最小が北側柱列のＰ２で短軸18㎝、最大が南東隅のＰ５で長軸42㎝を測る。検出面からの深さは、Ｐ３が20㎝、Ｐ８が24㎝である以外は、12～18㎝で20㎝に満たない。掘形の底面はほぼ平坦で、周壁もほぼ直立する。

柱穴の掘形内堆積土は、黒褐色シルトを基調とした単層である。柱痕を確認できたものはなかった。なお、いずれの柱穴からも遺物は出土していない。

ま と め

本遺構は、東西３間×南北１間の東西棟の建物跡である。中世の屋敷跡を区画する１号堀跡より32ｍ離れた位置にあるが、建物跡の主軸方向が同堀跡の東西軸と概ね一致することから、隣接する２号建物跡と共に、中世の屋敷跡を構成する建物跡の一つと考えられる。（廣　川）

２号建物跡　ＳＢ02

遺　　構（図20、写真31・32）

本遺構は調査区西部のＣ４、Ｄ４グリッドで検出した掘立柱建物跡である。検出面はＬⅣ上面である。本遺構の西側に約１ｍ離れて１号建物跡が並列し、周辺には同様の建物跡の柱穴とみられる小穴群が広がっている。重複する遺構はないが、いくつかの小穴が近接することから、本遺構と前後する時期に複数の建物が存在していたと推測される。

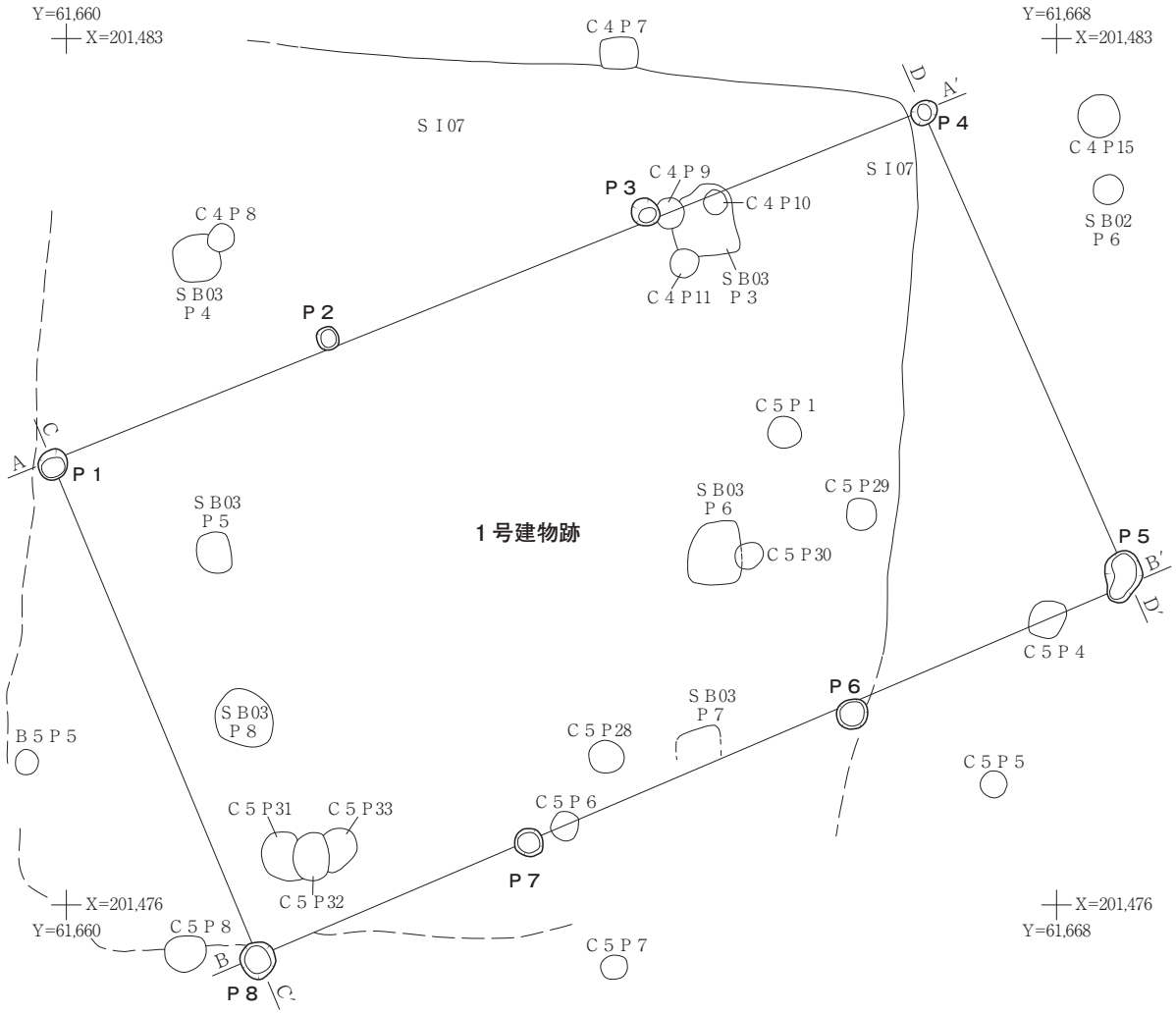

Y=61,660
X=201,483
Y=61,668
X=201,483
C４P７
S I07
P４
C４P15
S B02
P６
P３
C４P９
C４P10
S I07
C４P８
S B03
P４
C４P11
S B03
P３
P２
C５P１
P１
S B03
P５
１号建物跡
S B03
P６
C５P29
C５P30
P５
C５P４
P６
S B03
P８
S B03
P７
C５P28
B５P５
C５P５
C５P31
C５P33
C５P６
P７
C５P32
X=201,476
Y=61,660
C５P８
C５P７
P８
X=201,476
Y=61,668
50.60m
LⅣ
S I07掘形
P１
P２
P３
S B03
P３
S I07
P４
P８
搅乱
P７
P６
P５
C
C′
D
D′
１号建物跡
Ｐ１～３・５・７・８堆積土
１　黒褐色シルト　10YR2/3
（ＬⅣ塊・褐色砂質土多量、炭化物粒微量）
Ｐ４・６堆積土
１　黒褐色シルト　10YR2/3
（ＬⅣ塊少量）
0
2m
(1/60)

図19　１号建物跡

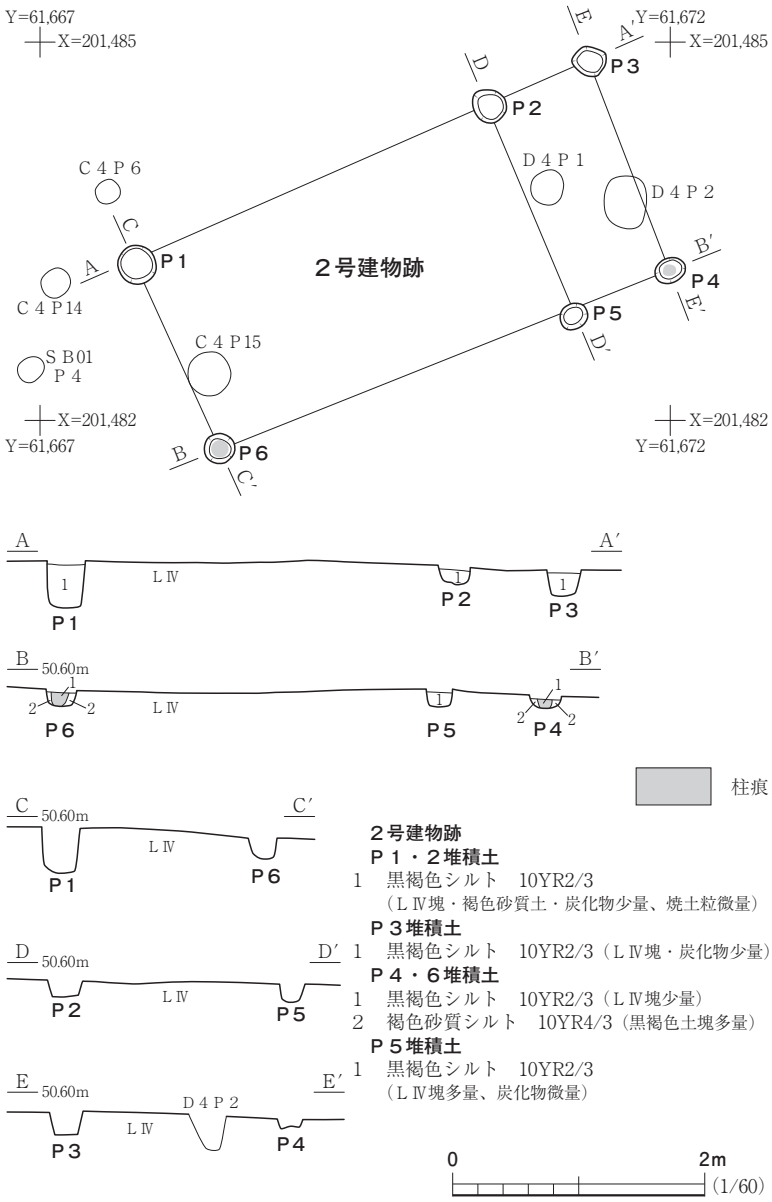


図20　２号建物跡

本遺構は東西２間×南北１間の東西棟の建物跡で、柱穴６基を検出した。東西の柱間では東寄りが狭く、Ｐ３・４は廂の柱の可能性も考えられる。芯々間での柱間の間隔は、北側柱列が西から2.02ｍ＋0.58ｍ、南側柱列が西から1.98ｍ＋0.56ｍ、西側柱列が1.08ｍ、中央の柱列が1.18ｍ、東側柱列が1.18ｍを測る。およそ東西2.6ｍ×南北1.1ｍの建物跡である。主軸方向は北東隅を起点とした北側柱列でＮ66°Ｅである。なお、南西隅を基点とした西側柱列はＮ25°Ｗである。

柱穴の掘形の平面形は楕円形ないし円形で、平面規模は直径25～30㎝を基本とし、最小が南東隅のＰ４で短軸20㎝、最大が北西隅のＰ１で長軸32㎝を測る。検出面からの深さは、Ｐ１が37㎝であるのに対し、Ｐ２～６は７～19㎝と浅い。掘形の底面は平坦ないし皿状に窪み、周壁はほぼ直立する。

柱穴の掘形内堆積土は、ＬⅣ塊を含んだ黒褐色シルトを基調としている。Ｐ４・６のℓ１は柱痕で、平面形は直径10～14㎝の円形を呈する。Ｐ４・６のℓ２は柱の周囲の埋土である。なお、いずれの柱穴からも遺物は出土していない。

ま と め

本遺構は、東西２間×南北１間の東西棟の建物跡である。中世の屋敷跡を区画する１号堀跡より27ｍ離れた位置にあるが、建物跡の主軸方向が同堀跡の東西軸と概ね一致することから、隣接する１号建物跡と共に、中世の屋敷跡と関連する建物跡の一つと考えられる。（廣　川）

３号建物跡　ＳＢ03

遺　　構（図21、写真33・34）

本遺構は調査区西部のＣ４・５グリッドで検出した掘立柱建物跡である。検出面はＬⅣ上面である。本遺構は、７号住居跡、１号建物跡、Ｃ４Ｐ９等の小穴と重複している。これらの遺構との新旧関係は、本遺構の柱穴やＣ４Ｐ９等の小穴及び１号建物跡の柱穴が７号住居跡の堆積土上面から確認されること、本遺構のＰ３を掘り込んでいるＣ４Ｐ９をさらに１号建物跡のＰ３が掘り込んで

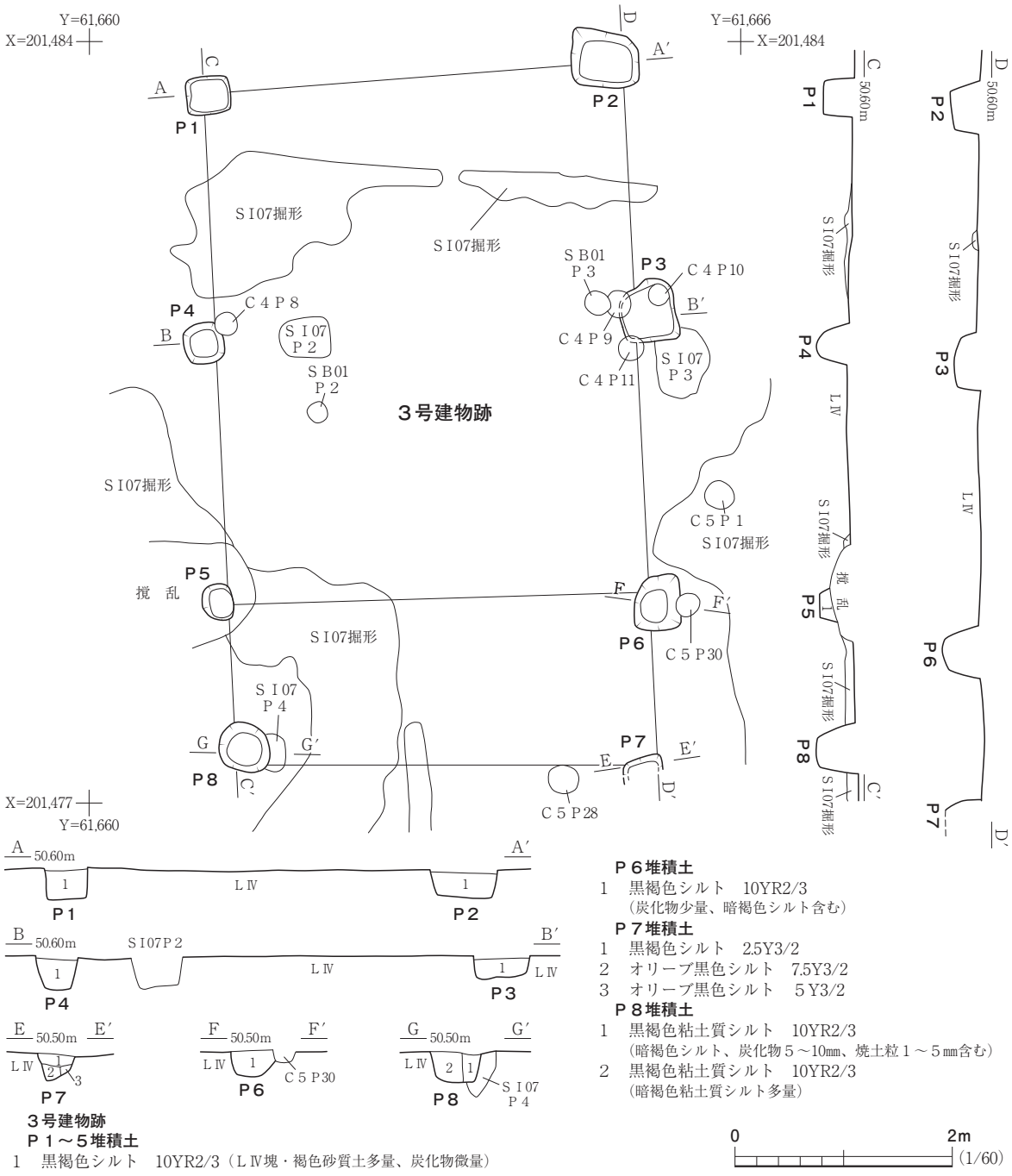


図21　３号建物跡

いること、Ｃ４Ｐ９等の他の小穴も本遺構の柱穴を掘り込んでいることから、古い順から、７号住居跡→本遺構→Ｃ４Ｐ９等の小穴→１号建物跡と判断される。

本遺構は東西１間×南北３間の南北棟の建物跡で、柱穴８基を検出した。南北の柱間では南寄りの柱間が狭いため、Ｐ７・８は廂の柱穴である可能性も考えられる。芯々間での柱間の間隔は、西側柱列が北から1.52ｍ＋1.58ｍ＋0.92ｍ、東側柱列が北から1.54ｍ＋1.80＋1.06ｍ、北側柱列が2.40ｍ、中央北寄りの柱列が2.70ｍ、中央南寄りの柱列が2.60ｍ、南側柱列が2.44ｍを測る。およそ南北４ｍ×東西2.5ｍの建物跡である。主軸方向は南西隅を起点とした西側柱列でＮ４°Ｗである。

柱穴の掘形の平面形は方形を基調とした形状を呈する。平面規模は長軸38～55㎝を基本とし、最小が西側柱列のＰ５で短軸30㎝、最大が北東隅のＰ２で長軸63㎝を測る。検出面からの深さは、Ｐ３・５が20㎝前後でやや浅いが、それ以外は27～35㎝である。掘形の底面は平坦ないし皿状に窪み、周壁はほぼ直立する。なお、Ｐ７は大部分が撹乱を受けていて不明である。

柱穴の掘形内堆積土は、黒褐色シルトを基調としている。Ｐ７ℓ２とＰ８ℓ１が柱痕の可能性があるが、断定はできない。なお、いずれの柱穴からも遺物は出土していない。

ま と め

本遺構は、東西１間×南北３間の南北棟の建物跡である。検出された他の１・２・４～６号建物跡とは、主軸方向や柱穴の形状が異なっているため、別な時期の建物跡と推測される。また、重複関係から、古墳時代前期以降で中世以前の所産と判断される。出土遺物がなく遺構の所属時期を厳密に特定することはできないが、柱穴の形状が方形を基調とするものは、古代以降に多いことから、概ね古代から中世の所産と考えておきたい。（廣　川）

４号建物跡　ＳＢ04

遺　　構（図22、写真35・36）

本遺構は調査区東部の中央東寄りとなるＨ３グリッドで検出した掘立柱建物跡である。検出面はＬⅣ上面である。本遺構と５号建物跡は、平面的な位置関係から、重複関係にあると判断される。なお、Ｐ２が５号建物跡のＰ２と検出面で僅かに接するが、新旧関係を把握することはできなかった。なお、その他、他遺構と重複する柱穴はない。

本遺構は、東西１間×南北３間の南北棟の建物跡で、柱穴６基を検出した。柱間寸法は、桁行の西側柱列で北から2.3ｍ＋2.16ｍ＋1.88ｍと漸減し、梁行の北側柱列が2.16ｍ、南側柱列が2.05ｍを測る。東側柱列のＰ２とＰ３との間には柱穴が検出されなかったが、確認された柱穴がいずれも浅い点を考慮すると、削平されて確認できなかった可能性が高い。主軸方向は南西隅を起点とした西側柱列でＮ28°Ｗで、１号堀跡の南北軸と概ね一致する。

柱穴の掘形の平面形は不整円形のものが多いが、Ｐ４・６は方形ないし長方形を基調とする。掘形の平面規模は長軸30～35㎝前後を基本とし、最小が北東隅のＰ２で直軸26㎝、最大が南西隅のＰ４で長軸42㎝を測る。検出面からの深さは10～18㎝と浅く、全体的に上部が大きく削平されて

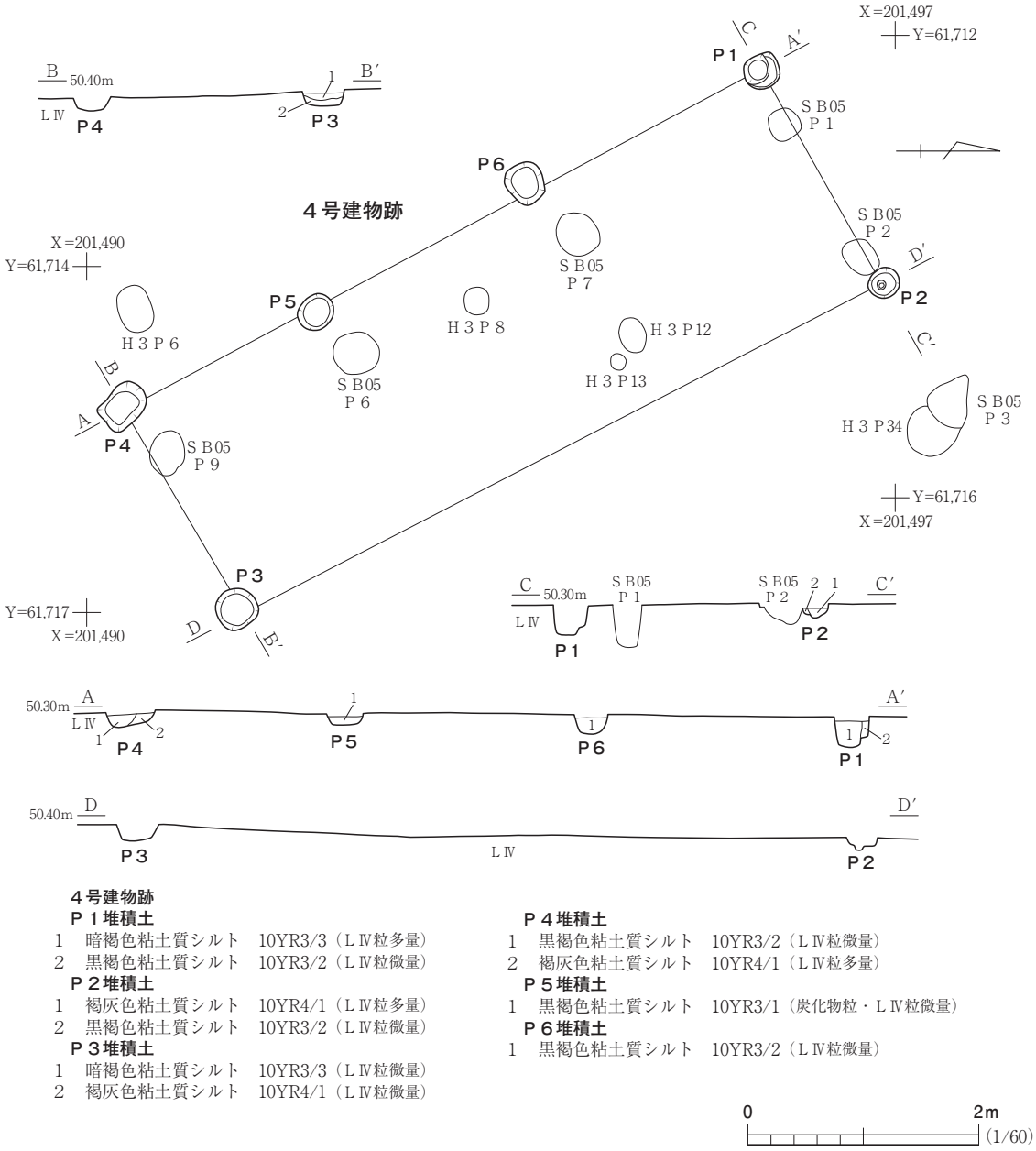


図22　４号建物跡

いるものと考えられる。

柱穴の掘形内堆積土は、黒褐色粘土質シルトを基調とするが、柱痕を確認できたものはない。Ｐ１・２・４は、ℓ２が柱の周囲の埋土、ℓ１が柱を抜き取った箇所に流入した土層と考えている。なお、いずれの柱穴からも遺物は出土していない。

ま と め

本遺構は、東西１間×南北３間の南北棟の建物跡である。出土遺物がなく遺構の所属時期を厳密に特定することはできないが、１号堀跡で区画された内部に位置し、建物跡の主軸方向が同堀跡の南北軸と概ね一致することから、中世の屋敷跡を構成する建物跡の一つと考えられる。　（草　野）

５号建物跡　ＳＢ05

遺　　構（図23、写真35～37）

本遺構は調査区東部の中央東寄りとなるＨ３グリッドで検出した掘立柱建物跡である。検出面はＬⅣ上面である。本遺構と４号建物跡は、平面的な位置から、新旧関係にあると判断される。なお、Ｐ２が４号建物跡のＰ２と検出面で僅かに接するが、新旧関係を把握することはできなかった。この他、重複が確認されたのは、Ｐ３とＰ８である。Ｐ３はＨ３Ｐ34を掘り込んでいることから、本遺構の方が新しいと判断される。また、Ｐ８は上部が８号溝跡に削られているため、本遺構の方が古いと判断される。

本遺構は、東西２間×南北３間の南北棟の建物跡で、柱穴９基を検出した。柱間寸法は、桁行の西側柱列で北から2.04ｍ＋2.20ｍ＋1.84ｍ、東側柱列で北から2.24ｍ＋2.04ｍ＋1.98ｍ、梁行の北側柱列で西から1.26ｍ＋1.5ｍとばらつきが見られる。南側柱列は１間となっているが、対応する北側柱列のＰ２が浅い柱穴であることを考慮すると、削平されて確認できなかった可能性が高い。主軸方向は南西隅を起点とした西側柱列でＮ28°Ｗで、１号堀跡の南北軸と概ね一致する。

柱穴の掘形の平面形は不整円形ないし楕円形のものが多いが、Ｐ５は長方形を基調とする。掘形の平面規模は長軸35～40㎝前後を基本とし、最小が北西隅のＰ１で長軸26㎝、最大が南東隅のＰ８で長軸45㎝を測る。また、Ｐ３・４の底面に直径6～10㎝の根石、Ｐ５には厚さ10㎝の礎盤石が確認された。検出面からの深さは、Ｐ６が24㎝とやや浅い他は30～35㎝前後でほぼ一定しているが、上述した通り北側柱列のＰ２が特に浅く18㎝を測る。

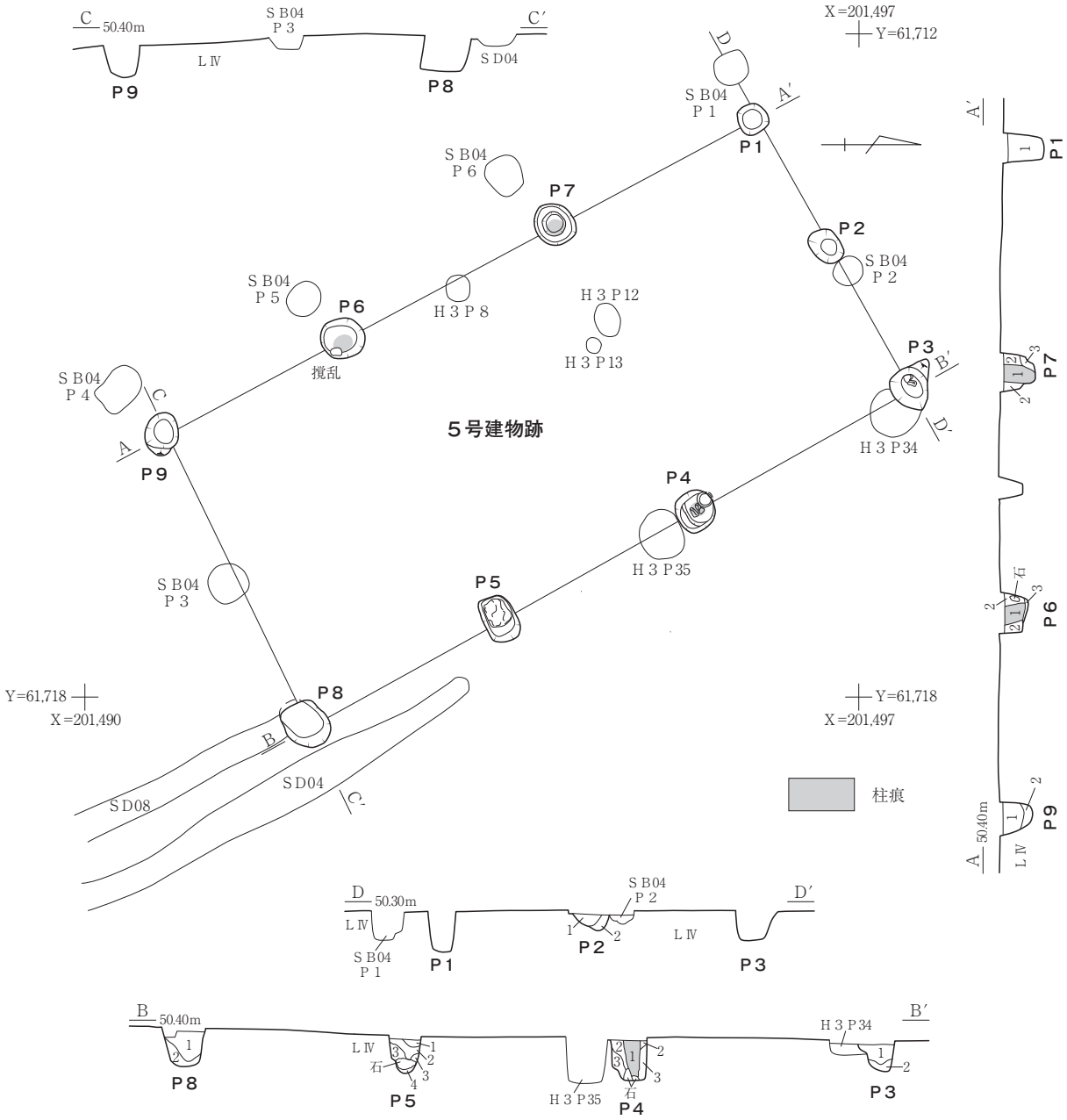
柱穴の掘形内堆積土をみると、Ｐ４・６・７で柱痕を確認した。柱痕としたＰ４・６・７のℓ１は、いずれも黒褐色粘土質シルトで、平面形は直径15㎝前後の円形を呈する。東側柱列のＰ３・５・８では、柱を抜き取った後に土が流入したような状況が観察された。

なお、遺物はＰ９のℓ２から土師器細片が１点出土しただけで、本建物跡の成立ないし廃絶時期を示唆する遺物は皆無である。また、遺物は図示できなかった。

ま と め

本遺構は、東西２間×南北３間の南北棟の建物跡である。遺構の所属時期を判断する遺物に欠けるが、１号堀跡で区画された内部に位置し、建物跡の主軸方向が同堀跡の南北軸と概ね一致することから、中世の屋敷跡を構成する建物跡の一つと考えられる。

重複する４号建物跡との新旧関係は定かではない。しかし、Ｐ８が中世の屋敷地に帰属すると考えられる８号溝跡に削られている点を重視すれば、５号建物跡の廃絶後に西へずらした位置に４号建物跡がつくられ、その後に８号溝跡がＰ８を開削したという可能性も考えられる。　（草　野）



５号建物跡

Ｐ１堆積土

1　褐灰色粘土質シルト　10YR4/1（ＬⅣ粒微量）

Ｐ２堆積土

1　褐灰色粘土質シルト　10YR4/1
（黒褐色粘土質シルト粒多量、ＬⅣ粒微量）

2　褐灰色粘土質シルト　10YR4/1（ＬⅣ粒多量）

Ｐ３堆積土

1　黒褐色粘土質シルト　10YR3/2（炭化物粒・ＬⅣ粒微量）

2　褐灰色粘土質シルト　10YR4/1（黒褐色粘土塊少量）

Ｐ４堆積土

1　黒褐色粘土質シルト　10YR3/2（ＬⅣ粒微量）

2　灰黄褐色粘土質シルト　10YR4/2（ＬⅣ塊多量）

3　褐灰色粘土質シルト　10YR4/1（ＬⅣ粒微量）

Ｐ５堆積土

1　黒褐色粘土質シルト　10YR3/2（ＬⅣ粒微量）

2　黒褐色粘土質シルト　10YR3/2（ＬⅣ粒多量）

3　黒褐色粘土質シルト　10YR3/2（褐灰色粘土質シルト粒多量）

4　褐灰色粘土　10YR4/1（ＬⅣ粒少量）

Ｐ６堆積土

1　黒褐色粘土質シルト　10YR3/2（ＬⅣ塊微量）

2　黒褐色粘土質シルト　10YR3/1（ＬⅣ塊量）

3　黒褐色粘土　10YR2/2（ＬⅣ塊微量）

Ｐ７堆積土

1　黒褐色粘土質シルト　10YR3/2（ＬⅣ塊微量）

2　黒褐色粘土質シルト　10YR3/2（ＬⅣ塊多量）

3　黒褐色粘土質シルト　10YR3/1（ＬⅣ塊微量）

Ｐ８堆積土

1　黒褐色粘土質シルト　10YR3/2（ＬⅣ塊少量、炭化物粒微量）

2　褐灰色粘土質シルト　10YR4/1（ＬⅣ塊多量）

0　2m
(1/60)

図23　５号建物跡

６号建物跡　ＳＢ06

遺　　構（図24、写真38・39）

本遺構は、調査区東部でも北東部となるＧ２グリッドで検出した掘立柱建物跡である。検出面はＬⅣ上面である。重複する遺構はないが、周囲には小穴群が散在する。

本遺構は、東西１間×南北２間の南北棟の建物跡で、柱穴５基を検出した。柱間寸法は、桁行の東側柱列で北から1.9ｍ＋2.2ｍ、梁行の北側柱列で1.72ｍを測る。南西隅の柱穴は確認されなかった。しかし、対応する南東隅のＰ４が浅い柱穴であることを考慮すると、削平された可能性が高い。主軸方向は南東隅を起点とした東側柱列でＮ25°Ｗで、１号堀跡の南北軸と概ね一致する。

柱穴の掘形の規模・平面形は直径24～30㎝の円形ないし楕円形を呈する。検出面からの深さは北側の４基が20㎝前後で一定しているが、上述した通り浅いＰ４は12㎝を測る。

柱穴の掘形内堆積土は、柱痕を残すものは皆無で、すべて単層の人為的な埋土であった。Ｐ１～３は焼土塊・炭化物粒を非常に多く含む黒褐色粘土質シルト層、Ｐ４・５は焼土塊・炭化物粒を少し含む褐灰色シルト層で、建物廃棄後に焼却され埋め戻された可能性が考えられる。なお、いずれの柱穴からも遺物は出土していない。

ま と め

本遺構は、東西１間×南北２間の南北棟の建物跡である。出土遺物がなく遺構の所属時期を厳密に特定することはできないが、１号堀跡で区画された内部に位置し、建物跡の主軸方向が同堀跡の南北軸と概ね一致することから、中世の屋敷跡を構成する建物跡の一つと考えられる。　（草　野）

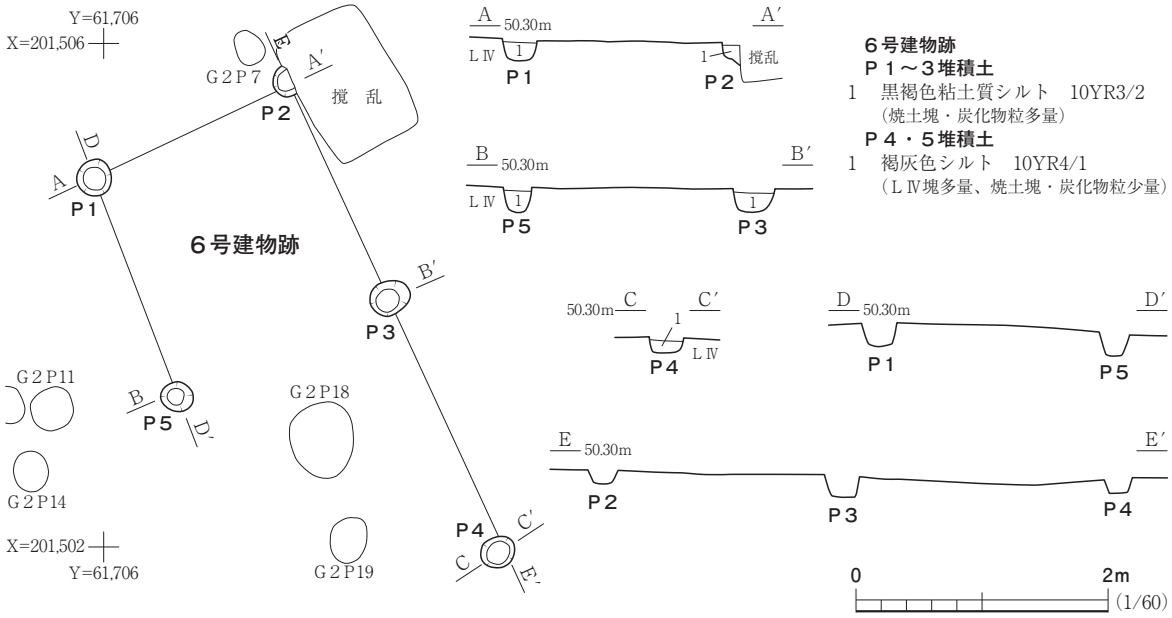


図24　６号建物跡

第４節　　土　　坑

１次・２次調査で発見された土坑は27基である。このうち21基（１・６～24・27号）は調査区東部で検出され、古墳時代前期の竪穴住居跡の周辺にはあまり認められない。全体として出土遺物に乏しく時期が不明のものがほとんどだが、周辺遺構との関係から古代ないし中世に位置付けられる可能性がある。

１号土坑　ＳＫ01（図25・29、写真40・69）

本遺構は、調査区東部の南西隅にあたるＧ６グリッドに位置する土坑である。検出面はＬⅣ上面である。重複する遺構はないが、西側に１号井戸跡が隣接する。

平面形は直径100～120㎝の不整円形を呈し、検出面からの深さは最深部で40㎝を測る。断面形は南西部及び南東部の上方の掘り込みが浅く緩やかで、底面は若干の凹凸がある。

堆積土は色調・含有物の違いにより３層に分層した。ℓ１・３はレンズ状堆積を示す自然堆積土、ℓ２はＬⅣ塊や黒色粘土質シルト塊を斑状に多く含む特徴から人為堆積土と考えられる。

遺物は、比較的遺存状態が良かった土師器鉢の他、土師器細片２点が出土した。図29－１の土師器鉢は内外面ともナデが施され、口縁部外面と体部との境にヨコナデによって生じた弱い段が認められる。

本遺構から出土した遺物は、その特徴から７世紀代の資料の可能性があるが、断定はできない。なお、遺構の性格は不明である。（草　野）

２号土坑　ＳＫ02（図25、写真40）

本遺構は、調査区西部の中央付近、Ｃ５・Ｄ５グリッドに位置する土坑である。検出面はＬⅣ上面である。重複する遺構はないが、周囲には小穴群が広がっている。

平面形は隅丸方形を基調とし、長軸70㎝、短軸68㎝を測る。検出面からの深さは30㎝である。周壁は垂直に掘り込まれ、底面は平坦である。

堆積土はＬⅣ塊を多く含む黒褐色シルトの単層で、人為的に一度に埋められたものと考えられる。

遺物は、土師器片７点が出土した。いずれも細片のため図示できなかったが、古墳時代前期のものと判断される。

本遺構の性格は不明だが、所属時期については、出土遺物から古墳時代以降に位置付けられる。

（廣　川）

３号土坑　ＳＫ03（図25）

本遺構は、調査区西部の南東部、Ｅ６・Ｆ６グリッドに位置する土坑である。検出面はＬⅣ上面

である。重複する遺構はなく、周囲にも小穴が僅かに点在する程度である。

平面形は直径130㎝の円形を呈する。検出面からの深さは18㎝で、底面は平坦である。

堆積土は暗褐色砂質シルトの単層で、ＬⅣ由来の褐色砂質シルトを斑状に含むことから、人為堆積土と考えられる。なお、遺物は出土していない。

本遺構からは出土遺物もなく、遺構の所属時期や性格等については不明である。　（廣　川）

４号土坑　ＳＫ04（図25、写真40）

本遺構は、調査区西部の南西部、Ｄ６・Ｄ７グリッドに位置する土坑である。検出面はＬⅣ上面である。重複する遺構はないが、2.4ｍ南方に５号土坑がある。

平面形は長軸82㎝、短軸60㎝の不整楕円形を呈する。検出面からの深さは15㎝で、底面は平坦である。

堆積土はＬⅣに近い暗褐色砂質シルトの単層で、しまりもないことから自然堆積土と考えられる。

本遺構からは出土遺物もなく、遺構の所属時期や性格等については不明である。　（廣　川）

５号土坑　ＳＫ05（図25）

本遺構は、調査区西部の南西隅にあたるＤ７グリッドに位置する土坑である。検出面はＬⅣ上面である。重複する遺構はないが、2.4ｍ北方に４号土坑がある。

平面形は、長軸100㎝、短軸94㎝の楕円形である。検出面からの深さは約15㎝を測る。底面は概ね平坦だが、中央部が直径40㎝ほど浅く窪んでいる。

堆積土は、炭化物を含む暗褐色細砂のℓ１、にぶい黄褐色細砂のℓ２、暗褐色シルトのℓ３に分層した。中央部のℓ１はしまりのない自然堆積土だが、ℓ３は黒褐色シルトとＬⅣ由来の褐色砂質シルトを斑状に含むことから人為堆積土と考えられる。ℓ２は中央部の浅く窪む箇所、ℓ３は外周にのみ認められる。堆積状況や遺構の形状から、土坑内に枠状の仕切りがあった可能性が想定される。

本遺構からは出土遺物もなく、遺構の所属時期や性格等については不明である。　（廣　川）

６号土坑　ＳＫ06（図25）

本遺構は、調査区東部の北西部、Ｆ３グリッドに位置する土坑である。検出面はＬⅣ上面である。北北東方向に延びる７号溝跡と重複する。同溝跡によって本遺構東部の上端が削られているため、本遺構の方が古いと判断される。

平面形は長軸70㎝、短軸60㎝の不整楕円形を呈する。検出面からの深さは30㎝を測る。南東部に比べ西部の掘り込みが急勾配で、底面は平坦である。

堆積土は色調・含有物の多寡により２層に分層した。薄いレンズ状堆積を示すℓ１は自然堆積土、ＬⅣ塊を多く含む厚い堆積のℓ２は人為堆積土と考えられる。

本遺構からは出土遺物もなく、遺構の所属時期や性格等については不明だが、堆積土の色調や土

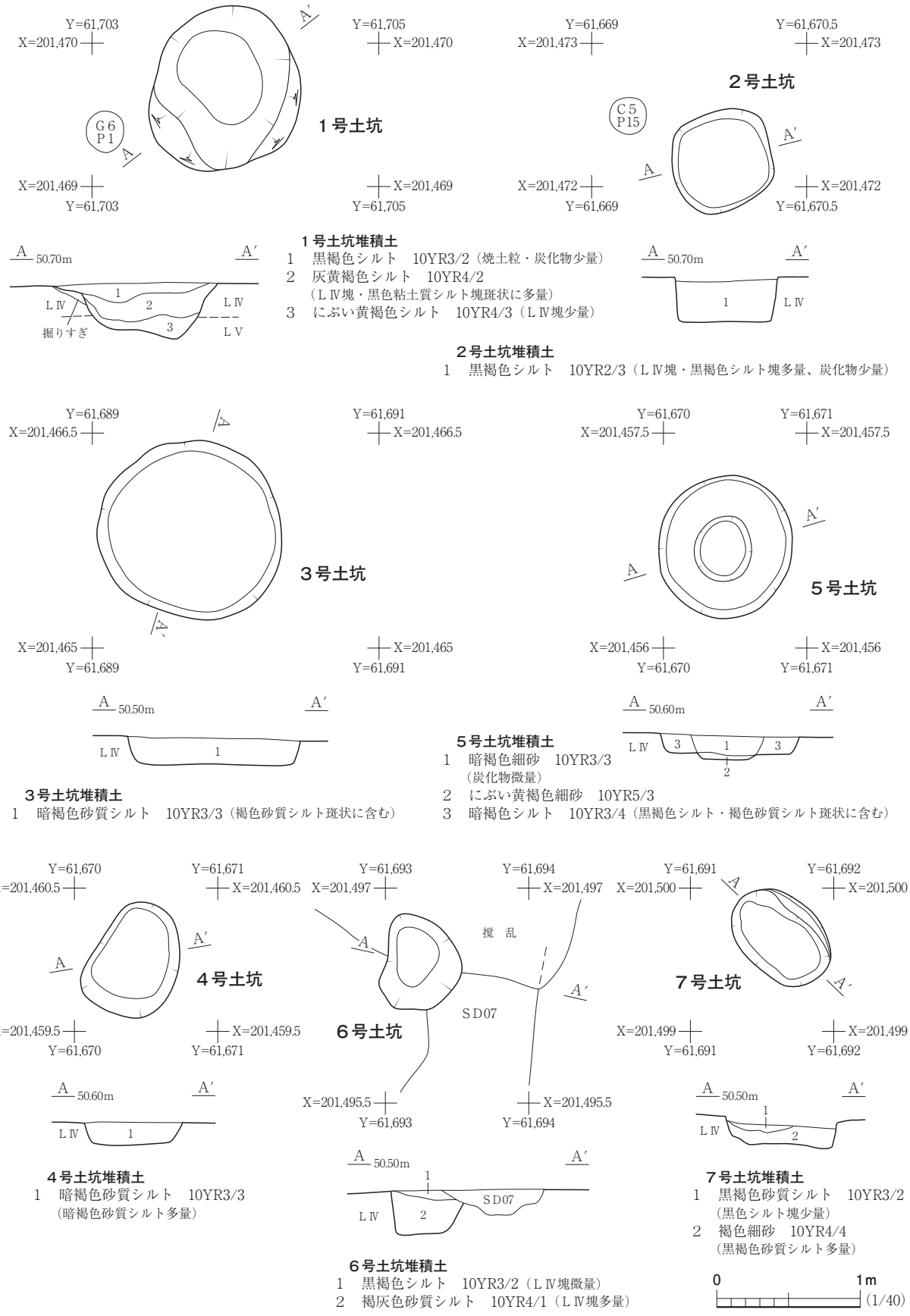

Y=61,703
X=201,470
Y=61,705
X=201,470
Y=61,669
X=201,473
Y=61,670.5
X=201,473
１号土坑
２号土坑
G6
P1
C5
P15
A
A′
X=201,469
Y=61,703
X=201,469
Y=61,705
X=201,472
Y=61,669
X=201,472
Y=61,670.5
50.70m
LⅣ
LⅤ
掘りすぎ
１号土坑堆積土
1　黒褐色シルト　10YR3/2（焼土粒・炭化物少量）
2　灰黄褐色シルト　10YR4/2
（ＬⅣ塊・黒色粘土質シルト塊斑状に多量）
3　にぶい黄褐色シルト　10YR4/3（ＬⅣ塊少量）
２号土坑堆積土
1　黒褐色シルト　10YR2/3（ＬⅣ塊・黒褐色シルト塊多量、炭化物少量）
Y=61,689
X=201,466.5
Y=61,691
X=201,466.5
Y=61,670
X=201,457.5
Y=61,671
X=201,457.5
３号土坑
５号土坑
X=201,465
Y=61,689
X=201,465
Y=61,691
X=201,456
Y=61,670
X=201,456
Y=61,671
50.50m
50.60m
３号土坑堆積土
1　暗褐色砂質シルト　10YR3/3（褐色砂質シルト斑状に含む）
５号土坑堆積土
1　暗褐色細砂　10YR3/3
（炭化物微量）
2　にぶい黄褐色細砂　10YR5/3
3　暗褐色シルト　10YR3/4（黒褐色シルト・褐色砂質シルト斑状に含む）
Y=61,670
X=201,460.5
Y=61,671
X=201,460.5
Y=61,693
X=201,497
Y=61,694
X=201,497
Y=61,691
X=201,500
Y=61,692
X=201,500
４号土坑
６号土坑
７号土坑
撹　乱
SD07
X=201,459.5
Y=61,670
X=201,459.5
Y=61,671
X=201,495.5
Y=61,693
X=201,495.5
Y=61,694
X=201,499
Y=61,691
X=201,499
Y=61,692
４号土坑堆積土
1　暗褐色砂質シルト　10YR3/3
（暗褐色砂質シルト多量）
６号土坑堆積土
1　黒褐色シルト　10YR3/2（ＬⅣ塊微量）
2　褐灰色砂質シルト　10YR4/1（ＬⅣ塊多量）
７号土坑堆積土
1　黒褐色砂質シルト　10YR3/2
（黒色シルト塊少量）
2　褐色細砂　10YR4/4
（黒褐色砂質シルト多量）
0
1m
(1/40)

図25　１～７号土坑

質が１号土坑に近いことから、同土坑に近い時期の所産の可能性がある。　（草　野）

７号土坑　ＳＫ07（図25）

本遺構は、調査区東部の北西部、Ｆ３グリッドに位置する土坑である。検出面はＬⅣ上面である。重複する遺構はないが、2.8ｍ南東に６号土坑がある。

平面形は、長軸78㎝、短軸54㎝の楕円形で、主軸方向はＮ50°Ｗである。検出面からの深さは16㎝を測り、底面には細かな起伏が見られるが、概ね平坦である。

堆積土は、色調・含有物の違いから２層に分層し、レンズ状堆積を示すことから自然堆積土と考えられる。

本遺構からは出土遺物もなく、遺構の所属時期や性格等については不明である。　（草　野）

８号土坑　ＳＫ08（図26）

本遺構は、調査区東部の中央付近、Ｇ３グリッドに位置する土坑である。検出面はＬⅣ上面である。１号堀跡に沿って北北西方向に延びる３号溝跡と重複する。同溝跡に西側を大きく削られているため、本遺構の方が古いと判断される。また、東側には12・13号土坑が隣接する。

残存範囲によると、平面形は長軸130㎝の不整楕円形で、検出面からの深さ５㎝程度の浅い皿状を呈する。

堆積土はＬⅣ塊を多く含む暗褐色砂質シルトの単層で、自然堆積土と考えられる。

本遺構からは出土遺物もなく、遺構の所属時期や性格等については不明である。　（草　野）

９号土坑　ＳＫ09（図26・29、写真40・69）

本遺構は、調査区東部の中央付近、Ｇ４グリッドに位置する土坑である。検出面はＬⅣ上面である。重複する遺構はないが、３号溝跡の東側に近接し、約1.6ｍ北方に15・16号土坑がある。

平面形は長軸約200㎝、短軸160㎝の不整楕円形を呈し、掘り込みは緩やかで検出面からの深さは32㎝を測る。

堆積土は色調やＬⅣ塊の多寡により２層に分層し、レンズ状堆積を示すことからいずれも自然堆積土と考えられる。

出土遺物は縄文土器小片２点のみで、このうち１点を図示した。図29－２は口縁部付近の破片である。磨滅のため、明瞭ではないが、沈線で区画された内部に縄文が観察される。

本遺構の性格等は不明であり、所属時期も詳しい年代は明らかにしえない。なお、１・６号土坑の堆積土と比べると、本遺構の堆積は自然堆積と考えられる点が異なるが、これらの土坑と色調や土質が近似している。このことから、１号土坑や６号土坑に近い時期の所産の可能性もある。

（草　野）

10号土坑　ＳＫ10（図26、写真40）

本遺構は、調査区東部の南東部、Ｉ３グリッドに位置する土坑である。検出面はＬⅣ上面である。重複する遺構はないが、南東側に22号土坑が近接する。

平面形は長軸114㎝、短軸90㎝の楕円形を呈する。南西側から北東側に向かって緩やかに深くなり、検出面からの深さは最深部で20㎝を測る。

堆積土はＬⅣ塊を少量含む黒褐色粘土質シルトの単層で、自然堆積土と考えられる。

本遺構からは出土遺物もなく、遺構の所属時期や性格等については不明である。　（草　野）

11号土坑　ＳＫ11（図26、写真40）

本遺構は、調査区東部の中央付近、Ｇ３グリッドに位置する土坑である。検出面はＬⅣ上面である。重複する遺構はないが、北側に小穴群が認められる他、約２ｍ南西に12・13号土坑がある。

平面形は長軸100㎝、短軸76㎝の楕円形を呈し、主軸方向はＮ26°Ｅである。検出面からの深さは16㎝である。断面形は浅い皿状を呈し、底面は多少の凹凸はあるものの比較的平坦である。

堆積土は色調・ＬⅣ塊の多寡により２層に分層した。いずれもレンズ状堆積を示すことから自然堆積土と考えられる。

本遺構からは出土遺物もなく、遺構の所属時期や性格等については不明である。　（草　野）

12号土坑　ＳＫ12（図26、写真41）

本遺構は、調査区東部の中央付近、Ｇ３グリッドに位置する土坑である。検出面はＬⅣ上面である。重複する遺構はないが、３号溝跡の東側にあって、北西側に13号土坑、南東側に15・16号土坑が隣接する。

平面形は直径約100㎝の不整円形を呈し、検出面からの深さは30㎝を測る。掘り込みの上方は浅く緩傾斜で、底面が平らな断面形である。

堆積土は２層に分層した。ℓ１は焼土粒・炭化物を含む黒褐色砂質シルト、ℓ２は暗褐色砂質シルトである。いずれもレンズ状堆積を示すことから自然堆積土と考えられる。

本遺構からは出土遺物もなく、遺構の所属時期や性格等については不明である。　（草　野）

13号土坑　ＳＫ13（図26、写真41）

本遺構は、調査区東部の中央付近、Ｇ３グリッドに位置する土坑である。検出面はＬⅣ上面である。重複する遺構はないが、３号溝跡の東側にあって、西側に８号土坑、南東側に12号土坑が隣接する。

平面形は長軸84㎝、短軸72㎝の不整楕円形、断面形は擂鉢状を呈する。検出面からの深さは28㎝を測る。

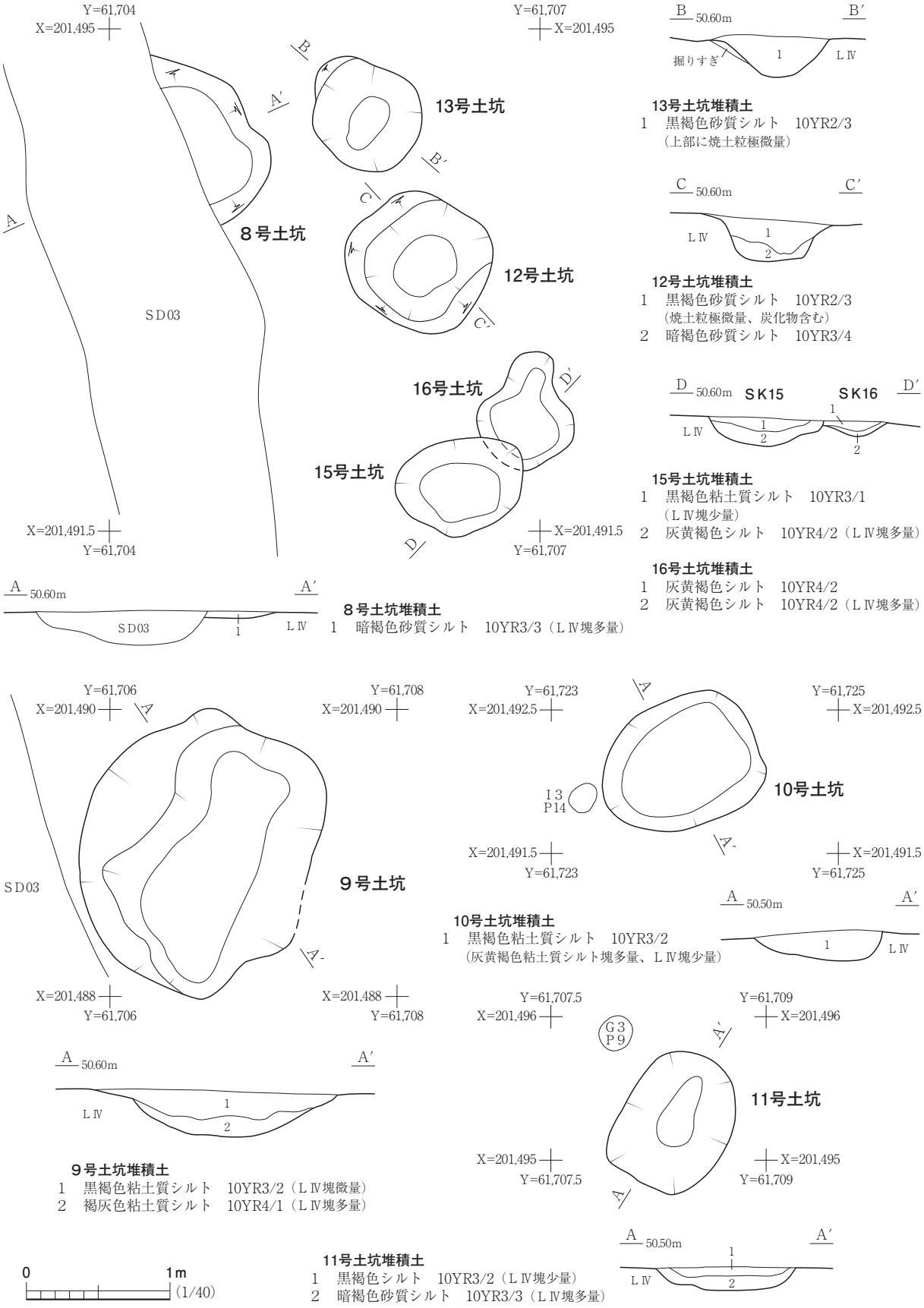


図26　８～13・15・16号土坑

堆積土は黒褐色砂質シルトの単層で、自然堆積土と考えられる。

本遺構からは出土遺物もなく、遺構の所属時期や性格等については不明である。　（草　野）

14号土坑　ＳＫ14（図27・29、写真41・69）

本遺構は、調査区東部の北部、Ｇ２グリッドに位置する土坑である。検出面はＬⅣ上面である。重複する遺構はないが、約１ｍ北方を11・12号溝跡が東西方向に走り、2.4ｍ南東に６号建物跡がある。

平面形は長軸3.26ｍ、短軸2.68ｍの不整楕円形を呈する。周壁の立ち上がりは緩やかで、検出面からの深さは46㎝を測る。

堆積土は４層に分層した。主体をなす黒褐色粘土質シルトのℓ１・２が一度に埋められたような人為堆積の状況を示すのに対し、底面に薄く広がるℓ３と西壁付近に認められるℓ４は自然堆積と考えられる。

遺構内部には、主軸方向Ｎ22°Ｗの石積み１列が底面に設置されていた。残存していた石列は７個の自然石からなり、うち２個が積まれた状態で検出された。このほか元位置をとどめていない10～30㎝大の石が６個確認されたため、おそらく全体が２段積みの石列だったと考えられる。遺構東部に堆積するℓ２は、底面からこの石積みを覆うように認められ、逆に有機物を多く含むℓ３が石積みの東側に広がらない点を勘案すると、ℓ２は石積みの裏込めとして施された埋土と捉えられる。石列の長さは1.86m、底面からの高さは中央の２段積み部分で36㎝を測る。

遺物はℓ１から土師器・瓦質土器擂鉢・陶器蓋が出土した。図29－３は瓦質土器擂鉢の口縁部片で、１単位５本の擂目が施される。図29－４は摘み部分が剝離したロクロ成形の陶器蓋片で、その特徴から、近世の岸窯製品と考えられる。底面には回転糸切り痕が残る。

本遺構の具体的な性格は不明であるが、遺構内部を石積みで区画し、深く広い西部を主体とした利用形態が想定される。遺構の所属時期は、瓦質土器擂鉢の特徴から15～16世紀以降に位置付けられ、陶器蓋の年代観から近世までに埋没したものと考えられる。　（草　野）

15号土坑　ＳＫ15（図26、写真42）

本遺構は、調査区東部の中央付近、Ｇ３グリッドに位置する土坑である。検出面はＬⅣ上面である。16号土坑と重複し、本遺構の方が新しい。この他、北に12号土坑、西に３号溝跡が隣接する。

平面形は長軸90㎝、短軸64㎝の不整楕円形を呈する。底面は中央部分が緩やかに窪む形状で、検出面からの深さは最深部で20㎝を測る。

堆積土は色調・土質・ＬⅣ塊の多寡により２層に分層した。いずれもレンズ状堆積を示すことから自然堆積土と考えられる。

本遺構からは出土遺物もなく、遺構の所属時期や性格等については不明だが、堆積土の色調や土質が９号土坑に近いことから、同土坑に近い時期の所産の可能性がある。　（草　野）

16号土坑　ＳＫ16（図26、写真42）

本遺構は、調査区東部の中央付近、Ｇ３グリッドに位置する土坑である。検出面はＬⅣ上面である。15号土坑と重複し、本遺構の方が古い。この他、北に12号土坑、西に３号溝跡が隣接する。

平面形は長軸84㎝、短軸30～68㎝の不整形状を呈する。底面は中央部分に向かって浅く緩やかに窪み、検出面からの深さは10㎝を測る。

堆積土はＬⅣの多寡により２層に分層した。いずれもレンズ状堆積を示すことから自然堆積土と考えられる。

本遺構からは出土遺物もなく、遺構の所属時期や性格等については不明だが、堆積土は重複関係にある15号土坑のℓ２と共通性が高く、近い時期に位置付けられるものと考えられる。　（草　野）

17号土坑　ＳＫ17（図27、写真42）

本遺構は、調査区東部の中央付近、Ｇ３グリッドに位置する土坑である。検出面はＬⅣ上面である。18号土坑と１号堀跡と重複し、これらの遺構よりも本遺構の方が古い。

平面形は長軸122㎝、短軸90㎝の不整長方形ないし楕円形を呈する。底面は西側に向かって緩やかに低くなる形状で、１号堀跡際の最深部で深さ22㎝を測る。

堆積土は黒褐色粘土質シルトの単層で、自然堆積土と考えられる。

本遺構からは出土遺物もなく、遺構の所属時期や性格等については不明だが、１号堀跡に遺構西部が削られていることから、中世の屋敷跡が営まれる以前に位置付けられることは確かである。

（草　野）

18号土坑　ＳＫ18（図27、写真42）

本遺構は、調査区東部の中央付近、Ｇ３グリッドに位置する土坑である。検出面はＬⅣ上面である。17号土坑と３号溝跡と重複し、17号土坑より新しく、３号溝跡より古い。

平面形は長軸110㎝、短軸90㎝の楕円形である。底面は中央部分が緩やかに窪む形状で、検出面からの深さは最深部で22㎝を測る。

堆積土は黒褐色シルトの単層で、17号土坑と同様に自然堆積土と考えられる。

本遺構からは出土遺物もなく、遺構の所属時期や性格等については不明である。　（草　野）

19号土坑　ＳＫ19（図28、写真42）

本遺構は、調査区東部の北部、Ｇ２グリッドに位置する土坑である。検出面はＬⅣ上面である。重複する遺構はないが、2.4ｍ東方に小穴群を挟んで６号建物跡がある。

平面形は長軸140㎝前後の不整形状を呈し、検出面からの深さは最深部で26㎝を測る。断面形も全体的に歪で、底面の起伏が目立つ形状である。

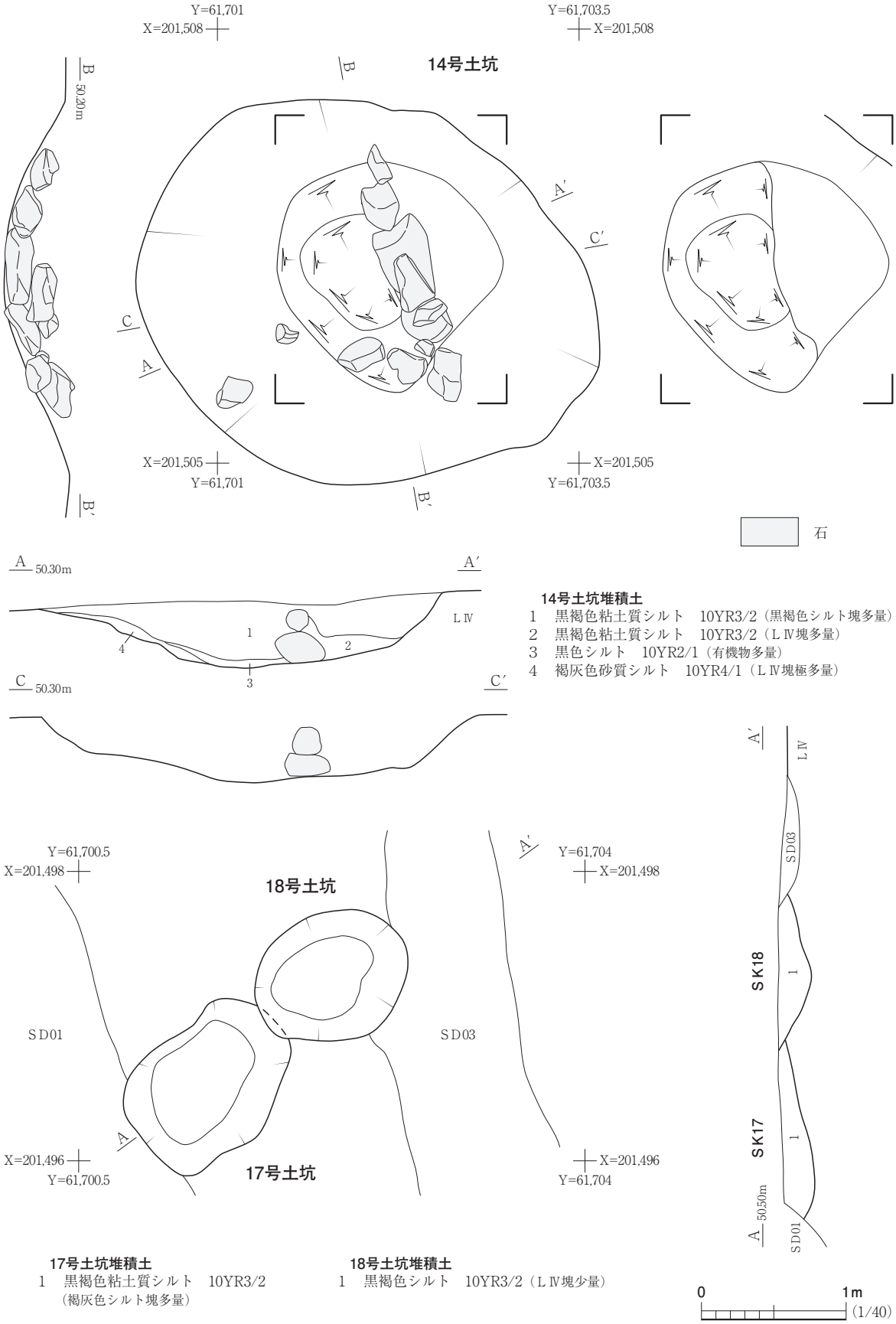


図27　14・17・18号土坑

堆積土は色調・ＬⅣ塊の多寡により２層に分層し、いずれも自然堆積土と考えられる。

本遺構からは出土遺物もなく、遺構の所属時期や性格等については不明である。　（草　野）

20号土坑　ＳＫ20（図28）

本遺構は、調査区東部の北部、Ｆ２グリッドに位置する土坑である。検出面はＬⅣ上面である。12号溝跡と重複し、本遺構の方が新しい。また、東側に14号土坑が隣接する。

上方が削平を受けているため、検出面からの深さは最深部でも12㎝程度と浅く、特に南東部では遺構の上端が確認されなかった。そのため、本来の規模・形状は定かでないが、残存部による限り、平面形は長軸170㎝以上、短軸72～104㎝の不整長方形を呈する。底面は平坦である。

堆積土は黒褐色シルトの単層で、ＬⅣ塊を多量に含む特徴等から人為堆積土と考えられる。

本遺構からは出土遺物もなく、遺構の所属時期や性格等については不明である。　（草　野）

21号土坑　ＳＫ21（図28、写真42）

本遺構は、調査区東部の北部、Ｇ２グリッドに位置する土坑である。検出面はＬⅣ上面である。重複する遺構はないが、３号溝跡北端の西側に隣接する。

平面形は長軸80㎝、短軸66㎝の不整楕円形を呈する。底面が平らな形状で、検出面からの深さは24㎝を測る。

堆積土は色調・ＬⅣ塊の多寡により２層に分層した。ＬⅣ塊を多量に含むℓ２は、人為堆積土と考えられる。ℓ１は自然堆積土であろう。

本遺構からは出土遺物もなく、遺構の所属時期や性格等については不明である。　（草　野）

22号土坑　ＳＫ22（図28、写真40）

本遺構は、調査区東部の南東部、Ｉ３グリッドに位置する土坑である。検出面はＬⅣ上面である。重複する遺構はないが、北西側に10号土坑、南東側に13号溝跡が近接する。

平面形は長軸124㎝、短軸104㎝の不整楕円形である。底面は南東方向に向かって緩やかに傾斜している。検出面からの深さは、最深部で20㎝を測る。

堆積土は灰黄褐色粘土質シルトの単層で、ＬⅣ塊を多量に含むため人為堆積土と考えられる。

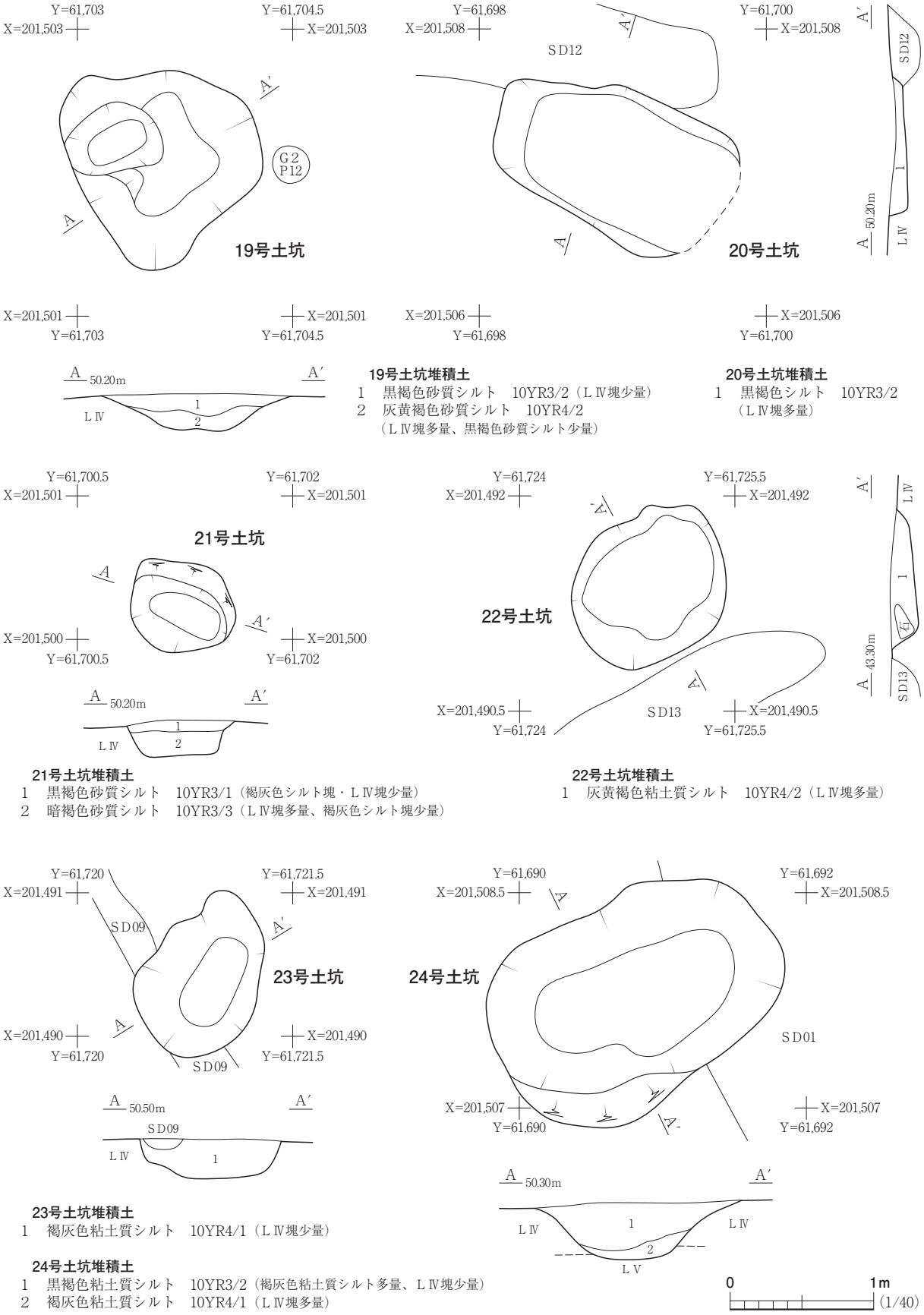
遺物は、土師器片１点が出土した。細片のため図示できなかったが、古墳時代前期のものと判断される。

本遺構の性格は不明だが、所属時期については、出土遺物から古墳時代以降に位置付けられる。

（草　野）

23号土坑　ＳＫ23（図28、写真42）

本遺構は、調査区東部の南東部、Ｉ３グリッドに位置する土坑である。検出面はＬⅣ上面であ



19号土坑堆積土
1　黒褐色砂質シルト　10YR3/2（ＬⅣ塊少量）
2　灰黄褐色砂質シルト　10YR4/2
（ＬⅣ塊多量、黒褐色砂質シルト少量）

20号土坑堆積土
1　黒褐色シルト　10YR3/2
（ＬⅣ塊多量）

21号土坑堆積土
1　黒褐色砂質シルト　10YR3/1（褐灰色シルト塊・ＬⅣ塊少量）
2　暗褐色砂質シルト　10YR3/3（ＬⅣ塊多量、褐灰色シルト塊少量）

22号土坑堆積土
1　灰黄褐色粘土質シルト　10YR4/2（ＬⅣ塊多量）

23号土坑堆積土
1　褐灰色粘土質シルト　10YR4/1（ＬⅣ塊少量）

24号土坑堆積土
1　黒褐色粘土質シルト　10YR3/2（褐灰色粘土質シルト多量、ＬⅣ塊少量）
2　褐灰色粘土質シルト　10YR4/1（ＬⅣ塊多量）

図28　19～24号土坑

る。９号溝跡と重複し、本遺構の方が古い。

平面形は長軸120㎝、短軸54～82㎝の不整楕円形を呈する。底面にはやや凹凸が見られ、検出面からの深さは28㎝を測る。

堆積土は褐灰色粘土質シルトの単層で、自然堆積土と考えられる。

遺物は、土師器片１点が出土した。細片のため図示できなかったが、古墳時代前期のものと判断される。

本遺構の性格は不明であり、所属時期も詳しい年代は明らかにしえないが、出土遺物及び重複関係のある９号溝跡よりも古いことから、古墳時代～中世のいずれかの時期におさまるものと考えられる。（草　野）

24号土坑　ＳＫ24（図28、写真43）

本遺構は、調査区東部の北西部、Ｆ２グリッドに位置する土坑である。検出面はＬⅣ上面である。１号堀跡と重複し、本遺構の方が古い。

平面形は長軸206㎝、短軸130㎝の楕円形である。遺構の掘り込みは検出面から40㎝下のＬＶ上部にまで及び、底面は緩やかな鍋底状を呈する。

堆積土は色調・含有物の違いにより２層に分層した。いずれもレンズ状堆積を示すことから自然堆積土と考えられる。

本遺構の性格は不明であり、所属時期も詳しい年代は明らかにしえないが、重複関係のある１号堀跡よりも古いことから、中世の屋敷跡が営まれる以前に位置付けられると考えられる。（草　野）

25号土坑　ＳＫ25（図29、写真43）

本遺構は、調査区西部の北東部、Ｄ５グリッドに位置する土坑である。検出面はＬⅣ上面である。重複する遺構はないが、北東側に26号土坑が近接する。

平面形は長軸112㎝、短軸60～106㎝の不整楕円形である。検出面からの深さは30㎝を測り、底面は平坦である。なお、遺構内の北西際とその約30㎝外側に張り出した箇所に直径約10㎝、長さ約60㎝の杭（前者：杭Ｂ、後者：杭Ａ）が打ち込まれている。さらに、杭Ａの西隣に直径約８㎝、長さ28㎝の杭Ｃが確認されたが、本遺構との関係については不明である。

堆積土は色調により３層に分層したが、いずれもグライ化しているため、堆積要因は判然としなかった。

本遺構からは出土遺物もなく、遺構の所属時期や性格等については不明だが、規模・形状や堆積土の特徴が共通する26号土坑と関連する可能性が高い。（草　野）

26号土坑　ＳＫ26（図29、写43）

本遺構は、調査区西部の北東部、Ｄ５グリッドに位置する土坑である。検出面はＬⅣ上面であ

る。重複する遺構はないが、南西側に25号土坑が近接する。

平面形は長軸108㎝、短軸82㎝の楕円形である。検出面からの深さは26㎝を測り、底面は平坦である。

堆積土は色調により２層に分層したが、いずれもグライ化しているため、堆積要因は判然としなかった。

本遺構からは出土遺物もなく、遺構の所属時期や性格等については不明だが、規模・形状や堆積土の特徴が共通する25号土坑と関連する可能性が高い。　（草　野）

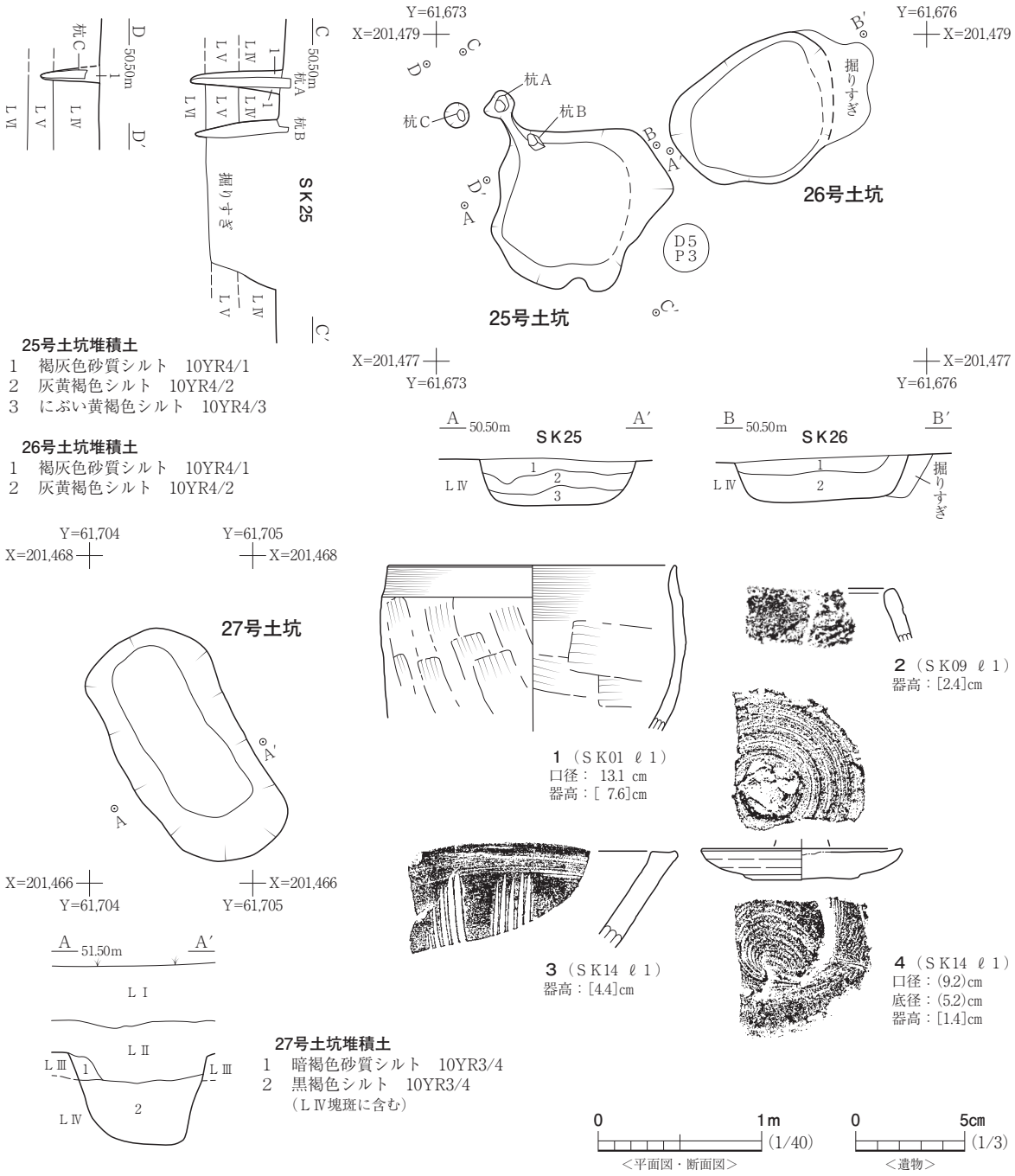


図29　25～27号土坑、土坑出土遺物

27号土坑　ＳＫ27（図29）

本遺構は、調査区西部の南西端、Ｇ６グリッドに位置する土坑である。検出面はＬⅢ上面である。東側に15～17号溝跡、西側に２・14号溝跡が近接する。１次調査では溝跡としていたが、２次調査の結果、土坑であることが判明した。

平面形は長軸153㎝、短軸75㎝の南北に長い楕円形である。検出面からの深さは最大で48㎝である。

堆積土は２層に分層した。ℓ１は上部の壁際のみで見られる暗褐色砂質シルトで、壁の崩落土と見られる。ℓ２は黒褐色シルトを基調としていて、ＬⅣ塊が混ざる。しまりもあることから、人為堆積土と考えられる。

本遺構からは出土遺物もなく、遺構の所属時期や性格等については不明である。　（鶴　見）

第５節　堀 跡 ・ 溝 跡

今回の調査では堀跡・溝跡計17条が確認された。１号堀跡としたものは、平成28年度に伊達市教育委員会が実施した中室内遺跡第１次確認調査（伊達市教育委員会2017）で検出された館跡の区画溝と考えられる遺構の続きで、他に検出された溝跡16条と比べて大規模で防御的な機能を有すると判断したため、堀跡として区別した。

１号堀跡　ＳＤ01

遺　　構（図30～33、写真44～49・62）

本遺構は、調査区東部の南西隅近くでＬ字形に屈曲するコーナー部分をもち、Ｆ１～４、Ｇ３～５、Ｈ５、Ｉ４・５、Ｊ４グリッドを横断して直線的に走る堀跡である。検出面はＬⅣ上面だが、調査の過程でＦ２グリッドにおいてＬⅡ上面から掘り込まれていることを確認した。重複遺構として17・24号土坑、３・５・６・12・15・17号溝跡、１号特殊遺構があげられ、これらを壊してつくられており、本遺構の方が新しい。調査区東部の南東隅にあたるＪ４グリッドでは、現代の撹乱によって本遺構が大きく削られ、辛うじて北側の上端を残すのみであった。

堆積土は色調・含有物の違い等により７層に分層した。ℓ１・２は礫や砂質シルト塊などが含まれ、近現代の燻し瓦や陶器片が出土する人為堆積土、ℓ３～７は自然堆積土と考えられる。植物遺体・木片を非常に多く含む黒褐色粘土層のℓ３は、堀跡が東西方向に走る間は薄いレンズ状堆積を示しているが、コーナー付近から徐々に層厚を増し、堀跡中央が不自然に窪んだ形状を呈する。伊達市教育委員会による中室内遺跡第１次確認調査成果によれば、「昭和の初め頃、稲作が行われた際に堀跡がまだ埋まり切っていないことから、水路として利用していたことが周辺からの聞き取り調査で判明した（伊達市教委2017：p.13）。」とあり、ℓ３の落ち込みは近現代の堀跡再利用に伴う

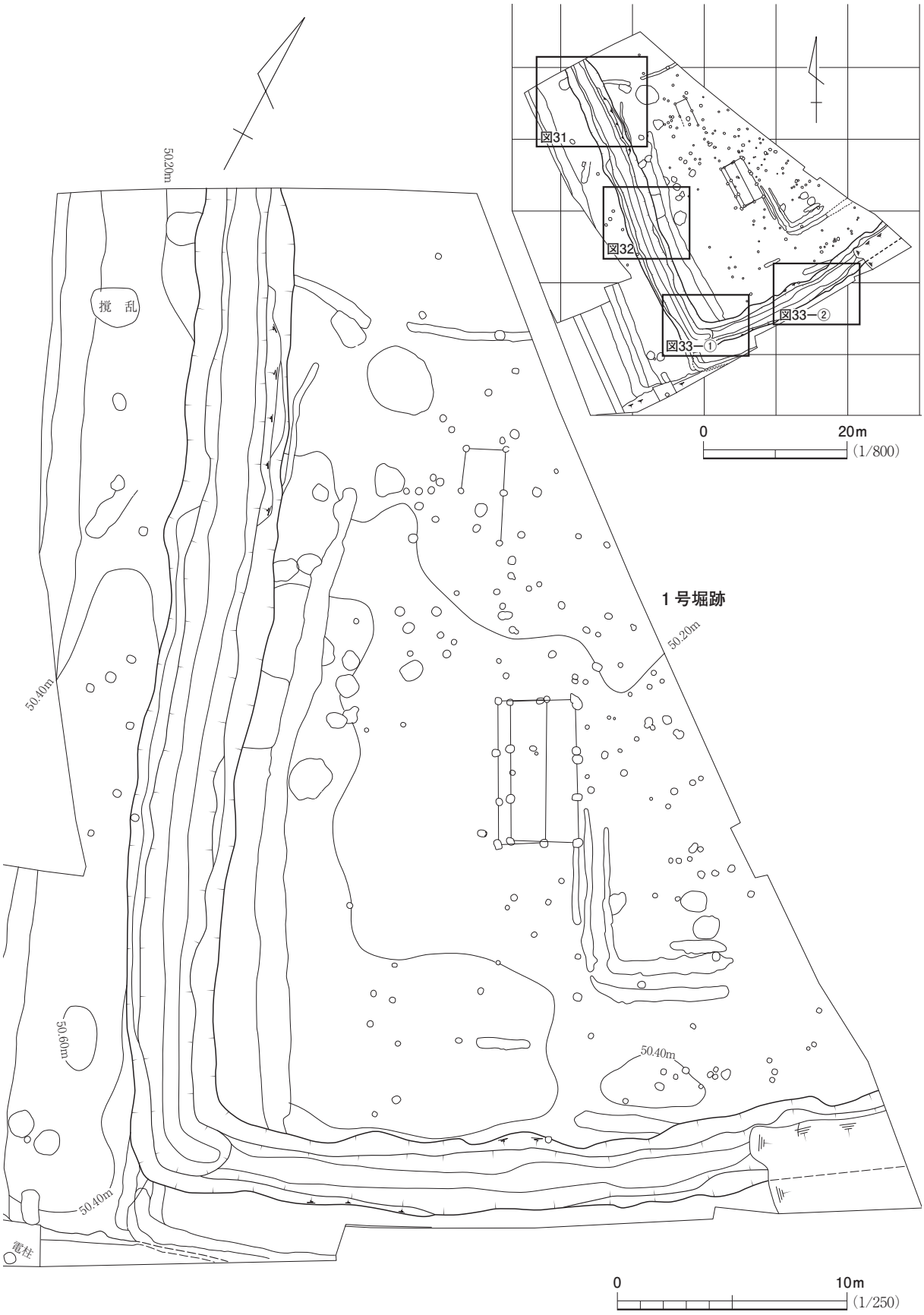


図31
図32
図33－①
図33－②
0
20m
(1/800)
1号堀跡
50.20m
50.40m
50.60m
撹　乱
電柱
0
10m
(1/250)

図30　１号堀跡（１）

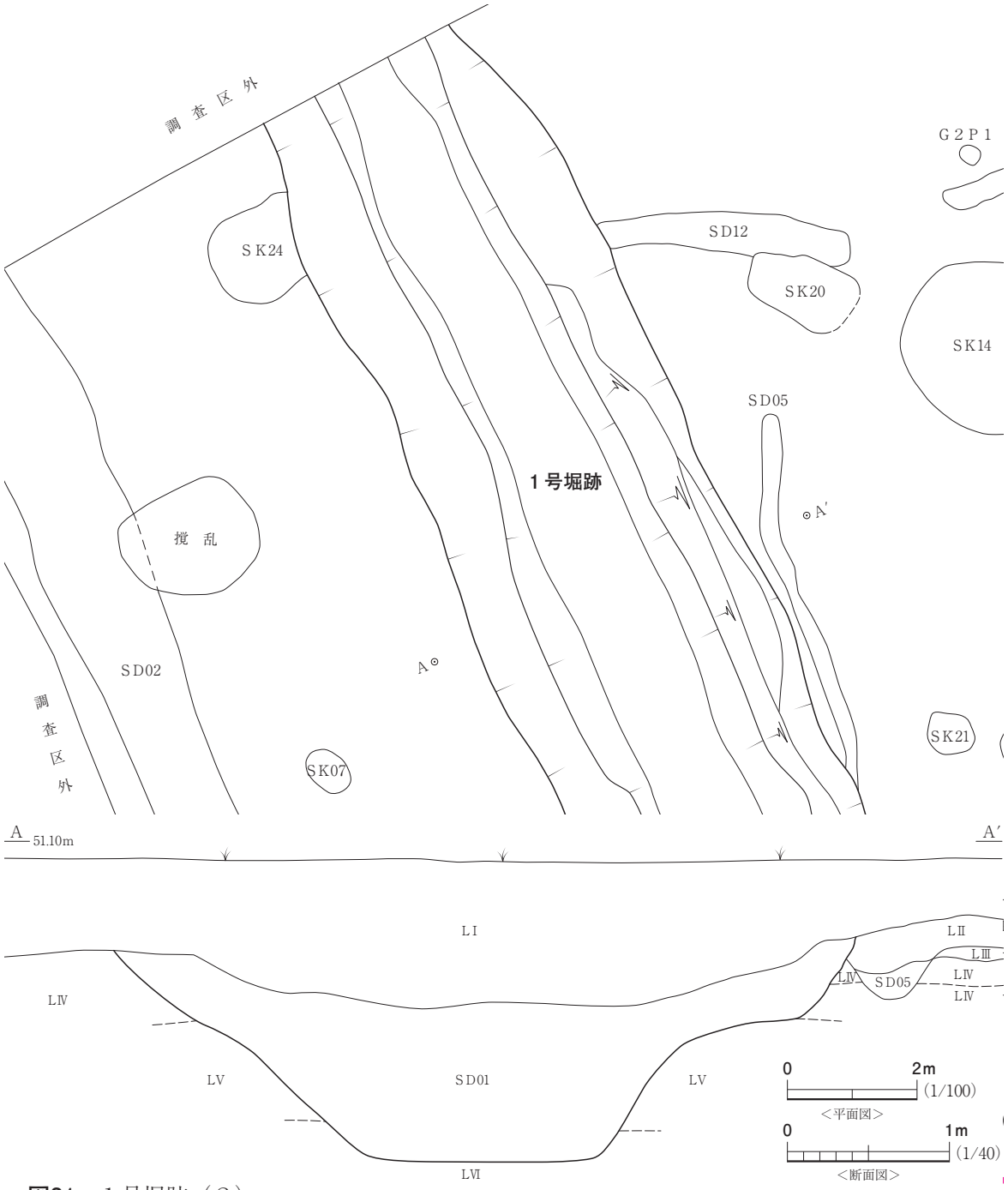


図31　１号堀跡（２）

浚渫によるもので、ここに含まれる多量の植物遺体・木片は水路利用後に生じた滞水状況を示していると考えられる。ℓ４はＧ３・４グリッドに位置する１号特殊遺構の覆土の流れ込み、ℓ６は堀跡コーナー付近の外側に堆積した肩部の崩落土と考えられ、ともに一部の箇所で限定的に確認された。堀跡全体で確認されるℓ５・７では、深さに応じた基本土層由来の含有物が整合的に認められ、自然堆積層と判断できる。とくに厚く堆積するℓ５は、屋敷跡廃絶後の近世を中心とした時期に形成されたものだろう。なお、堀跡と併せて土塁の有無が問題となるが、今回の調査範囲でその存在を積極的に示す痕跡は認められなかった。

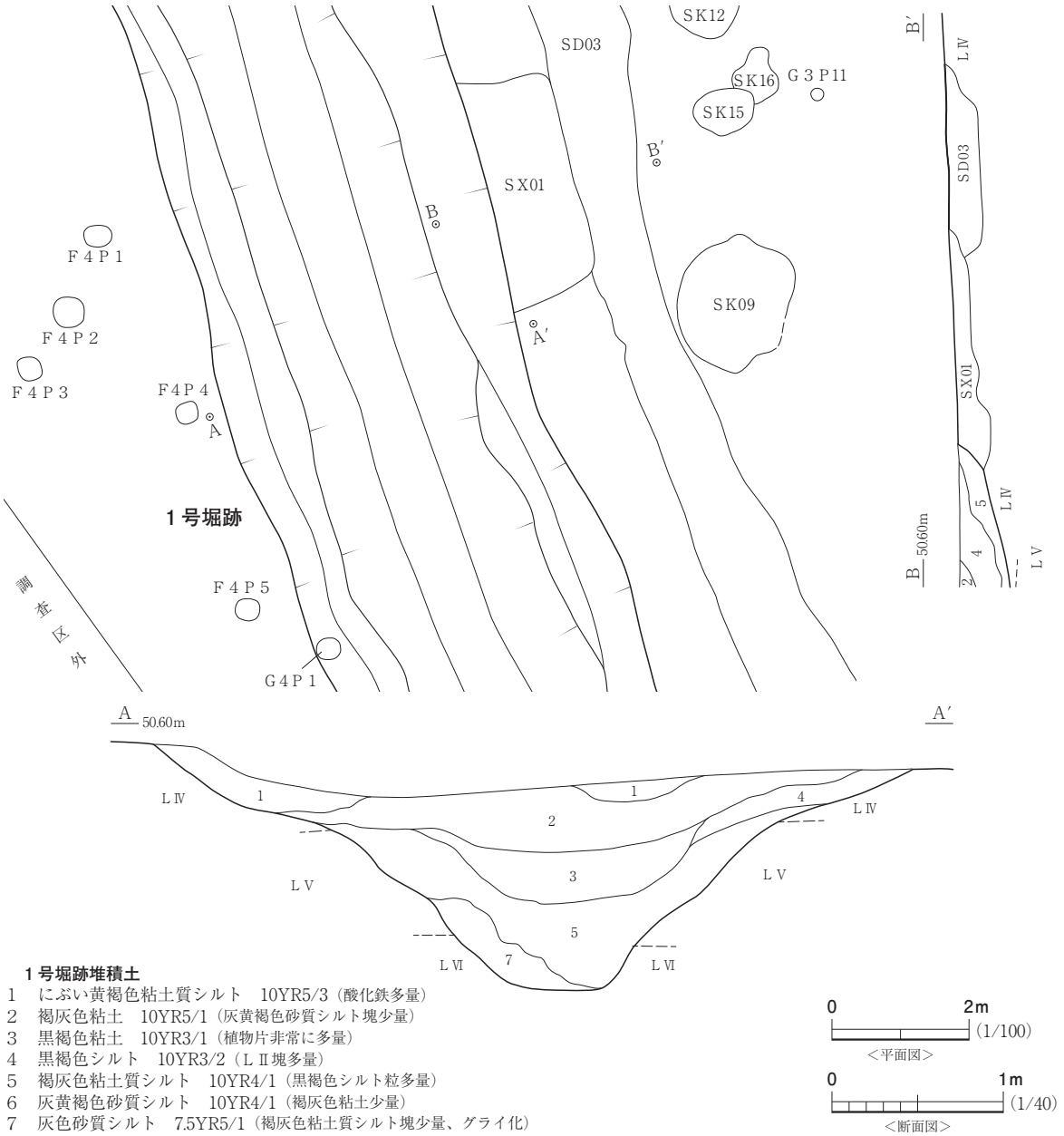


図32　１号堀跡（３）

調査区内で確認された堀跡の長さは、Ｌ字形に屈曲するコーナー部から北北西方向（Ｎ 24° Ｗ）へ走る南北軸で約44ｍ、同じくコーナーから東北東方向（Ｎ 64° Ｅ）へ走る東西軸で約33ｍを測り、それぞれ調査区外に延びていく。検出面での幅は南北軸が４ｍ前後と相対的に幅広く、17号土坑付近で最大4.9ｍ、調査区北端で最小3.2ｍを測る。東西軸の幅は３ｍ前後で広狭を繰り返し、６号溝跡の西端付近で最大3.4ｍ、最小2.5ｍを測る。断面形は底面幅0.6～1.6ｍの逆台形で、全体的に上部と下部とで掘り込みの傾斜が異なっている。南北軸では、浅く緩やかな上部掘り込みと急傾斜の下部掘り込みの間に幅0.3～0.8ｍほどの緩傾斜面があり、とくに外側（西側）はコーナー部のやや北側から約23ｍにわたって認められる。一方で、東西軸では緩傾斜面が存在せず、外側（南側）より内側（北側）の傾斜が緩やかな特徴を指摘できる。底面は全体的に概ね平坦だが、コーナー部分で

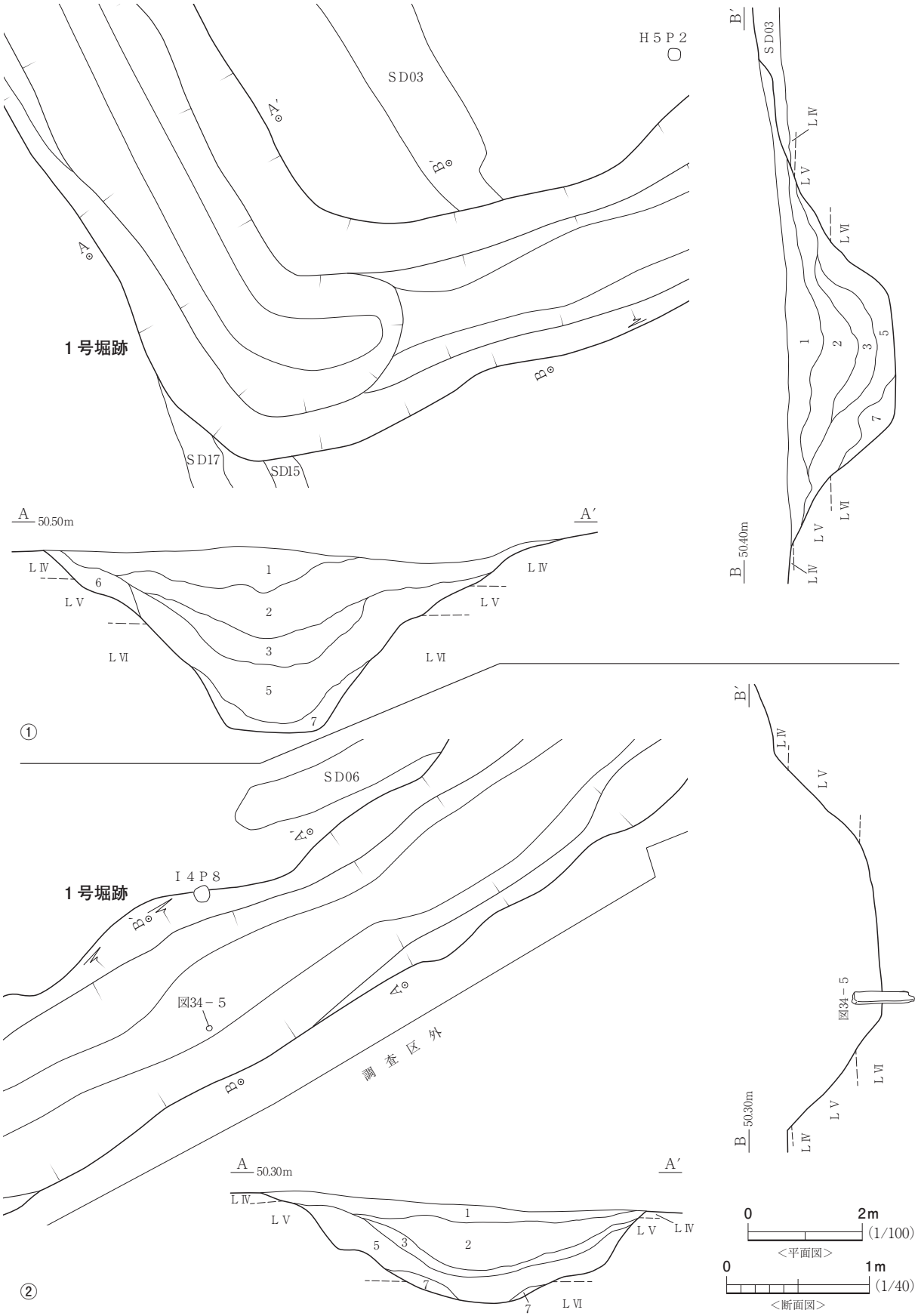

H５P２
SD03
A′
B′
１号堀跡
SD17
SD15
A
50.50m
A′
LⅣ
LⅤ
LⅥ
1
2
3
5
6
7
①
B′
SD03
LⅣ
LⅤ
LⅥ
B
50.40m
SD06
１号堀跡
I４P８
図34－５
調査区外
A
50.30m
A′
②
B′
図34－５
B
50.30m
0
2m
(1/100)
＜平面図＞
0
1m
(1/40)
＜断面図＞

図33　１号堀跡（４）

南北軸の方が一段深く掘り込まれており、検出面からの深さは南北軸で約1.3ｍ、東西軸で約0.7ｍを測る。また、底面標高は、全体的な傾向として、南北軸・東西軸とも南西隅に向かって低くなる特徴がある。

なお、Ｉ５グリッドでは、本遺構の底面に20㎝ほど垂直に打ち込まれた杭が１本確認された（図33の断面Ｂ－Ｂ′）。杭は直径７㎝、残存長44.8㎝で、樹皮がついたままの丸太材に一面削りが施されている（図34－５）。杭先は先端から７㎝が削り面の裏側に施された段状加工によって厚さ３～3.5㎝の板状を呈し、鋭く尖らせることなく隅丸方形に整えられている。単独検出のため用途が定かでなく、杭が堀跡に伴うものか否か判然としないが、残存部がℓ３より下部におさまることから杭上部は近現代の堀跡再利用時に削平されたものと考えられ、それ以前に打ち込まれた可能性が高い。

遺　　物（図34、写真70）

遺物は土師器・石製品・木製品が計41点出土し、このうち６点を図34に示した。１～４は、いずれも１号特殊遺構の覆土から流出したと考えられるℓ４出土の土師器である。１は口縁部を折り返した壺で、接合した16点のうち頸部片１点が１号特殊遺構の覆土内から出土したものである。２は内面にナデ、外面にハケメを施す土師器の体部で、外面に煤の付着と被熱痕が見られるものの、上部がすぼまる器形と外面に粗いミガキが施される特徴を勘案して壺と判断した。３は内外面

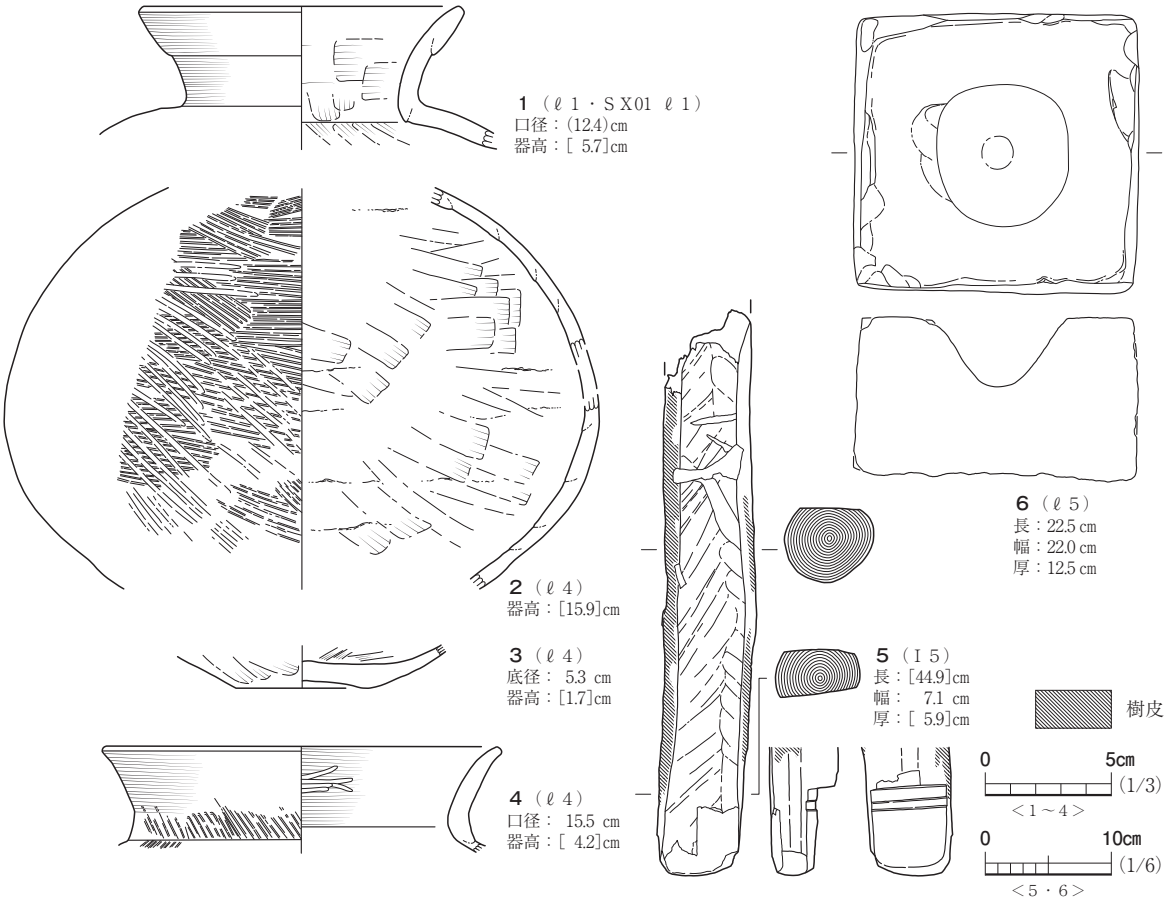


図34　１号堀跡出土遺物

に指ナデを施す上げ底気味の底部片で、器形の特徴から壺と考えられる。外面の一部に被熱痕がみられるが、胎土や器厚の違い等から２とは別個体と判断される。４は外面にハケメを施す甕の口頸部で、外面の一部に煤の付着と被熱痕が認められる。

５は先述の杭である。

６は、コーナー付近のℓ５から出土した直方体の石造物である。凝灰岩製で一辺約22㎝、高さ12.5㎝を測り、五輪塔の地輪と考えられる。片側の面の中央に直径10.4～11.2㎝、深さ5.5㎝の円形の窪みが施されており、反対面の調整加工が最も粗いことから円形の窪みのある面が上面と推定される。なお、石材側面に梵字等が施された痕跡は認められなかった。

ま と め

本遺構は、規模やＬ字形に屈曲する形状、本遺構の内部で多数の小穴が確認されたこと等から、中世の屋敷跡を区画する堀跡と考えられる。堀跡の堆積状況からは近世以前に位置付けられ、僅かながら堀跡の内部の小穴から出土した遺物の年代観を考えあわせると、15～16世紀頃には存在していたものと想定される。（草　野）

２号溝跡　ＳＤ02

遺　　構（図35・36、写真50・51）

本遺構は、調査区東部の西辺沿い、Ｅ２・３、Ｆ３～５、Ｇ５・６グリッドを縦断して直線的に走る溝跡である。調査区の制限によりＦ４グリッドで10ｍほど途切れるが、一直線につながる位置関係から同一の溝跡と判断した。溝跡の上部は、調査区の西側を通る市道設置に伴い大きく削られている。そのため検出面はＬⅣ上面だが、Ｆ５グリッドの調査区端でＬⅢ上面から掘り込まれていることが確認できた。南端部で14号溝跡と重複し、本遺構の方が古い。

堆積土の特徴は、上記の未調査部分を挟む南北で異なっており、南部で５層、北部で４層に分層した。南部の５層は、いずれも基本土層由来の含有物が整合的に認められる自然堆積土で、とくに黒褐色シルト層のℓ１はＬⅡの流れ込みで形成されたと考えられる。かたや北部のℓ１は南部に認められない土層であり、ＬⅣ由来の褐灰色砂質シルト粒を多く含む人為堆積土と考えられる。北部のℓ２～４はレンズ状堆積を示す自然堆積土で、このうち黒褐色シルト層のℓ２が南部のℓ１に対応するものと判断した。

検出された溝跡の長さは、南部で15.5ｍ、北部で21.4ｍを測り、南北一連のものとすると調査区南壁から北壁までの約45ｍとなる。全体的に大きく幅を減じることなく１号堀跡の南北軸と概ね平行する北北西方向（Ｎ21°Ｗ）に走っている。検出面での幅は、南部が1.1ｍ前後と相対的にやや狭く、南部の北端で最狭0.88ｍを測る。北部では1.3ｍ前後の箇所が多く、北端近くで最大1.72ｍを測る。

断面形は底面幅0.2～0.4ｍの逆台形の２段掘りとなっており、掘り込みの中ほどに幅0.2～0.4ｍのテラス状の緩傾斜面が一部形成される。ただ、南部と北部では掘り込みの深さや角度に違いが

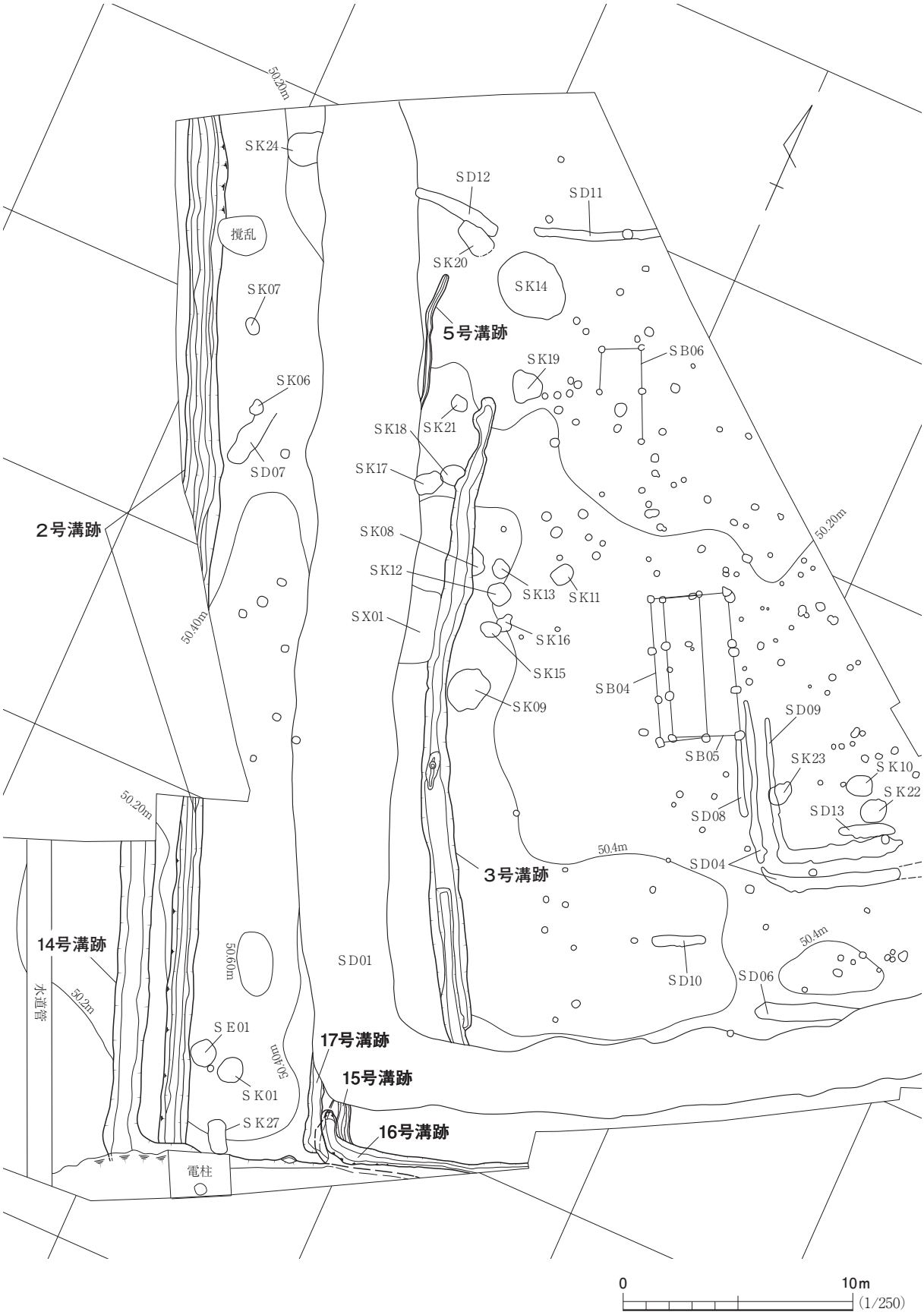
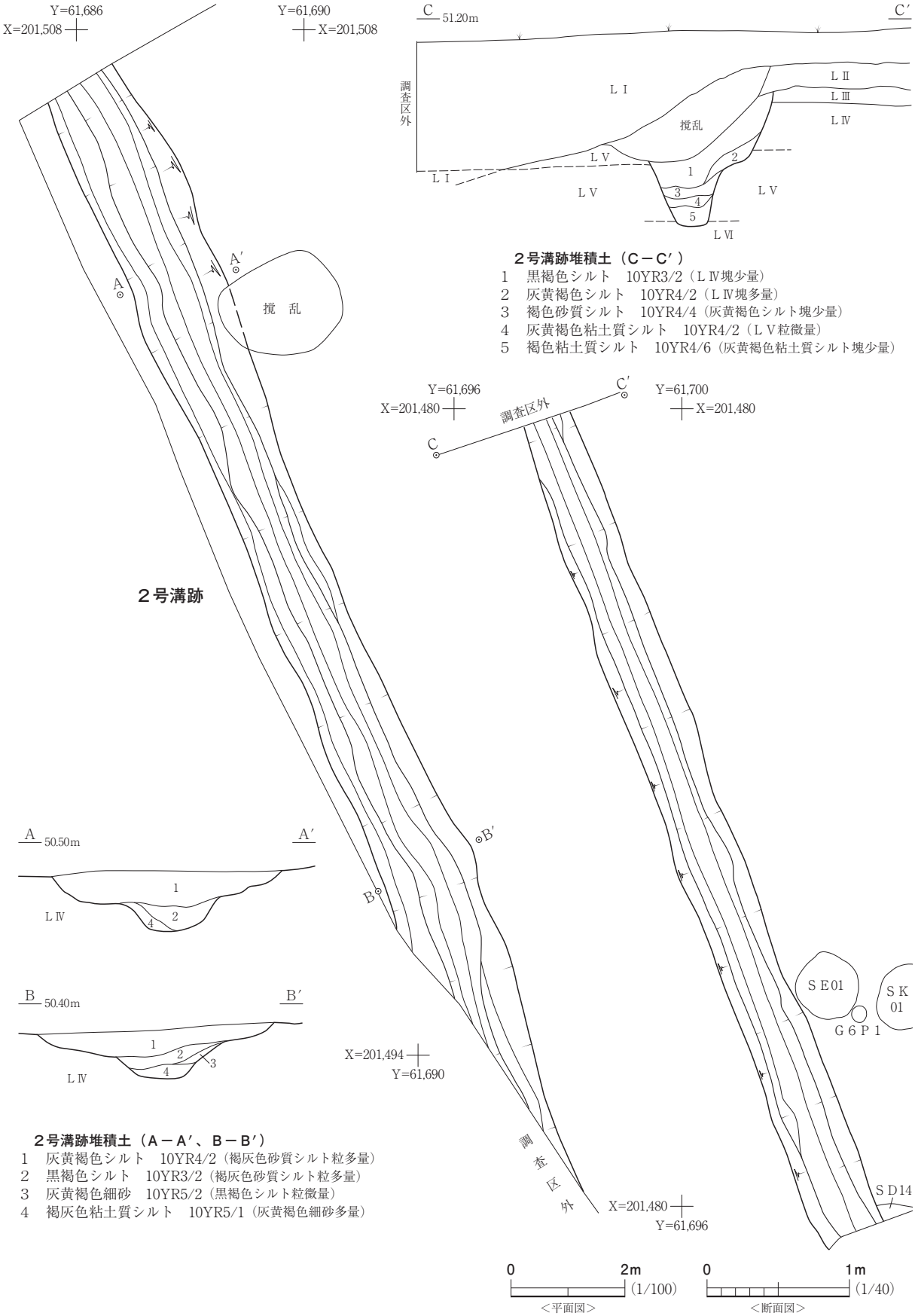


図35　２・３・５・14～17号溝跡全体図



２号溝跡堆積土（Ｃ－Ｃ′）
1　黒褐色シルト　10YR3/2（ＬⅣ塊少量）
2　灰黄褐色シルト　10YR4/2（ＬⅣ塊多量）
3　褐色砂質シルト　10YR4/4（灰黄褐色シルト塊少量）
4　灰黄褐色粘土質シルト　10YR4/2（ＬⅤ粒微量）
5　褐色粘土質シルト　10YR4/6（灰黄褐色粘土質シルト塊少量）

２号溝跡堆積土（Ａ－Ａ′、Ｂ－Ｂ′）
1　灰黄褐色シルト　10YR4/2（褐灰色砂質シルト粒多量）
2　黒褐色シルト　10YR3/2（褐灰色砂質シルト粒多量）
3　灰黄褐色細砂　10YR5/2（黒褐色シルト粒微量）
4　褐灰色粘土質シルト　10YR5/1（灰黄褐色細砂多量）

図36　２号溝跡

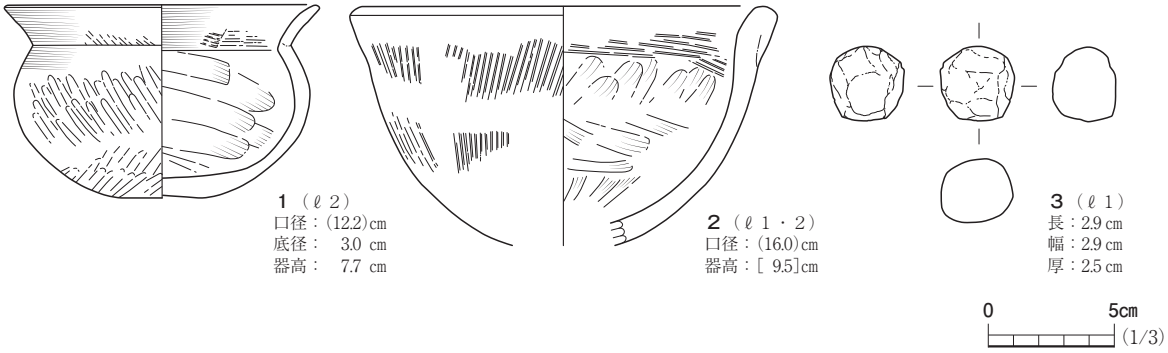


図37　２号溝跡出土遺物

見られる。南部は２段階とも深く急角度で、掘り込み面から底面までの深さは約0.9ｍを測る。一方、北部は２段階とも浅く緩やかで、検出面から底面までの深さは約0.4ｍを測る。特に北部の上部掘り込みには、先述した通り南部に広がらない人為堆積土が認められ、堆積時期の違いを示唆する。掘り込み形状の違いも考え合わせると、溝を掘り直している可能性もある。

遺　　物（図37、写真71）

遺物は土師器片58点、土製品１点が出土し、このうち北部で出土した３点を図37に示した。１は平底気味の土師器小型短頸鉢で、体部外面にミガキ、内面にナデを施す。２は底部を欠く半球形の土師器鉢で、器壁が厚く粗い胎土が特徴的である。体部外面と口縁部内面にハケメ、体部内面にナデを施す。３はやや歪だが球状に整えられた土製品である。孔や凹みは認められない。

ま と め

２号溝跡の所属時期は、出土遺物の年代観から古墳時代前期以降に位置付けられる。１号堀跡に平行する点を評価すると屋敷跡との関連が想定されるが、２号溝跡の掘り込み面がＬⅢ上面であることから１号堀跡より先行して開削された点は疑いない。このため、所属時期の下限は中世以前と判断される。ただし、遺構の北部が後世に掘り直されたと仮定した場合、屋敷跡に取り込まれる形で再利用された可能性も考えられる。

遺構の性格は、何らかの区画や用排水の溝の他、直線的であることを評価すれば道跡の側溝等の可能性も指摘されるが、積極的に特定する根拠は得られなかった。　（草　野）

３号溝跡　ＳＤ03

遺　　構（図35・38、写真42・52・62）

本遺構は、調査区東部の中央付近、Ｇ２～５、Ｈ５グリッドを縦断して直線的に走る溝跡である。検出面はＬⅣ上面である。本遺構は、南端で１号堀跡と、北部で８・18号土坑及び１号特殊遺構とそれぞれ重複し、１号堀跡と１号特殊遺構より古く、８・18号土坑より新しい。

堆積土は単層ないし２層に分層し、１号特殊遺構や９号土坑付近を境にして南北で状況が異なっていた。南側の堆積土は、ＬⅣ塊を多く含む灰黄褐色シルトを主体とした人為堆積土と考えられるのに対し、北側は含有物の少ない暗褐色ないし黒褐色シルトで、ＬⅡ由来の自然堆積土と考えられ

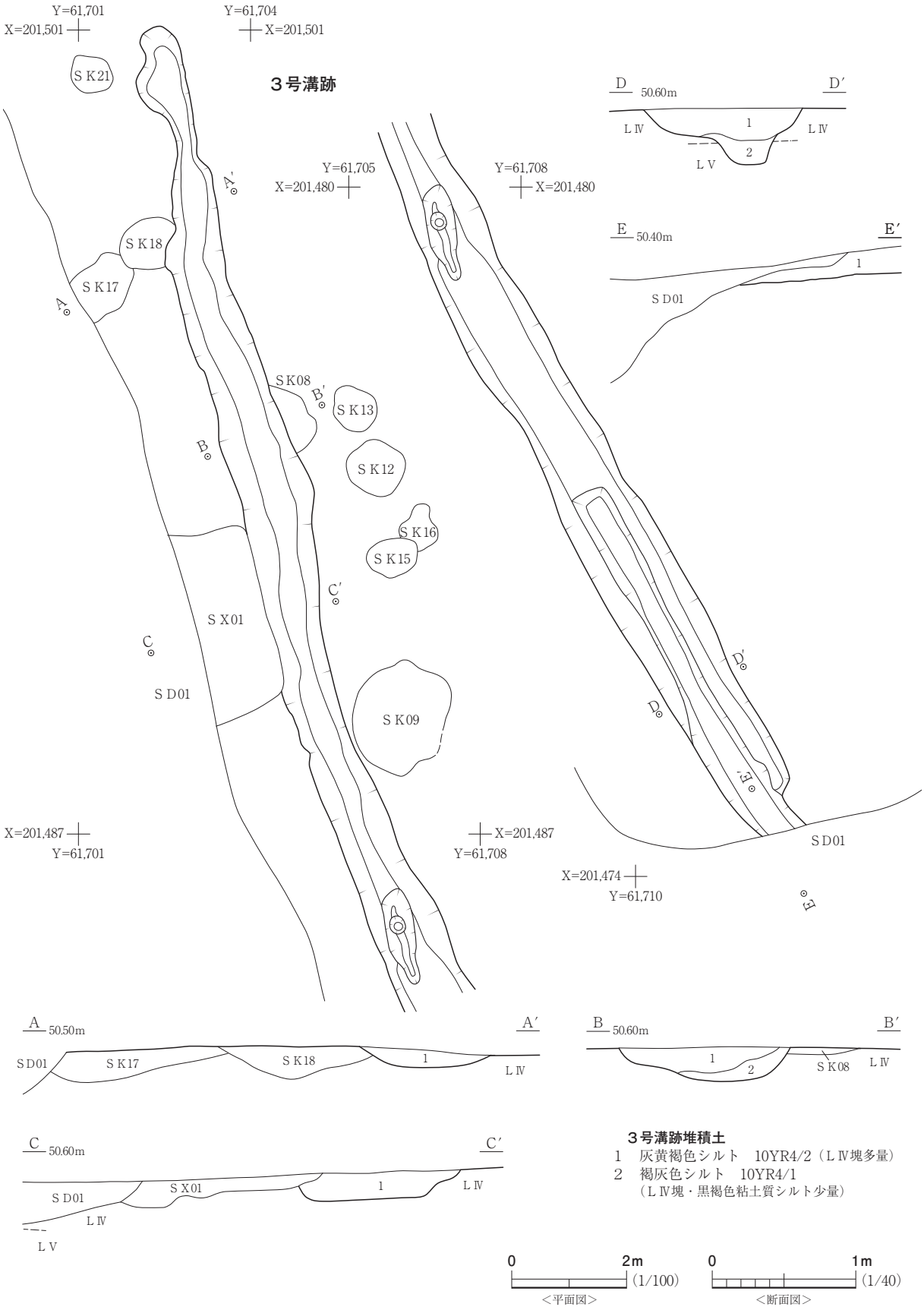

３号溝跡
Y=61,701
X=201,501
Y=61,704
X=201,501
Y=61,705
X=201,480
Y=61,708
X=201,480
X=201,487
Y=61,701
X=201,487
Y=61,708
X=201,474
Y=61,710
S K21
S K18
S K17
S K08
S K13
S K12
S K16
S K15
S X01
S D01
S K09
A
A′
B
B′
C
C′
D
D′
E
E′
50.60m
50.40m
L Ⅳ
L Ⅴ
1
2
50.50m
S K17
S K18
S K08
S X01
３号溝跡堆積土
1　灰黄褐色シルト　10YR4/2（L Ⅳ塊多量）
2　褐灰色シルト　10YR4/1
（L Ⅳ塊・黒褐色粘土質シルト少量）
0
2m
(1/100)
＜平面図＞
0
1m
(1/40)
＜断面図＞

図38　３号溝跡

る。

検出された溝跡の長さは約28ｍで、南端は１号堀跡に削られているが、幅３ｍ弱を測る１号堀跡の外側までは続かない。堀跡に削られる手前で幅を減じ浅くなる点を勘案すると、本来の規模も30ｍに満たないと判断できる。西側に隣接する１号堀跡の南北軸と概ね並行する北北西方向に走っているが、北端部では５号溝跡と同様に北方向に緩やかに屈曲する。検出面での幅は南部で1.2～1.4ｍ前後、北部で0.9～1.2ｍ前後である。断面形は浅く緩やかな逆台形を基本とするが、南部６ｍほどが西寄りを一段深く掘り下げる２段掘りとなっていて、検出面からの深さは南部で約40㎝、北部で約20㎝を測る。

遺物は土師器片13点が出土した。いずれも細片で図示し得なかったが、古墳時代前期の可能性がある。

ま と め

本遺構の所属時期の特定は難しく、出土遺物の特徴と１号堀跡開削時には埋没していたことを勘案し、大まかに古墳時代前期～中世頃としておきたい。また、本遺構の北端部は５号溝跡と並行するような形状であることから、同溝跡と関連を持って機能していた可能性もある。　（草　野）

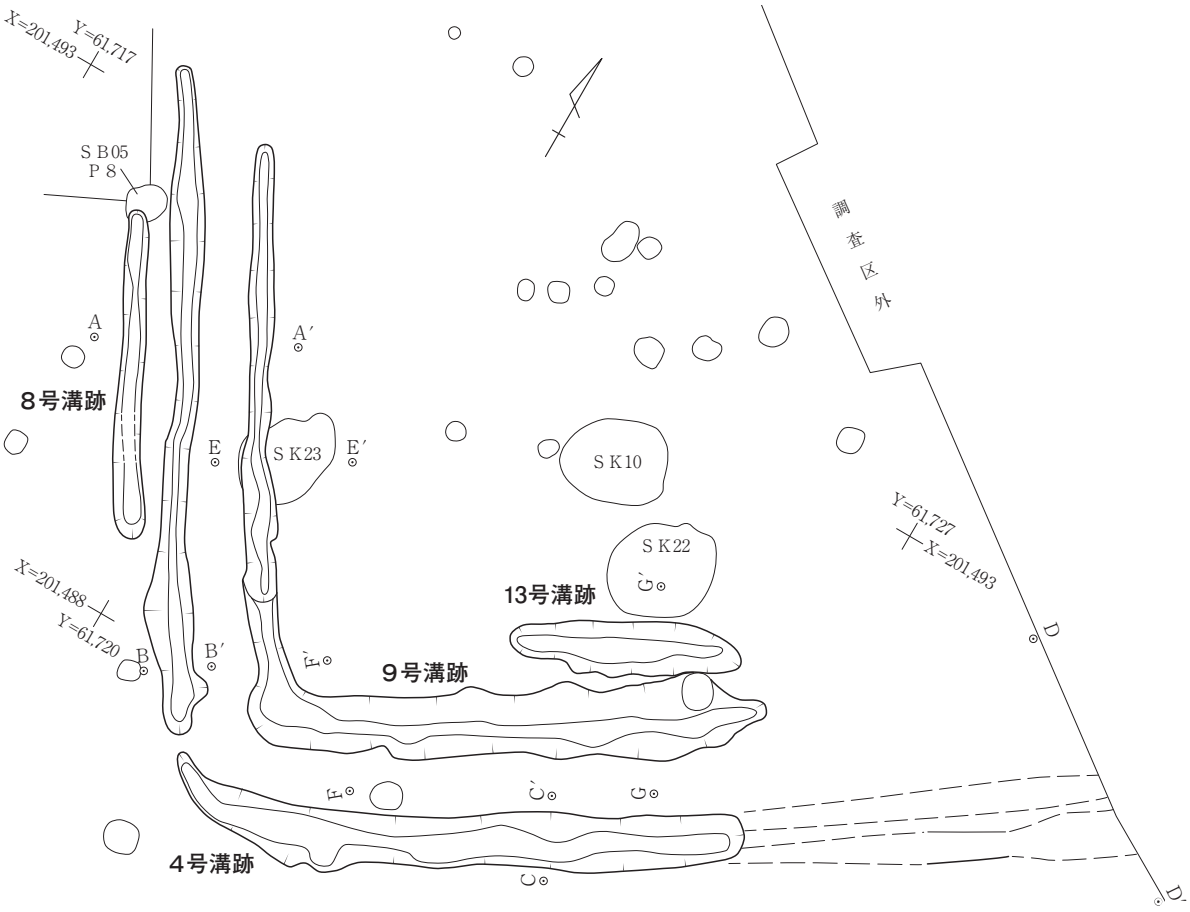
４・８・９・13号溝跡　ＳＤ04・08・09・13

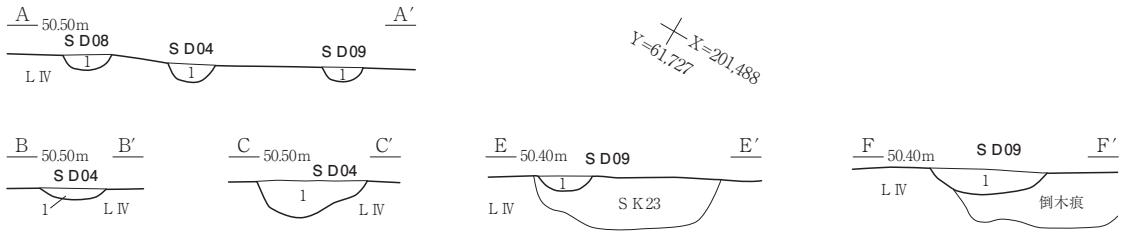
遺　　構（図39、写真53～55）

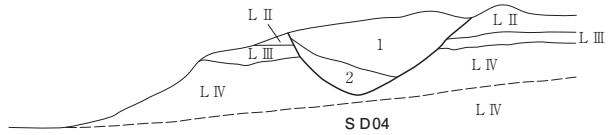
本遺構群は調査区東部でも南東部、１号堀跡で区画された内部のＨ３・４及びＩ３・４グリッドで検出された並走する溝跡である。このうち、４・９号溝跡は１号堀跡の形状に沿うようにＬ字形に屈曲する。検出面はＬⅣ上面だが、Ｉ３グリッドの調査区東壁で４号溝跡がＬⅡ上面から掘り込まれていることが確認できた。４号溝跡の両脇を並走する８・９号溝跡も同時期の所産と考えられ、同様にＬⅡ上面から掘り込まれている可能性が高い。８号溝跡が５号建物跡を構成する南東隅柱穴のＰ８を、９号溝跡が23号土坑をそれぞれ掘り込んでおり、また13号溝跡も南側の上端が僅かながら９号溝跡に削られていた。

堆積土は、単層ないし２層に分けられ、４・９号溝跡のコーナー部付近を境にして状況が異なっている。北北西方向（Ｎ29°Ｗ）へ走る４・８・９号溝跡の南北軸がＬⅣ塊を多く含む灰褐色シルトで人為的な埋め戻し土と考えられるのに対し、コーナーから東北東方向（Ｎ60°Ｅ）へ走る４・９号溝跡の東西軸では含有物の少ない黒褐色粘土質シルトないし褐色シルトでＬⅡ由来の自然堆積土と考えられる。ただし掘り込み面が確認できた調査区東壁の土層断面Ｄ－Ｄ′によると、４号溝跡の黒褐色粘土質シルト層の上にＬⅣ塊を多く含む暗褐色シルト層が堆積しており、覆土の上層については人為堆積土と考えられる。なお、９号溝跡に一部削られる13号溝跡は、近接する９号溝跡と明らかに異なる灰黄褐色シルトの自然堆積土で、埋没時期の違いを示唆している。

コーナー部で一旦途切れる４号溝跡の長さは、北北西方向へ走る南北軸で約７ｍ、コーナーから東北東方向へ走る東西軸で約5.8ｍを検出し、東西軸はさらに調査区外に延びて10ｍ以上となる。







４・８・９号溝跡堆積土（Ａ－Ａ′）
1　灰褐色シルト　10YR4/2（ＬⅣ塊多量）

４号溝跡堆積土（Ｂ－Ｂ′）
1　にぶい黄褐色粘土質シルト　10YR5/4

４号溝跡堆積土（Ｃ－Ｃ′）
1　褐色砂質シルト　10YR4/4

４号溝跡堆積土（Ｄ－Ｄ′）
1　暗褐色シルト　10YR3/3（ＬⅣ塊多量）
2　黒褐色粘土質シルト　10YR3/3（ＬⅣ塊微量）

９号溝跡堆積土（Ｅ－Ｅ′）
1　黒褐色粘土質シルト　10YR4/2（ＬⅣ塊多量）

９号溝跡堆積土（Ｆ－Ｆ′）
1　黒褐色粘土質シルト　10YR4/2（褐色シルト塊微量）

９号溝跡堆積土（Ｇ－Ｇ′）
1　黒褐色粘土質シルト　10YR3/2
（ＬⅣ塊少量、炭粒微量）

13号溝跡堆積土（Ｇ－Ｇ′）
1　灰黄褐色シルト　10YR3/2（ＬⅣ塊少量、炭粒微量）

0　2m　(1/80)　＜平面図＞
0　1m　(1/40)　＜断面図＞

図39　４・８・９・13号溝跡

４号溝跡の西側を並走する８号溝跡の長さは約3.5ｍ、４号溝跡の東側をＬ字形に並走する９号溝跡は南北軸で約6.4ｍ、東西軸で約5.5ｍを測り、13号溝跡の長さは約2.5ｍである。検出面での幅は、４・９号溝跡の南北軸と８号溝跡が0.2～0.5ｍ前後と相対的に狭く、４・９号溝跡の東西軸では0.5～0.8ｍと広くなる。13号溝跡の幅は0.36～0.56ｍを測る。断面形はいずれも底面中央が緩やかに窪む形状で、検出面からの深さは４・９号溝跡の南北軸と８号溝跡で10㎝前後、４・９号溝跡の東西軸と13号溝跡で20㎝前後を測る。

遺物は４号溝跡から土師器片３点、９号溝跡から土師器片２点が出土したが、いずれも細片のため図示できなかった。

ま と め

遺構の具体的な性格・時期は不明であるが、並走する４・８・９号溝跡については同時期に開削された一連のものである可能性が高く、屋敷地内部の何らかの区画溝と推測される。１号堀跡に沿う形状で、掘り込み面が同じくＬⅡ上面であることから、１号堀跡開削後の15～16世紀以降に位置づけられる。８号溝跡の北端が５号建物跡の柱穴を掘り込んでいる点を踏まえると、少なくとも屋敷地の造営当初には存在しなかったと考えられる。また13号溝跡については、４・８・９号溝跡より古く位置付けられるが、出土遺物もなく詳しい時期は不明である。（草　野）

５号溝跡　ＳＤ05

遺　　構（図40）

本遺構は、調査区東部でも西部のＦ２・３及びＧ５・６グリッドで検出された溝跡である。検出面はＬⅣ上面だが、Ｆ２グリッド及びＧ６グリッドの調査区南壁でＬⅢ上面から掘り込まれていることが確認できた。南端部は１号堀跡と重複し、本遺構の方が古い。

堆積土は、最初に含有物の少ない灰黄褐色シルトが堆積し、その後、ＬⅡが周囲から流入した状況を呈する。いずれも自然堆積土と考えられる。

検出された溝跡の長さは、南部で5.5ｍを測る。平面形は、３号溝跡の北端部と並行するような形状となっている。断面形は浅く緩やかな逆台形を基本とし、掘り込み面からの深さは約30㎝を測る。なお、出土遺物はなかった。

ま と め

本遺構は３号溝跡との関連を重視すれば、これらと同時期、ないし相前後して掘られた可能性も考えられる。なお、遺構の具体的な性格は不明である。（草　野）

６号溝跡　ＳＤ06

遺　　構（図41、写真56）

本遺構は、調査区東部でも南東部の、Ｉ４グリッドに位置する溝跡である。検出面はＬⅣ上面である。１号堀跡と重複し、本遺構の方が古い。

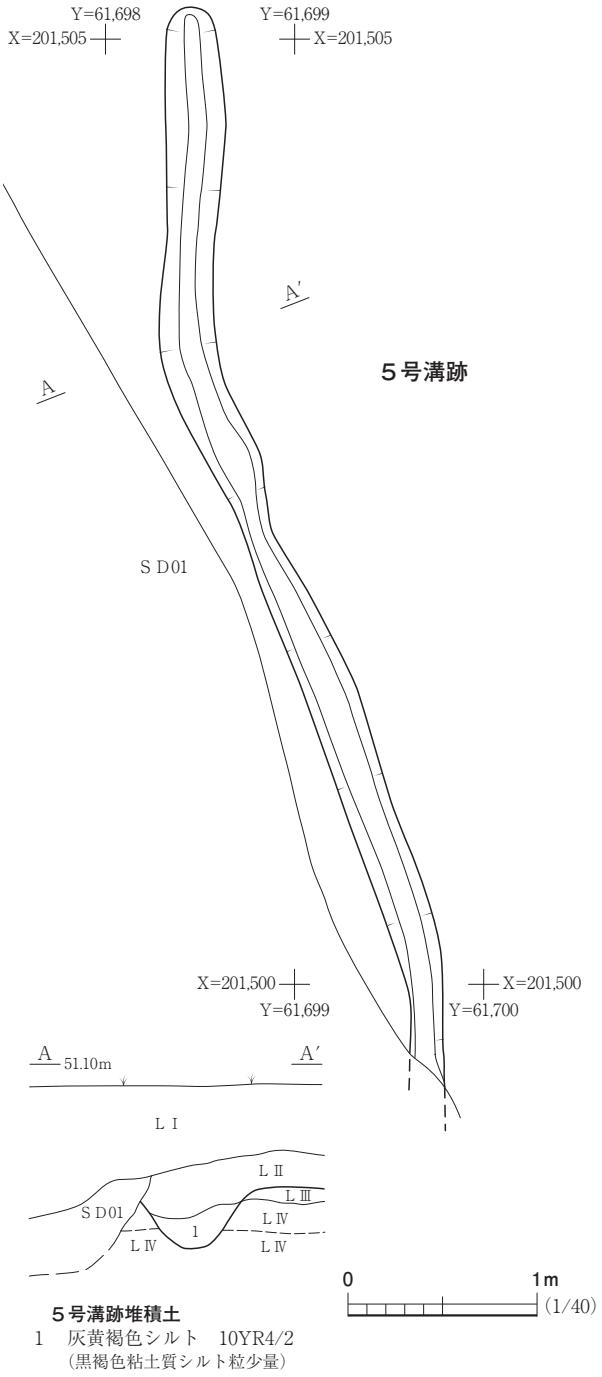


図40　５号溝跡

堆積土は、ＬⅣ塊を少量含む灰黄褐色シルトの単層で、自然堆積土と考えられる。

検出された溝跡の長さは約4.5ｍだが、東方向に延びるところで１号堀跡に削られているため本来の長さは不明である。検出面での幅は0.6～0.8ｍで、主軸方向はＮ68°Ｅである。底面は平坦で、検出面からの深さは10～20㎝を測る。

遺　　物（図41、写真71）

遺物は土師器片20点、須恵器片１点が出土し、このうち３点を図41に示した。１は酸化焔焼成による土師器甕の胴部片だが、外面に平行タタキ目、内面に青海波状の当て具痕が認められ、須恵器の技法が駆使されてつくられている。２は底面に木葉痕を残す土師器甕、３は須恵器甕の口縁部片である。

ま と め

本遺構の時期は、１号堀跡との重複関係から中世以前であることがわかり、出土遺物の年代観を勘案すると古代頃と推察される。また、検出部分が一部に限られるため、溝跡の機能については判然としない。　（草　野）

７号溝跡　ＳＤ07

遺　　構（図41、写真56）

本遺構は、調査区東部でも北西部のＦ３グリッドに位置する溝跡で、検出面はＬⅣ上面である。６号土坑と重複し、本遺構の方が新しい。また、遺構の北部は撹乱により失われている。

堆積土は、ＬⅣ塊を多量含む黒褐色シルトの単層で、自然堆積土と判断した。ＬⅣ塊は下層を中心に認められ、層中には壁の崩落土も含まれていると考えられる。

検出された溝跡の長さは2.6ｍ、検出面での幅は0.8～1.1ｍである。底面は凹凸が認められる箇所もあるが、概ね平坦である。検出面から底面までの深さは10～15㎝前後で、全体的に浅い。

遺物は土師器が１点出土しているが、細片のため図示できなかった。

ま と め

本遺構の時期は、６号土坑よりも新しいが、出土遺物が少ないため、詳細な時期は不明である。ただ、本遺構の主軸方位は、１号堀跡を含めた他の溝跡とはずれているが、12号溝跡の主軸方向とほぼ直交する。このことから、12号溝跡と同時期に機能していた可能性もある。（草　野）

10号溝跡　ＳＤ10

遺　　構（図41、写真57）

本遺構は、調査区東部でも南東部のＨ４グリッドに位置する溝跡で、検出面はＬⅣ上面である。重複する遺構は確認されていない。

堆積土は、黒褐色粘土質シルトの単層で、自然堆積土と考えられる。

検出された溝跡の長さは2.34ｍ、検出面での幅は0.4～0.45ｍで、ほぼ一定の幅で掘られている。底面は平らで、検出面からの深さは15～18㎝前後である。出土遺物はない。

ま と め

本遺構からは出土遺物もなく、遺構の所属時期や性格等については不明である。（鶴　見）

11号溝跡　ＳＤ11

遺　　構（図42、写真57）

本遺構は、調査区東部北端のＧ１・２グリッドに位置する溝跡である。検出面はＬⅣ上面である。Ｇ１Ｐ１と重複していて、本遺構の方が古い。

堆積土は褐灰色シルトの単層で、自然堆積土と判断した。

本遺構の規模は、確認できた範囲での長さは4.8ｍであり、さらに調査区外に続いている。検出面での幅は約35㎝を測る。断面形は逆台形を呈し、底面は平坦で、検出面からの深さは10㎝前後である。また、出土遺物はなかった。

ま と め

本遺構は、Ｇ１Ｐ１と重複しており、この小穴よりも古い時期の溝跡である。Ｇ１Ｐ１を含めた調査区東部の小穴群の時期は概ね中世頃と考えられることから、本遺構は中世以前のものと判断している。なお、遺構の性格は不明である。（鶴　見）

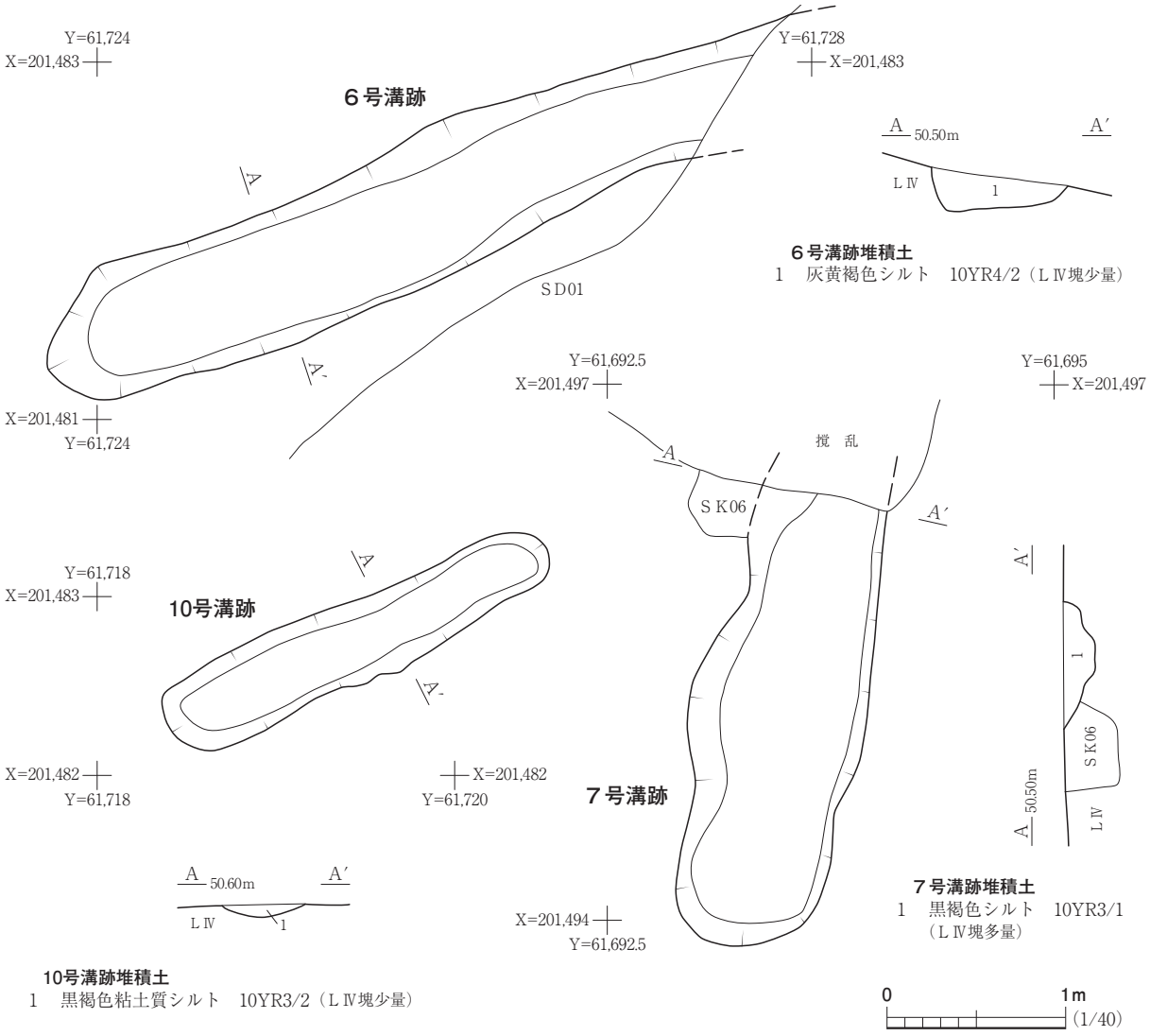
12号溝跡　ＳＤ12

遺　　構（図42）

本遺構は、調査区東部の北端付近であるＧ１・２グリッドに位置する溝跡である。ＬⅣ上面で検出した。20号土坑、１号堀跡と重複していて、本遺構の方がそれらよりも古い。

堆積土は、褐灰色粘土質シルトの単層で、自然堆積土と判断した。

東西に長い溝跡で、長さは約3.9ｍ、検出面での幅は42～64㎝で、西側が狭い。また、中央部付



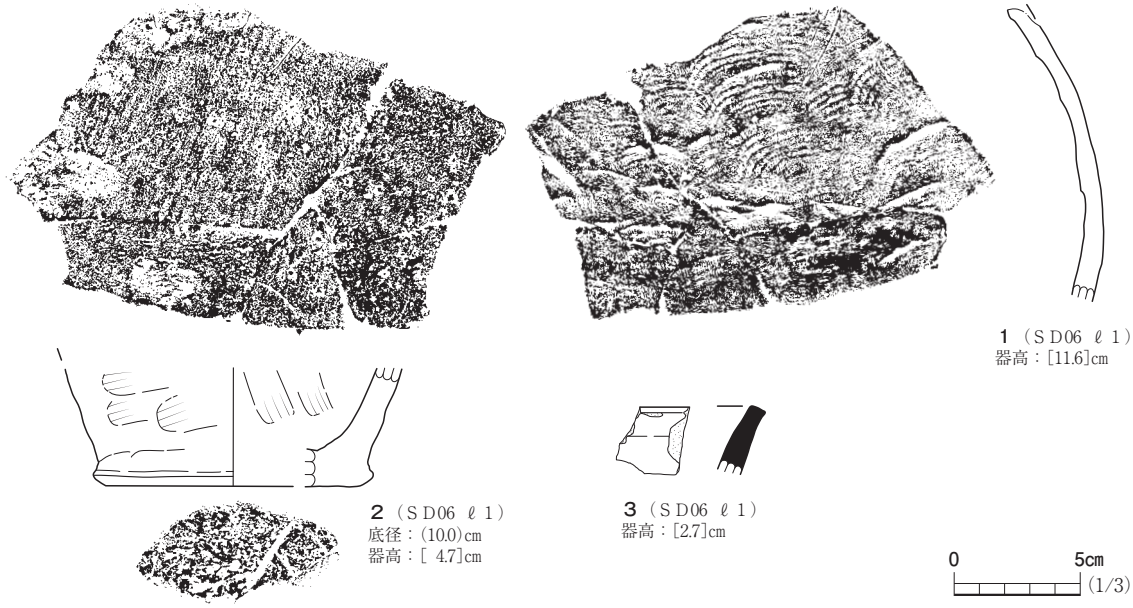


図41　６・７・10号溝跡、６号溝跡出土遺物

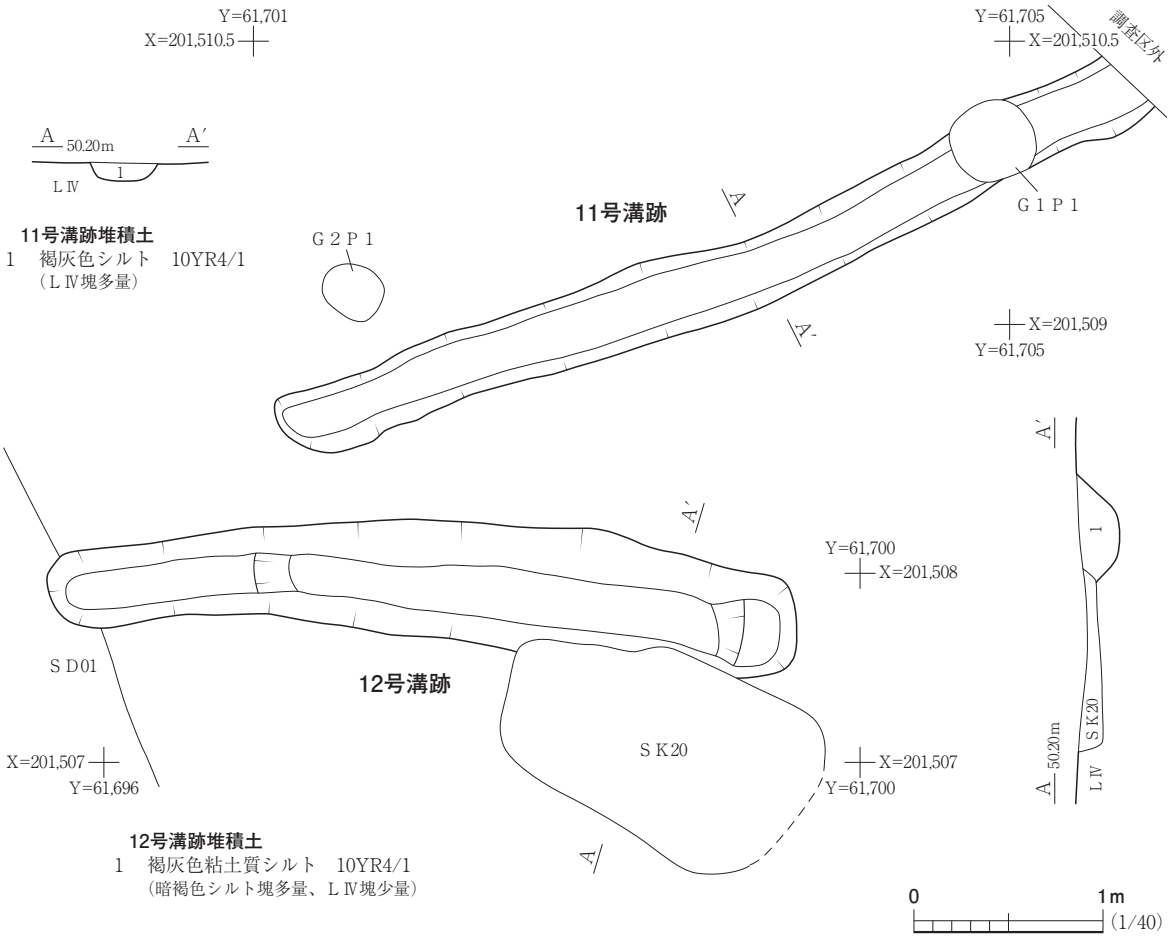


図42　11・12号溝跡

近で底面が一段低くなっている。そのため、検出面からの深さは両端では10㎝前後なのに対し、中央部では最も深い場所で38㎝を測る。出土遺物はない。

ま と め

本遺構の所属時期は明確ではないが、20号土坑や１号堀跡よりも古い遺構である。１号堀跡は、15・16世紀頃には存在していたと推定されているため、本遺構はそれ以前のものと考えられる。また、本遺構の主軸方位は、1号堀跡を含めた他の溝跡とはずれているが、７号溝跡の主軸方向とほぼ直交する。このことから、７号溝跡と同時期に機能していた可能性もある。　（鶴　見）

14号溝跡　ＳＤ14

遺　　構（図43・44、写真58）

本遺構は、２次調査区で確認された溝跡で、Ｆ５・６、Ｇ６、Ｈ６グリッドに位置する。検出面はＬⅣ上面である。２号溝跡と15号溝跡と重複し、それらの遺構よりも本遺構の方が新しい。また、南端部は現代の撹乱により削られている。

堆積土は、２層に分層し、いずれも自然堆積土と判断している。

遺構は、Ｆ５～６グリッドまでは南北方向に延び、Ｆ６グリッドで向きを変えて東に続くＬ字形

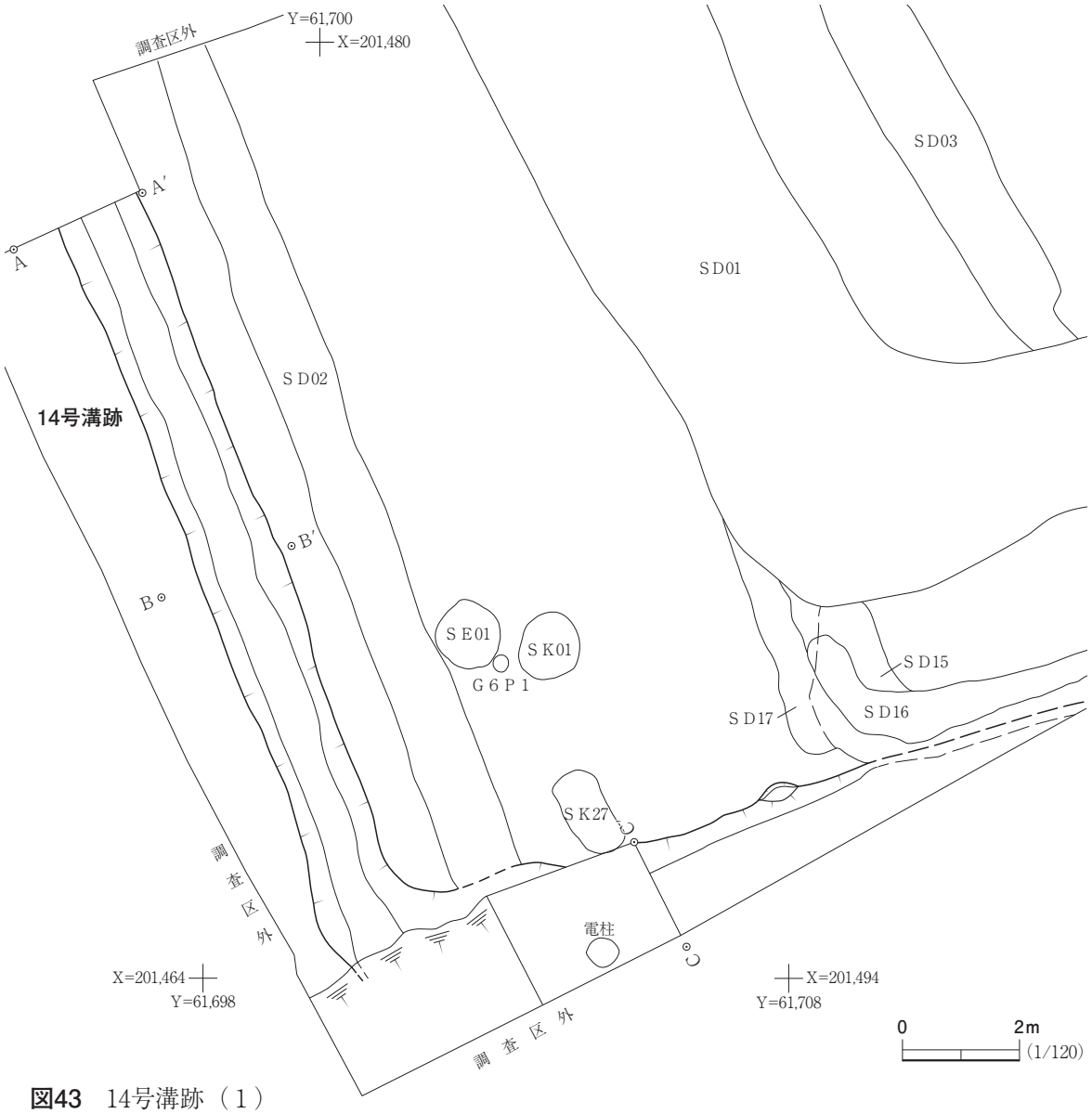


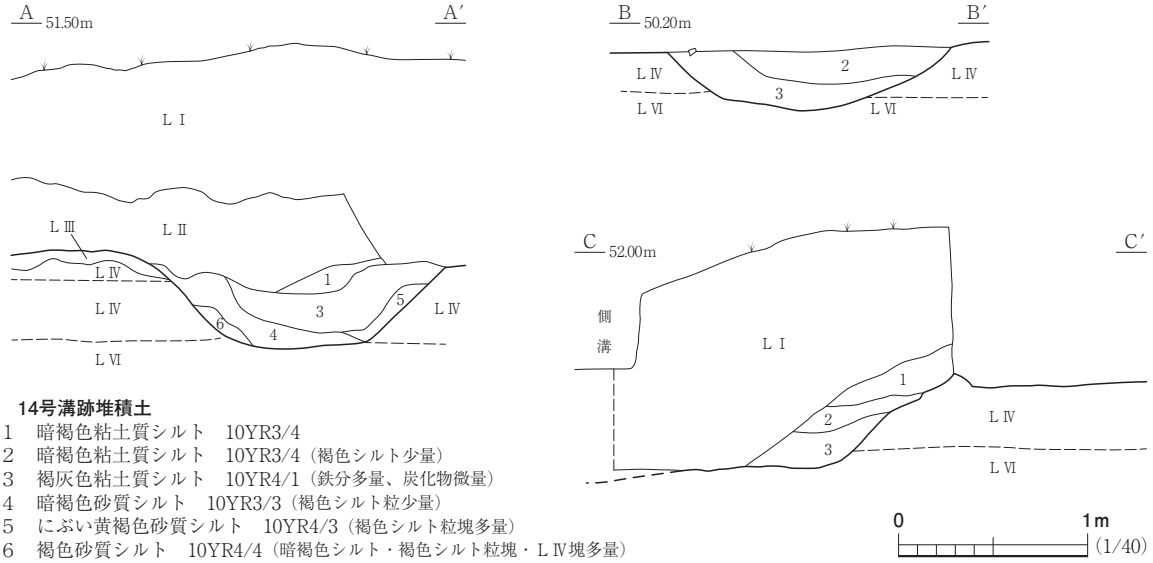
図43　14号溝跡（１）

を呈している。検出した範囲での規模は、北端からコーナーまでで13ｍ、コーナーから東端までで12ｍである。幅は1.5ｍ前後で一定している。検出面からの深さは最大で33㎝である。底面の標高は、南西隅に向かって低くなっている。また、遺構の南西隅は、底面の形状から、まっすぐ南に延びる可能性がある。

本遺構からは、土師器が25点出土した。細片のため図示できなかったが、古墳時代前期のものと、内面黒色処理が施されたロクロ成形の古代のものが含まれている。

ま と め

本遺構は、出土遺物から古代以降の溝跡と考えられ、さらに、重複する２・15号溝跡よりは新しい時期のものと判断できる。また、１号堀跡と同様、Ｌ字形に屈曲することから、同堀跡に関連した区画溝の可能性もあるが､同堀跡との同時性を判断する根拠に欠けるため断定できない｡なお、遺構の南西隅が南に延びていたとすれば、排水の機能も有していたと推測される。　（鶴　見）



14号溝跡堆積土
1　暗褐色粘土質シルト　10YR3/4
2　暗褐色粘土質シルト　10YR3/4（褐色シルト少量）
3　褐灰色粘土質シルト　10YR4/1（鉄分多量、炭化物微量）
4　暗褐色砂質シルト　10YR3/3（褐色シルト粒少量）
5　にぶい黄褐色砂質シルト　10YR4/3（褐色シルト粒塊多量）
6　褐色砂質シルト　10YR4/4（暗褐色シルト・褐色シルト粒塊・ＬⅣ塊多量）

図44　14号溝跡（２）

15号溝跡　ＳＤ15

遺　　構（図45、写真59）

本遺構は、調査区東部の南東隅にあたるＧ５・６、Ｈ６グリッドに位置する溝跡である。検出面はＬⅣ上面だが、土層断面の観察からＬⅢ上面から掘り込まれていることが確認できた。１次調査の段階では、溝跡であることが把握できず、２号特殊遺構としていたが、２次調査の成果を踏まえて溝跡として報告することとした。本遺構は、１号堀跡及び14・16・17号溝跡と重複し、１号堀跡・14号溝跡よりは古く、16・17号溝跡よりは新しい。また、遺構の南壁及び東端部は現代の撹乱により失われている。

堆積土は５層に分層した。ℓ１はにぶい黄褐色シルト、ℓ２は黒褐色シルトを基調とする。ともに周囲の基本土層には見られない褐灰色粘土質シルト粒を多く含んでおり、その特徴から人為堆積土の可能性が高いと考えられる。ℓ３～５の堆積要因は判然としないが、ℓ１・２同様、人為堆積の可能性がある。

本遺構はＬ字形に屈曲する溝跡で、その規模は、南北方向約４ｍ、東西方向で9.3ｍ以上である。当初、重複する16号溝跡の存在に気付かず一緒に掘り進めてしまったが、土層断面で確認できた検出面での幅は約1.6ｍを測る。断面形は緩やかな逆台形を呈する。掘り込み面から底面までの深さは最深部で40㎝である。なお、本遺構は16号溝跡と平面的に同じ箇所にあることから、16号溝跡をつくりなおしたものであると判断される。

遺　　物（図45、写真71）

遺物はℓ２から土師器片３点が出土しており、このうちの１点を図45に示した。１は、器面がやや磨滅しているものの外面に櫛描き波状文が施されており、外に向かって直線的に開く器形から甕の口頸部片と判断できる。器形・調整は須恵器の特徴を有しているが、酸化焔焼成による軟質の

焼き上がりで内面に黒色処理が施されている。

ま と め

本遺構の所属時期は、出土遺物の特徴から古代以降に位置付けられ、１号堀跡より古いことと掘り込み面がＬⅢ上面であることから、中世の屋敷跡が営まれる15～16世紀以前と考えられる。遺構の性格は、Ｌ字形に屈曲する形状から、何らかの区画溝と考えられる。（草野・鶴見）

16号溝跡　ＳＤ16

遺　　構（図45、写真59）

本遺構は、調査区東部の南東隅にあたるＧ５・６グリッドに位置する溝跡である。検出面はＬⅣ上面である。東隣で検出された15号溝跡によって上部全体を削平されている。１次調査の段階では、遺構の一部の検出に留まったことから溝跡であるとは断定できず、３号特殊遺構としていたが、２次調査の成果を踏まえて溝跡として報告することとした。

堆積土は２層に分層した。ℓ１は褐色粘土質シルト、ℓ２は灰黄褐色シルトを基調とする。ℓ１は15号溝跡と同様、周囲の基本土層では見出し難い褐灰色粘土質シルト粒を含んでおり、その特徴から人為堆積土の可能性が高いと考えられる。このことから、平面的に同じ位置ある15号溝跡は、本遺構を埋め立てた後につくりなおされたものと判断される。

本遺構は、Ｌ字形に屈曲する溝跡で、長さは南北方向で約２ｍ、東西方向で約６ｍである。検出された範囲での幅は40～60㎝前後だが、上部を15号溝跡に削られているため、本来の幅はこれよりも広かった可能性がある。検出面からの深さは最大で18㎝を測る。断面形は鍋底状を呈し、底面は概ね平坦だが、底面標高はコーナー付近が一番低くなっている。

出土遺物は土師器が１点出土したが、細片のため図示できなかった。

ま と め

本遺構は、Ｌ字形に屈曲する形状を呈することから、何らかの区画溝と考えられる。重複する15号溝跡と併せると、同じ箇所で新旧２時期に渡る区画溝がつくられたと判断される。

本遺構の所属時期については、15号溝跡と同様、中世の屋敷跡が営まれる15～16世紀以前としておきたい。（草野・鶴見）

17号溝跡　ＳＤ17

遺　　構（図45、写真59）

本遺構は、調査区東部の南東隅にあたるＧ５・６グリッドに位置し、検出面はＬⅣ上面である。１号堀跡と15・16号溝跡と重複し、それらの遺構よりも本遺構の方が古い。１次調査段階では、本遺構から北に約30m離れている５号溝跡と一連のものとして考えていた。しかし、２次調査で溝跡と判明した15・16号溝跡も近接した位置にあるため、５号溝跡がいずれの溝跡に続くかは判然としなくなった。このことから、新たに17号溝跡として報告することとした。

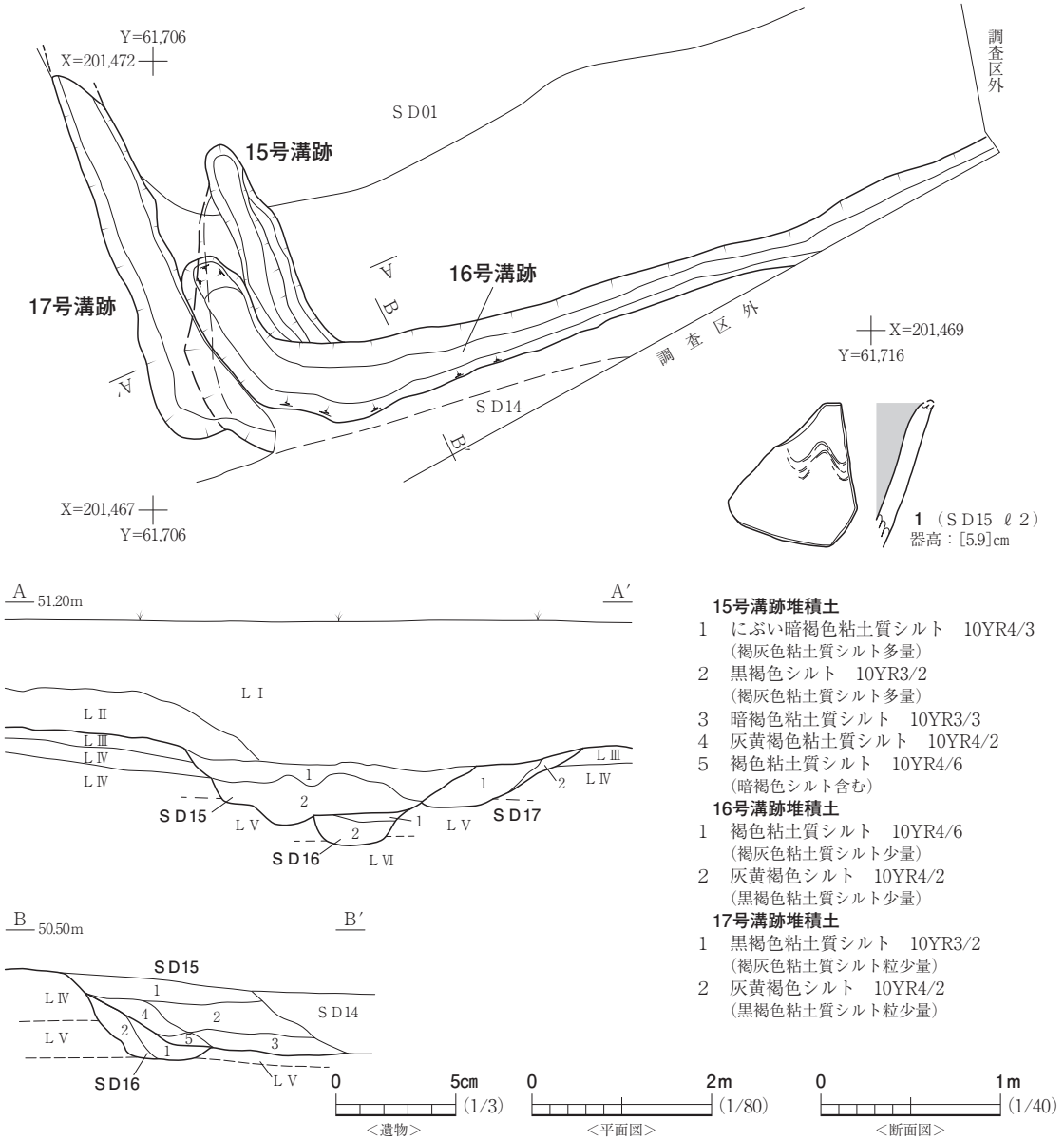


図45　15～17号溝跡、15号溝跡出土遺物

堆積土は２層に分層した。いずれも周囲からの自然流入土と判断した。

検出された溝跡の長さは5.8ｍで、検出面での幅は46～62㎝である。南東部が15号溝跡に削られているため不明だが、本遺構周辺で検出された溝跡はＬ字形に屈曲するものが多いことから、本遺構も東方向に続いていた可能性も否定できない。遺構の断面形は逆台形で、検出面からの深さは約20㎝である。なお、出土遺物はなかった。

ま と め

本遺構は、重複関係から、15～16世紀以前に位置付けられる１号堀跡よりは古い時期のものであると判断される。遺構の具体的な性格については不明である。（鶴　見）

第６節　井　戸　跡

調査区東部と西部で１基ずつ、計２基の井戸跡を検出した。ともに井桁や井戸枠を伴わず、当初は土坑と考えて調査を進めたが、遺構底面が湧水層まで達することから素掘りの井戸跡と判断した。所属時期は、１号井戸跡が古代以降、２号井戸跡が古墳時代以降と考えられるが、周辺遺構との関係から中世に下る可能性もある。

１号井戸跡　ＳＥ01（図46、写真60・71）

本遺構は調査区東部の南西隅にあたるＧ５・６グリッドに位置する。検出面はＬⅣ上面である。

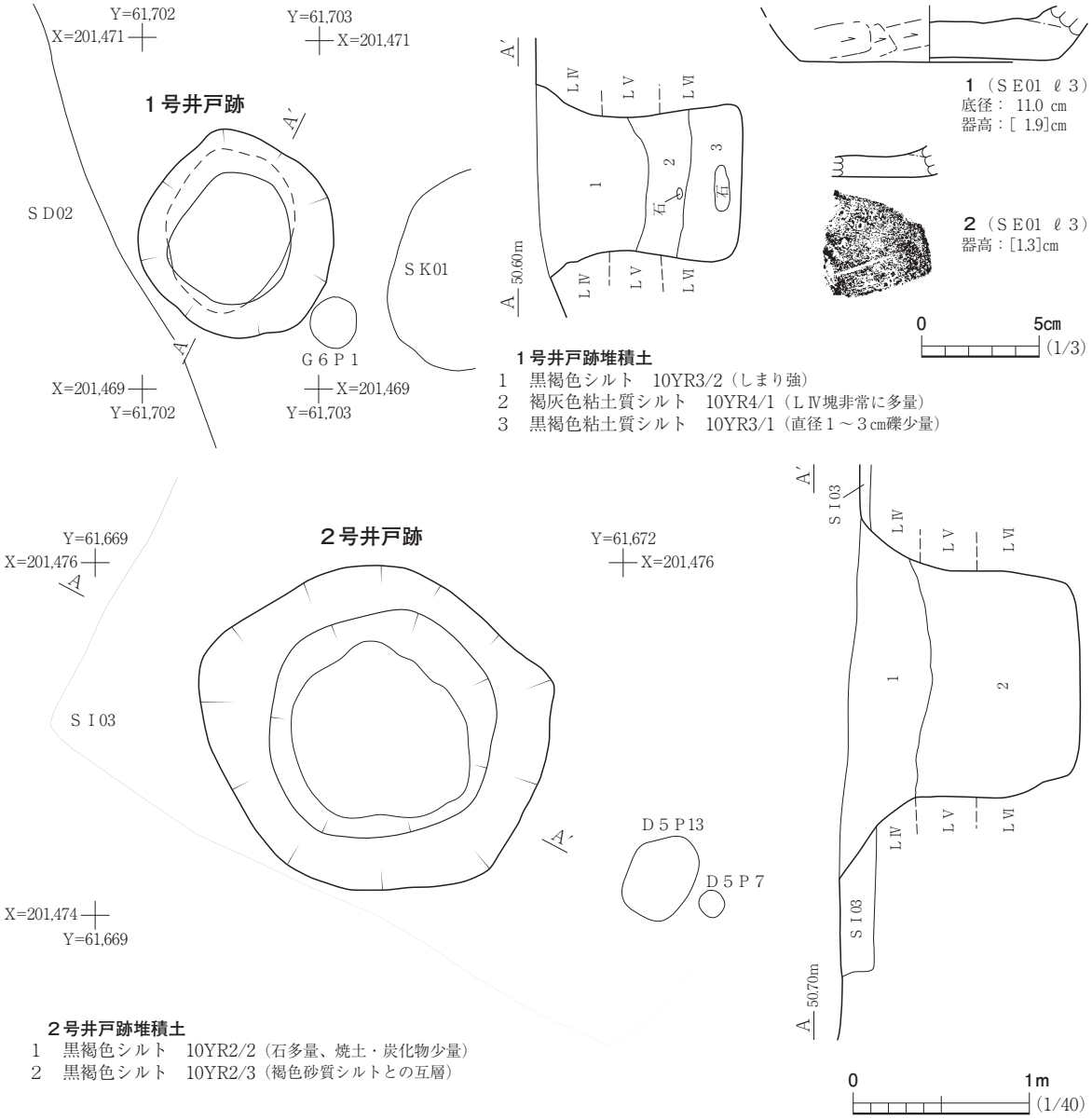


図46　１・２号井戸跡、１号井戸跡出土遺物

重複する遺構はないが、西側には２号溝跡、東側には１号土坑及びＧ６Ｐ１が隣接している。また、東に４ｍには１号堀跡がある。

検出面での平面形は、直径1.1～1.18ｍの不整円形で、隣接する１号土坑に近い規模・形状を呈する。検出面から深さ30㎝あたりまで緩やかに傾斜し、ＬⅤ上面付近で楕円形状にすぼまった後、南北壁を中心として抉れて底面に至る。検出面からの深さは1.16ｍで、基盤の礫層であるＬⅥは45㎝掘り込まれている。

堆積土は、色調・含有物の違い等により３層に分層した。均質な黒褐色シルトのℓ１とＬⅣ塊を非常に多く含む褐灰色粘土質シルトのℓ２は人為堆積土で、ℓ３は自然堆積土と考えられる。

遺物は、ℓ３から土師器甕の底部片が２点出土した。図46－１は、底部の内外面はナデ調整だが、体部下端には横方向のヘラケズリが施されている。図46－２は、全体的に磨滅しており調整は不明だが、底面外面に木葉痕が認められる。

本遺構は、基盤の礫層を深く掘り込み、遺構底面が湧水層まで達することから井戸跡と判断した。遺構の所属時期は、出土土器の特徴から古代以降と考えられるが、１号堀跡や小穴群との関連で中世まで下る可能性もある。（草　野）

２号井戸跡　ＳＥ02（図46、写真60）

本遺構は調査区西部の中央北寄り、Ｃ５・Ｄ５グリッドに位置する。ＬⅣ上面で検出された３号住居跡の覆土上面で検出され、住居跡の南西壁より内側を深く掘り込んでつくられていることから、同住居跡よりも新しいと判断した。この他、直接重複する遺構はないが、周囲には小穴群が点在する。

検出面での平面形は、長軸2.02ｍ、短軸1.4～1.84ｍの不整楕円形を呈する。検出面から深さ40㎝あたりまでは緩やかに傾斜し、ＬⅤ上面付近で直径約1.3ｍの円形状にすぼまった後、そこから垂直気味に底面に至る。検出面からの深さは約1.3ｍで、基盤の礫層であるＬⅥは60㎝掘り込まれている。

堆積土は黒褐色シルトで、含有物等の違いにより２層に分層した。ℓ１は石や焼土・炭化物を含むが比較的均質な土である。ℓ２は黒褐色シルトとＬⅣに起因する褐色砂質シルトとの互層である。いずれも人為堆積土と判断した。

遺物は、ℓ１から土師器片４点が出土したが、小片のため図示できなかった。これらは、上述した重複する３号住居跡に伴うものの可能性が高い。

本遺構は、基盤の礫層を深く掘り込み、遺構底面が湧水層まで達することから井戸跡と判断した。遺構の所属時期は、重複する３号住居跡より新しいため、古墳時代以降に位置付けられる。なお、中世に属すると考えられる小穴群が周囲に広がる点を踏まえると、中世まで下る可能性もある。

（廣　川）

第７節　特 殊 遺 構

特殊遺構は１基確認した。平面形の特徴からは竪穴住居跡の可能性が考えられたが、底面の起伏が顕著であること等から、性格を特定することができなかった。

１号特殊遺構　ＳＸ01

遺　　構（図47、写真61・62）

本遺構は、調査区東部の中央付近、Ｇ３・４グリッドに位置する。検出面はＬⅣ上面である。１号堀跡と３号溝跡と重複し、１号堀跡より古く、３号溝跡よりは新しい。

堆積土は黒褐色シルトを基調とし、下部を中心にＬⅣ塊が多く含まれる。ＬⅡ由来の土を主体とする人為堆積土と考えられる。

遺構の西半部は１号堀跡に大きく削られているが、確認された周壁は直線的で、残存範囲による限り、平面形は南北軸3.2ｍ前後の方形ないし長方形を呈するものと考えられる。検出面からの深さは概ね15cm前後を測るが、周壁より50～70cmほど内側のあたりから底面の起伏が目立ち、窪みの顕著な箇所では検出面からの深さが20cmほどになる。

遺物はℓ１上層で古墳時代前期の特徴を持つ土師器片30点が出土したが、接合関係をもたない

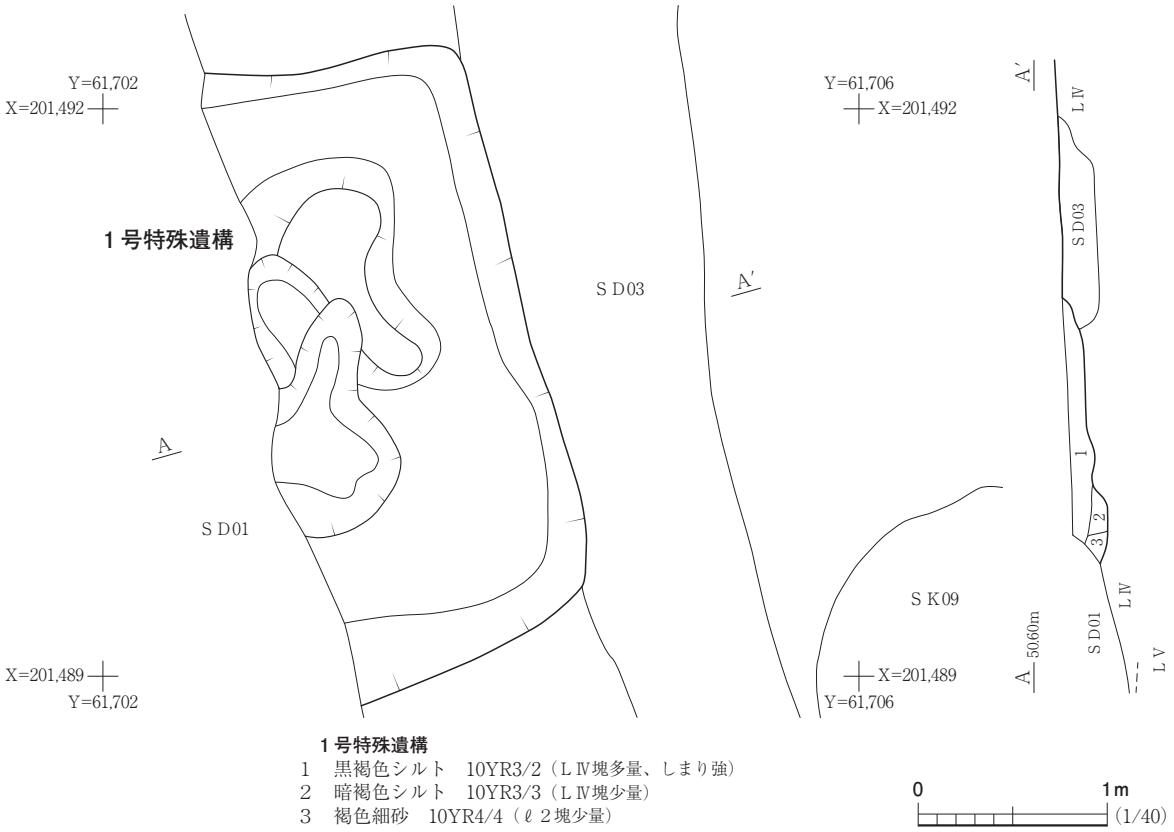


図47　１号特殊遺構

細片が多く図示し得なかった。

ただし、このうち１点が１号堀跡のℓ４から出土した壺(図34－１)と接合しており、１号堀跡のℓ４から出土した他の土師器(図34－２～４)についても本来は本遺構の覆土に含まれていたものが流出したものと考えられる。

ま と め

本遺構の所属時期は、出土遺物から古墳時代以降と考えられ、また１号堀跡の開削時に埋没していた点を考え合わせると中世の屋敷跡が営まれる15～16世紀以前であることは確かである。ただし、それ以上絞り込む根拠はないため、大まかに古墳時代～中世頃としておきたい。

遺構の具体的な性格は不明である。なお、検出段階では、平面形の特徴と出土遺物から古墳時代前期の竪穴住居跡と推定されたが、底面の起伏が顕著で貼床等の痕跡も認められず、竪穴住居跡と判断する根拠は得られなかった。ただ、つくりかけの竪穴住居跡の可能性は残されている。（草　野）

第８節　小　穴　群

遺　　構（図48～55、写真63～67）

検出した小穴は253基である。調査区ごとに見ると、東部が146基、西部が107基で、確認された数の差はあまり大きくない。調査区東部・西部ともに遺構検出面はＬⅣ上面である。

調査区西部では、Ｃ４・５グリッド周辺と、Ｄ６グリッド周辺に小穴が集中している。Ｃ４・５グリッドで確認された小穴は、同グリッドで複数の建物跡が確認されていることから、建物跡の柱穴であったと推定される。

調査区東部では、１号堀跡で区画された内部に小穴が集中している。特に、Ｇ２グリッド、Ｈ２・３グリッドに多く、周辺で建物跡も確認されているため、建物跡の柱穴と推定される。それ以外の場所で確認された小穴は、Ｇ２グリッド、Ｈ２・３グリッドに比べると密度が低い。Ｆ４グリッドやＩ４グリッドでは、１号堀跡や４号溝跡等と同じ軸線方同で並ぶ小穴があり、堀や溝に沿って設置された柱列跡が存在していたと推定される。

各小穴の径は10～60㎝前後とばらつきが見られるが、概ね20～30㎝前後のものが多い。平面形は円形ないし歪んだ円形を呈するものが大半だが、調査区西部では方形を基調とするものも数基確認された。検出面からの深さは、浅いものでは10㎝以下、深いものでは最大64㎝のものもある。

堆積土は、黒褐色または灰黄褐色シルトの単層のものがほとんどで、これらは柱が抜き取られた後に堆積した自然堆積土と判断される。柱痕が観察できたものによれば、柱材の直径は15～20㎝である。また、Ｈ３Ｐ28では、柱の抜き取り痕が確認された。

遺　　物（図55、写真71）

253基の小穴のうち、11基の小穴から、土師器や瓦質土器が各１～４点出土した。そのうち、瓦質土器１点を図示した。土師器は小片のため図示できなかったが、古墳時代や古代のものとみられる。

図55－１はＧ２Ｐ２から出土した瓦質土器の風炉と考えられる破片である。頸部に雷文があり、窓と考えられる透かし部が僅かに確認できる。

ま と め

検出した小穴は、建物跡あるいは柱列跡等の柱穴と推定される。各小穴の厳密な所属時期は不明だが、６号建物跡の周囲で確認されたＧ２Ｐ２から中世の瓦質土器が出土したことから、中世のものが中心と考えられる。調査区東部は、１号堀跡の内側にあたり、複数の掘立柱建物跡も確認されていることから、屋敷地の中心となる箇所と推定される。小穴は建物跡の周囲や、１号堀跡に沿うよう分布しているため、確認できたものとは別の建物や、堀に沿って設置された柵または塀などが存在していたと推定される。

調査区西部で確認された方形を基調とするものは、３号建物跡と同様の時期の可能性がある。なお、１号堀跡で区画された内部の遺構では、近世の遺物も僅かに出土しているため、近世の小穴も存在している可能性がある。（鶴　見）

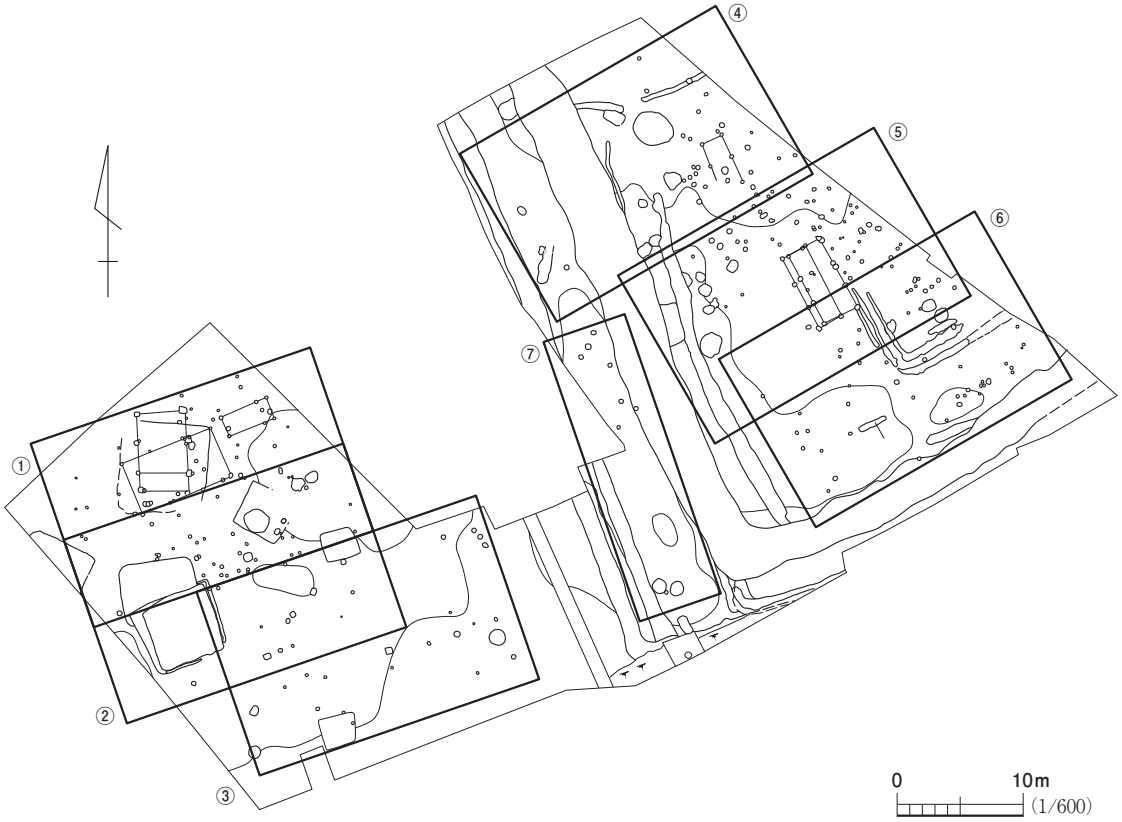


図48　小穴群全体図

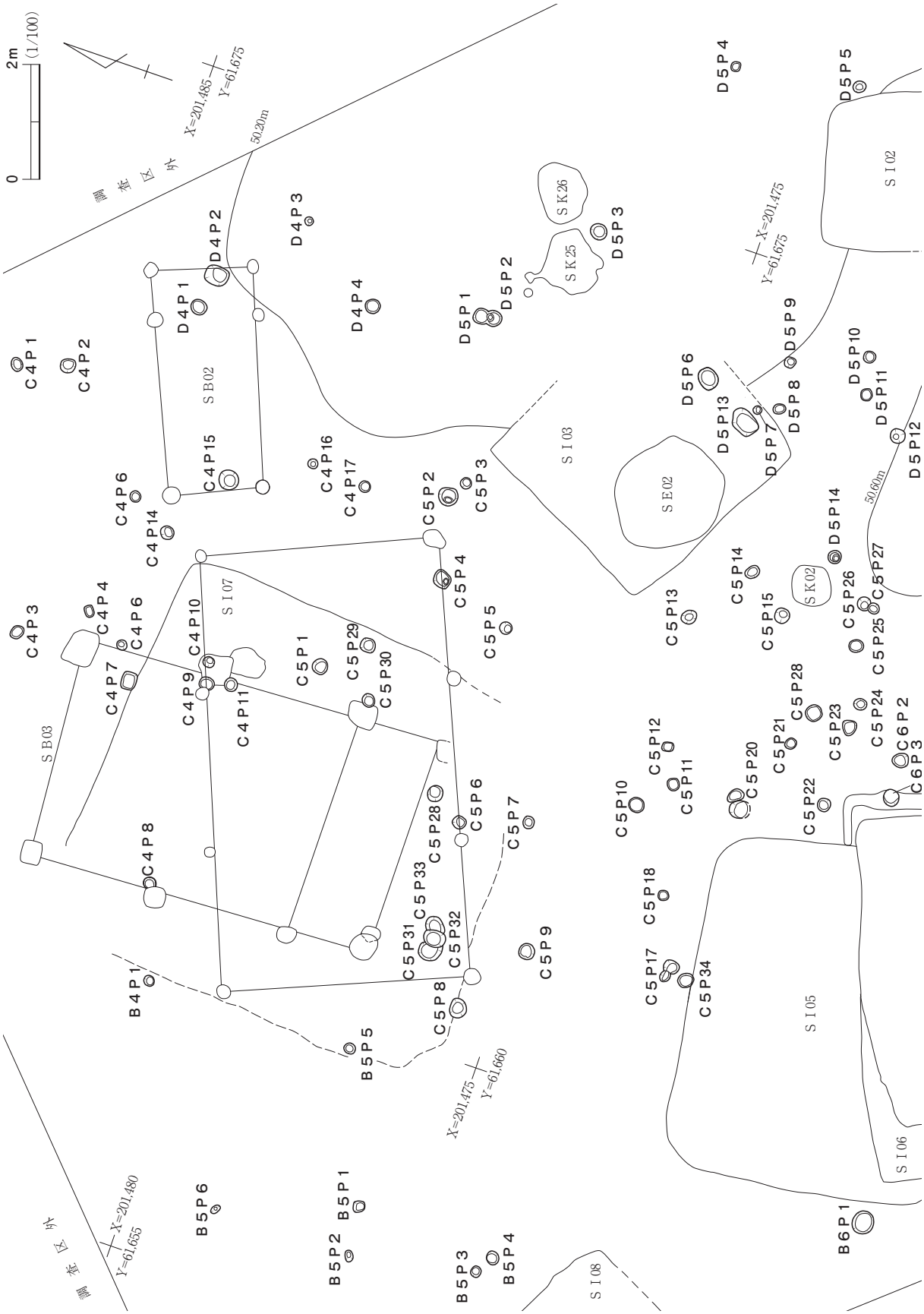

0
2m
(1/100)
調査区外
X=201.485
Y=61.675
50.20m
D4P1
D4P2
D4P3
D4P4
D5P1
D5P2
D5P3
D5P4
D5P5
D5P6
D5P7
D5P8
D5P9
D5P10
D5P11
D5P12
D5P13
D5P14
SK25
SK26
SK02
SI02
SI03
SI05
SI06
SI07
SI08
SB02
SB03
SE02
X=201.475
Y=61.675
50.60m
C4P1
C4P2
C4P3
C4P4
C4P6
C4P7
C4P8
C4P9
C4P10
C4P11
C4P14
C4P15
C4P16
C4P17
C5P1
C5P2
C5P3
C5P4
C5P5
C5P6
C5P7
C5P8
C5P9
C5P10
C5P11
C5P12
C5P13
C5P14
C5P15
C5P17
C5P18
C5P20
C5P21
C5P22
C5P23
C5P24
C5P25
C5P26
C5P27
C5P28
C5P29
C5P30
C5P31
C5P32
C5P33
C5P34
C6P2
C6P3
B4P1
B5P1
B5P2
B5P3
B5P4
B5P5
B5P6
B6P1
X=201.475
Y=61.660
X=201.480
Y=61.655

図49　小穴群①

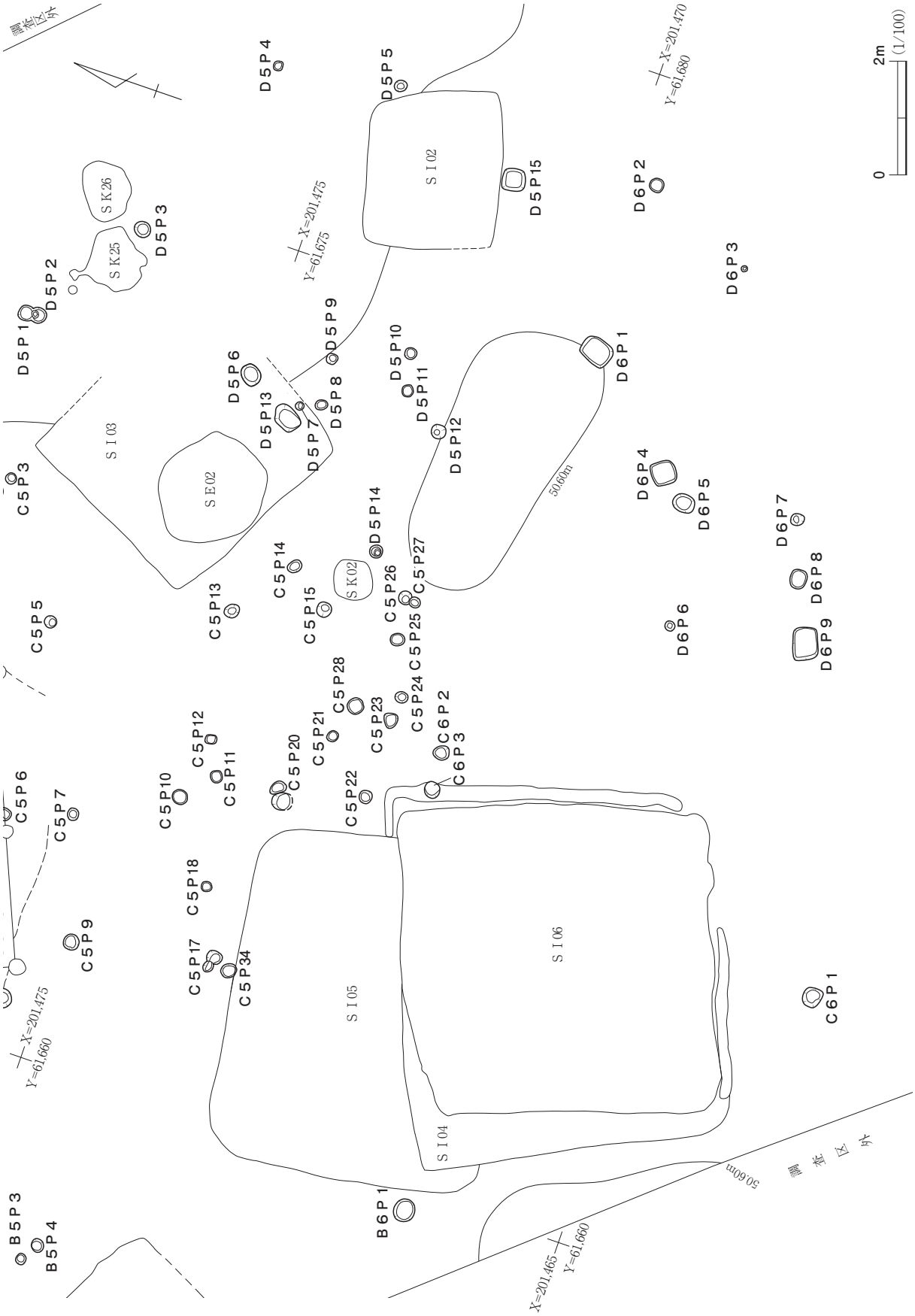

調査区外
D5P4
D5P5
X=201.470
Y=61.680
2m
0
(1/100)
S I 02
D5P15
D6P2
S K26
S K25
D5P3
D5P2
D5P1
X=201.475
Y=61.675
D6P3
D5P9
D5P10
D5P11
D6P1
D5P6
D5P13
D5P8
D5P7
D5P12
S I 03
S E 02
C5P3
50.60m
D6P4
D6P5
D6P7
D5P14
C5P14
S K02
C5P27
C5P26
C5P25
C5P15
C5P13
C5P5
D6P6
D6P8
D6P9
C5P28
C5P24
C5P23
C6P2
C5P21
C5P12
C5P20
C6P3
C5P11
C5P10
C5P22
C5P6
C5P7
C5P18
C5P9
C5P17
C5P34
S I 06
S I 05
C6P1
X=201.475
Y=61.660
S I 04
50.60m
調査区外
B6P1
B5P3
B5P4
X=201.465
Y=61.660

図50　小穴群②

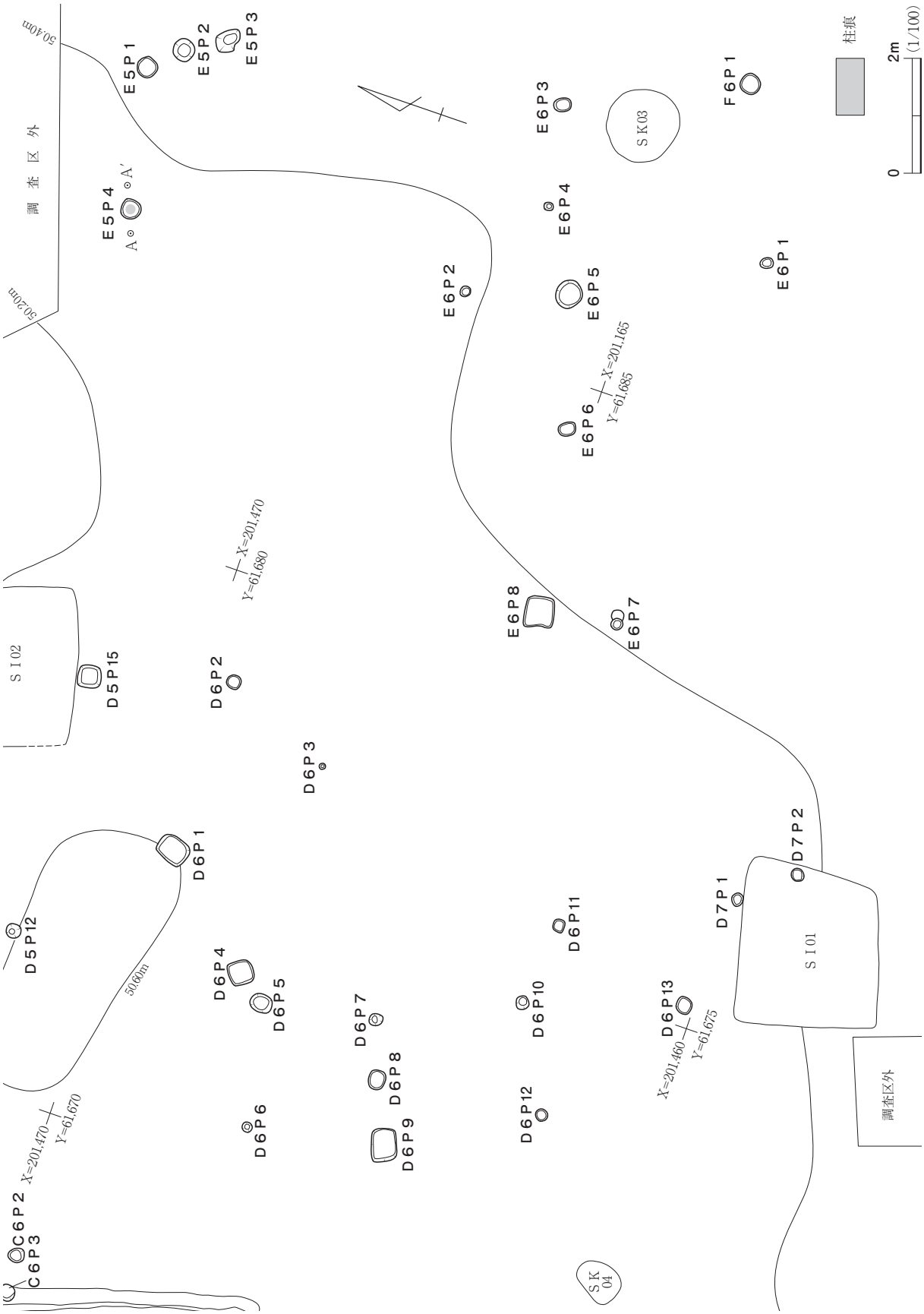

調査区外
50.40m
50.20m
50.60m
E5P1
E5P2
E5P3
E5P4
A
A′
E6P1
E6P2
E6P3
E6P4
E6P5
E6P6
E6P7
E6P8
F6P1
SK03
SK04
SI01
SI02
D5P12
D5P15
D6P1
D6P2
D6P3
D6P4
D6P5
D6P6
D6P7
D6P8
D6P9
D6P10
D6P11
D6P12
D6P13
D7P1
D7P2
C6P2
C6P3
X=201.470
Y=61.670
X=201.470
Y=61.680
X=201.165
Y=61.685
X=201.460
Y=61.675
調査区外
柱痕
0
2m
(1/100)

図51　小穴群③

柱痕
0
2m
(1/100)
X=201,510
Y=61,710
調査区外
H2P2
H2P1
G2P8
G2P9
D
D′
H2P8
H2P10
H3P1
G2P20
F
F′
G2P21
H2P9
G2P22
G3P1
G2P6
C
C′
G2P7
SB06
G2P3
B
B′
G1P1
G2P2
SD11
G1P2
G2P1
Y=61,700
X=201,510
SK14
G2P4
G2P5
G2P11
G2P10
G2P13
G2P12
G2P14
G2P15
G2P16
G2P17
G2P18
G2P19
SK19
SK20
SD12
SD05
50.20m
SK21
SK18
SK17
SD03
50.4m
SD01
X=201,495
Y=61,700
50.20m
F3P1
SK07
SK06
SD07
50.40m

図52　小穴群④

柱痕
2m
(1/100)
0
Y=61,720
X=201,500
50.20m
S B05
S B04
S D04
S D09
S D08
S K23
S K22
S K10
S K11
S K12
S K13
S K08
S K15
S K16
S K09
S D03
S D01
S X01
X=201,495
Y=61,710
X=201,485
Y=61,730
H2P15
H2P16
H2P6
H2P5
H2P7
H2P12
H2P11
H2P8
H2P10
H3P1
H3P3
H3P5
H3P4
H3P2
G2P22
G3P1
G3P5
G3P6
G3P7
G3P8
G3P3
G3P4
G3P9
G3P10
G3P11
G3P2
H3P11
H3P21
H3P10
H3P9
H3P7
H3P14
H3P17
H3P18
H3P19
H3P20
H3P34
H3P33
H3P22
H3P23
H3P24
H3P25
H3P26
H3P27
H3P28
H3P29
H3P31
H3P30
H3P32
H3P35
H3P36
H3P15
H3P12
H3P13
H3P6
H3P16
H4P4
H4P2
H4P3
H4P5
H4P8
H4P1
I3P1
I3P2
I3P4
I3P5
I3P6
I3P8
I3P9
I3P13
I3P12
I3P11
I3P16
I3P15
I3P14
I3P17
I3P10
I3P7

図53　小穴群⑤

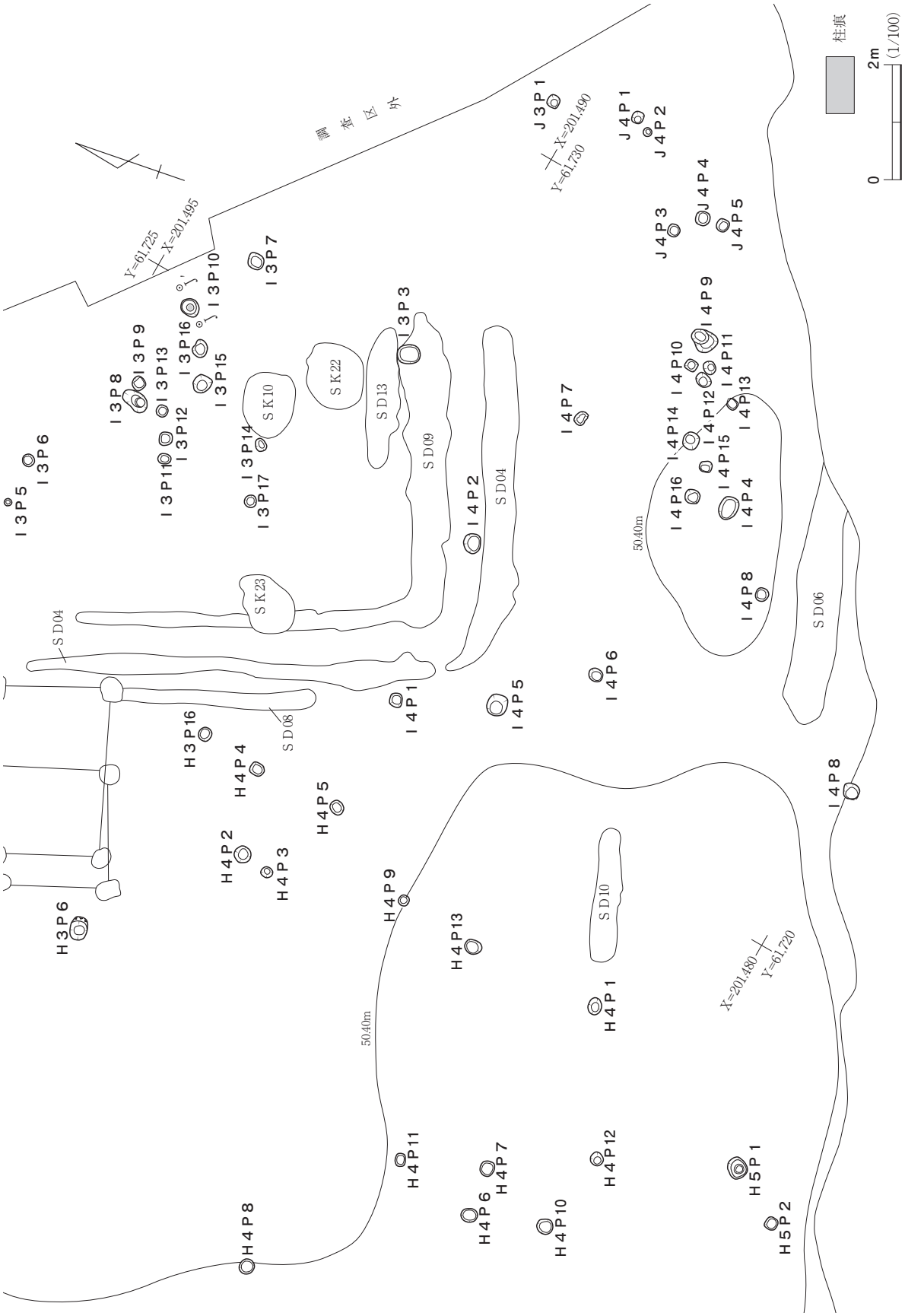
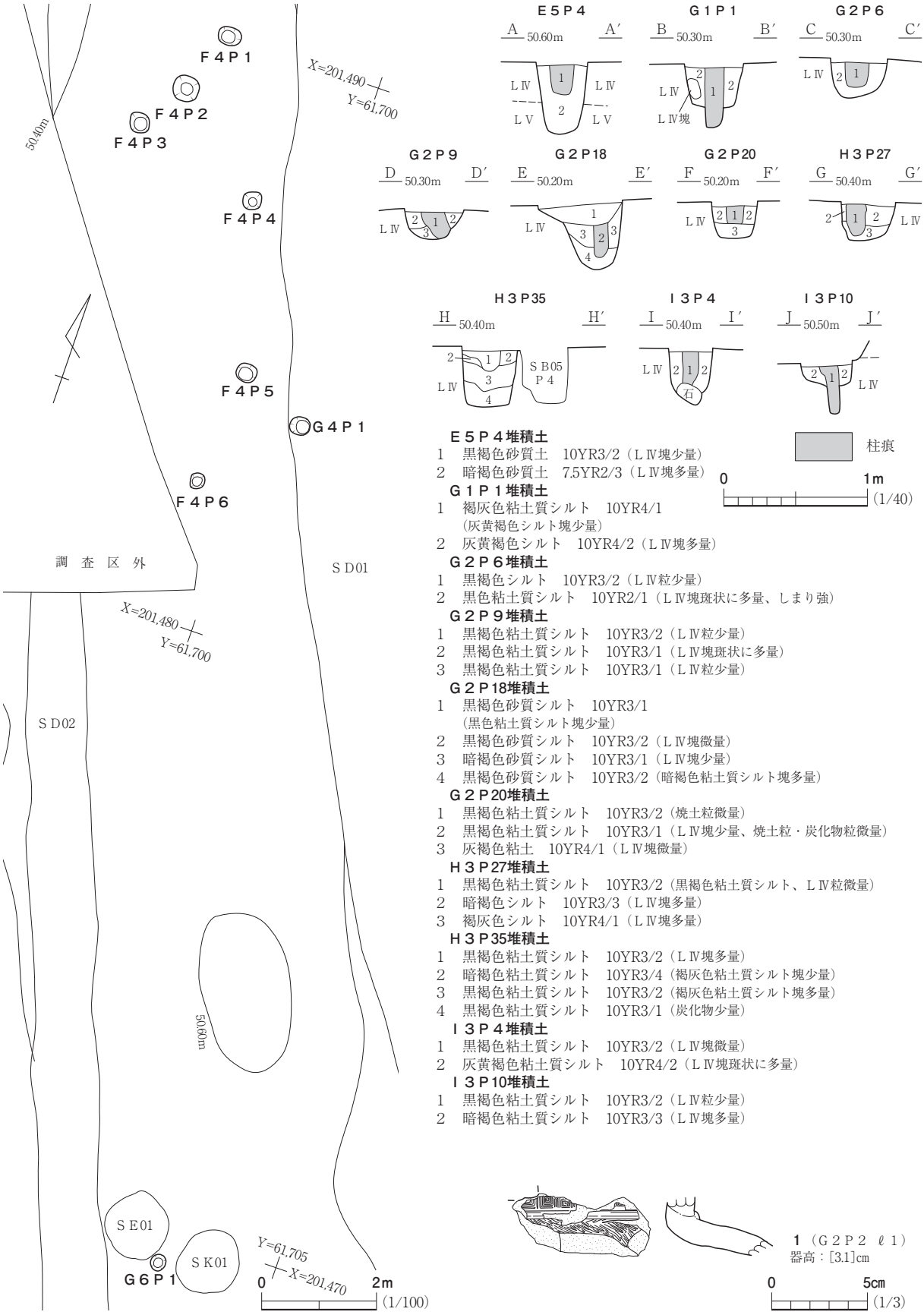

調査区外
柱痕
0
2m
(1/100)
Y=61,725
X=201,495
Y=61,730
X=201,490
X=201,480
Y=61,720
50.40m
50.40m
S D04
S D08
S D09
S D13
S D04
S D06
S D10
S K10
S K22
S K23
I 3 P 5
I 3 P 6
I 3 P 7
I 3 P 8
I 3 P 9
I 3 P 10
I 3 P 11
I 3 P 12
I 3 P 13
I 3 P 14
I 3 P 15
I 3 P 16
I 3 P 17
I 3 P 3
I 4 P 1
I 4 P 2
I 4 P 4
I 4 P 5
I 4 P 6
I 4 P 7
I 4 P 8
I 4 P 9
I 4 P 10
I 4 P 11
I 4 P 12
I 4 P 13
I 4 P 14
I 4 P 15
I 4 P 16
J 3 P 1
J 4 P 1
J 4 P 2
J 4 P 3
J 4 P 4
J 4 P 5
H 3 P 6
H 3 P 16
H 4 P 2
H 4 P 3
H 4 P 4
H 4 P 5
H 4 P 6
H 4 P 7
H 4 P 8
H 4 P 9
H 4 P 10
H 4 P 11
H 4 P 12
H 4 P 13
H 4 P 1
H 5 P 1
H 5 P 2

図54　小穴群⑥



E５P４堆積土
1　黒褐色砂質土　10YR3/2（L Ⅳ塊少量）
2　暗褐色砂質土　7.5YR2/3（L Ⅳ塊多量）

G１P１堆積土
1　褐灰色粘土質シルト　10YR4/1
（灰黄褐色シルト塊少量）
2　灰黄褐色シルト　10YR4/2（L Ⅳ塊多量）

G２P６堆積土
1　黒褐色シルト　10YR3/2（L Ⅳ粒少量）
2　黒色粘土質シルト　10YR2/1（L Ⅳ塊斑状に多量、しまり強）

G２P９堆積土
1　黒褐色粘土質シルト　10YR3/2（L Ⅳ粒少量）
2　黒褐色粘土質シルト　10YR3/1（L Ⅳ塊斑状に多量）
3　黒褐色粘土質シルト　10YR3/1（L Ⅳ粒少量）

G２P18堆積土
1　黒褐色砂質シルト　10YR3/1
（黒色粘土質シルト塊少量）
2　黒褐色砂質シルト　10YR3/2（L Ⅳ塊微量）
3　暗褐色砂質シルト　10YR3/1（L Ⅳ塊少量）
4　黒褐色砂質シルト　10YR3/2（暗褐色粘土質シルト塊多量）

G２P20堆積土
1　黒褐色粘土質シルト　10YR3/2（焼土粒微量）
2　黒褐色粘土質シルト　10YR3/1（L Ⅳ塊少量、焼土粒・炭化物粒微量）
3　灰褐色粘土　10YR4/1（L Ⅳ塊微量）

H３P27堆積土
1　黒褐色粘土質シルト　10YR3/2（黒褐色粘土質シルト、L Ⅳ粒微量）
2　暗褐色シルト　10YR3/3（L Ⅳ塊多量）
3　褐灰色シルト　10YR4/1（L Ⅳ塊多量）

H３P35堆積土
1　黒褐色粘土質シルト　10YR3/2（L Ⅳ塊多量）
2　暗褐色粘土質シルト　10YR3/4（褐灰色粘土質シルト塊少量）
3　黒褐色粘土質シルト　10YR3/2（褐灰色粘土質シルト塊多量）
4　黒褐色粘土質シルト　10YR3/1（炭化物少量）

I３P４堆積土
1　黒褐色粘土質シルト　10YR3/2（L Ⅳ塊微量）
2　灰黄褐色粘土質シルト　10YR4/2（L Ⅳ塊斑状に多量）

I３P10堆積土
1　黒褐色粘土質シルト　10YR3/2（L Ⅳ粒少量）
2　暗褐色粘土質シルト　10YR3/3（L Ⅳ塊多量）

図55　小穴群⑦、Ｇ２Ｐ２出土遺物

表１　小穴一覧(西部)

グリッド	P番号	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	堆積土	備考
B４	1	20	18	20	△B１	
B５	1	23	20	20.5	B１	
	2	20	14	18	△B１	
	3	20	18	14	B３	
	4	25	20	17	B１	
	5	20	19	20.5	△B１	
	6	18	12	14	△B１	
B６	1	42	36	30	△B１	
C４	1	24	20	9	C３	
	2	26	24	12	○B１	
	3	27	20	19	○B１	
	4	20	16	19	☆B１	
	5	18	18	11	△B１	
	6	20	18	24	B１	
	7	34	26	10	☆C１	
	8	22	18	14.5	△B３	
	9	26	20	32	△B３	
	10	20	20	31	△B３	
	11	23	22	28.5	△B３	
	12	18	18	9	△B１	
	13	20	20	26	ℓ１△B１ ℓ２△B３	ℓ１柱痕
	14	26	22	16	△B１	
	15	36	34	29	○B１	
C５	1	28	27	7.5	△C３	
	2	35	32	32	△B１	
	3	20	20	16	△B１	
	4	34	28	41	ℓ１△B１ ℓ２　G３	
	5	22	22	18	F３	
	6	25	23	16	ℓ１△B１ ℓ２G３	
	7	23	20	4	F４	
	8	34	30	23.5	ℓ１△B１ ℓ２　F３	ℓ１柱痕
	9	28	27	23	◎B１	
	10	27	26	4	△C３	
	11	23	22	3	△C３	
	12	20	16	30	△B１	
	13	28	25	18	ℓ１△C１ ℓ２　C３	ℓ１柱痕
	14	26	20	7	F３	
	15	28	26	30	△B１	
	16	20	18	15	△C３	P17→P16
	17	28	22	12	△C３	P17→P16
	18	18	18	7	△B１	
	19	32	32	39	△B１	
	20	30	10	9	△C１	
	21	10	12	14	△B１	
	22	24	24	17	△C３	
	23	28	26	10	△B３	
	24	22	20	13	△B１	
	25	24	22	6	△B３	
	26	22	20	24	C３	P26→P27
	27	20	18	25	△B１	P26→P27
	28	30	30	16	○B１	
	29	26	24	24.5	△B１	
	30	24	20	12	F３	
	31	44	36	12.5	△B３	
	32	40	30	19	△B１	
	33	36	28	23	△B３	
	34	28	26	47	○C３	
C６	1	36	34	13	F３	
	2	30	28	13	△B１	
	3	30	28	21	☆B１	
D４	1	29	26	23	○B１	
	2	44	34	28.5	△B３	
	3	26	26	8	△C３	
	4	25	25	28	△B１	
D５	1	30	28	15	△C３	P１→P２
	2	28	20	15	△C３	P１→P２
	3	30	28	5	F３	
	4	20	18	15	○B１	
	5	22	20	12	○B１	
	6	1	32	24	○B１	
	7	15	15	15	F３	
	8	22	18	9	◎B１	
	9	20	18	8	F４	
	10	21	21	11.5	F３	
	11	22	20	25	◎B１	
	12	28	26	10	F３	
	13	52	36	64	△C３	
	14	24	24	26	△B１	
	15	46	36	30	ℓ１◎B１ ℓ２△C３	
D６	1	60	44	15	△C１	
	2	25	25	24	△B３	
	3	10	10	4.5	B１	
	4	52	42	15	△C１	
	5	40	32	21	C１	
	6	18	17	15	B１	
	7	26	21	26	△C３	
	8	35	30	25	○C３	
	9	58	44	10	○C３	
	10	24	22	18	F３	
	11	22	20	21	C３	
	12	21	20	7	C３	
	13	32	28	28	F４	
D７	1	22	20	29.5	△C３	
	2	24	20	29.5	△C３	
E５	1	38	35	49	○C１	
	2	40	38	14	△B１	
	3	50	36	8.5	B１	
	4	38	34	51	図55	
E６	1	22	20	5	C３	
	2	20	18	6	F４	
	3	32	24	11.5	○C３	
	4	16	14	11	C３	
	5	50	46	12	△C３	
	6	30	23	3	ℓ１　C１ ℓ２△F３	ℓ１柱痕
	7	20	20	10	○C３	
	8	68	52	15	○F４	
F６	1	36	36	14	△C３	

含有物：☆　ⅠⅣ塊、焼土、炭化物
◎　ⅠⅣ塊、焼土
○　ⅠⅣ塊、炭化物
△　ⅠⅣ塊
なし　含有物なし

土色：A　黒色　10YR2/1
B　黒褐色　10Y3/2
C　暗褐色　10YR3/3
D　褐灰色　10YR4/1
E　灰黄褐色　10YR4/2
F　にぶい黄褐色　10YR4/3
G　褐色　10YR4/4

土質：1　シルト
2　粘土質シルト
3　砂質シルト
4　砂
5　粘土

表２　小穴一覧（東部）

グリッド	Ｐ番号	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	堆積土	備考
Ｆ３	1	42	34	13.5	△Ｂ１	
Ｆ４	1	42	32	23.5	△Ｂ３	
	2	46	45	35.5	○Ｂ３	
	3	40	35	25.5	△Ｂ３	
	4	36	33	20.5	△Ｂ１	
	5	36	32	15.5	Ｃ１	
	6	28	25	22	△Ｂ２	
Ｇ１	1	47	45	42	図55	
	2	28	26	18	△Ｅ２	
Ｇ２	1	34	28	29.5	△Ｂ２	
	2	33	31	36	○Ｂ２	瓦質土器
	3	30	23	35	△Ｂ２	
	4	32	28	15	△Ｂ２	
	5	29	26	14.5	◎Ｂ5	
	6	42	40	28	図55	
	7	30	23	9	△Ｂ２	
	8	20	16	8	△Ｂ２	
	9	44	40	20	図55	
	10	31	25	13.5	△Ｂ２	
	11	35	35	11	△Ｄ１	
	12	27	25	13	◎Ｂ２	
	13	32	31	16.5	◎Ｂ２	
	14	34	27	15.5	◎Ｄ１	
	15	40	35	35	△Ｂ２	
	16	31	26	28	◎Ｄ１	
	17	41	39	23.5	◎Ｄ１	
	18	61	50	30	図55	
	19	38	28	23.5	ℓ１△Ｃ２ ℓ２△Ａ５	
	20	31	30	25	図55	
	21	40	33	12	△Ｂ１	
	22	28	24	17	ℓ１△Ｂ２ ℓ２　Ｂ２	
Ｇ３	1	23	20	14	○Ｂ１	
	2	24	22	40	△Ｂ３	
	3	42	40	23.5	◎Ｅ２	
	4	54	45	35	△Ｂ２	
	5	45	40	20	◎Ｂ１	
	6	30	30	22	△Ｂ３	
	7	25	23	16.5	△Ｂ２	
	8	33	35	68.5	Ｃ２	
	9	25	23	18.5	△Ｂ２	
	10	22	19	13	△Ｅ２	
	11	20	19	8	△Ｂ２	
Ｇ４	1	37	31	32.5	△Ｂ２	
Ｇ６	1	30	26	18.5	△Ｂ１	
Ｈ２	1	25	23	14	△Ｂ１	
	2	30	25	18	△Ｂ１	
	3	23	21	12.5	△Ｂ１	
	4	20	18	13.5	△Ｂ１	
	5	33	26	15	○Ｂ１	
	6	30	12	30.5	△Ｂ１	
	7	23	19	8	○Ｂ１	
	8	22	21	20	△Ｂ２	
	9	38	15	12	○Ｂ２	
	10	25	23	19	△Ｂ２	
	11	33	29	20	◎Ｂ２	
	12	34	24	11	△Ｂ１	
Ｈ３	1	32	24	13	☆Ｂ２	
	2	42	30	14	ℓ１☆Ｂ２ ℓ２△Ｂ２	ℓ１柱痕
	3	32	22	18	△Ｂ１	
	4	30	24	11.5	△Ｂ１	Ｐ４→Ｐ５
	5	20	19	8	△Ｂ２	Ｐ４→Ｐ５
	6	41	30	42	△Ｂ２	
	7	38	30	24	◎Ｂ２	
	8	25	22	16.5	欠	
	9	44	33	25	ℓ１△Ｃ１ ℓ２△Ｂ２	
	10	22	20	28.5	△Ｂ２	
	11	24	20	14	△Ｂ２	
	12	32	23	16	△Ｂ２	
	13	15	15	8.5	△Ｂ２	
	14	22	19	12	△Ｂ１	
	15	30	29	21	△Ｂ１	
	16	25	24	16	△Ｂ２	
	17	28	25	23	△Ｂ１	
	18	24	22	10	△Ｂ１	
	19	27	18	10.5	△Ｂ１	
	20	22	20	17.5	△Ｂ１	
	21	20	17	13	△Ｂ２	
	22	15	14	16.5	△Ｂ２	
	23	10	9	7	△Ｂ２	
	24	40	35	10	ℓ１△Ｄ１ ℓ２△Ｂ２	
	25	24	23	27	△Ｄ２	
	26	23	20	18	△Ｂ２	
	27	45	38	32	図55	
	28	45	26	32	△Ｂ２	
	29	20	19	19	△Ｂ２	
	30	18	14	7	△Ｂ１	
	31	34	28	30.5	△Ｂ１	
	32	30	28	24	△Ｂ１	
	33	18	17	12	△Ｂ２	
	34	43	32	14	Ｅ２	
	35	46	37	38	図55	
	36	20	16	11	△Ｅ２	
Ｈ４	1	29	24	18	△Ｅ２	
	2	30	28	18	△Ｂ２	
	3	20	18	12	△Ｂ２	
	4	26	22	33.5	△Ｂ２	
	5	26	24	19	△Ｂ２	
	6	30	24	15	△Ｅ２	
	7	28	27	15.5	○Ｂ２	
	8	27	26	16.5	△Ｂ１	
	9	19	19	11	△Ｂ２	
	10	28	27	12.5	△Ｂ２	
	11	23	18	16	△Ｂ２	
	12	25	22	9	△Ｅ２	
	13	30	25	31.5	△Ｃ１	
Ｈ５	1	39	32	33	△Ｂ２	
	2	22	21	19.5	△Ｂ２	
Ｉ３	1	20	20	20	△Ｂ２	
	2	28	25	13.5	△Ｂ２	
	3	40	32	29	△Ｂ２	
	4	31	30	27	図55	
	5	13	13	8	△Ｂ２	
	6	21	20	12.5	△Ｂ２	
	7	32	30	16.5	△Ｄ２	
	8	49	24	36.5	△Ｄ２	
	9	24	24	11	△Ｄ２	
	10	36	30	22.8	図55	
	11	22	18	29.5	△Ｂ１	
	12	26	22	31.5	△Ｂ２	
	13	22	20	17	△Ｂ２	
	14	22	18	11.5	△Ｂ２	
	15	33	30	40	△Ｅ２	
	16	30	24	24	△Ｂ２	
	17	22	22	15.5	△Ｂ２	
Ｉ４	1	28	22	14	△Ｅ２	
	2	34	30	26	△Ｂ２	
	3	32	28	26	△Ｂ２	
	4	42	32	57	○Ｂ２	
	5	40	34	31.5	ℓ１△Ｃ１ ℓ２△Ｄ２	
	6	26	24	28	△Ｅ２	
	7	26	18	12.5	△Ｅ１	
	8	24	24	12.5	△Ｂ２	
	9	47	30	40	△Ｂ２	
	10	24	18	37	△Ｂ２	
	11	24	20	10.5	△Ｂ２	
	12	28	22	30	△Ｂ２	
	13	22	18	34.5	△Ｂ２	
	14	32	30	28	△Ｂ２	
	15	22	18	15.5	△Ｂ２	
	16	28	26	27.5	△Ｂ２	
Ｊ３	1	25	24	11.5	○Ｂ２	
Ｊ４	1	22	20	16.5	△Ｂ１	
	2	15	15	8	△Ｂ１	
	3	22	21	30.5	△Ｃ２	
	4	26	26	27.5	△Ｂ２	
	5	24	22	24.5	△Ｂ２	

第９節　遺構外出土遺物

遺構外からは、土師器、須恵器、瓦質土器、陶器の計200点の遺物が出土した。主体を占めるのは土師器で、他の資料は１～３点程度である。このうち、土師器５点、須恵器１点、瓦質土器１点、陶器１点を図示した。

図56－１～５は土師器である。１は器台で、脚部を欠いている。２はミニチュアの鉢である。内面には丁寧なハケ目が観察される。３は器形不明の土器の台部である。ハケ目が内外面に施されている。４は杯で、内面にはヘラミガキと黒色処理が施されている。外面は底部～体部下端に手持ちヘラケズリを施しているため、ロクロ成形か非ロクロ成形かは不明である。５は壺または甕の底部である。１・２・５は古墳時代前期、４は古代であろうが、３は時期の特定は難しい。

図56－６は須恵器甕の破片である。外面は平行タタキ目、内面は同心円文の当て具痕が観察される。古代のものと考えられる。

図56－７は瓦質土器で、香炉の口縁部と見られ、外面には縦方向のヘラミガキが観察される。15～16世紀頃の資料とみられる。

図56－８は陶器の擂鉢である。11本単位の卸目が間隔をあけて施されている。中・近世のものと考えられる。

（鶴　見）

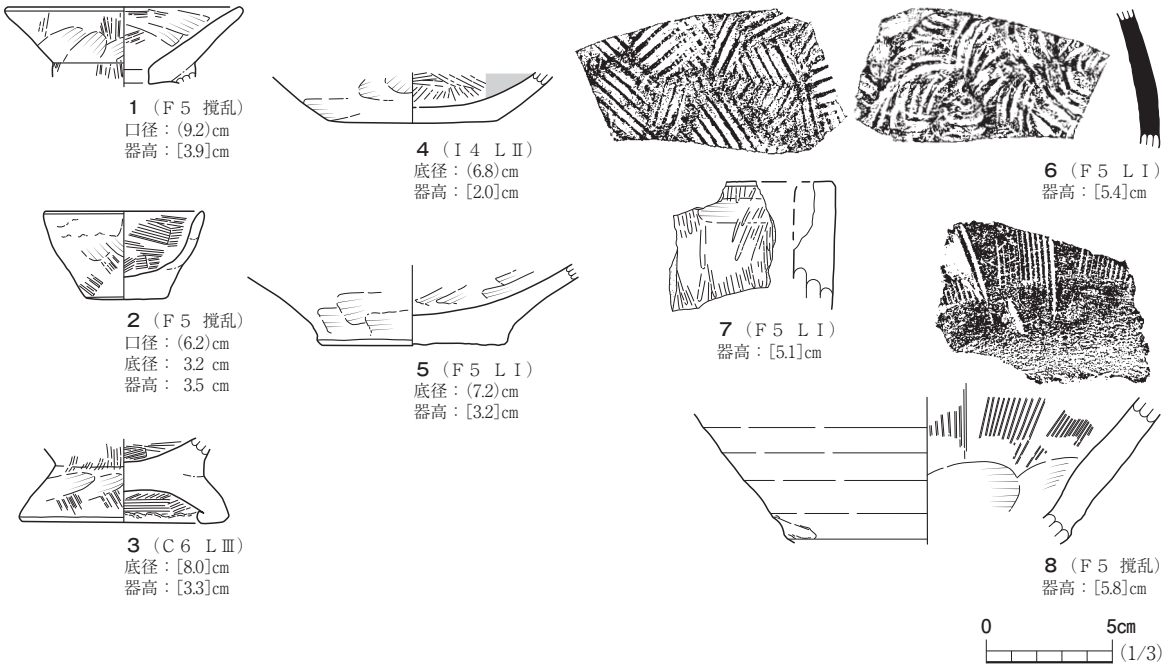


図56　遺構外出土遺物

第３章　　総　　括

中室内遺跡の１・２次調査では、竪穴住居跡８軒、掘立柱建物跡６棟、土坑27基、堀跡・溝跡17条、井戸跡２基、特殊遺構１基、小穴253基を検出した。これらの遺構は、古墳時代～中世に営まれたものと考えられるが、詳細な時期の特定が難しいものも多い。以下、古墳時代、古代～中世の各時代について言及し、総括としたい。

古墳時代

今回の調査では、古墳時代前期の集落跡が見つかったことが成果の一つである。これまで、伊達市保原町の上保原地区では、当該期の集落の発掘調査が行われたことがなかったため、貴重な調査事例となった。調査区西部で検出した竪穴住居跡８軒は、出土遺物から古墳時代前期でも中葉頃のものと判明した。いずれの住居跡も堆積土が薄く、遺存状態は良くないが、平面形は方形を基調とし、貼床が確認された。また、床面で炉跡と思われるものが確認できたのは４・５号住居跡で、他の住居跡では確認されなかった。なお、竪穴住居跡の分布状況から、集落は西側の調査区外にも広がっていると推定される。

古代～中世

古代～中世の主要な遺構は、１～６号建物跡、１号堀跡、４・８・９号溝跡、小穴群である。この内、３号建物跡は、１・２・４～６号建物跡と比べると、柱穴の平面形が円形ではなく方形を基調とすること、柱穴の規模がやや大きいこと、主軸方向が異なっている等の特徴が指摘される。異なる時期の建物跡である可能性が高いが、遺物が出土していないため明確な時期は不明である。重複状況などを考慮すると、古代～中世のものと推定される。また、３号建物跡が位置する調査区西部で検出された方形を基調とする柱穴も古代～中世の可能性がある。この他には、古代の遺物が出土し、主軸方向が１号堀跡と異なる６号溝跡も古代の可能性がある。

中世では、１号堀跡が重要な遺構と言える。１号堀跡は、調査区内でＬ字形に屈曲し、その規模は長さ南北44ｍ以上、東西33ｍ以上、幅３～４ｍ、深さ１～1.6ｍである。区画された内部には、４～６号建物跡の他、同様の建物跡を構成する柱穴とみられる多数の小穴が確認された。また、４・８・９号溝跡も、１号堀跡で区画された内部で３条並行して確認された。このうち、４・９号溝跡は１号堀跡の形状に沿うようにＬ字形に屈曲する。何らかの区画溝と推測されるが、内部に明瞭な建物跡やその他関連するとみられる遺構を確認することができなかったため、具体的な性格は判然としない。また、１号堀跡の区画外にある１・２号建物跡についても、建物の長軸方向が１号

堀跡の東西軸とほぼ一致することから、同時期の建物跡と推測される。

これらの遺構は、中世の屋敷跡及びそれに関連する遺構群と評価される。時期については、１号堀跡から15世紀以降のものとみられる五輪塔の地輪が出土していること、小穴から15～16世紀頃の瓦質土器が出土していることから、概ね15～16世紀頃と推測される。

１号堀跡は、発掘調査以前からその存在が認識されていて、明治時代の字切り図にも描かれている。地籍図を基に作成したものが図57である。字切り図の堀は、北と南で二重に巡っている。内側の堀は、方形を呈するが、南東隅で途切れ全周しない。今回見つかった１号堀跡は、Ｌ字形に屈曲する形状から、地籍図で示されている堀のうち、内側の堀の西辺と南辺の一部と考えられる。また、伊達市教育委員会による確認調査の際に見つかった堀跡（図58－①）は、１号堀跡の延長上にあることから、１号堀跡の続きと考えられる。１号堀跡の南西コーナーから図58－①までは約73ｍである。なお、１号堀跡の南辺が地籍図に描かれた通り東辺に続かずに収束するとすれば、図58－①は、１号堀跡の東端に近い箇所と推測される。

今回の調査区より北側の部分では、福島県教育委員会による確認調査（福島県教育委員会2017）

図57　中室内遺跡周辺の地籍図

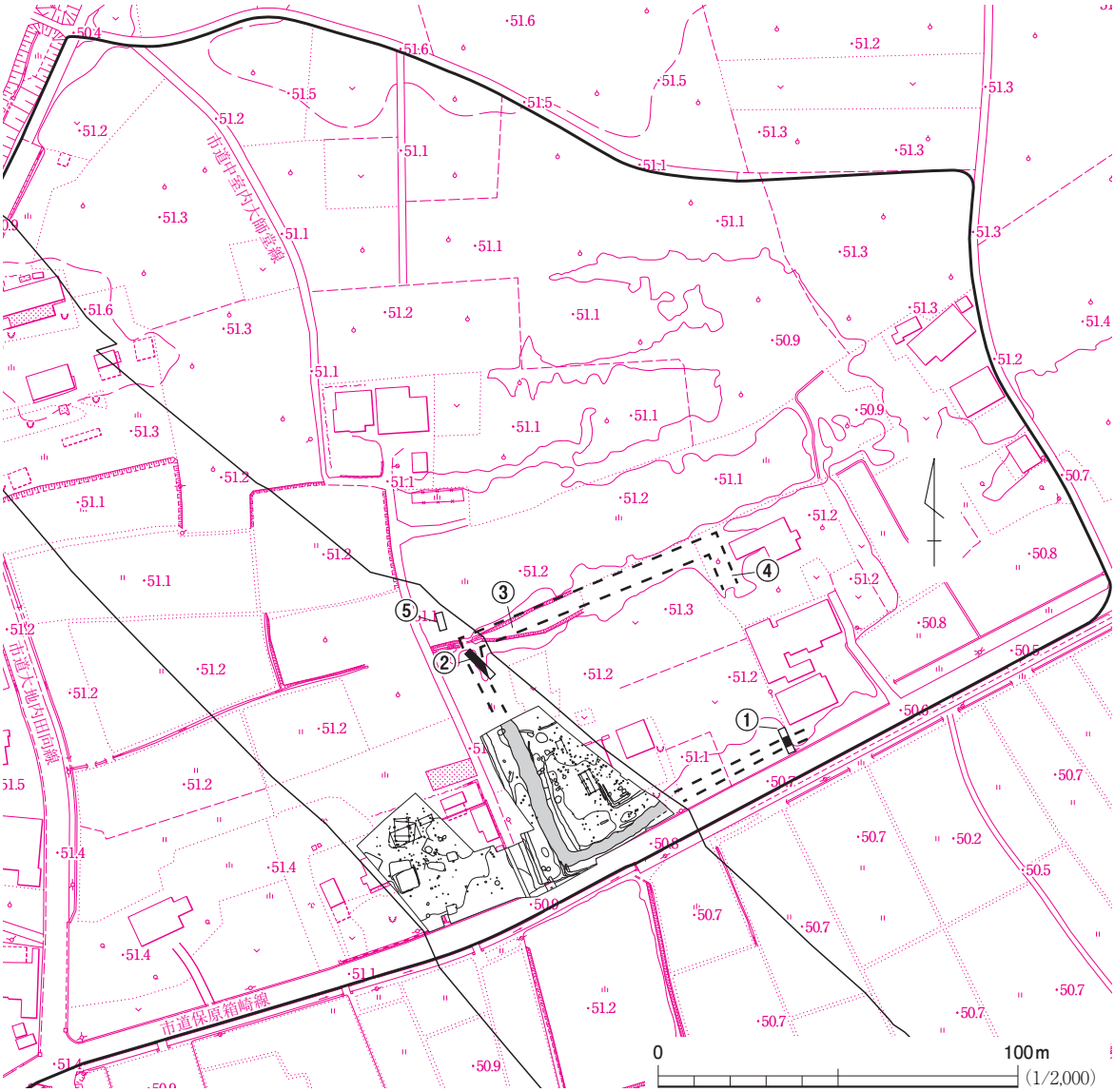


図58　堀跡推定図

で１号堀跡の延長部分が見つかっている（図58－②）。そして、これのすぐ北に隣接して現在も用水路として利用されている深さ約0.3ｍの東西に延びる溝（図58－③）があるが、周辺の住民の話によれば、この溝は昭和30年代頃には深さ約１ｍの用水路であったという。１号堀跡は、伊達市教育委員会による確認調査の際には、図58－①の箇所は昭和の初め頃に堀跡が完全には埋没しておらず、窪んだ状態だったことから水路として利用していたという情報が得られている。また、今回の発掘調査でも、それを裏付ける堆積状況が１号堀跡で確認されている。これらのことから、図58－③についても、完全には埋没していない１号堀跡の北辺が、現在も水路として使用されている可能性がある。なお、北辺から東辺にかけてのコーナーは、現在の等高線を参考にすると、図58－④の箇所で南側に屈曲するため、当該箇所の可能性がある。

次に、字切り図に描かれた二重に巡る堀のうち、外側のものについて言及したい。北辺の西端部分と予想された図58－⑤の箇所に設定した福島県教育委員会の確認調査（福島県教育委員会2017）

では遺構は皆無であり、その存在については把握することができなかった。このため、北辺の堀については、工区外にあるとみられる。南辺の堀については、地籍図に描かれた特徴、すなわち内側の堀と同程度の幅で直線的な堀とみられる遺構は確認されなかった。なお、１号堀跡より南側で確認された溝跡は、14～17号溝跡であるが、15～17号溝跡は１号堀跡に掘り込まれているため、１号堀跡より古い時期の遺構と判断される。14号溝跡は、厳密な所属時期を特定する材料に欠けるが、重複する15・16号溝跡よりも新しく、１号堀跡と同時期に存在していた可能性がある。ただ、Ｌ字形に屈曲する形状であること、幅は規模がわかる西辺で約1.5ｍを測り、１号堀跡の半分以下であること等、字切り図に描かれた特徴とは異なっている。なお、14号溝跡の南辺の大部分は市道保原箱崎線の道路造成による撹乱により失われているため、本来の規模は不明である。

また、14号溝跡だけでなく、15・16号溝跡もＬ字形に屈曲する形状である。15・16号溝跡は、いずれも人為堆積土との調査所見がある。このことから、１号堀跡は、これらの溝跡を意識して構築された可能性もある。このような状況を考える上で、伊達市保原町保原城跡の調査事例が参考となる。保原城跡では、14世紀中葉～16世紀前葉にかけては、在地領主の館跡または宗教関連施設としての機能が想定され、16世紀中葉に大規模な堀を備えた城館跡に変化すると考えられている。また、遺構の観察では、城館跡として整備される際に、前代までの遺構は全て埋め戻されていたことがわかっている（保原町教育委員会2005）。中室内遺跡についても、当初は小規模な溝で区画された屋敷跡で、その後、小規模な溝を埋め立て、大規模な１号堀跡を構築した可能性がある。

以上、述べてきたように、今回の中室内遺跡の調査では、古墳時代前期の集落跡が見つかった。そして、堀跡で区画された中世の屋敷跡の一部が明らかになった。特に、中世の屋敷跡に関しては、地籍図と対比できる資料が得られたことが成果として強調できる。

出土遺物は多くはないが、その中に、瓦質土器の風炉が含まれていたことも注目できる。瓦質土器の風炉は、福島県内では、伊達氏と関連する遺跡からの出土が多いとされる（佐藤2017）。また、中室内遺跡の周辺には、西に0.8㎞に伊達市初代朝宗が築いたとされる伊達市保原町高子館跡、東に３㎞には遺跡の成り立ちの背景に伊達氏との強い関わりがうかがえると評価されている伊達市保原町舟橋遺跡（伊達市教育委員会2007）がある。中室内遺跡の中世の屋敷跡については、文献に記載がないため、どのような人物が居住していたのかは不明であるが、上記のことを踏まえると、伊達氏との関係も想定される。（鶴　見）

参考文献

佐藤　俊　2017「福島県内における瓦質土器風炉の様相」『福島考古　第59号』福島県考古学会
伊達市教育委員会　2005『保原城跡Ⅳ・宮下遺跡・大地内Ａ遺跡』保原町文化財調査報告書第18集
伊達市教育委員会　2007『舟橋遺跡』伊達市埋蔵文化財調査報告書第３集
伊達市教育委員会　2017『平成28年度市内遺跡発掘調査報告書（試掘調査）』伊達市埋蔵文化財調査報告書第29集
福島県教育委員会　2017『福島県内遺跡分布調査報告25』

第３編　日照田（ひでりだ）遺跡

遺跡記号	ＱＲ－ＨＤＤ
所在地	伊達郡桑折町大字松原字日照田
時代・種類	縄文時代の狩場、古代の流路跡、 中世の居住域
調査期間	平成29年４月17日～４月28日 平成29年５月29日～８月24日
調査員	丹治篤嘉・渡邉春喜・廣川紀子・ 草野潤平・枝松雄一郎・鶴見諒平

第１章　遺跡の位置と調査経過

第１節　遺跡の位置と現況

日照田遺跡は、福島県伊達郡桑折町大字松原字日照田に所在する。東北本線の伊達駅から、北に約１㎞のところに位置する。松原地区は、桑折町の南西端に位置し、福島市飯坂町湯野地区と接している。遺跡より北側の丘陵裾部には、飯坂町方面から桑折町市街地へ通じる県道124号線が東西方向に延びている。遺跡の位置する箇所は、一般国道115号相馬福島道路と東北自動車道が交差するジャンクション予定地となっており、北西側に隣接して東北自動車道が走っている。遺跡のさらに東方には、東北新幹線や東北本線が縦走する。

遺跡は、標高85ｍほどの低位段丘上に立地する。現況では、江戸時代に開削された西根上堰と下堰とに挟まれた緩やかな傾斜地で、水稲耕作や果樹栽培が行われている。同じ段丘上には、平成28年度に調査が行われた川原田遺跡や、平成29年度に並行して調査が行われた舘ノ前遺跡（本書第４編）が存在する。

（廣　川）

第２節　調 査 経 過

日照田遺跡の調査は、４月３日付で福島県教育委員会より2,800㎡の本発掘調査の指示を受けて実施した。調査に係った作業日数は延べ61日である。調査区を図１に示したようにⅠ～Ⅲ区に分け、工事計画の優先度の高い日照田遺跡Ⅰ区（100㎡）の調査から着手し、同じく優先度の高い舘ノ前遺跡Ⅰ区（900㎡）とともに先行して引き渡しを行った。その後に、残りの日照田遺跡Ⅱ・Ⅲ区（2,700㎡）の調査を行った。以下に、調査の経過について週ごとに記す。

４月第４週：17日（月）に作業員駐車場に仮設トイレを設置する。18日（火）に作業員の雇用を開始し、19日（水）から遺構検出作業に入る。

４月第５週：24日（月）に１号溝跡を検出し、調査を進める。26日（水）に基本土層図の作成、27日（木）に調査区全体の写真撮影、28日（金）までに地形測量を終えて日照田遺跡Ⅰ区（100㎡）の調査を終了する。

５月第５週：29日（月）に県文化財課及び国交省の立ち会いの下、日照田遺跡Ⅰ区（100㎡）について現地引き渡しを行った。また、同日、重機を搬入し、日照田遺跡Ⅱ・Ⅲ区（2,700㎡）の表土除去を開始する。

６月第１週：１日（金）～翌週５日（月）まで降雨のため作業を中止する。

６月第２週：Ⅱ区北部の表土除去が終了し、８日（木）に作業員の雇用を再開する。９日（金）からⅡ区北部の遺構検出作業に入り、小穴群が集中することを確認する。

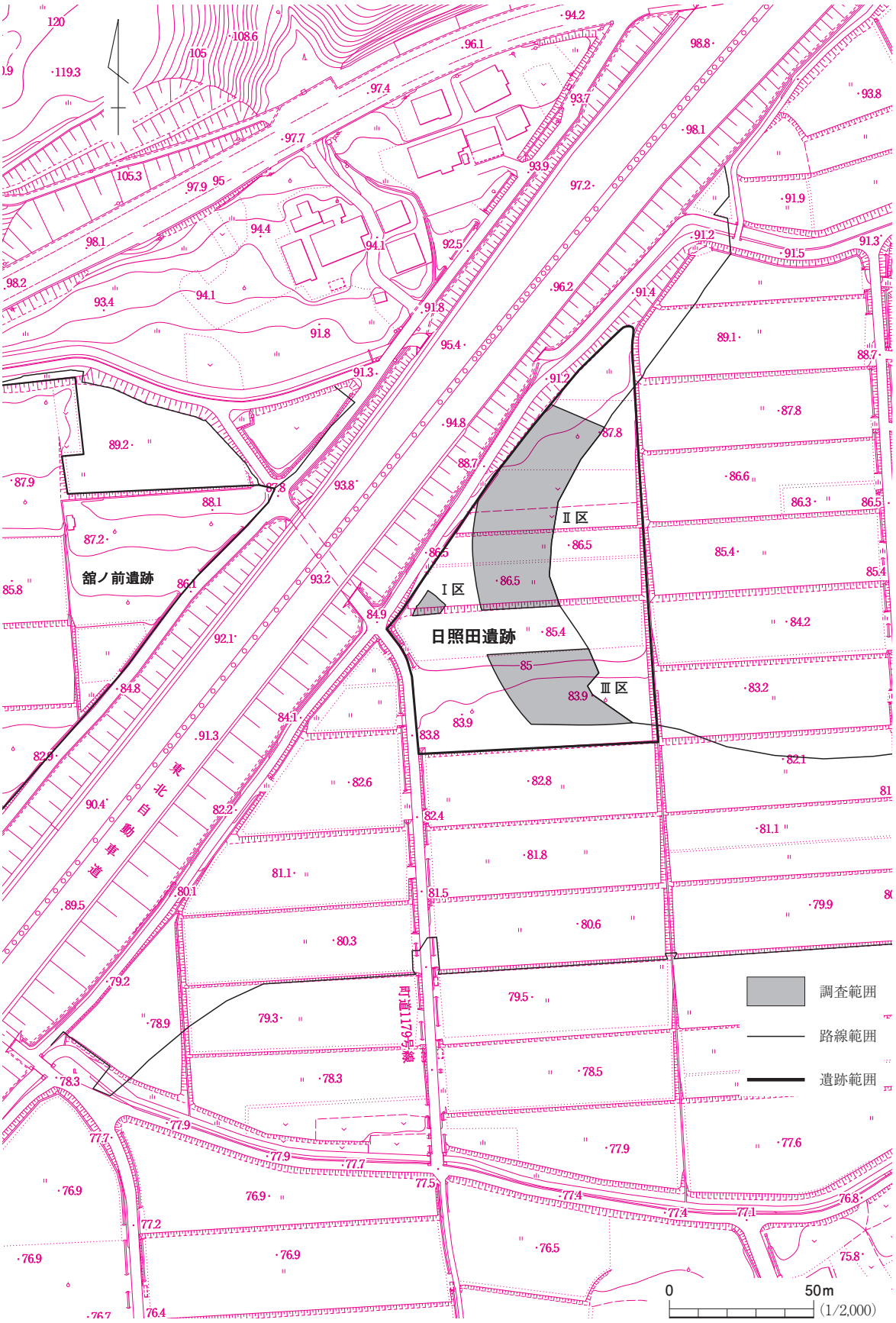

日照田遺跡
舘ノ前遺跡
Ⅰ区
Ⅱ区
Ⅲ区
東北自動車道
町道1795線
調査範囲
路線範囲
遺跡範囲
0
50m
(1/2,000)

図１　調査区位置図

６月第３週：表土除去は14日(水)にⅡ区南部を終えてⅢ区に移る。遺構検出作業はⅡ区南部に移り、16日(金)から流路跡の掘り下げを行い、土師器・須恵器片が出土し始めた。

６月第４週：引き続き流路跡の掘り下げを行う。20日(火)にⅢ区の表土除去が終了し、縄文時代の落し穴と考えられる土坑数基を確認する。23日(金)よりⅢ区の遺構検出作業を始める。

６月第５週：27日(火)からⅢ区より検出した土坑７基の掘り下げを行う。29日(木)に４・５号土坑の断面図を作成する。

７月第２週：梅雨の時期に入り、調査区内に溜まる雨水の排水作業を余儀なくされる。引き続き土坑群の精査を行い、４日(火)に基本土層図の作成、５日(水)からⅢ区の流路跡の掘り下げを始め、７日(金)からは流路跡脇から検出された特殊遺構群の精査に取りかかった。

７月第３週：Ⅲ区の調査を継続しながら、10日(月)からⅡ区北部の遺構検出作業とⅡ区南部の流路跡の確認作業に入る。11日(火)に測量基準点を打設する。週の後半から、Ⅱ区北部では検出した建物跡、土坑数基、小穴群の精査に入る。

７月第４週：20日(木)よりⅡ区南部の遺構検出作業、流路跡の掘り下げに入る。21日(金)にⅢ区の全体写真のための清掃及び撮影を行う。

７月第５週：25日(火)に流路跡の平面図を作成する。週の後半から、Ⅱ区南部で検出された土坑数基の精査に入る。

８月第１週：調査区全体の地形測量を行う。Ⅱ区北部では掘り上げた遺構の作図と清掃を行って、４日(金)に全体写真を撮影した。

８月第２週：Ⅱ区南部の調査に集約し、流路跡の掘り下げを行う。10日(木)には、流路跡から検出された杭列の取り上げを行った。

８月第４週：21日(月)より調査を再開する。Ⅱ区南部の流路跡の底面を確認し、清掃を行って23日(水)に全体写真を撮影する。24日(木)に器材類を撤収して日照田遺跡の全調査を終了した。

９月第２週：４日(月)に、県文化財課及び国交省の立ち会いの下、日照田遺跡Ⅱ・Ⅲ区(2,700㎡)について現地引き渡しを行った。　(廣　川)

第２章　発見された遺構と遺物

第１節　調査成果の概要と基本土層

調査成果の概要

日照田遺跡は、北から南に向けて緩やかに傾斜する地形に立地している。今回の調査区は水田や果樹園として利用されていた。調査箇所は３箇所に分かれており、西から時計回りにⅠ区、Ⅱ区、Ⅲ区とした。

検出された遺構は、掘立柱建物跡１棟、土坑13基、溝跡１条、特殊遺構３基、小穴52基、流路跡である。土坑は、縄文時代の落し穴９基を含む。溝跡、特殊遺構、流路跡は平安時代のもので、土師器・須恵器が出土する。掘立柱建物跡や小穴は中世のものとみられる。

基本土層（図２）

基本土層は、色調・土質の諸特徴からＬⅠ～Ⅴの５層に分層した。調査箇所が３箇所に分かれることから調査区内の数カ所で土層を確認し、Ⅰ区（Ａ－Ａ′）、Ⅱ区（Ｂ－Ｂ′、Ｃ－Ｃ′）、Ⅲ区（Ｄ－Ｄ′）の４地点を柱状図で示した。

ＬⅠは、表土・耕作土及び盛土層である。細分して表土・耕作土をＬⅠａ、盛土をＬⅠｂとした。ＬⅠａはⅡ区を除いたⅠ・Ⅲ区では30～40㎝、ＬⅠｂは30㎝前後の厚さが認められる。

ＬⅡは、黒褐色粘土質シルト層で、調査区全体から確認された。層厚は25～35㎝程度である。この付近一帯の果樹園造成等により、欠層している箇所も多い。

ＬⅢは、Ⅲ区でのみ確認されたにぶい黄褐色粘土質シルト層である。ＬⅡからＬⅣへの漸移的な層で、層厚は約20㎝である。

ＬⅣは、調査区全域で確認されるにぶい黄褐色シルト層である。今回の調査では、本層の上面で遺構が検出された。

ＬⅤは、Ⅱ区南部で確認した極暗赤褐色を呈する基盤の砂礫層である。　（廣　川）

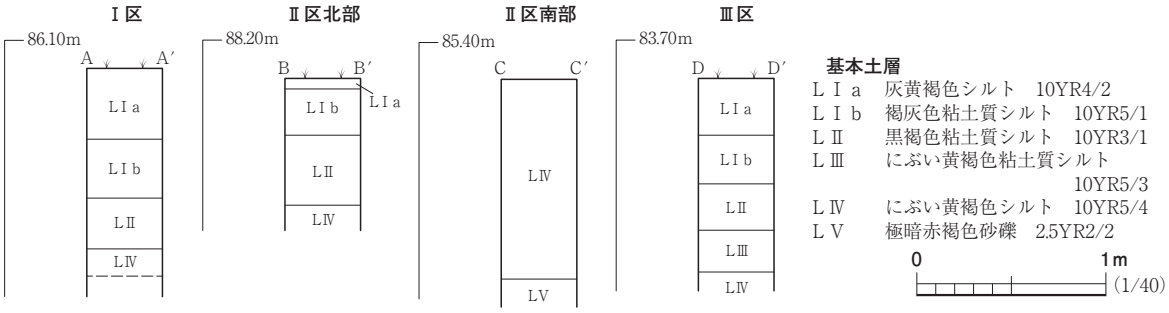


図２　基本土層

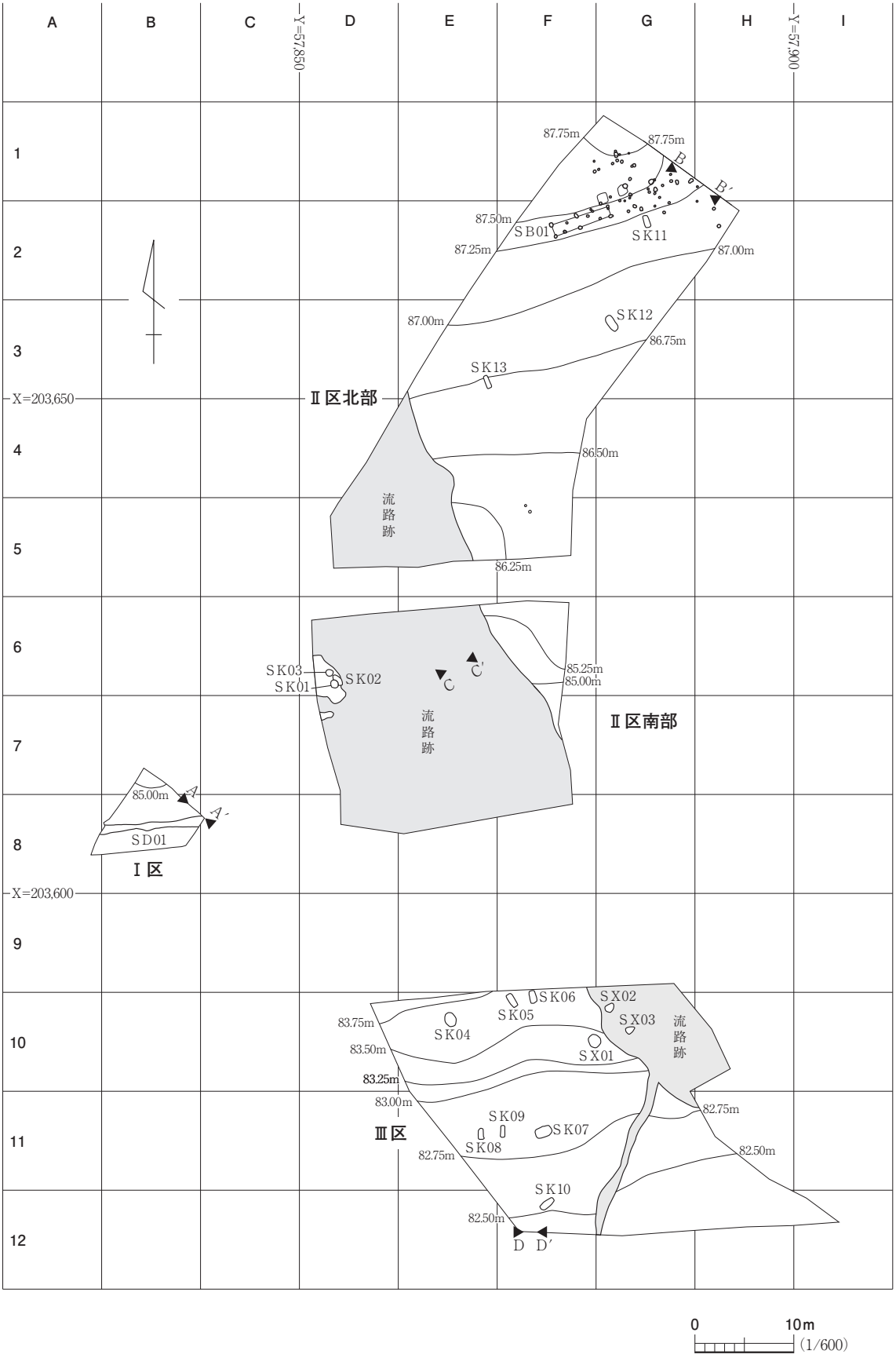

A
B
C
D
E
F
G
H
I
Y=57,850
Y=57,900
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
X=203,650
X=203,600
87.75m
87.75m
87.50m
87.25m
87.00m
87.00m
86.75m
86.50m
86.25m
85.25m
85.00m
85.00m
83.75m
83.50m
83.25m
83.00m
82.75m
82.75m
82.50m
82.50m
B
B′
SB01
SK11
SK12
SK13
Ⅱ区北部
流路跡
SK03
SK01
SK02
C
C′
流路跡
Ⅱ区南部
A
A′
SD01
Ⅰ区
SK06
SX02
SK05
SX03
SK04
流路跡
SX01
Ⅲ区
SK09
SK07
SK08
SK10
D
D′
0
10m
(1/600)

図３　遺構配置図

第２節　掘立柱建物跡

今回の調査で発見された掘立柱建物跡は１棟で、２間×１間の細長い東西棟の建物である。この建物跡の北東部には、同様の建物跡の柱穴とみられる小穴群の広がりが認められる。

１号建物跡　ＳＢ01

遺　　構（図４、写真５・６）

本遺構はⅡ区北部の北端寄りとなるＦ２、Ｇ２グリッドで検出した掘立柱建物跡である。本遺構の周辺では、建物跡の柱穴とみられる小穴52基が検出されており、これらの小穴群の西端部に位置する。検出面はＬⅣ上面である。また、本遺構のＰ３は小穴の一つであるＧ２Ｐ２と重複していて、本遺構の方が新しい。

本遺構は東西２間×南北１間の細長い東西棟の建物跡で、柱穴６基を検出した。東西の柱間に対して、南北の柱間の間隔が半分の長さに満たない特徴的な構造となっている。芯々間での柱間の間隔は、北側柱列が西から2.76ｍ＋3.28ｍ＝6.04ｍ、南側柱列が西から2.65ｍ＋3.34ｍ＝5.99ｍ、西側柱列が1.24ｍ、中央の柱列が1.12ｍ、東側柱列が1.04ｍを測る。東西間では東寄りの柱間が広く、およそ東西６ｍ×南北１ｍの少規模な建物跡である。主軸方向は北西隅を起点とした北側柱列でＮ70°Ｅである。

柱穴の掘形の平面形は楕円形ないし円形で、規模は直径が30～35㎝を基本とし、最小が北東隅のＰ３で長軸26㎝、最大がＰ２で長軸52㎝を測る。検出面からの深さは、Ｐ１は26㎝、２は30㎝であるのに対し、Ｐ３～６は約17㎝と浅い。掘形の底面は概ね平坦である。

柱穴の掘形内堆積土は、黒褐色シルトを基調とした単層である。北側のＰ１～３には柱材の一部が遺存する。また、Ｐ４の底面近くとＰ６の底面からは石が認められ、特にＰ４は平たい大ぶりのものであるため礎盤石のような役割が考えられる。

遺　　物（図４、写真19）

Ｐ１～３からは柱材の一部が確認されたが、他に出土遺物は認められなかった。

図４－１～３はいずれも柱材である。この３点については、樹種同定及び放射性炭素年代測定を行っている。樹種は、１・２がクリ、３が針葉樹という結果が出ている。年代測定の結果は、いずれも暦年較正年代で、１が1039calAD－1188calAD（95.4％）、２が1118calAD－1213calAD（57.2％）、３が1029calAD－1155calAD（95.4％）という結果が出ている（付編参照）。

ま と め

本遺構は、東西２間×南北１間の細長い東西棟の建物跡で、梁行の幅も狭いため、居住用とは異なるものとみられる。また、周囲から検出された小穴群は、本建物跡の東側に集中して認められる。そして、本建物跡の東西柱列の延長上にまとまって分布する一群があることから、同様の東西

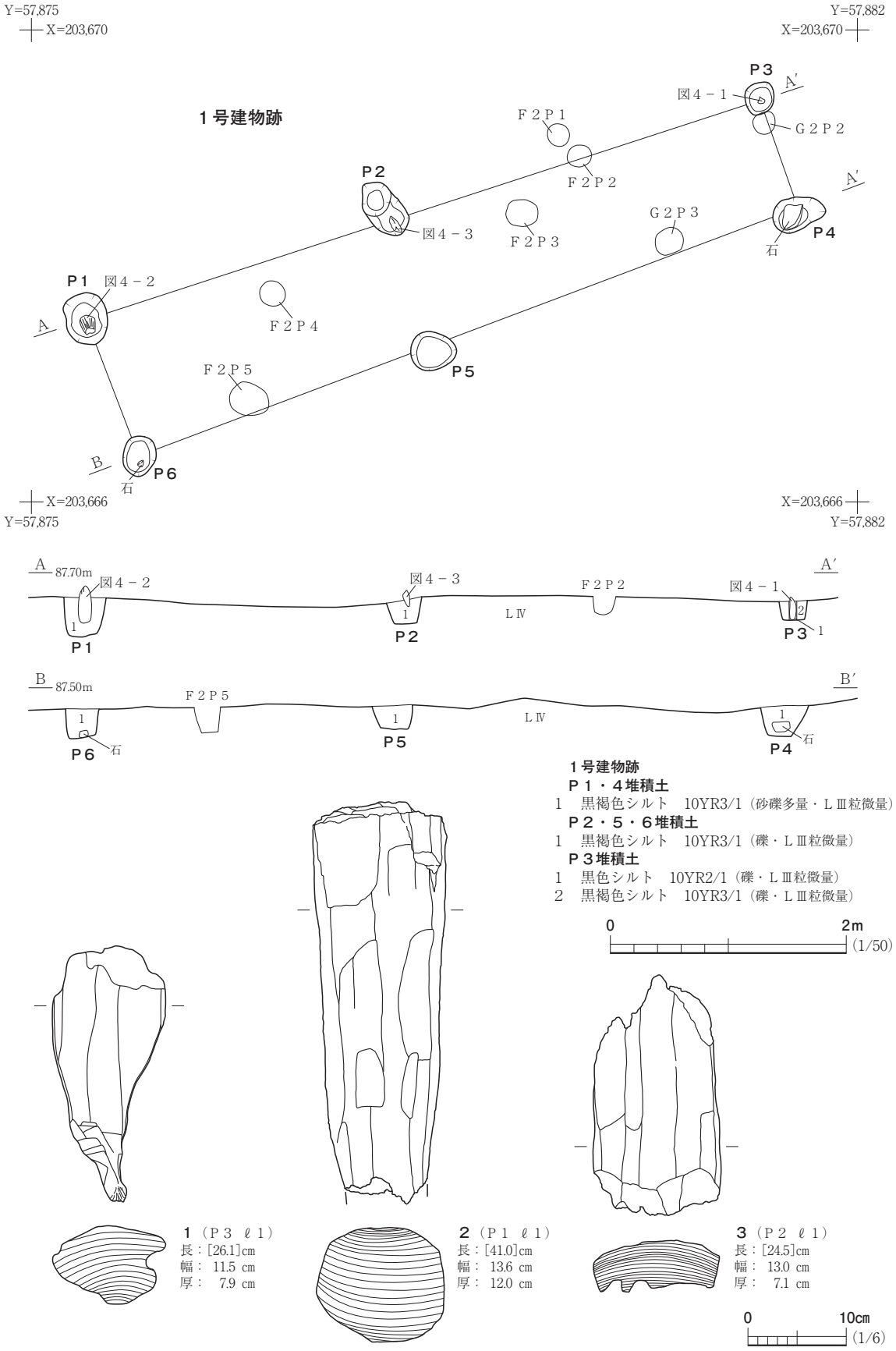


図４　１号建物跡・出土遺物

棟の建物跡が並存していた可能性がある。

本遺構では、柱材の放射性炭素年代測定の結果、11世紀前半～13世紀初頭頃という測定結果が得られた。これに対し、本遺構周辺の小穴群の一つであるＧ１Ｐ30からは13～14世紀頃の常滑焼とみられる陶器が出土している。本遺構は、これらの小穴と一連のものと考えられること、柱材の伐採時期や建材の転用等の可能性を考慮すると、測定結果よりも新しい年代と考えることに矛盾はないことから、13～14世紀頃の建物跡と考えておきたい。（廣　川）

第３節　土　坑

今回の調査で発見された土坑は13基である。４～10・13号土坑の８基は、形態的な特徴から縄文時代の落し穴と考えている。底面に逆茂木を刺したとみられる小さい穴が認められるものが多い。12号土坑は落し穴の可能性もあるが、出土した木片の年代測定では古墳時代という結果が出ていることから、４～10・13号土坑とは時期が異なると考えている。１～３号土坑の性格は不明だが、出土遺物や平安時代の流路跡に囲まれた中洲状の箇所に立地することから、平安時代のものと推察される。11号土坑は時期、性格とも不明である。

１号土坑　ＳＫ01（図５、写真７）

本遺構は、Ⅱ区南部西端のＤ６グリッドで検出した土坑である。検出面はＬⅣ上面で、２号土坑と重複し、本遺構の方が新しい。また、北西１ｍに隣接して３号土坑がある。流路跡に囲まれた中洲状の箇所に立地している。

平面形は楕円形で、規模は長軸86㎝、短軸73㎝、検出面からの深さは14㎝である。断面形は概ねレンズ状を呈する。

堆積土は黒褐色シルトの単層で、自然堆積土と判断した。

遺物は、平安時代の土師器が１点出土したが、細片のため図示できなかった。

本遺構の性格は不明だが、平安時代の土師器が出土したこと、平安時代の流路跡に囲まれた中洲状の箇所に立地することから、当該期の土坑と考えられる。（鶴　見）

２号土坑　ＳＫ02（図５、写真７）

本遺構は、Ⅱ区南部西端のＤ６グリッドで検出した土坑である。検出面はＬⅣ上面で、１号土坑と重複し、本遺構の方が古い。

平面形はやや歪んだ楕円形で、規模は長軸133㎝、短軸79㎝、検出面からの深さは最大15㎝である。東壁は、流路跡に向かって開口しているが、流水により失われた可能性がある。南西壁は、１号土坑によって掘り込まれているため、上半部が残っていない。また、北壁の立ち上がりは他の箇所に比べ緩やかとなっている。

堆積土は２層に分層した。ℓ１は１号土坑のℓ１と近似した黒褐色粘土質シルト、ℓ２はややグライ化した褐灰色を呈する粘土質シルトである。いずれも自然堆積土と判断した。なお、遺物は出土していない。

本遺構の性格は不明だが、１号土坑同様、平安時代の流路跡に囲まれた中洲状の箇所に立地することから、当該期の土坑と考えられる。（鶴　見）

３号土坑　ＳＫ03（図５・７、写真７・20）

本遺構は、Ⅱ区南部西端のＤ６グリッドで検出した土坑である。検出面はＬⅣ上面で、重複する遺構はない。南東１ｍに隣接して１・２号土坑がある。

平面形は歪んだ円形で、規模は長軸64㎝、短軸62㎝である。検出面からの深さは、最大で11㎝と浅い。壁の立ち上がりは、全体的に緩やかである。

堆積土は２層に分層した。レンズ状の堆積状況を示すことから、自然堆積土と判断した。また、ℓ１・２は、土色や含有物等の状況が２号土坑の堆積土と近似する特徴を示す。

遺物は、１点出土した。図７－５はロクロ成形の土師器杯である。口縁部から体部下半にかけての破片で、内面には黒色処理とミガキが認められる。その特徴から９世紀代のものと考えられる。

本遺構の性格は不明だが、平安時代の土器が出土したこと、平安時代の流路跡に囲まれた中洲状の箇所に立地することから、当該期の土坑と考えられる。なお、堆積土の特徴が２号土坑と近似することから、同土坑と同時期に埋没した可能性がある。（鶴　見）

４号土坑　ＳＫ04（図５、写真７）

本遺構は、Ⅲ区北端のＥ10グリッドで検出した土坑である。検出面はＬⅣ上面である。重複する遺構はないが、東に６～８ｍには５・６号土坑、南東に11ｍには８・９号土坑がある。

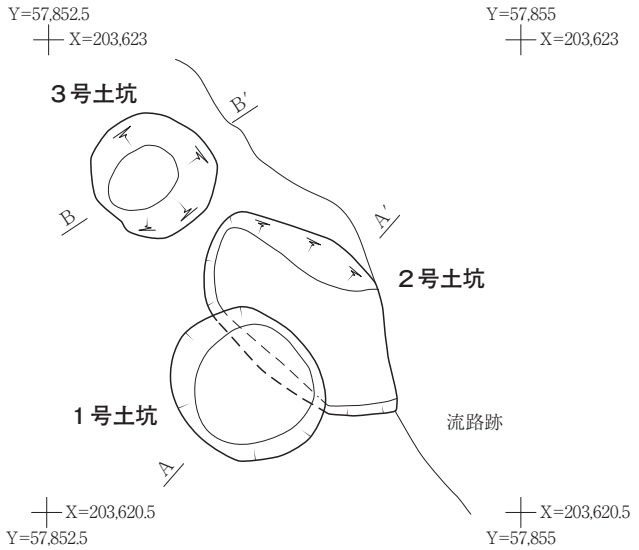
平面形は、検出面では楕円形だが、底面では長方形を呈している。各部の計測値は、検出面では長軸146㎝、短軸107㎝、底面では長軸111㎝、短軸51㎝である。断面形は逆台形を呈する。底面は平坦で、中央付近で小穴を１基確認した。小穴は、長軸39㎝、短軸23㎝の楕円形で、土坑底面からの深さは58㎝である。

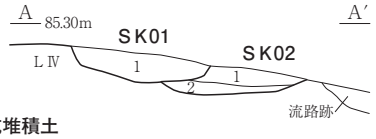
堆積土は11層に分層した。ℓ１～10は黒褐色または褐灰色シルトを主体とし、遺構の中央部に向けて流れ込んでいることから、周囲から流入した自然堆積土と判断した。ℓ11は小穴部分の堆積土で、逆茂木の杭の痕跡は認められず、自然堆積土と判断した。なお、遺物は出土していない。

本遺構は、形態や深さ、底面に小穴が認められるといった特徴から落し穴と考えられる。遺物が出土していないため、時期は明確でないが、縄文時代のものと推定される。（鶴　見）

５号土坑　ＳＫ05（図５、写真７）

本遺構は、Ⅲ区北端のＦ10グリッドで検出した土坑である。検出面はＬⅣ上面である。重複す



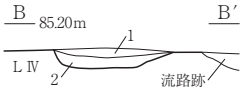


１号土坑堆積土

1　黒褐色シルト　10YR3/1
（グライ化した青灰色粘土質シルト多量、風化礫少量、しまりあり）

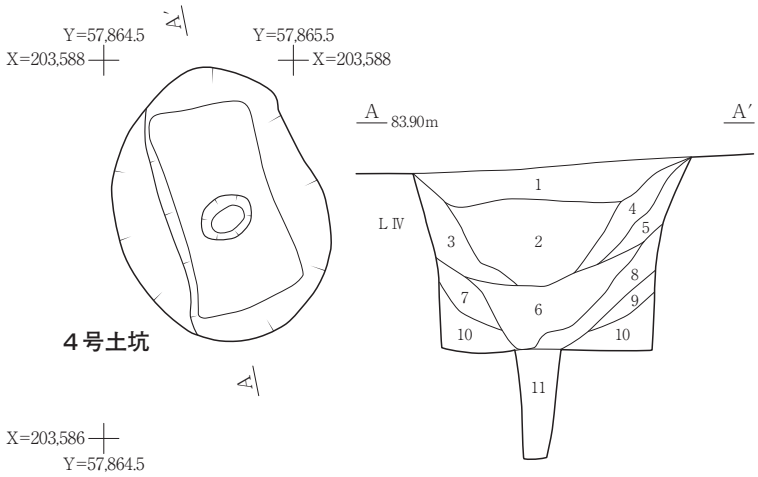
２号土坑堆積土

1　黒褐色粘土質シルト　10YR3/1
（風化礫片・炭化物少量、しまりあり）
2　褐灰色粘土質シルト　10YR5/1
（グライ化した青灰色粘土質シルト多量）



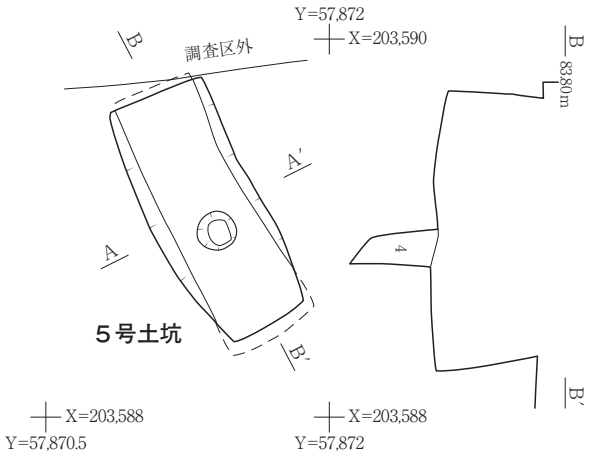
３号土坑堆積土

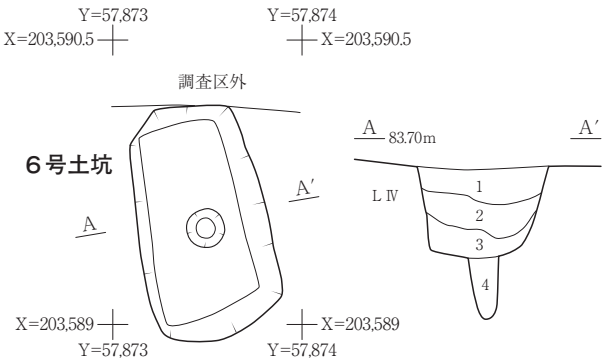
1　黒褐色粘土質シルト　10YR3/1（直径１～２㎝風化礫多量）
2　灰黄褐色粘土質シルト　10YR4/2
（グライ化したにぶい黄褐色粘土質シルト多量、
黒褐色粘土質シルト少量）



４号土坑堆積土

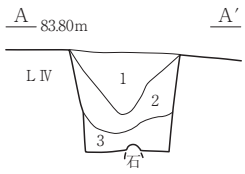
1　黒褐色粘土質シルト　10YR3/1
（直径１㎝以下の風化礫多量）
2　黒褐色粘土質シルト　10YR3/1
（こぶし大礫、直径２㎝以下風化礫多量）
3　黒色粘土質シルト　10YR2/1
（黒褐色シルト粒、直径１㎝以下風化礫少量）
4　褐灰色シルト　10YR4/1
（黒色粘土質シルト粒、直径５㎜以下風化礫多量）
5　黒褐色シルト　10YR3/2
（黒色粘土質シルト粒少量）
6　褐灰色粘土質シルト　10YR4/1
（こぶし大以下風化礫多量）
7　黒色粘土質シルト　10YR2/1
（灰黄褐色シルト粒、風化礫粒少量）
8　褐灰色シルト　10YR4/1
（灰黄褐色シルト粒、黒色粘土質シルト粒少量）
9　褐灰色シルト　10YR4/1
（灰黄褐色シルト粒多量、直径１㎝以下風化礫少量）
10　黒褐色シルト　10YR3/1（粗砂多量、風化礫少量）
11　黒褐色粘土質シルト　10YR3/1
（直径５㎜以下風化礫少量）





６号土坑堆積土

1　黒褐色シルト　10YR3/2
（黒色粘土質シルト多量、直径２～４㎝の風化礫少量）
2　黒褐色粘土質シルト　10YR2/1
（直径１㎝以下風化礫少量）
3　褐灰色シルト　10YR4/1（直径１㎝以下風化礫少量）
4　灰褐色シルト　10YR5/1（粗砂少量）



５号土坑堆積土

1　暗褐色シルト　10YR3/3
（中心部に直径２～３㎝の風化礫多量、しまりあり）
2　黒褐色粘土質シルト　10YR3/1
（粗砂多量、風化礫少量）
3　褐灰色粘土質シルト　10YR4/1（灰黄褐色シルト粒、粗砂少量）
4　灰褐色シルト　10YR5/1（粗砂少量）

0　1m
（1/40）

図５　１～６号土坑

る遺構はないが、東に1.5ｍには６号土坑、西に６ｍには４号土坑がある。

平面形は長方形で、検出面での規模は、長軸136㎝、短軸59㎝である。検出面から底面までの深さは最大で58㎝である。東西の壁は直立するが、南北壁は抉れている。底面は平坦で、中央よりやや南寄りの位置で小穴を１基確認した。小穴は径20㎝の円形で、土坑底面からの深さは43㎝である。小穴の底面は水平ではなく、南側の方が深くなっている。

堆積土は４層に分層した。ℓ１～３は遺構の中央部に向けて流れ込んでいることから周囲から流入した自然堆積土と判断した。ℓ４は小穴部分の堆積土で、逆茂木の杭の痕跡は認められず、自然堆積土と判断した。なお、遺物は出土していない。

本遺構は、形態や底面に小穴が認められるといった特徴から落し穴と考えられる。遺物が出土していないため、時期は明確でないが、縄文時代のものと推定される。（鶴　見）

６号土坑　ＳＫ06（図５、写真７）

本遺構は、Ⅲ区北端のＦ10グリッドで検出した土坑である。検出面はＬⅣ上面である。重複する遺構はないが、西に1.5ｍには５号土坑がある。

平面形は長方形を基調としている。検出面での規模は、長軸124㎝、短軸69㎝である。検出面からの深さは最大で47㎝である。周壁の立ち上がりは垂直に近い。底面は平坦で、中央付近からは小穴を１基確認した。小穴は径20㎝の円形で、土坑底面からの深さは32㎝である。小穴の底面は丸みがあり、平坦ではない。また、底面付近は常時湧水している。

堆積土は４層に分層し、いずれも自然堆積土と判断した。ℓ４は小穴部分の堆積土で、逆茂木の杭の痕跡は認められなかった。なお、遺物は出土していない。

本遺構は、形態や底面に小穴が認められるといった特徴から落し穴と考えられる。遺物が出土していないため、時期は明確でないが、縄文時代のものと推定される。（鶴　見）

７号土坑　ＳＫ07（図６、写真７）

本遺構は、Ⅲ区中央部のＦ11グリッドで検出した土坑である。検出面はＬⅣ上面である。重複する遺構はないが、西に３ｍには９号土坑、西に５ｍには８号土坑、南に6.5ｍには10号土坑がある。

平面形は長方形を呈し、検出面での規模は、長軸160㎝、短軸111㎝である。検出面から底面までの深さは最大で89㎝である。周壁はほぼ垂直に立ち上がるが、東壁のみ内側に抉れている。底面の凹凸は少なく、ほぼ平坦である。なお、底面では、土坑の中軸線上に２基、北壁寄りの位置に２基、計４基の小穴を確認した。小穴の平面形はいずれも円形で、径は12～21㎝前後、土坑底面から小穴底面までの深さは、30㎝前後にまとまっている。

堆積土は13層に分層し、いずれも自然堆積土と判断した。ℓ１～７・９～12は、黒褐色または褐灰色を基調とする周囲から自然流入土、ℓ８はにぶい黄褐色を基調とした壁の崩落土、ℓ13は

小穴部分の堆積土である。なお、小穴部分の堆積土には、逆茂木の杭の痕跡は認められなかった。

本遺構からは、ℓ１の検出面付近から土師器が１点出土したが、細片のため図示できなかった。出土状況から、後世に流入した遺物と考えられる。

本遺構は、縄文時代の落し穴と考えられるが、詳細な時期は不明である。また、本遺跡で確認された他の落し穴と考えられる土坑と比べると、規模が大きく、逆茂木の杭の痕跡とみられる小穴が４つ確認されるといった異なった特徴が認められる。（鶴　見）

８号土坑　ＳＫ08（図６、写真７）

本遺構は、Ⅲ区西端のＥ11グリッドで検出した土坑である。検出面はＬⅣ上面である。重複する遺構はないが、東に２ｍには９号土坑、東に５ｍには７号土坑がある。

平面形は長方形を呈し、規模は長軸112㎝、短軸47㎝ある。検出面から底面までの深さは最大で52㎝である。周壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦で、中央付近で小穴を１基確認した。小穴は長軸23㎝、短軸20㎝の楕円形で、土坑底面から小穴底面までの深さは最大で23㎝である。

堆積土は６層に分層し、いずれも自然堆積土と判断した。ℓ１～４は周囲からの流入土、ℓ５は周囲からの流入土と壁の崩落土が混在した層である。ℓ６は小穴部分の堆積土で、逆茂木の杭の痕跡は認められなかった。なお、遺物は出土していない。

本遺構は、形態や底面に小穴が認められるといった特徴から落し穴と考えられる。遺物が出土していないため、時期は明確でないが、縄文時代のものと推定される。（鶴　見）

９号土坑　ＳＫ09（図６、写真８）

本遺構は、Ⅲ区Ｆ11グリッドで検出した土坑である。検出面はＬⅣ上面である。重複する遺構はないが、西に２ｍには８号土坑、東に３ｍには７号土坑がある。

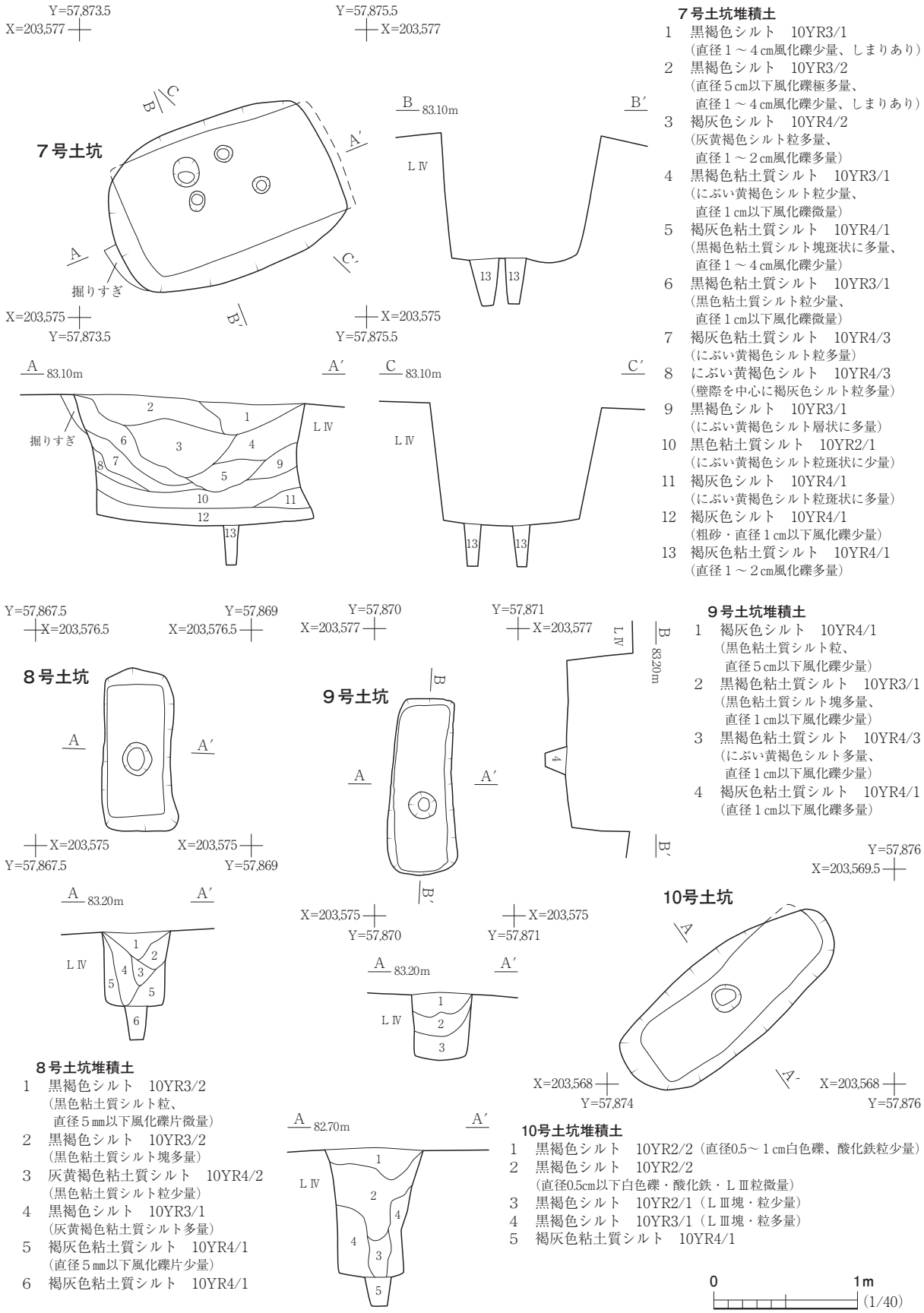
平面形は長方形を呈し、規模は長軸122㎝、短軸43㎝である。検出面から底面までの深さは最大47㎝である。周壁の立ち上がりは垂直に近く、底面はほぼ平坦である。底面では、中央よりやや南寄りの位置で小穴を１基確認した。小穴は径19㎝の円形で、土坑底面から小穴底面までの深さは15㎝である。

堆積土は４層に分層し、いずれも自然堆積土と判断した。ℓ１～３が周囲からの流入土、ℓ４は小穴部分の堆積土で、逆茂木の杭の痕跡は認められなかった。なお、遺物は出土していない。

本遺構は、形態や底面に小穴が認められるといった特徴から落し穴と考えられる。遺物が出土していないため、時期は明確でないが、縄文時代のものと推定される。（鶴　見）

10号土坑　ＳＫ10（図６、写真８）

本遺構は、Ⅲ区南端のＦ12グリッドで検出した土坑である。検出面はＬⅣ上面である。重複する遺構はないが、北に6.5ｍには10号土坑がある。



７号土坑堆積土

1　黒褐色シルト　10YR3/1
（直径１～４cm風化礫少量、しまりあり）
2　黒褐色シルト　10YR3/2
（直径５cm以下風化礫極多量、
直径１～４cm風化礫少量、しまりあり）
3　褐灰色シルト　10YR4/2
（灰黄褐色シルト粒多量、
直径１～２cm風化礫多量）
4　黒褐色粘土質シルト　10YR3/1
（にぶい黄褐色シルト粒少量、
直径１cm以下風化礫微量）
5　褐灰色粘土質シルト　10YR4/1
（黒褐色粘土質シルト塊斑状に多量、
直径１～４cm風化礫少量）
6　黒褐色粘土質シルト　10YR3/1
（黒色粘土質シルト粒少量、
直径１cm以下風化礫微量）
7　褐灰色粘土質シルト　10YR4/3
（にぶい黄褐色シルト粒多量）
8　にぶい黄褐色シルト　10YR4/3
（壁際を中心に褐灰色シルト粒多量）
9　黒褐色シルト　10YR3/1
（にぶい黄褐色シルト層状に多量）
10　黒色粘土質シルト　10YR2/1
（にぶい黄褐色シルト粒斑状に少量）
11　褐灰色シルト　10YR4/1
（にぶい黄褐色シルト粒斑状に多量）
12　褐灰色シルト　10YR4/1
（粗砂・直径１cm以下風化礫少量）
13　褐灰色粘土質シルト　10YR4/1
（直径１～２cm風化礫多量）

９号土坑堆積土

1　褐灰色シルト　10YR4/1
（黒色粘土質シルト粒、
直径５cm以下風化礫少量）
2　黒褐色粘土質シルト　10YR3/1
（黒色粘土質シルト塊多量、
直径１cm以下風化礫少量）
3　黒褐色粘土質シルト　10YR4/3
（にぶい黄褐色シルト多量、
直径１cm以下風化礫少量）
4　褐灰色粘土質シルト　10YR4/1
（直径１cm以下風化礫多量）

８号土坑堆積土

1　黒褐色シルト　10YR3/2
（黒色粘土質シルト粒、
直径５mm以下風化礫片微量）
2　黒褐色シルト　10YR3/2
（黒色粘土質シルト塊多量）
3　灰黄褐色粘土質シルト　10YR4/2
（黒色粘土質シルト粒少量）
4　黒褐色シルト　10YR3/1
（灰黄褐色粘土質シルト多量）
5　褐灰色粘土質シルト　10YR4/1
（直径５mm以下風化礫片少量）
6　褐灰色粘土質シルト　10YR4/1

10号土坑堆積土

1　黒褐色シルト　10YR2/2（直径0.5～１cm白色礫、酸化鉄粒少量）
2　黒褐色シルト　10YR2/2
（直径0.5cm以下白色礫・酸化鉄・ＬⅢ粒微量）
3　黒褐色シルト　10YR2/1（ＬⅢ塊・粒少量）
4　黒褐色シルト　10YR3/1（ＬⅢ塊・粒多量）
5　褐灰色粘土質シルト　10YR4/1

図６　７～10号土坑

平面形は隅が丸い長方形で、検出面での規模は、長軸172㎝、短軸69㎝である。検出面から底面までの深さは最大で90㎝である。周壁はほぼ直立するが、北西隅の下部が抉れている。底面は平坦で、中央付近で小穴を１基確認した。小穴は径19㎝の円形で、土坑底面から小穴底面までの深さは20㎝である。

堆積土は５層に分層し、いずれも自然堆積土と判断した。ℓ１～３は周囲からの流入土、ℓ４は周囲からの流入土と壁の崩落土が混在した層である。ℓ５は小穴部分の堆積土で、逆茂木の杭の痕跡は認められなかった。なお、遺物は出土していない。

本遺構は、形態や深さ、底面に小穴が認められるといった特徴から落し穴と考えられる。遺物が出土していないため、時期は明確でないが、縄文時代のものと推定される。（鶴　見）

11号土坑　ＳＫ11（図７、写真８）

本遺構はⅡ区北部の北端近くのＧ２グリッドで検出した土坑である。検出面はＬⅣ上面である。重複する遺構はないが、本遺構の北側には小穴群の広がりが認められ、本遺構から西に３ｍには１号建物跡がある。

東壁の北半分が撹乱を受けているが、平面形は長軸126㎝、短軸56㎝の長方形で、検出面からの深さは最大で32㎝である。底面は皿状に窪み、周壁はほぼ直立する。主軸方向はＮ12°Ｗで、等高線にほぼ直交している。

堆積土は黒褐色シルトで、含有物の違い等により３層に分層した。周囲からの自然流入土を主体とするが、ℓ３はＬⅣ塊を多量含むことから、壁の崩落土も混在していると考えている。なお、遺物は出土しなかった。

本遺構の時期や性格は不明である。平面形の形状や大きさは本遺跡で確認される落し穴と似ているが、掘り込みがかなり浅いため異なるものとみられる。（廣　川）

12号土坑　ＳＫ12（図７、写真８・20）

本遺構はⅡ区北部の中央東寄りのＧ３グリッドで検出した土坑である。検出面はＬⅣ上面である。重複する遺構はないが、北に9.5ｍには11号土坑、南西方向に13ｍには13号土坑がある。

平面形は長軸約168㎝、短軸約80㎝の細長い楕円形で、検出面からの深さは最大で106㎝である。

底面は平坦で、下端がやや抉れて掘り込まれており、周壁は内側に反った弓なり状に立ち上がる。主軸方向はＮ34°Ｗを示す。

堆積土は４層に分層した。ℓ１・３・４は周囲からの流入土、ℓ２はＬⅣ塊を多量に含む西壁の崩落土である。ℓ３・４は、西壁の崩落土であるℓ２が堆積した影響を受けたとみられ、土圧により東側に押されたような堆積状況となっている。流入土のうち、ℓ１・３は黒褐色シルトないし黒色シルトで土色が近似している。一方、ℓ４はグライ化した灰色粘土質シルトで、底面上に厚さ

50～60cmほど堆積する。

出土遺物は４点で、そのうち３点を図示した。図７－１～３は縄文土器である。１は口縁部に近い箇所の破片である。地文は沈線で区画され、横方向の沈線の下には刺突がある。２・３は体部の破片で、沈線と地文のみ確認できる。いずれも縄文時代後期中葉～後葉頃のものと考えられる。また、底面付近から木片が出土していて、樹種同定及び放射性炭素年代測定を行っている。樹種はケンポナシ属、暦年較正年代は345calAD－396calAD（68.2％）という結果が出ている（付編参照）。

本遺構は、調査段階の所見では、その形状と掘り込みの深さ、堆積土中から縄文土器が出土したことから縄文時代の落し穴と考えた。しかし、底面から出土した木片の放射性炭素年代測定結果は古墳時代前期に相当し、縄文時代とは大きく年代が異なっている。このため、堆積土中から出土した縄文土器は後世に流入したものの可能性が高い。よって、本遺構は、底面出土の木片の年代から、古墳時代前期の可能性が高いと考えられる。具体的な性格は断定できないが、形状から落し穴の可能性もある。

（廣　川）

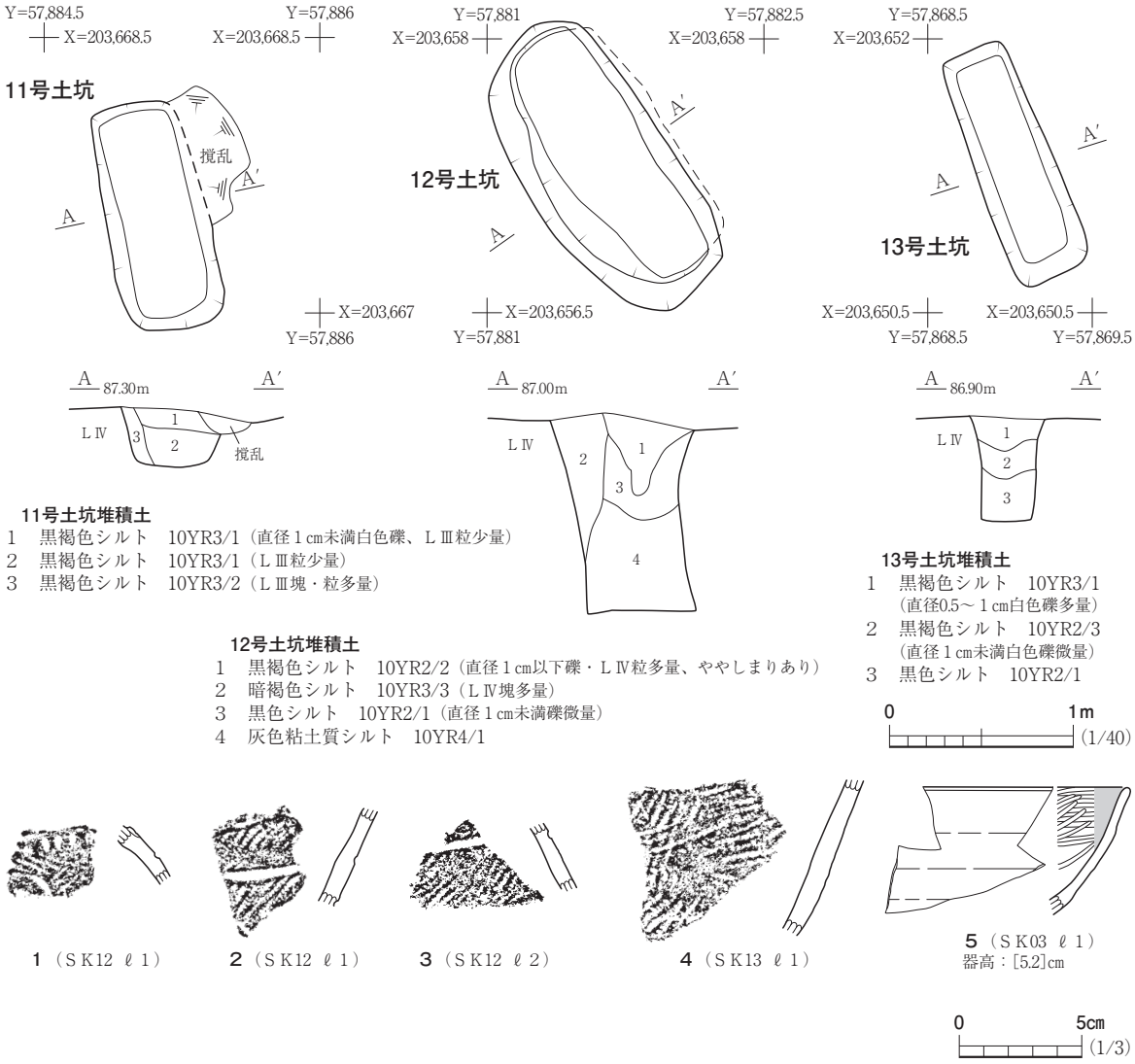


図７　11～13号土坑、土坑出土遺物

13号土坑　ＳＫ13（図７、写真８・20）

本遺構はⅡ区北部中央のＥ３グリッドで検出した土坑である。検出面はＬⅣ上面で、重複する遺構はない。本遺構に近接した遺構もないが、北東に13ｍ離れた位置に12号土坑がある。

平面形は長方形で、規模は長軸約130㎝、短軸約42㎝である。検出面からの深さは最大で62㎝である。底面は平坦で、周壁はほぼ直立する。主軸方向はＮ22°Ｗで、等高線にほぼ直交している。

堆積土は３層に分層し、いずれも自然堆積土と判断した。ℓ１・２は黒褐色シルトを基調とし、含有物の違いから２層に分層した。その下層にℓ３の黒色シルトが底面上に厚く堆積する。

出土遺物は縄文土器１点である。図７－４は縄文土器で、体部下半の破片である。確認できるのは地文のみであるが、胎土等の特徴から後期のものと推定される。

本遺構は、形態の特徴から落し穴と考えられる。時期については、堆積土中から縄文時代後期頃の土器が確認されていることから、当該期の所産と考えておきたい。（廣　川）

第４節　溝　跡

今回の調査で発見された溝跡は１条である。Ⅰ区でのみ確認されていて、出土遺物から平安時代のものと考えられる。

１号溝跡　ＳＤ01

遺　構（図８、写真９）

本遺構は、Ⅰ区のＢ８グリッドで検出した溝跡である。検出面はＬⅣ上面で、重複する遺構はない。

東西に延びる溝跡で、調査区内で確認した範囲の長さは10.6ｍ、幅は最少36㎝、最大104㎝である。検出面からの深さは10～26㎝で、東に行くほど深く遺存状態が良い。また、底面は東に向かって傾斜している。溝の断面形は、逆台形を呈する。

堆積土は４層に区分した。いずれも自然堆積土と判断した。ℓ１～３は、レンズ状に堆積している。ℓ４は北壁際に認められる層である。ややグライ化して土色が変質しているが、ＬⅣに起因すると考えられ、壁の崩落土と判断した。

遺　物（図８、写真20）

遺物は、土師器29点、須恵器３点が出土した。その内、器種が判断できる３点を図示した。

図８－１は、土師器杯である。ロクロ成形されたもので、口縁部から体部にかけて残存した破片である。口縁部はわずかに外反し、内面は黒色処理とミガキが施されている。図８－２は土師器甕の口縁部から頸部の破片である。ロクロ成形で、口縁端部は上につまみ上げられており、頸部は

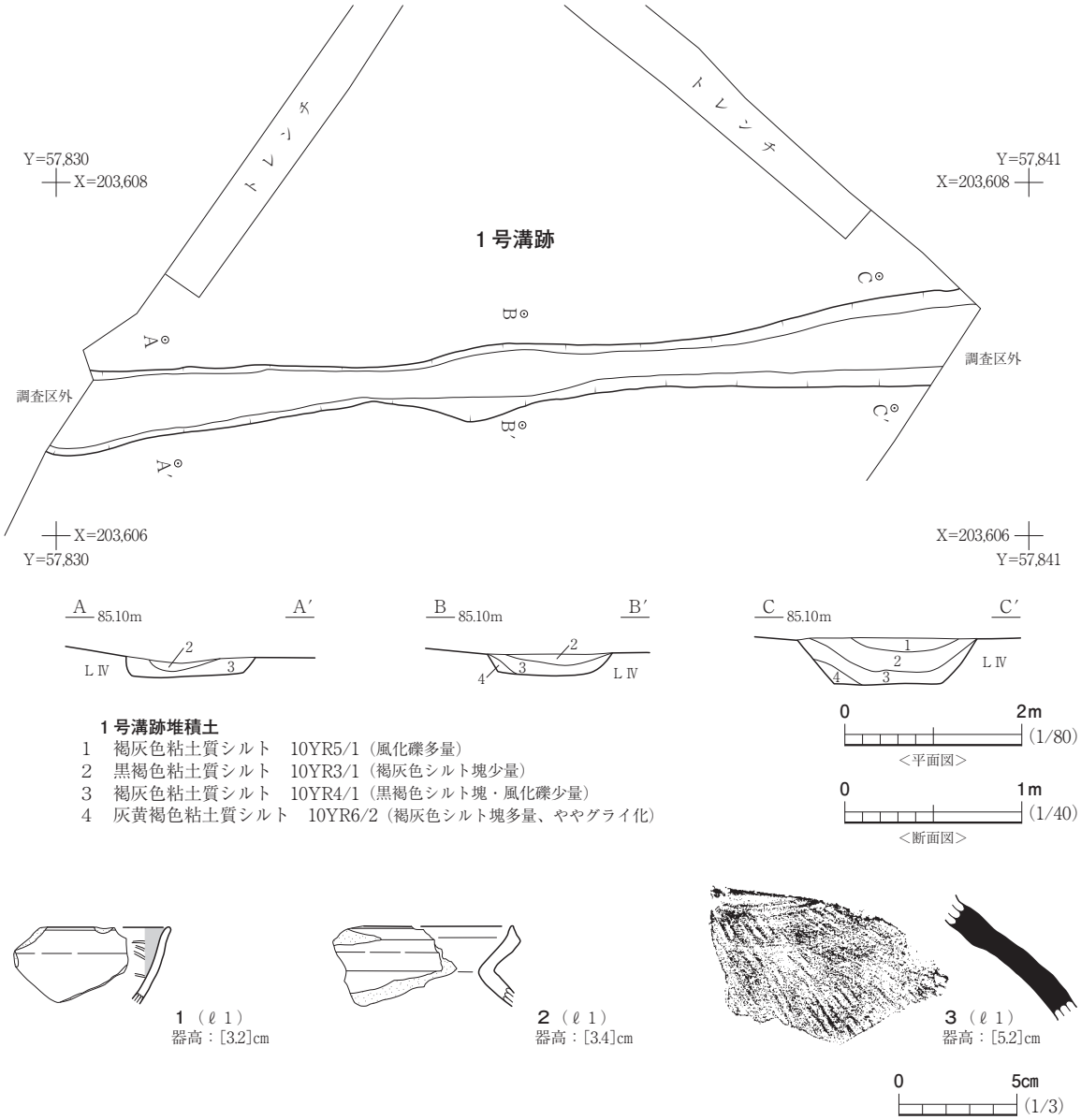


図８　１号溝跡・出土遺物

「く」の字状に曲がる。図８－３は須恵器甕で、頸部付近から胴部にかけてのものである。外面は平行タタキ目が残るが、内面はナデ調整により当て具痕は確認されなかった。

ま と め

本遺構は、平安時代の土師器・須恵器が出土したことから、当該期の溝跡と考えられる。調査が一部のため具体的な性格については不明だが、遺構底面は東に傾斜するため、Ⅱ区南部の流路跡の方に排水する機能があった可能性もある。（鶴　見）

第５節　特 殊 遺 構

今回の調査で発見された特殊遺構は３基である。３基ともⅢ区の流路跡の岸辺付近で確認された。出土遺物等から、いずれも平安時代の遺構と考えられる。

１号特殊遺構　ＳＸ01

遺　　構（図９、写真10）

本遺構は、Ⅲ区のＦ10・Ｇ10グリッドで検出した遺構である。検出面はＬⅣ上面である。重複する遺構はないが、北東に2.5ｍには２号特殊遺構、東に2.5ｍには３号特殊遺構がある。当初は遺物が出土せず、窪地状の地形と考えていたが、遺構西部の堆積土を掘り下げた段階で遺物がまとまって出土したため、遺構として調査を行った。

平面形は歪んだ円形で、規模は南北144㎝、東西129㎝である。検出面からの深さは最大20㎝である。周壁は緩やかに立ち上がるが、西壁側では二段になっている。底面は中央部がやや低くなるが、ほぼ平坦である。

堆積土は２層に分層し、ℓ１・２ともに自然堆積と判断した。ℓ１は多量の炭化物と少量の焼土を含んでいるが、周壁や底面に焼けた痕跡はなかった。

遺　　物（図10、写真21）

遺物は、土師器片108点が出土し、杯２個体、甕１個体、鍋３個体分が復元できた。遺物は、遺構中央付近からまとまって出土した。出土層位はℓ１のみである。土師器杯は底部を上に向けた状態で、ほぼ完形を保っていた。それ以外は、割れた状態で折り重なって出土した。

図10－１～２は土師器杯で、１はほぼ完形である。いずれもロクロ成形で、内面には黒色処理

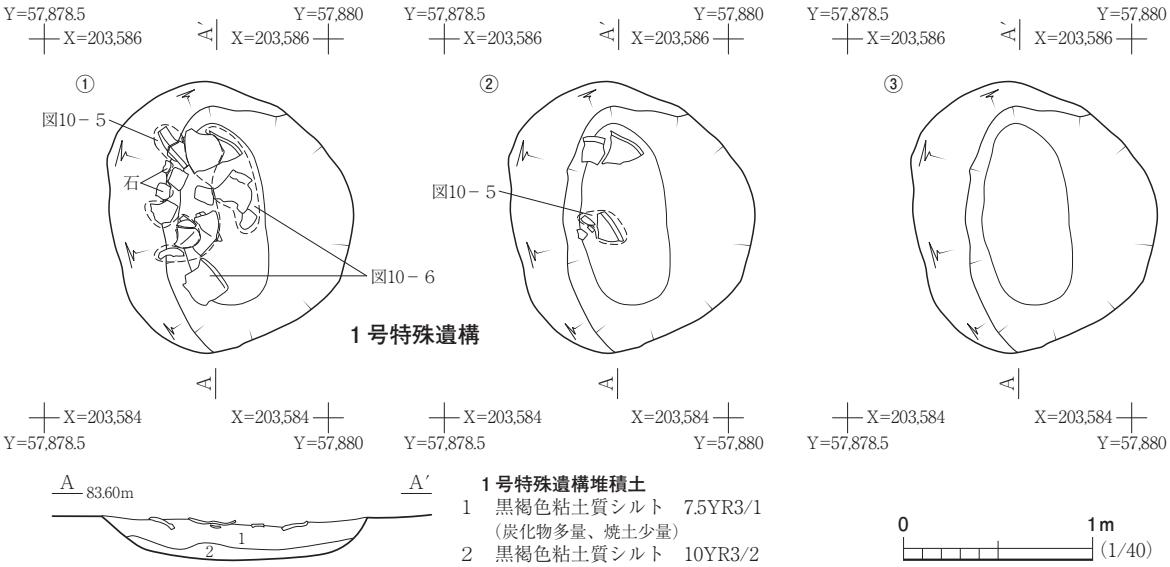


図９　１号特殊遺構

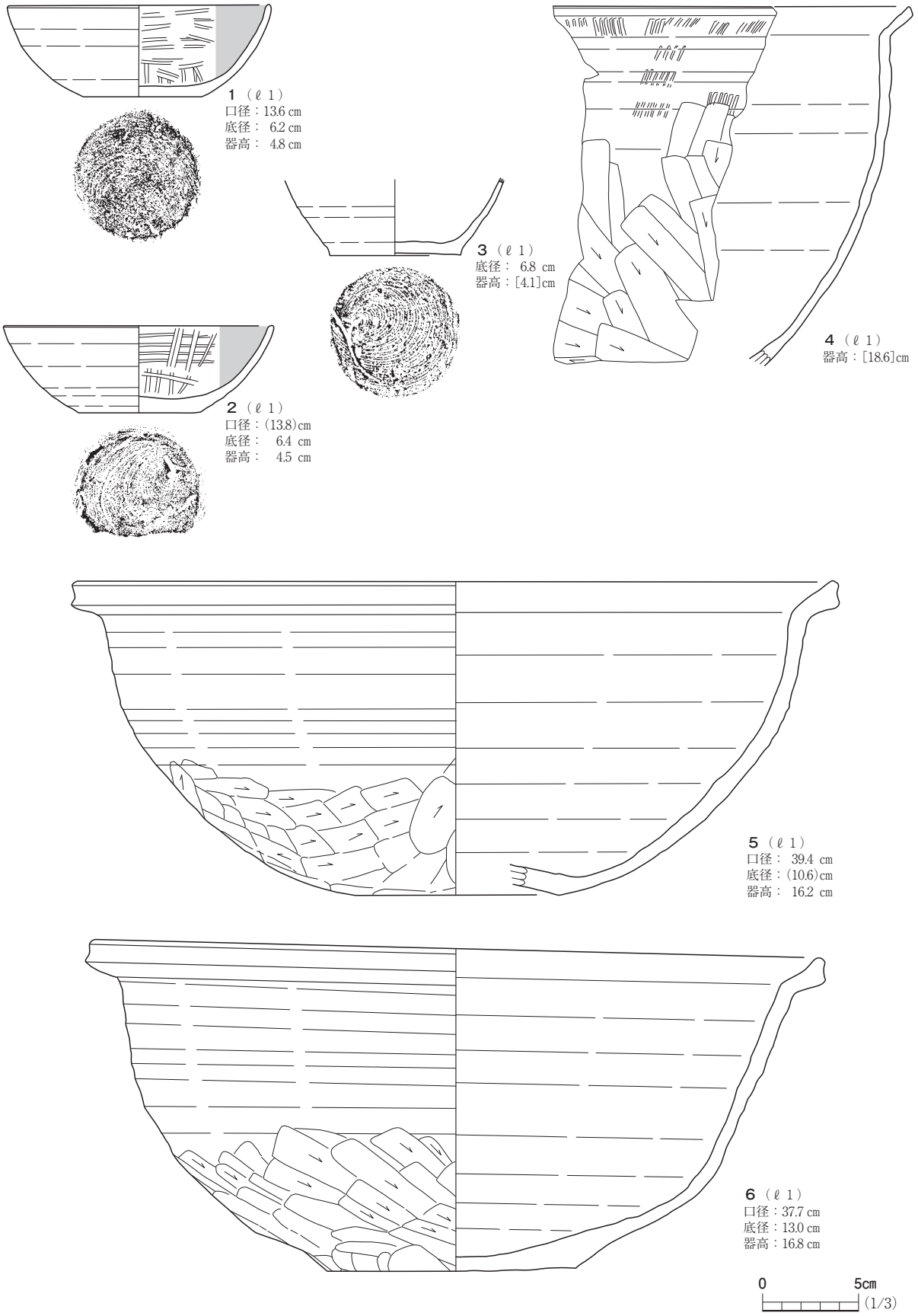


図10　１号特殊遺構出土遺物

とヘラミガキが認められ、底部の切り離しは回転糸切りである。底部～体部下端には切り離し後の調整は観察されなかった。また、２は外面が赤みを帯びていて、器面が剥離した痕跡がある。

図10－３は土師器甕である。胴部下半から底部にかけて残存していた。ロクロ成形で、器壁は薄い。底部の切り離しは回転糸切りである。また、全体的に器面が赤く、底部を中心に黒色の付着物が認められる。

図10－４～６は土師器鍋で、頸部は「く」の字状に屈曲している。４が薄手のつくりであるのに対し、５・６は厚手となっている。４の外面は、タタキで成形した後にロクロナデ、そしてその後、縦や斜め方向のヘラケズリが施されている。５・６には４のようなタタキ目は認められず、ロクロ成形後に胴部下半をヘラケズリして調整している。口縁端部の直下は外側に張り出し、端部との間は凹みが観察される。底部は平底で、底径は口径と比べ、かなり小さい。６の底部には、被熱痕跡とみられる赤色化した部分が確認できる。

ま と め

本遺構は、土器の出土状況から、不要になった土器の投棄場と考えられる。ただ、廃棄した段階では土坑状の落ち込みは一定程度埋没していたため、本来は別な用途があったと考えられる。しかし、その具体的な性格は不明である。

本遺構では、出土した炭化物について、放射性炭素年代測定を行っている。年代測定の結果は、暦年較正年代で、694calAD－746calAD（57.2％）という結果が出ていて、７世紀末～８世紀中頃にあたる（付編参照）。しかし、本遺構から出土した土器は全てロクロ成形で、杯の特徴から９世紀中～後半頃のものと考えられる資料であり、測定結果とは差がある。ただ、炭化物のもととなった木の伐採時期や転用等の可能性も考慮すると、測定結果よりも新しい年代と考えることに矛盾はなく、本遺構周辺及び本遺跡では７世紀代の遺構・遺物は確認されていないことから、本遺構は９世紀後半頃のものと考えておきたい。（鶴　見）

２号特殊遺構　ＳＸ02

遺　　構（図11、写真11）

本遺構は、Ⅲ区北端のＧ10グリッドで検出した遺構である。流路跡の岸辺付近にあり、流路跡の堆積土を掘り下げている段階で確認した。したがって、流路跡が完全に埋没する以前に機能していたものと考えられる。当初、遺構と認識できなかったため、内部の堆積土を少し掘り過ぎてしまった。検出面はＬⅣ上面である。重複する遺構はないが、南東に２ｍには３号特殊遺構、南西に2.5ｍには１号特殊遺構がある。

平面形は不整な長方形を呈し、規模は長軸92㎝、短軸71㎝である。検出面からの深さは最大で20㎝である。底面は周壁に被熱の痕跡は確認されなかった。

堆積土は黒色粘土質シルトの単層である。ℓ１は、流路跡堆積土のℓ２に相当し、自然堆積土と判断した。

遺　　物（図11、写真22）

本遺構の出土遺物は、土師器片237点、須恵器片１点、羽口片15点の他、鉄滓が出土している。その内、復元できた土師器４点、羽口６点を図示した。また、鉄滓については、椀形滓１点について、写真22に掲載した。

図11－１・２は土師器杯である。いずれもロクロ成形で、内面は黒色処理され、ヘラミガキで調整されている。１のヘラミガキは、放射状に施されている状況が観察できる。１の底部外面には回転糸切り痕が残り、切り離し後の調整はされていない。これに対し、２は底部周縁～体部下端

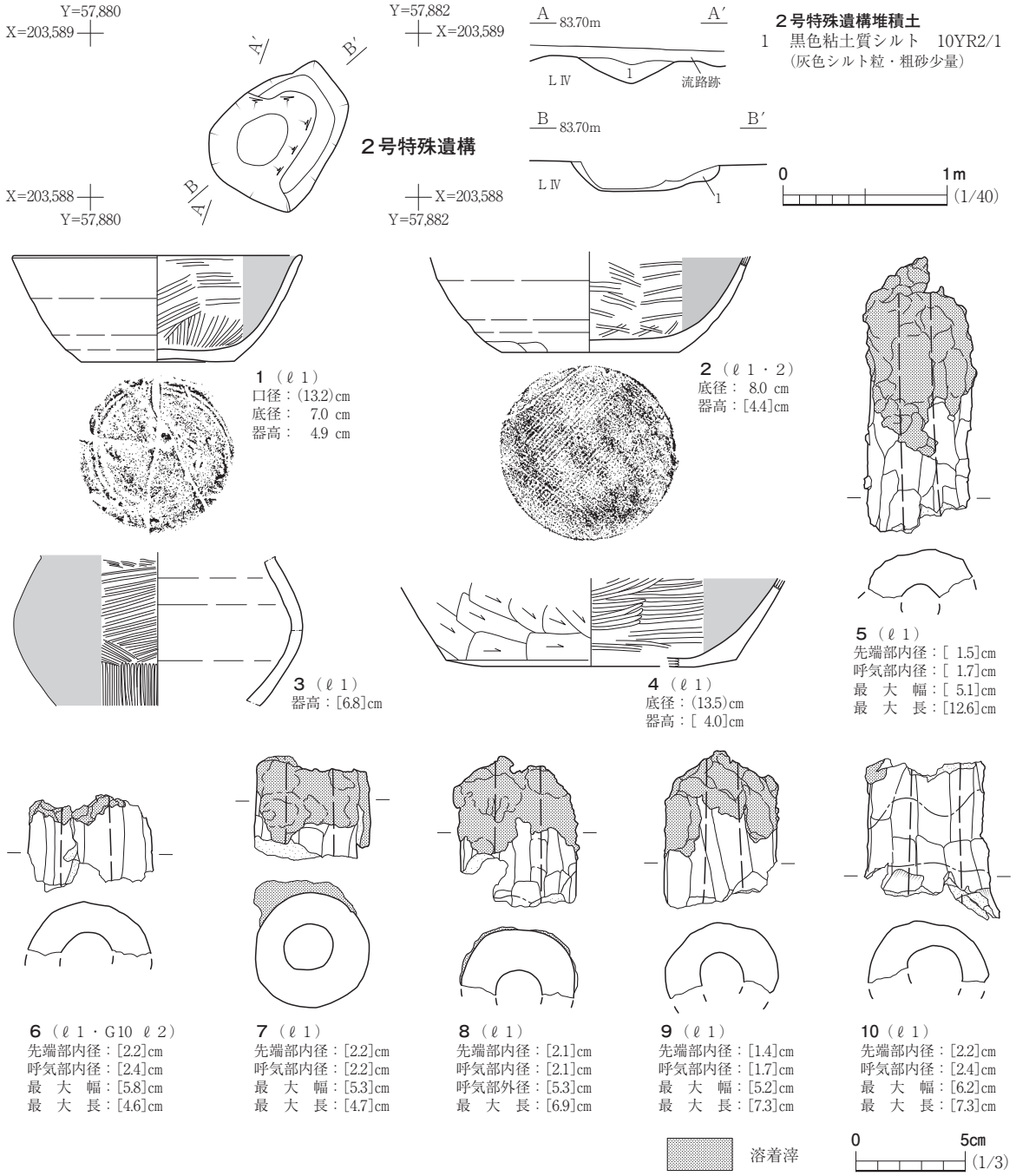


図11　２号特殊遺構・出土遺物

に手持ちヘラケズリ調整が認められる。また、底部には筋状の痕跡が認められるが、静止糸切りの痕跡とするには線が直線的過ぎるため、何らかの敷物の痕跡が残ったと想定される。

図11－３は土師器壺である。口縁部と底部が欠ける破片資料で、僅かに頸部が残っている。外面はヘラミガキと黒色処理が施されているが、内面はロクロナデ調整のみである。

図11－４は土師器甕または鉢の底部とみられる、胴部下端～底部にかけての破片である。外面は、横方向主体の手持ちヘラケズリで調整されている。内面は横方向のヘラミガキと黒色処理が観察される。

図11－５～10は羽口である。いずれも溶着滓が確認できる。先端部・吸気部ともに残存していないものが多く、全体の形状・長さがわかるものはなかった。５は出土したものの中では遺存状態が良い資料で、吸気部以外が残存していた。10の下端はやや「ハ」の字状に開くことから、吸気部付近の資料と考えられる。

写真22の椀形滓は底が丸い形状を呈し、鍛冶に伴うものと考えられる。

なお、羽口や椀形滓が出土したことから、掘り上げた遺構内部の堆積土の洗浄を行ったが、精錬時に生じる細かな鍛冶滓は確認されなかった。

ま と め

本遺構は、長軸が100㎝に満たない小規模の遺構だが、遺構内部から羽口がまとまって出土し、椀形滓も出土した。しかし、遺構には被熱の痕跡は皆無で、精錬時に生じる細かな鍛冶滓も確認されないことから、不要になった羽口や鉄滓等を廃棄した遺構と推定される。今回の調査区内では鍛冶炉は検出されなかったが、遺跡周辺で鍛冶が行われていた可能性が高い。なお、本遺構から出土した土師器片についても、鍛冶関連遺物とともに廃棄されたと考えられるが、ℓ１の上半で出土したものに関しては、流路跡が埋没する過程で流されてきた資料も含まれていると推測される。

また、本遺構では、出土した炭化物について、放射性炭素年代測定を行っている。年代測定の結果は、暦年較正年代で、764calAD－886calAD（80.1％）という結果が出ている（付編参照）。出土した土師器杯は９世紀中頃のものであり、測定結果の中におさまる。このことから、本遺構の年代は、９世紀中頃と考えている。（鶴　見）

３号特殊遺構　ＳＸ03

遺　　構（図12、写真12）

本遺構は、Ⅲ区北東部のＧ10グリッドで検出した遺構である。流路跡の岸辺付近にあり、流路跡の堆積土を掘り下げている段階で確認した。したがって、流路跡が完全に埋没する以前に機能していたものと考えられる。検出面はＬⅣ上面である。重複する遺構はないが、北西側２ｍには２号特殊遺構、西側に2.5ｍには１号特殊遺構がある。

平面形は不整形で、規模は長軸83㎝、短軸70㎝である。検出面からの深さは最大で13㎝である。周壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

堆積土は２層に分層し、いずれも自然堆積土と判断した。

遺構の中央部には横長の板材(図12－２)が置かれ、二本の杭で固定されていた。一本は遺構中央部、残りの一本は壁際付近で打ち込まれている。遺構中央部の杭(図12－３)は、板材(図12－２)を固定した状態のまま検出された。一方、壁際付近の杭(図12－４)は北西側に傾いており、遺構が埋没する過程で倒れたと推測される。また、板材や杭の周辺には10～20㎝大の石が７点まとまって検出された。本遺構周辺では石がまとまって検出されることはないため、本遺構に関連するものである可能性も考慮した。しかし、これらの石は全てℓ１の上部で検出されたため、判然としない。あるいは、流水で運ばれてきた石が板材に当たったことにより、本遺構周辺に散乱していた状況の可能性も考えられる。

遺　　物（図12、写真22）

出土遺物は、土師器杯が１点、木製品が３点、羽口１点、鉄滓１点で、このうち土師器と木製品

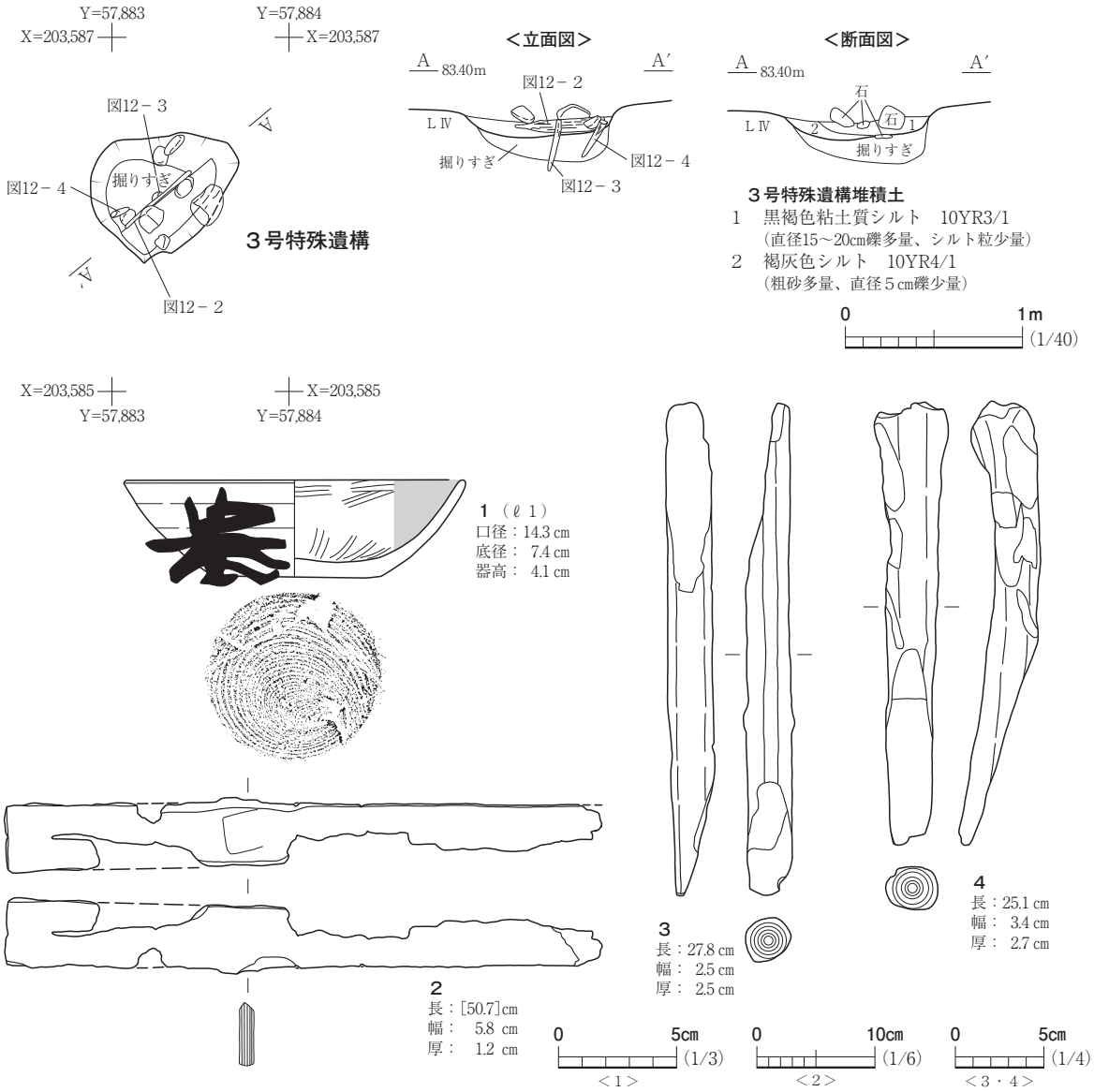


図12　３号特殊遺構・出土遺物

について図12に示した。

１は土師器杯である。ロクロ成形で、内面にはヘラミガキと黒色処理が施されているが、黒色処理は剝落し、遺存状態は悪い。底部外面には回転糸切り痕が残り、切り離し後の調整はされていない。また、体部外面に墨書が観察されたが、具体的な文字の判別はできない。

２は、板材である。腐食のため、もともとの長さは不明である。明瞭ではないが、一部に手斧らしき加工痕が残る。３・４は杭である。自然木の先端部を加工して杭にしている。３は上下両端に加工があり、上部は２の板材と接する部分にあたる。なお、２の板材は、樹種同定及び放射性炭素年代測定を行っている。樹種は、ニレ属、暦年較正年代は622calAD－655calAD（68.2％）という結果が出ている（付編参照）。

ま と め

本遺構は、僅かな窪みの中に板材を杭で固定した遺構である。流路跡の岸辺付近に位置することから、流路跡と関連する何らかの施設の可能性もあるが、具体的な用途は不明である。

本遺構から出土した土師器杯は、その特徴から９世紀後半頃の資料と考えられるが、板材の示す７世紀前半～中頃という測定結果とは差がある。ただ、板材については、木の伐採時期や転用等の可能性も考慮する必要がある。また、本遺構周辺及び本遺跡では７世紀代の遺構・遺物は確認されていない。以上のことから、本遺構は９世紀後半頃のものと考えておきたい。　（鶴　見）

第６節　小　穴　群

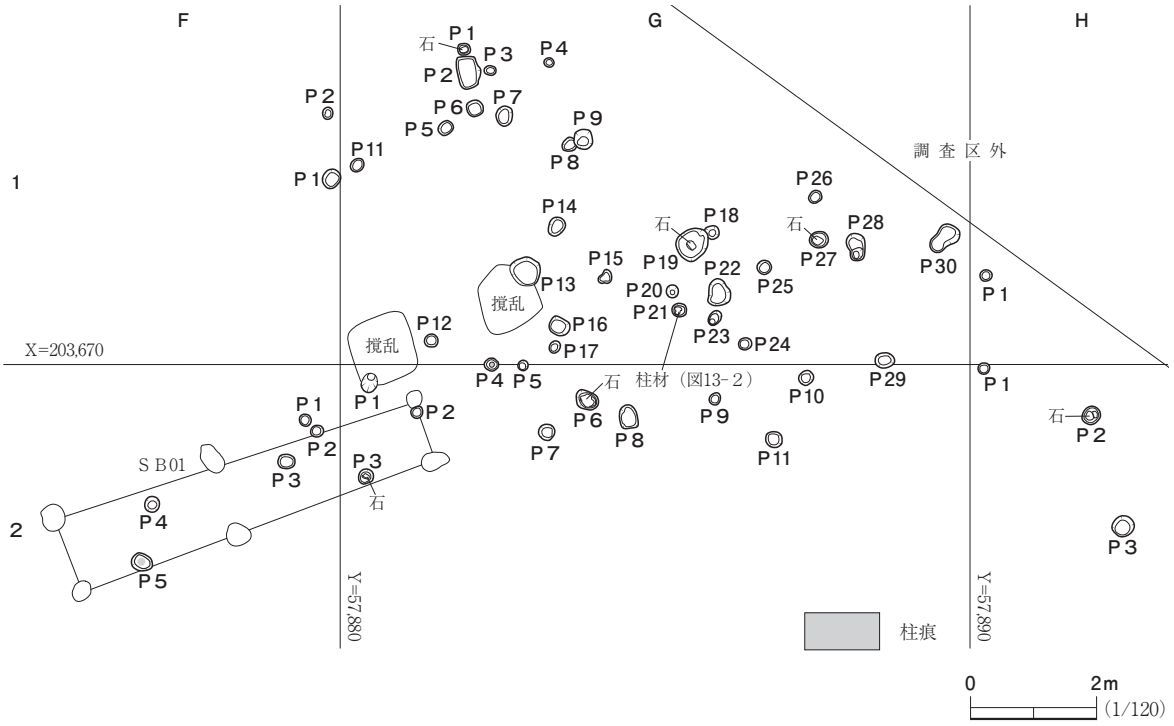
いずれの小穴もⅡ区北部から検出された。小穴はⅡ区北部の流路跡東側から検出された２基を除き、Ⅱ区北部の北端近くに集中する。その一角からは１号建物跡が検出されており、小穴群は同様の建物跡の柱穴と考えられる。

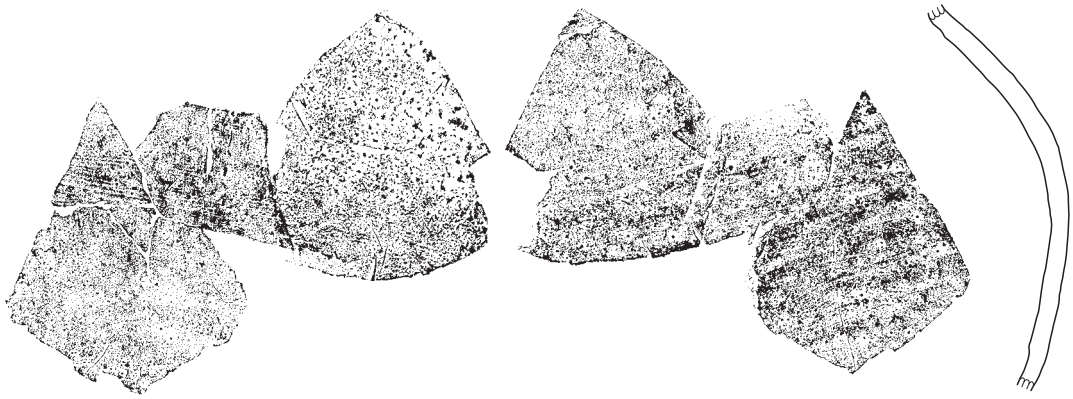
小 穴 群（図13、写真13～15）

検出した小穴は52基である。小穴はグリッドごとに番号を付け、一覧表に長軸（cm）、短軸（cm）、深さ（cm）、堆積土等の所見をまとめた。検出面はいずれもＬⅣ上面である。Ｆ５グリッドで検出された２基を除き、他の小穴はⅡ区北部の北端近く、Ｆ１・２、Ｇ１・２、Ｈ１・２グリッドで確認されている。小穴群は、分布状況から、北側の調査区外へも広がるものとみられる。

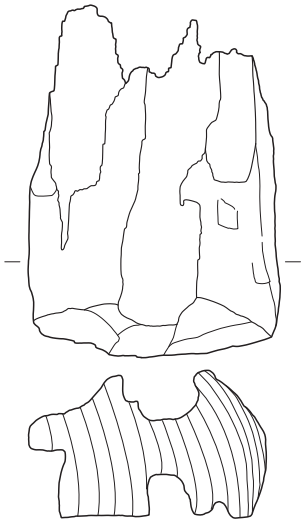
これらの小穴の平面形は楕円形ないし円形である。規模は、短軸の計測値で20～30cmの範囲内に収まるものがほとんどで、それより小さい20cm未満のものがいくつか存在する。

掘形内の堆積土は、多くが黒褐色シルトを基調としている。それぞれの小穴の中には重複するもの、堆積土中から柱痕跡や柱材の礎盤石の可能性がある石が認められたものがあり、それらは一覧表中に付け加えた。





1（H1P1 ℓ1）
器高：[21.2]cm



2（G1P21）
長：[18.5]cm
幅：13.2 cm
厚：[8.0]cm

0　5cm
(1/4)

図13　小穴群・出土遺物

表１　小穴一覧表

グリッド	Ｐ番号	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	堆積土	備考
Ｆ１	1	31	26	11	10YR3/1　黒褐色シルト(礫・ＬⅢ粒・炭少量)	土師器
	2	18	16	6	10YR3/1　黒褐色シルト(礫・ＬⅢ粒塊多量)	
Ｆ２	1	19	19	12	10YR3/1　黒褐色シルト(礫・ＬⅢ多量)	
	2	20	20	12	10YR3/1　黒褐色シルト(ＬⅢ粒少量)	
	3	26	22	16	10YR3/1　黒褐色シルト(礫・ＬⅢ粒多量・炭少量)	
	4	22	22	15	10YR3/1　黒褐色シルト(礫・ＬⅢ粒・炭少量)	
	5	33	28	19	10YR2/1　黒褐色シルト(ＬⅢ粒微量) 10YR4/2　灰黄褐色シルト(ＬⅢ粒・塊多量)	
Ｆ5	1	20	18	11	7.5YR3/2　黒褐色シルト(礫・Ⅲ粒・塊多)	土師器
	2	20	18	11	7.5YR3/2　黒褐色シルト(礫・Ⅲ粒・塊多)	
Ｇ１	1	20	18	11	10YR3/1　黒褐色シルト(礫・ＬⅢ粒・塊少量)	
	2	52	34	14	10YR3/1　黒褐色シルト(ＬⅢ粒・塊多量)	
	3	20	14	7	10YR2/3　黒褐色シルト(ＬⅢ粒少量)	
	4	14	13	4	10YR2/3　黒褐色シルト(ＬⅢ粒・塊少量)	
	5	24	20	11	10YR3/1　黒褐色シルト(礫・ＬⅢ粒多量・炭微量)	
	6	28	26	8.5	10YR3/1　黒褐色シルト(礫・ＬⅢ粒多)	
	7	32	24	12	10YR2/3　黒褐色シルト(ＬⅢ粒・塊少量)	
	8	22	20	12	7.5YR3/1　黒褐色シルト(礫少量・炭微量)	
	9	32	27	38	10YR3/1　黒褐色シルト(礫・ＬⅢ粒・塊多量・炭微量)	
	11	24	18	8	10YR3/1　黒褐色シルト(礫・ＬⅢ粒・炭微量)	
	12	21	19	10	10YR3/2　黒褐色シルト(ＬⅢ粒・塊多量)	
	13	49	46	14	10YR3/1　黒褐色シルト(礫・ＬⅢ粒多量)	
	14	30	24	16	10YR3/1　黒褐色シルト(礫・ＬⅢ粒多量)	
	16	34	28	23	10YR3/2　黒褐色シルト(礫・ＬⅢ粒多量) (10YR3/1　黒褐色シルト塊・ＬⅢ塊多量)	
	17	20	16	11	10YR3/2　黒褐色シルト(礫・ＬⅢ粒多量) (10YR3/1　黒褐色シルト塊・ＬⅢ塊多量)	
	18	22	18	32	10YR3/1　黒褐色シルト(礫・ＬⅢ粒塊多量)	
	19	56	45	20	10YR3/1　黒褐色シルト(ＬⅢ粒・炭少量)	
	20	20	18	4	10YR3/2　黒褐色シルト(礫・ＬⅢ粒多量)	
	21	22	21	6	10YR3/1　黒褐色シルト(礫・ＬⅢ粒少)	柱材
	22	45	30	28	10YR3/1　黒褐色シルト(礫・ＬⅢ粒多量)	
	23	25	18	3	10YR3/2　黒褐色シルト(礫・ＬⅢ粒多量・炭微量)	
	24	21	18	20	10YR3/1　黒褐色シルト(礫・ＬⅢ粒多量)	
	25	22	22	34	7.5YR2/1　黒色シルト(ＬⅢ粒微量)	
	26	21	18	12	10YR2/1　黒褐色シルト(ＬⅢ粒微量)	
	27	30	25	8	10YR3/1　黒褐色シルト(礫・ＬⅢ粒少量)	
	28	44	24	20	10YR3/1　黒褐色シルト(礫多量・ＬⅢ粒少量)	
	29	30	24	19	7.5YR2/1　黒色シルト(ＬⅢ粒少量)	
	30	52	26	18	10YR3/1　黒褐色シルト(礫・ＬⅢ粒・塊多量)　ＬⅢに近似	
Ｇ２	1	32	26	20	10YR3/2　黒褐色シルト(ＬⅢ粒・塊多量)	
	2	20	18	6	10YR3/1　黒褐色シルト(ＬⅢ粒微量)	
	3	24	22	16	10YR3/1　黒褐色シルト(礫・ＬⅢ粒多量・炭少量)	
	4	22	20	11	10YR4/2　灰黄褐色シルト(ＬⅢ粒・塊多量)	
	5	16	15	13.5	10YR3/1　黒褐色シルト(ＬⅢ粒・塊少量)	
	6	38	28	12	10YR3/1　黒褐色シルト(ＬⅢ粒・塊少量)	
	7	25	25	14	10YR2/1　黒色シルト(ＬⅢ粒微量)　ＬⅢに近似	
	8	38	30	18	10YR3/1　黒褐色シルト 10YR4/1　褐灰色シルト斑状(礫多量・ＬⅢ粒・塊多量)	
	9	20	16	10	10YR3/1　黒褐色シルト(礫・ＬⅢ塊多量)	
	10	24	20	16	10YR2/1　黒色シルト 10YR4/1　褐灰色シルト斑状(礫・ＬⅢ粒・塊多量)	
	11	26	24	8	10YR3/1　黒褐色シルト(ＬⅢ粒・塊多量塊多量)	
Ｈ１	1	18	18	4	10YR3/1　黒褐色シルト(礫・ＬⅢ粒・塊多量)	陶器
Ｈ２	1	18	18	6	10YR3/2　黒褐色シルト(ＬⅢ粒・塊多量)	
	2	30	26	10	10YR3/2　黒褐色シルト(ＬⅢ粒・塊多量)	
	3	34	30	30	15YR2/1　黒色シルト(ＬⅢ粒・塊少量)	

遺　　物（図13、写真23）

出土遺物はほとんどなく、Ｆ１Ｐ１、Ｆ５Ｐ１から出土した土師器杯の破片と、Ｈ１Ｐ１から出土した中世陶器、Ｇ１Ｐ21から出土した柱材で全てである。細片で図化できないものを除き、２点を図示した。

図13－１は陶器である。常滑焼とみられる甕で、頸部付近から胴部中央付近の破片である。胎土は緻密で、胴部上半を中心に自然釉の付着が認められる。13～14世紀頃のものとみられる。

図13－２は柱材である。腐朽が進行していて、加工痕は明瞭ではない。この柱材は、樹種同定及び放射性炭素年代測定を行っている。樹種はクリ、暦年較正年代は1065calAD－1155calAD

(66.4％)という結果が出ている(付編参照)。

ま と め

小穴群は、１号建物跡の柱穴と形状や規模、堆積土が近似することから、同様の建物跡の柱穴と考えられる。小穴群の中には、１号建物跡の東西柱列の延長上にまとまって分布する一群があることから、同建物跡と同様の東西棟の建物跡が並存していた可能性がある。

小穴群からは、Ｈ１Ｐ１から13～14世紀頃の中世陶器が出土した。その一方で、Ｇ１Ｐ21から出土した柱材の放射性炭素年代測定では、11世紀後半～12世紀中頃との結果が出ている。ただ、柱材については、木の伐採時期や転用の可能性も考慮する必要がある。そのため、小穴群の所属時期は陶器の年代観から13～14世紀頃と考えたい。　（廣　川）

第７節　流　路　跡

流路跡は、出土した遺物から、平安時代に機能していたと考えられる。遺物は、Ⅱ区南部の１～３号土坑周辺及びＥ６グリッドの南東部、Ⅲ区の２・３号特殊遺構周辺の比較的限られた範囲から出土した。また、Ⅱ区南部の流路跡の底面では、杭列が確認された。その機能は判然としないが、平安時代に自然流路の一部を何らかの目的で利用したと思われる。

流 路 跡（図14～17、写真16・17）

流路跡はⅡ区北部の南西部、Ⅱ区南部、そしてⅢ区東部で確認した。底面に凹凸が多く認められ、流水により堆積したと考えられる砂礫層が確認されることから自然の流路跡と判断した。検出面はＬⅣ上面である。Ⅱ区北部では重複する遺構はないが、Ⅱ区南部の中洲状の箇所に１～３号土坑がある。Ⅲ区では岸辺付近に２・３号特殊遺構があり、これらの遺構は流路跡の堆積土を除去した段階で検出されたことから、流路跡が完全に埋没する以前に営まれたものと考えられる。

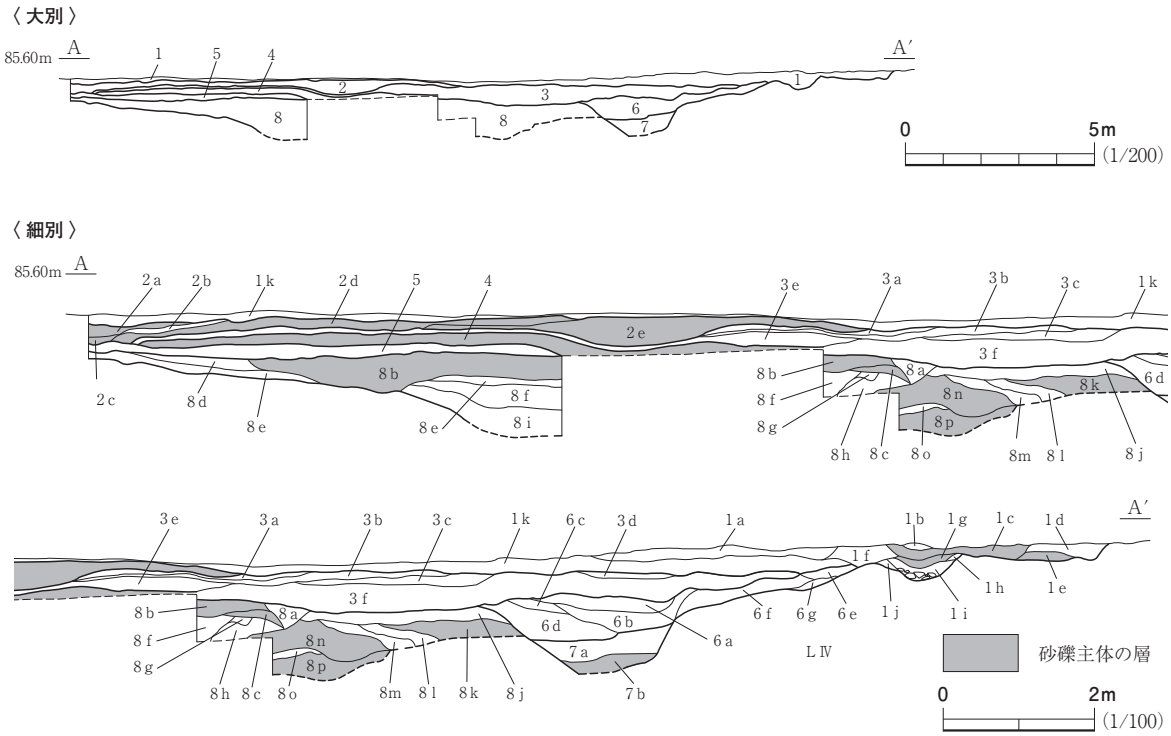
流路跡は北西から南東方向に向かって延びている(図14)。流路跡の規模は、検出された範囲で全長77.6ｍである。全体の幅がわかる箇所はないが、確認できる範囲での最大幅は24.8ｍである。深さは、Ⅱ区南部の中央やや東寄りで最大1.5ｍを測る。底面の標高は南東方向に向かって低くなっていく。また、Ⅲ区の流路跡南西部では、南西方向に延びる支流を確認した(図17)。支流は、検出された範囲での規模は、全長19.5ｍ、幅は60～150㎝である。支流の底面の標高は、南西方向に向かって低くなっていく。

堆積土に関しては、Ⅱ区とⅢ区とでは堆積状況が異なっており、土層の対応関係は把握できなかった。そのため、別々に層の番号を付けて記録した。

Ⅱ区では堆積土を８層に大別し、さらに各層を細別した(図15)。ℓ１・３・５は粘土質シルト主体の層、ℓ２・４は砂礫主体の層で、交互に堆積している。このうち、ℓ１・３は東部、ℓ２・４・５は西部を中心に堆積している。ℓ６・７は東部の岸辺付近から流路跡が一段深くなる箇所に

D
G
H
X=203,650
Y=57,850
Y=57,900
4
5
6
7
8
9
10
11
12
86.75m
86.50m
86.50m
86.25m
86.25m
Ⅱ区北部
A'
地山
図16
SK03
SK02
SK01
85.25m
85.00m
流水方向
A
Ⅱ区南部
流路跡
0
10m
(1/400)
X=203,600
SK05
SK06
SK04
SX02
SX03
SX01
図17
83.75m
83.50m
83.25m
83.00m
82.75m
82.50m
Ⅲ区
SK08
SK09
SK07
82.75m
82.50m
SK10
82.50m
D
E
F
G
H

図14　流路跡（1）



流路跡堆積土

１ａ　黒褐色シルト　10YR3/2
１ｂ　黒褐色粘土質シルト　10YR2/3
１ｃ　暗オリーブ褐色砂礫　2.5Y3/3
１ｄ　灰黄褐色シルト　10YR4/2（礫含む）
１ｅ　暗赤褐色砂質シルト　5YR3/2（礫多量）
１ｆ　暗褐色シルト　10YR3/3（礫含む）
１ｇ　褐色砂礫　10YR4/4
１ｈ　黒褐色粘質シルト　10YR2/2
１ｉ　黒色粘土質シルト　10YR2/1（オリーブ黒色砂と互層）
１ｊ　黒褐色粘土質シルト　2.5Y3/1
１ｋ　黒褐色シルト　10YR2/2（灰黄褐色シルト含む）
２ａ　灰黄褐色砂礫　10YR4/2
２ｂ　黒褐色粘土質シルト　10YR3/1
２ｃ　暗褐色砂　10YR3/3
２ｄ　褐色砂　10YR4/4
２ｅ　褐色砂礫　10YR4/4
３ａ　黒褐色粘土質シルト　10YR2/3
３ｂ　黒褐色シルト　10YR3/1
３ｃ　黒褐色シルト　10YR3/2（礫多量）
３ｄ　オリーブ黒粘土質シルト　5Y3/1
３ｅ　褐灰色粘土質シルト　10YR4/1（にぶい黄褐色砂層状に含む）
３ｆ　灰黄褐色粘土質シルト　10YR4/2（にぶい黄褐色シルト塊含む）
４　暗褐色砂礫　10YR3/4
５　黒褐色粘土質シルト　10YR3/1
６ａ　にぶい黄褐色粘土質シルト　10YR5/4（礫多量）
６ｂ　灰黄褐色粘土質シルト　10YR4/2
６ｃ　黒褐色粘土質シルト　2.5Y3/1
６ｄ　黒褐色粘土質シルト（礫含む）
６ｅ　黒褐色シルト　10YR2/2（炭化物多量）
６ｆ　オリーブ黒粘土質シルト　7.5Y3/2
６ｇ　黒褐色粘土質シルト　2.5Y3/1
７ａ　黒褐色粘土質シルト　10YR3/1（ややグライ化）
７ｂ　灰黄褐色細砂10YR5/2（褐灰色粘土質シルト塊多量）
８ａ　黒褐色粘土質シルト　10YR3/2（礫多量）
８ｂ　褐色砂礫　10YR4/4（褐色粘土質シルト多量）
８ｃ　黒褐色砂質シルト　10YR2/3（礫多量）
８ｄ　黒褐色粘土質シルト　10YR2/3（礫含む）
８ｅ　黒褐色粘土質シルト　10YR3/1
８ｆ　黒色粘土質シルト　10YR2/1
８ｇ　黒褐色シルト　10YR2/2
８ｈ　オリーブ黒砂質シルト　7.5Y2/2
８ｉ　黒褐色土質シルト　2.5Y3/1
８ｊ　黒褐色土質シルト　10YR3/1（礫含む）
８ｋ　褐色砂礫　10YR4/4
８ｌ　黒色泥炭　N1.5/
８ｍ　黒褐色土質シルト　10YR3/1
８ｎ　オリーブ黒砂礫　7.5Y3/1
８ｏ　灰色シルト　7.5Y4/1（黒褐色粘土質シルトと互層）
８ｐ　黒色砂礫　7.5Y2/1

図15　流路跡（２）

堆積している。ℓ６は粘土質シルト主体の層である。ℓ７は上部がややグライ化した粘土質シルト層（７ａ）で下部が砂礫層（７ｂ）である。ℓ８は中央部～西部に堆積する層で、中央部付近では粘土質シルト層と砂礫層が交互に堆積している。これらの層の観察から、中央部～西部（ℓ８）→東部（ℓ６・７）→西部（ℓ４・５）→東部（ℓ３）→西部（ℓ２）→東部（ℓ１）というように、流路の中心が変わりながら堆積していったと推測される。

遺物は、Ⅱ区北部では皆無で、Ⅱ区南部ではＤ６グリッドの１～３号土坑周辺、Ｅ６グリッドの南東部の比較的限られた範囲から出土した。出土層位を見ると、ℓ１・２・６・７ａから多く出土

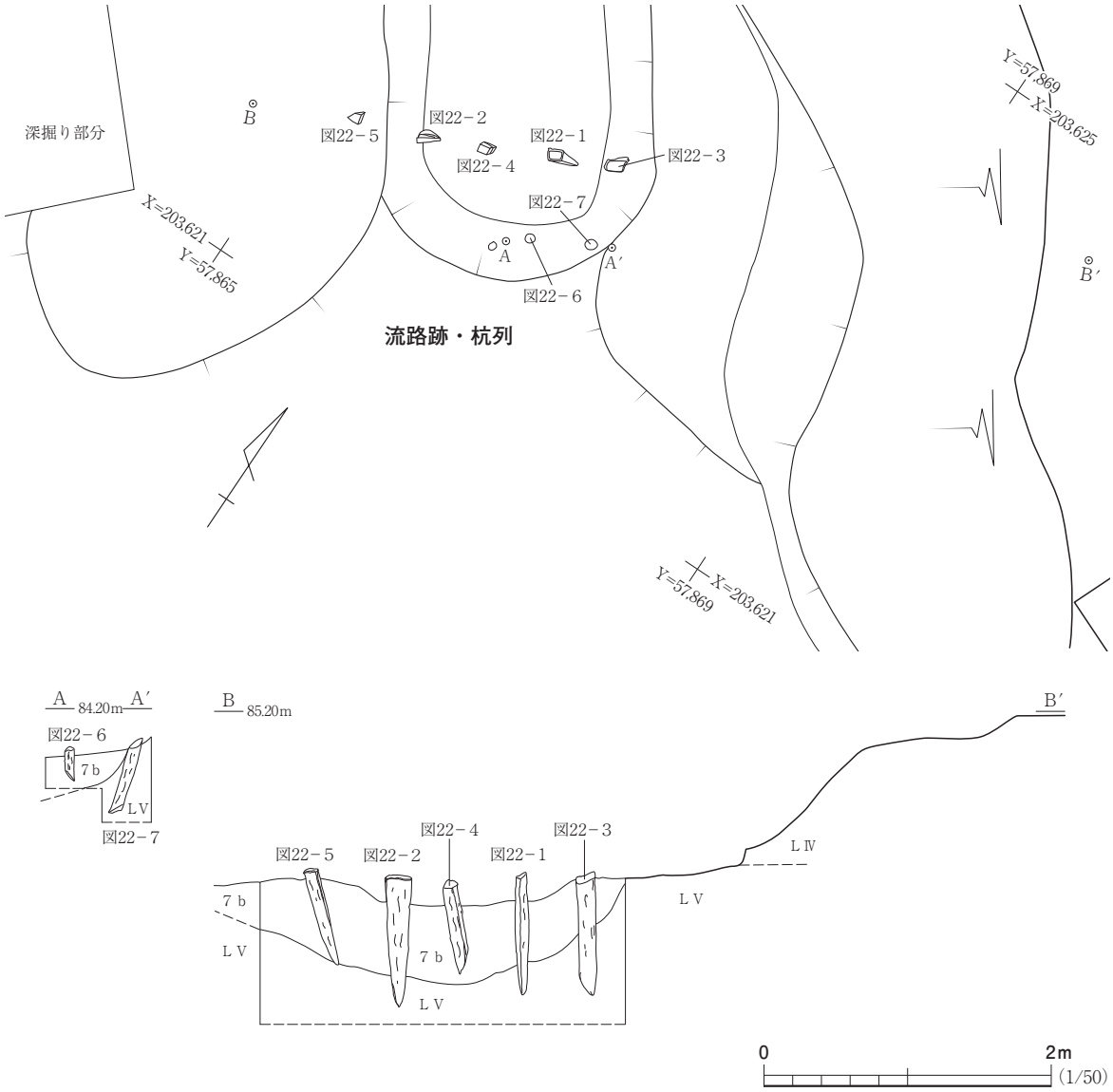


図16　流路跡（３）

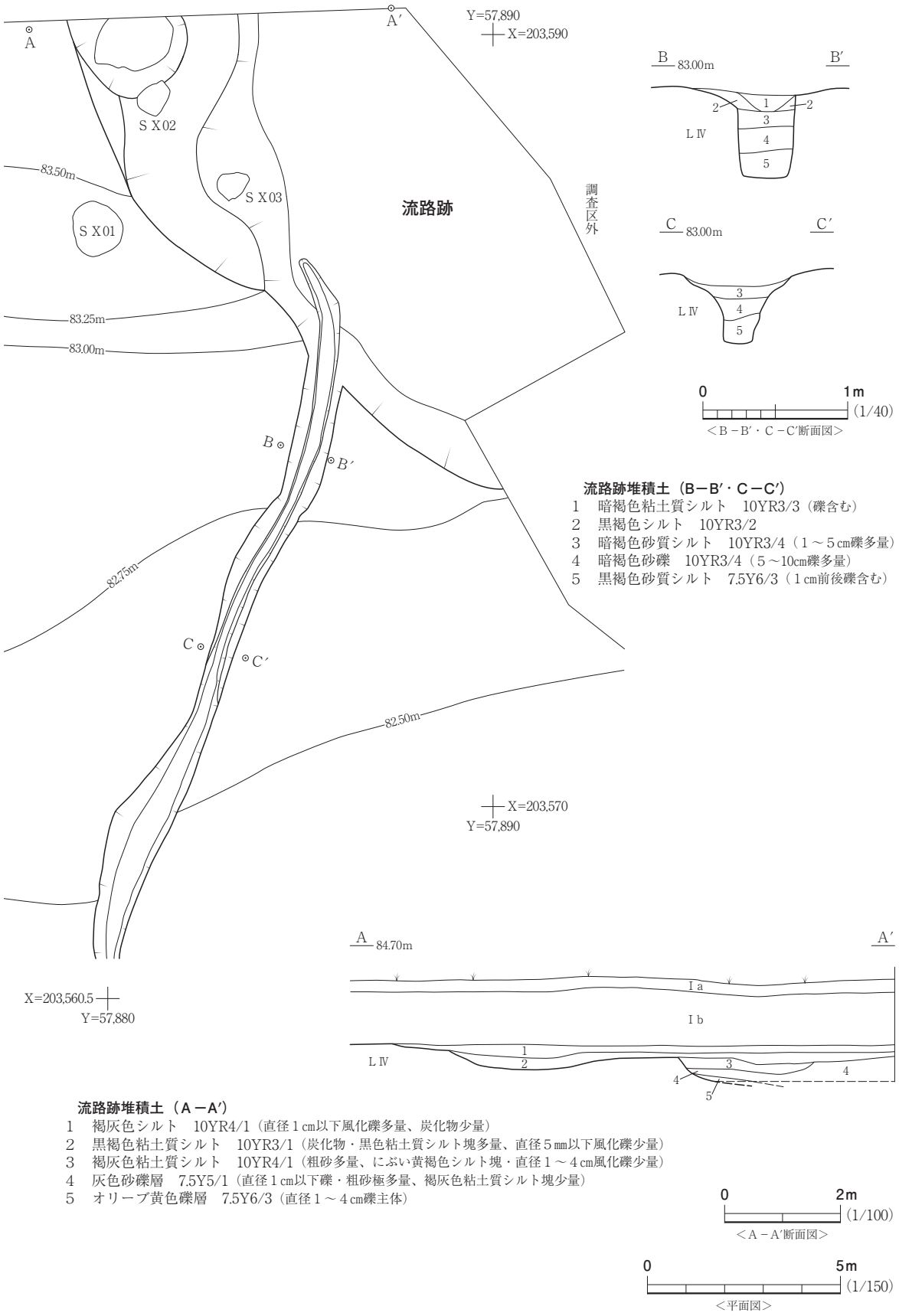
した。７ｂ層以下は無遺物層である。

Ⅲ区では堆積土を５層に分層した(図17)。ℓ１～３はシルト層ないし粘土質シルト層で、２・３号特殊遺構周辺から遺物がまとまって出土した。ℓ４・５は砂礫層で、無遺物層である。また、Ⅲ区の南西方向に延びる支流の堆積土は、暗褐色ないし黒褐色を呈し、礫を含む特徴がある。

また、Ⅱ区南部では、東部の一段深くなる箇所で杭列を確認した(図16)。杭列は、流路の方向とは直交する形で、北側に５本、南側に２本の計７本並んでいた。この７本の杭は、いずれも７ｂ層の上面から打ち込まれていると判断した。北側杭列は、杭の長さは70～90㎝で、深いものでは基盤の礫層であるＬＶまで打ち込まれていた。杭間の間隔は20～35㎝で、ほぼ一定間隔で打ち込まれている。なお、杭列の北側には、杭に引っかかって止まったとみられる流木が観察された。

遺　　物（図18～28、写真24～34）

流路跡からは縄文土器、土師器、須恵器、灰釉陶器、土製品、石器、木製品、羽口が計4,940点



流路跡堆積土（B－B′・C－C′）

1　暗褐色粘土質シルト　10YR3/3（礫含む）
2　黒褐色シルト　10YR3/2
3　暗褐色砂質シルト　10YR3/4（１～５㎝礫多量）
4　暗褐色砂礫　10YR3/4（５～10㎝礫多量）
5　黒褐色砂質シルト　7.5Y6/3（１㎝前後礫含む）

流路跡堆積土（A－A′）

1　褐灰色シルト　10YR4/1（直径１㎝以下風化礫多量、炭化物少量）
2　黒褐色粘土質シルト　10YR3/1（炭化物・黒色粘土質シルト塊多量、直径５㎜以下風化礫少量）
3　褐灰色粘土質シルト　10YR4/1（粗砂多量、にぶい黄褐色シルト塊・直径１～４㎝風化礫少量）
4　灰色砂礫層　7.5Y5/1（直径１㎝以下礫・粗砂極多量、褐灰色粘土質シルト塊少量）
5　オリーブ黄色礫層　7.5Y6/3（直径１～４㎝礫主体）

図17　流路跡（４）

出土したが、主体となるのは平安時代の土師器と須恵器である。器形がわかるものを中心に133点を掲載したが、先述した通り、土層の記録はⅡ区とⅢ区とで別々に作成したため、遺物もⅡ区とⅢ区とに分けて報告する。

Ⅱ区出土遺物

土師器（図18・19、写真24・25）

図18－１～18は杯である。ロクロ成形で、内面には黒色処理とヘラミガキが施されるものが多いが、２・７ではヘラミガキが観察できなかった。このうち、７は内面にロクロナデの痕跡が明瞭に認められることから、ヘラミガキが施されていないと考えられる。16は外面にも黒色処理とヘラミガキが認められる。内面のヘラミガキは、底部から体部下半までは放射状、体部から口縁部までは横方向で施されているものが多い。

底部の切り離しは、いずれも回転糸切りだが、８は器面の状態が悪いため不明瞭となっている。また、15では切り離しを途中でやり直したためか、最終的な切り離しとは別の痕跡が観察される。切り離した後は、３は体部下端に回転ヘラケズリ、４・13・15は体部下端に手持ちヘラケズリで調整している。

13・17には墨書、18には刻書が見られるが、具体的な文字の判別はできない。

なお、３・９・11は外面が赤色化していて、このうち３は内面の黒色処理も剝落している箇所が多く、11は黒色処理がほぼ剝落している。これらの資料は、二次的に熱を受けた可能性がある。また、６・８は外面に円形の剝離痕があり、焼成不良の可能性がある。

図18－19・20は高台付杯としたが、浅い皿状の器形を呈する可能性もある。いずれも、内面にはヘラミガキと黒色処理が施されている。19の杯部の底部には回転糸切り痕が残るが、20はロクロナデにより消されており、切り離しの痕跡は確認できなかった。

図19－１～３は杯または高台付杯の口縁部で、墨書が認められる。２・３は正位に書かれているが、１は横位の可能性がある。いずれも判読できない。

図19－４～６は甕である。４は口縁部に、６は頸部付近に煤が付着している。５は内面にカキ目状のナデが観察される。

須恵器・灰釉陶器（図19・20、写真25・26）

図19－７・９は須恵器の杯または高台付杯である。７は口縁部が外反する器形を呈する。９には墨書があり、文字というよりは何らかの記号かもしれない。図19－８は高台付杯で口縁部及び台部が欠損している。杯部の底面には手持ちヘラケズリが認められる。

図19－10は細片だが、須恵器短頸壺と推定され、外面にはカキ目状のナデが施される。

図19－11は小型の須恵器壺である。口縁部と底部が欠損するが、破片から大きさを復元した。外面には自然釉が付着する。

図19－12・13は須恵器長頸瓶と考えられる。12は破片資料だが径を復元して掲載した。口縁部は受け口状になっている。また、内外面に自然釉が付着する。13は頸部片で、リング状凸帯が僅

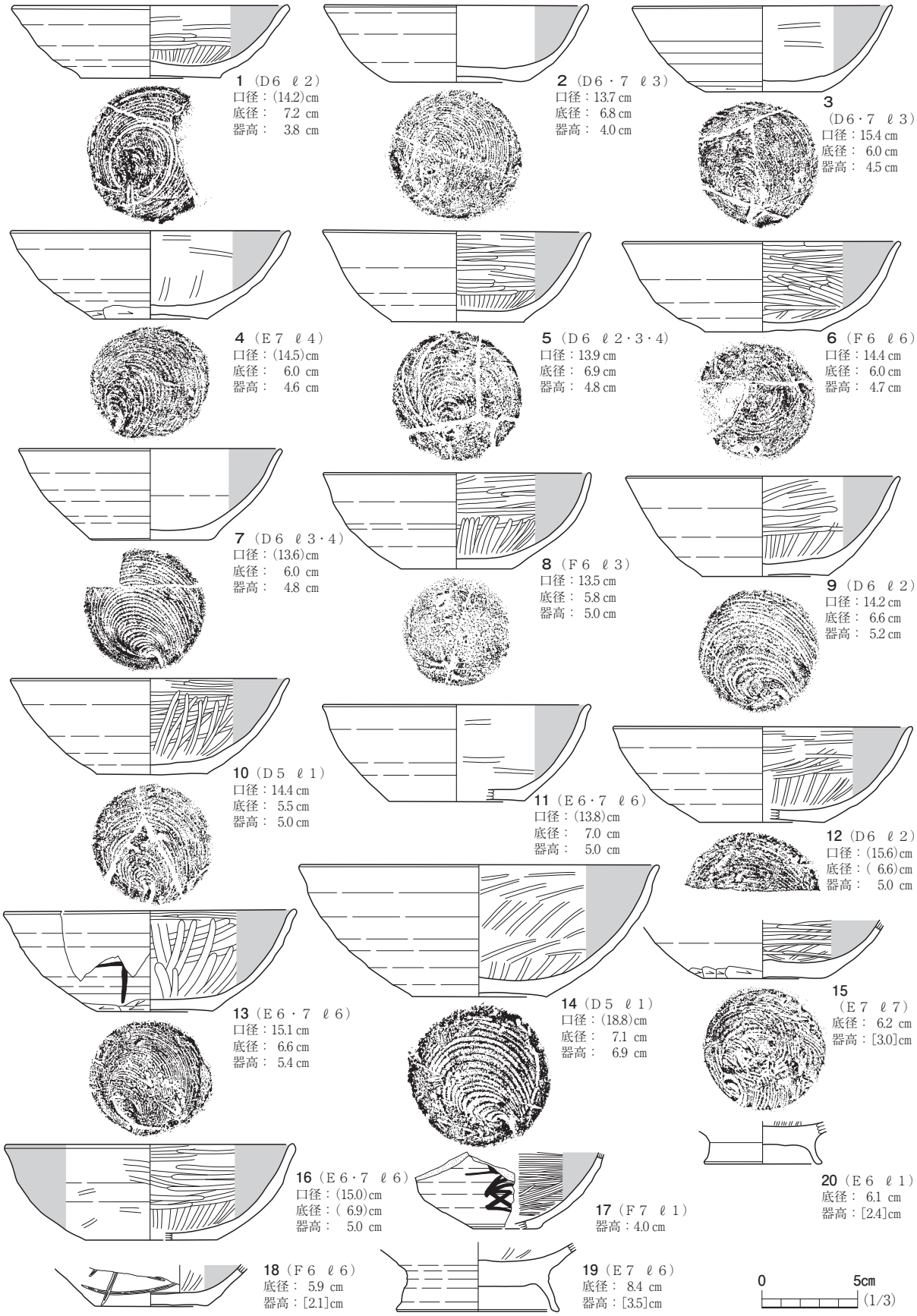


図18　流路跡出土遺物（１）

かに確認できる。

図19－14は須恵器鉢である。口縁部が内湾し、胴部上半に最大径を持つ器形を呈する。この器形から、鉄鉢を模倣したものと思われる。また、口縁端部と外面に自然釉が付着する。

図19－15～17は須恵器甕である。15は口縁部の破片で、横方向の波状文が施されている。内面には自然釉が付着する。16・17は胴部から底部にかけての資料である。16は外面にタタキ目の後にナデが施されるが、一部にヘラケズリも認められる。内面はロクロナデで調整されている。また、底部外面にはハケやタタキ目状の筋が認められる。この調整後に、ナデ調整が施されている。17は外面の胴部下端にのみ手持ちヘラケズリが認められるが、それ以外は底部外面も含め、ナデ

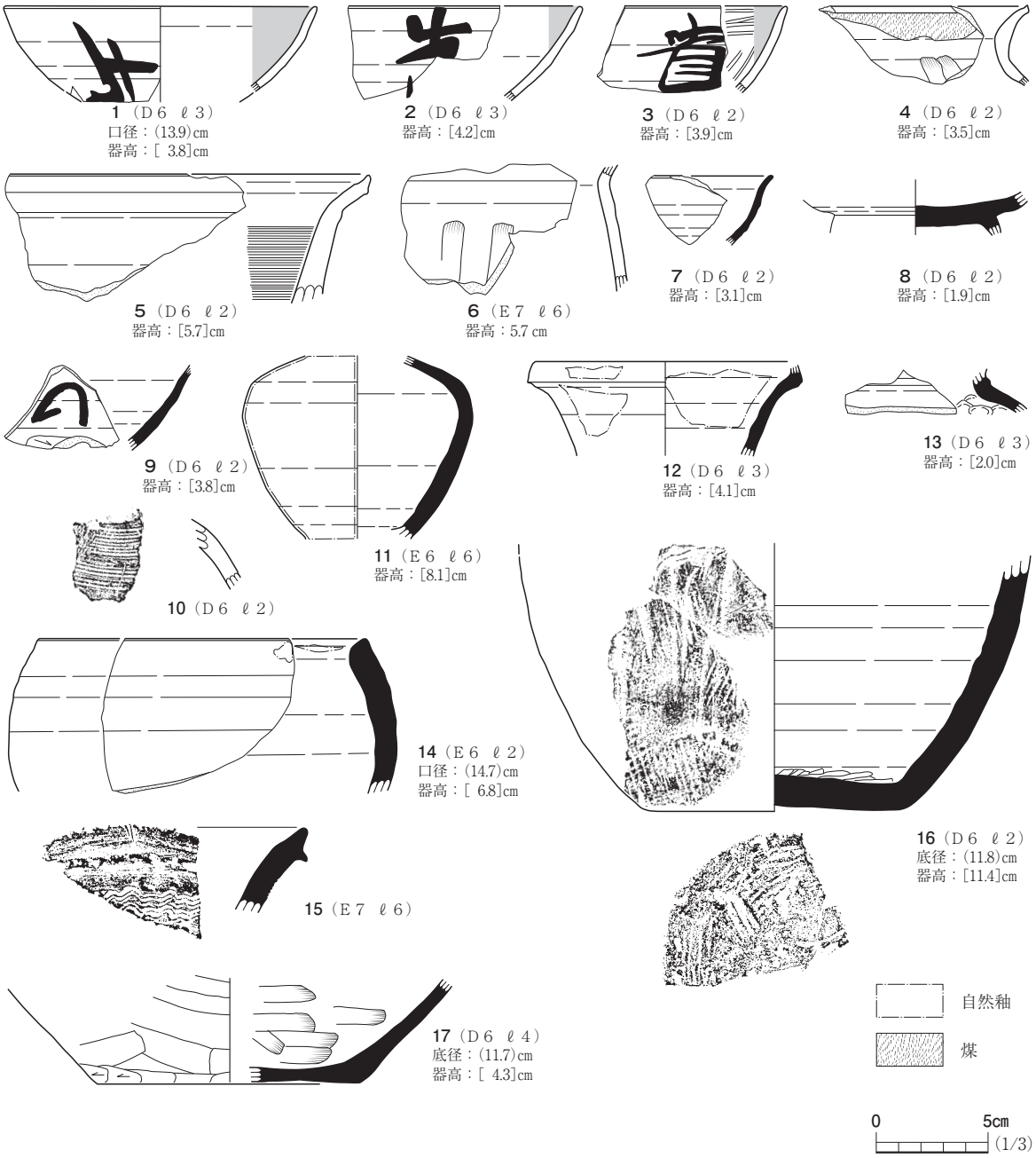


図19　流路跡出土遺物（２）

調整を施している。

図20－１～５は須恵器甕の胴部片をまとめた。いずれも外面には平行タタキ目が認められる。１・４・５は内面がナデにより判然としないが、無文の当て具痕の可能性がある。２の内面の当て具痕は、ナデ調整により不明である。３の内面の当て具痕はナデ調整により部分的にしか残っていないが、長方形格子状文とみられる。なお、３のナデ調整は筋が明瞭であることから、木の小口部分を用いた工具を用いていると推測される。

図20－６は灰釉陶器で、椀または皿の破片とみられる。

縄文土器・石器・木製品（図20～22、写真26～28）

図20－７は縄文時代後期の粗製土器である。櫛歯状工具による条線文が、口唇部直下では横方向に直線的に施されている。これより下では縦方向に弧を描くように施されている。

図20－８・９は石器で、２点とも微細剥離痕を有する剥片である。いずれも縄文時代のものと思われる。

図21・22には木製品をまとめた。図21－１・２は曲物である。２は底板のみだが、１は側板が遺存していた。また、１は側板と底板をサクラの樹皮で固定している。

図21－３は板状の木製品である。先端の形状から楔として使用された可能性もある。図21－４は先端が炭化していることから、火付け木と考えている。

図21－５～７は角材で、腐食が進行していて表面に加工痕があるかは判然としない。

図21－８はミカン割材である。

図22は、Ⅱ区南部で確認した杭列に使用されていた杭である。同図１～５は北側の杭で、全体的に手斧による加工痕が認められる。一方、南側の杭列の６・７は、先端部以外は整形されていない。なお、１・３の２点については、樹種同定及び放射性炭素年代測定を行っている。樹種は、いずれもカエデ属、暦年較正年代は、１は776calAD－904calAD（70.8％）、３は885calAD－985calAD（95.4％）という結果が出ている（付編参照）。

Ⅲ区出土遺物

土師器（図23～25、写真29～32）

図23には杯をまとめた。いずれもロクロ成形で、内面にはヘラミガキと黒色処理が認められる。ヘラミガキは、３・４・８・10・11・13の底部から体部下半にかけて放射状に施されている。１・３・４・12・13には、外面の体部下端に手持ちヘラケズリが認められる。

底部の切り離しは、回転糸切りのものがほとんどである。そして、回転糸切り痕が残る資料の底部外面は、３・４が切り離し後にナデまたはヘラケズリで調整されている以外は無調整である。一方、１は静止糸切りで、切り離し後にナデ調整が施されている。

９では、体部に墨書が観察されたが、何の文字かは不明である。また、15は底部外面にヘラ記号が施されている。

なお、１・２・12では内面の黒色処理が剥落している。１は内面の底部中心、２・12は全体的

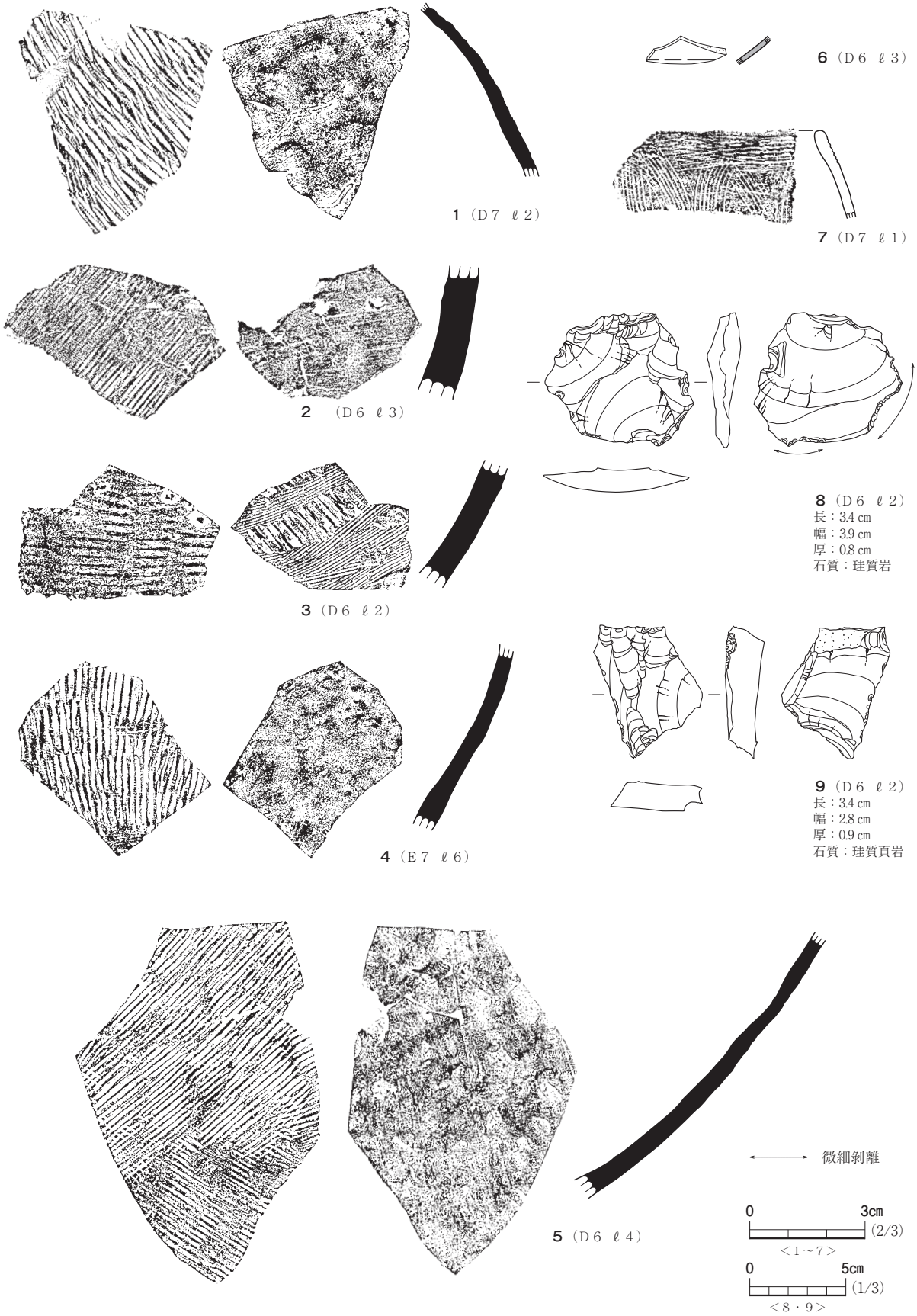


図20　流路跡出土遺物（3）

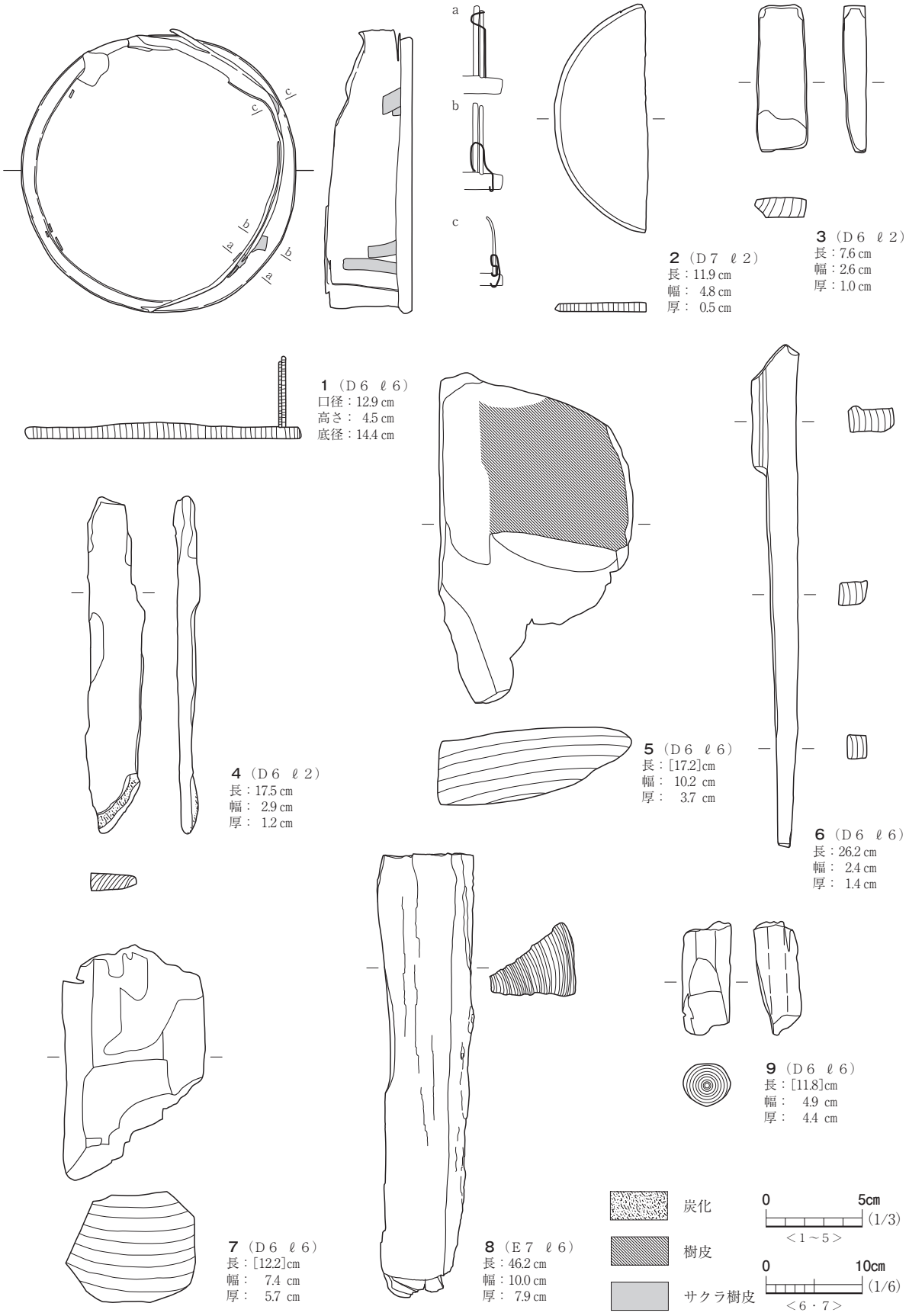


図21　流路跡出土遺物（４）

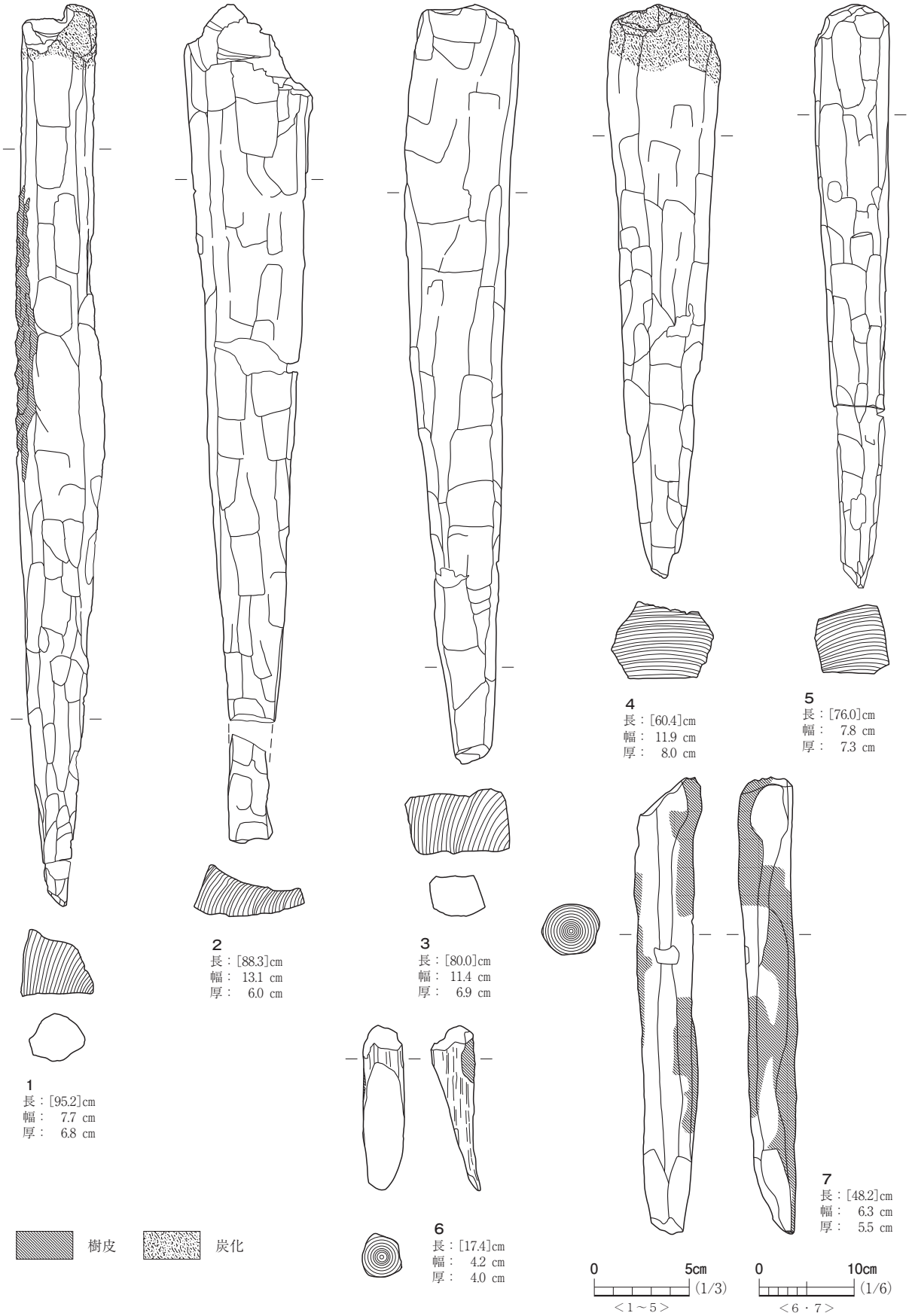


図22　流路跡出土遺物（５）

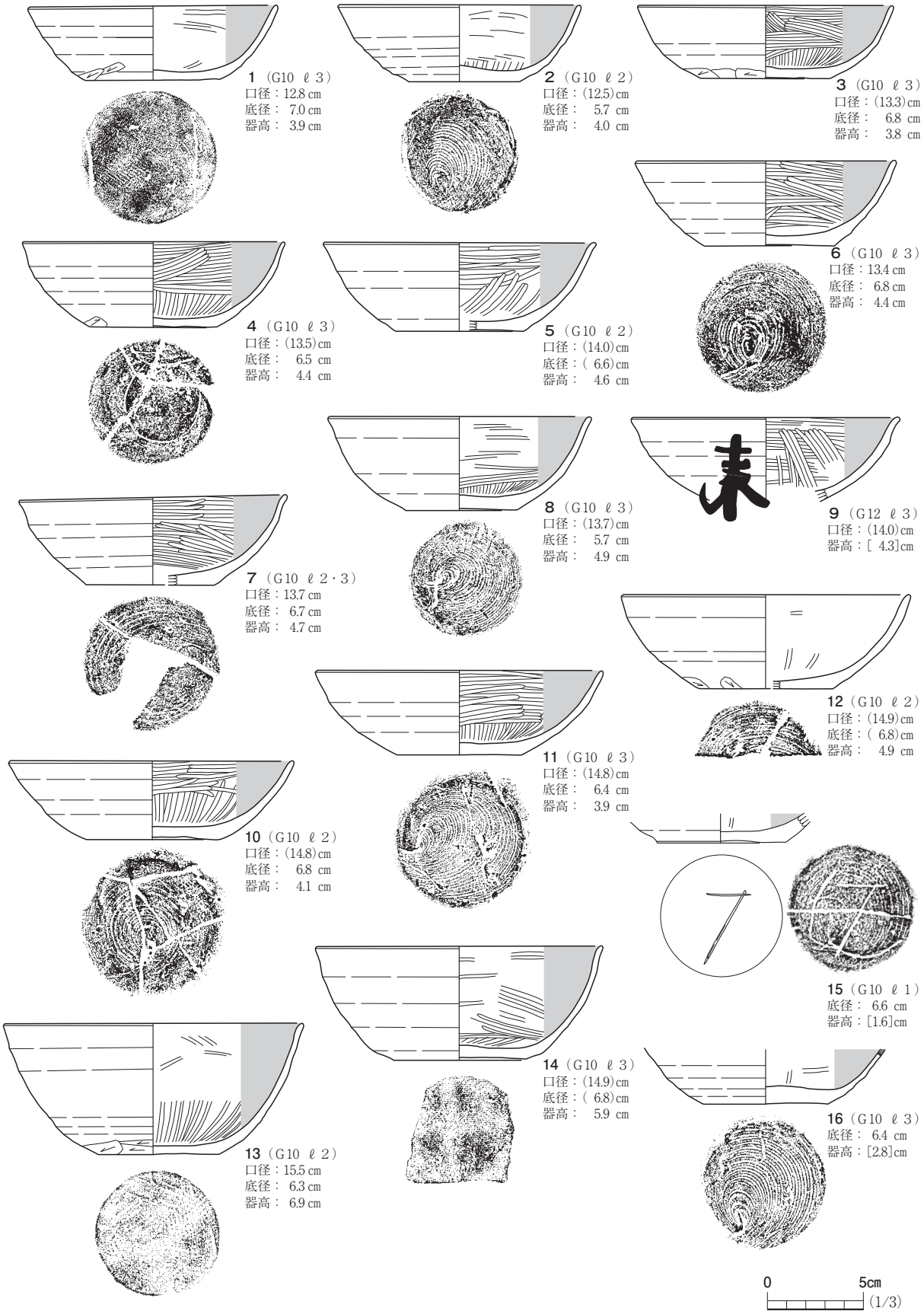


図23　流路跡出土遺物（６）

に剝落している。また、２では底部内面には器面が剝離した痕跡がある。13は口縁部付近や内面に器面が赤色化した箇所があり、熱を受けたか焼成不良と考えられる。

図24－１～５は杯または高台付杯の破片である。外面の口縁部～体部に墨書が観察された。文字が判読できるものはない。

図24－６は器壁が薄く、大型の杯または小型の鉢と推定する。内面は横方向の丁寧なヘラミガキの後、黒色処理が施されている。

図24－７はほぼ完形に復元できた高台付杯である。内面にはヘラミガキと黒色処理が施されているが、接合した破片の一つだけが黒色処理が完全に剝落していている。割れた後、この破片だけ二次的に熱を受けたものと思われる。

図24－８は、一般的に認められる高台付杯と比べて浅い器形を呈することから皿としておく。福島県内ではあまり類例のない器形である。高台部のつくり方は高台付杯と変わらない。高台が付く皿は、灰釉陶器や緑釉陶器等で見られることから、施釉陶器模倣のものと考えられる。図24－９・10は破片だが、８と同一の器形のものだろう。

図24－11は皿または高台付杯の高台部である。高台部だけでは、判別は難しいが、図24－８の高台部とつくりが近似する。

図24－12～16はロクロ成形の甕である。12・13は小型の甕で、どちらも底部を欠いている。12では胴部下端に粘土を付け足している状況が観察された。14～16は長胴甕で、15・16では胴部下半を縦方向の手持ちヘラケズリやナデで調整している。

図25－１は内面黒色処理が施された甕である。外面は、胴部上半にカキ目状のナデが施され、胴部下半は手持ちヘラケズリで調整されている。内面のヘラミガキは、胴部上半は横方向、胴部下半は横や斜め方向に施されている。

図25－２は鉢とした。口縁部が短く、端部が丸みを帯びている。同図１と調整の施し方が似ているが、カキ目状のナデは認められなかった。

図25－３・４は甕または鉢の底部である。外面の底部～体部下端にかけての調整は、３が手持ちヘラケズリ、４が回転ヘラケズリである。なお、３の底部外面には、何らかの敷物に置いた際に付いたとみられる筋が観察できた。

図25－５は小片だが、外面にタタキ目があり、甕と考えている。図25－６は非ロクロ成形の小型甕の底部で、底面には木葉痕がある。

図25－７は、甑と推定している。把手部分が剝離したとみられる痕跡がある。また、外面は赤くなっており、色を塗った可能性がある。

図25－８・９は鍋とした。どちらも頸部で外側に強く屈曲し、口縁部は受け口状になっている。８は胴部下端を中心に手持ちヘラケズリで調整している。９は外面にはロクロナデで消され切っていないタタキ目が観察された。また、ロクロナデの後に、胴部中央～下端にかけて手持ちヘラケズリで調整している。

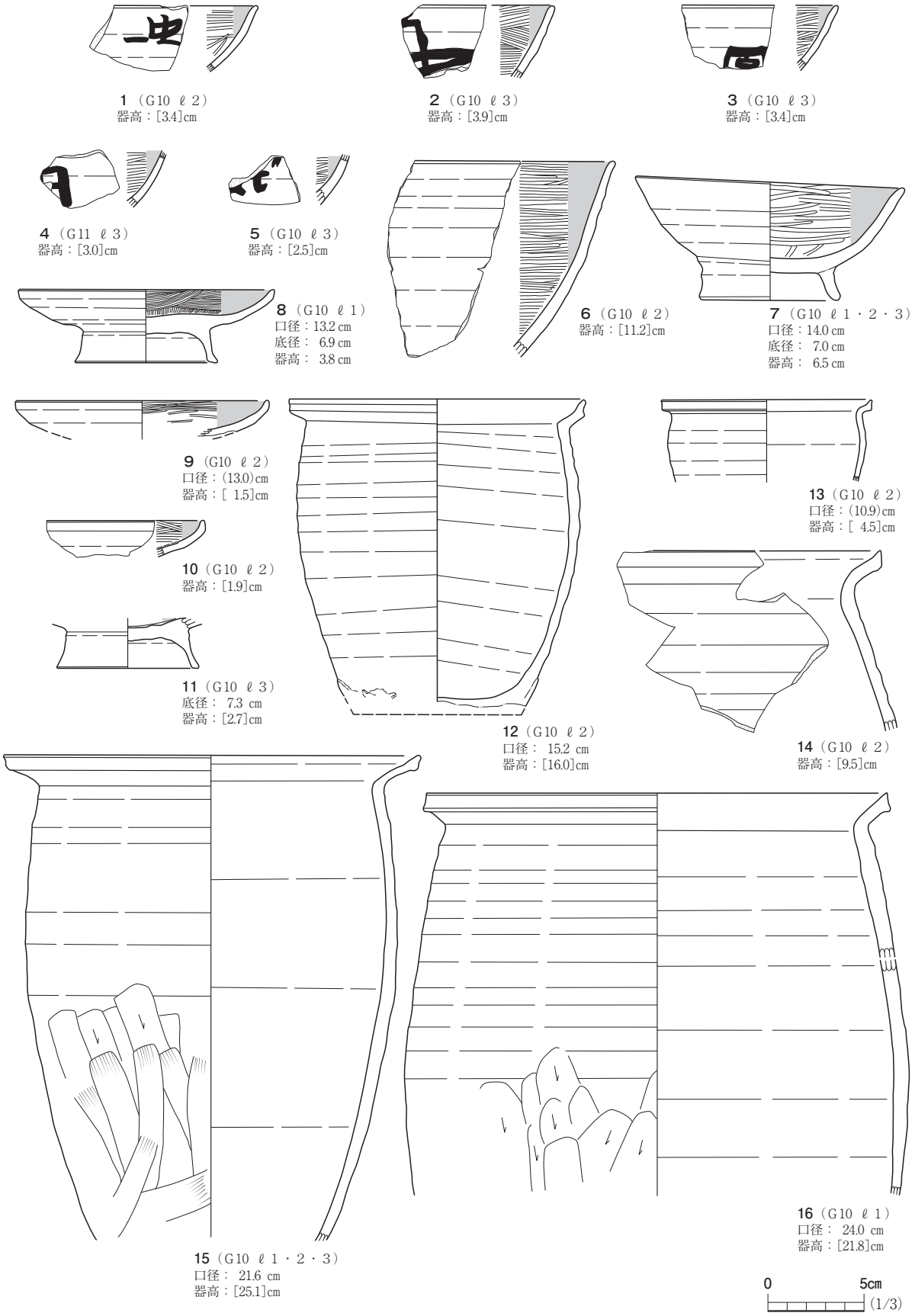


図24　流路跡出土遺物（７）

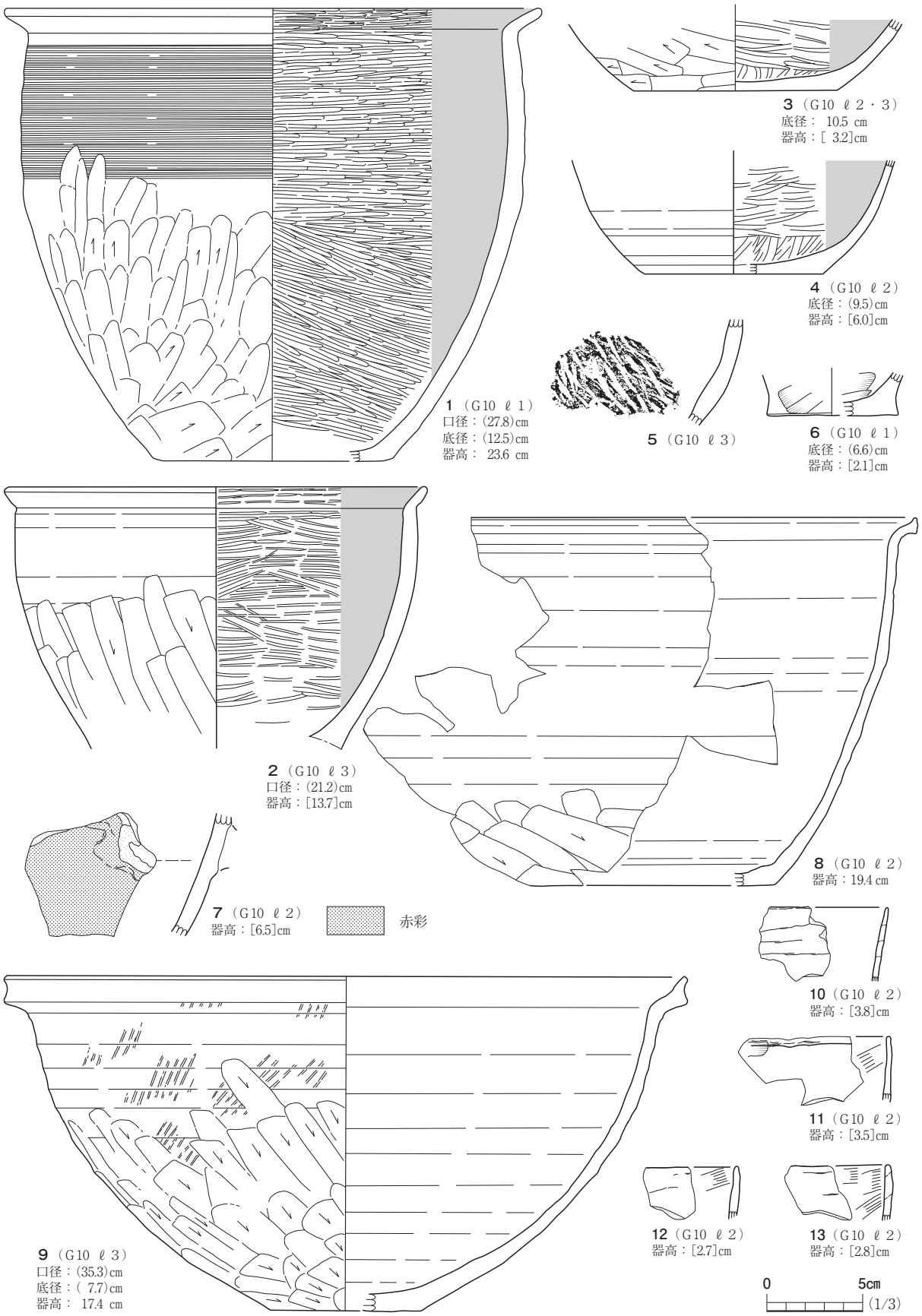


図25　流路跡出土遺物（8）

図25－10～13は筒形土器である。口縁部付近の破片を中心に掲載した。外面には積み上げ痕が残るものがあるが、内面は丁寧にナデ調整されている。

須恵器（図26・27、写真33・34）

図26－１・２・４～７は杯である。１は外面の底部～体部下端を手持ちヘラケズリで調整している。４～７は底部のみの資料で、底部切り離しはいずれも回転糸切りで、切り離し後の調整は観察されない。

図26－３は杯または高台付杯で、外面に墨書があるが、文字の判読はできない。

図26－８は壺とみられる。小片だが、復元して掲載した。外面の頸部付近から胴部上半にかけてカキ目状のナデが認められる。

図26－９・10・12～14、図27－１～３は甕である。そのうち、図26－９・10・12は口縁部が残る資料である。図26－11は甕または広口瓶だろう。

図26－９は破片から径を復元した。外面は肩のあたりまで、内面は口縁部に自然釉が付着している。外面のタタキ目は自然釉が付着しているため明瞭ではない。内面はナデ調整により、当て具痕は不明瞭である。僅かに長方形格子状文のような痕跡が観察されるが判然としない。

図26－10は胴部外面に平行タタキ目が見られるが、内面は丁寧にナデ調整が施されているため当て具痕は確認できない。

図26－11は口縁部が強く外反する。頸部は平行タタキの後にナデ調整が施されている。

図26－12は、外面は口縁端部と頸部、内面は口縁部全体に自然釉が付着する。

図26－13は平行タタキ目が残るが、一部がナデ調整により消されている。また、内面には自然釉が付着している。

図26－14、図27－１は頸部付近から胴部上半が残るものである。胴部外面はどちらも平行タタキ目があるが、図26－14は縦方向、図27－１は横方向となっている。また、図26－14の内面は丁寧にナデ調整されていて、当て具痕は見られない。図27－１もナデ調整により当て具痕の種類は不明だが、工具を当てた丸い痕跡が重なり合っている様子が観察された。この工具の痕跡は、重なり具合から図上で左から右に徐々に移動していると判断されるため、須恵器をつくる工人はタタキ成形の作業を時計回りの方向で行っていたと考えられる。

図27－２は胴部下半の破片で、外面には平行タタキ目が観察される。内面の当て具痕は長方形格子状文だが、ナデ調整で部分的に消されている。

図27－３は、器面の色調に赤みがあり、本遺跡出土の他の須恵器とは異なっている。内外面ともにロクロナデのみ観察される。器種は、瓶類の可能性もある。

図27－４は底部片である。外面は平行タタキ目が残る。内面には当て具痕は見られず、ナデ調整のみである。また、外面と内面に自然釉が付着する。

縄文土器・土製品・石器・木製品（図28、写真33・34）

図28－１・２は縄文土器で、１は口縁部、２は体部の破片である。１は、２条の横方向の沈線

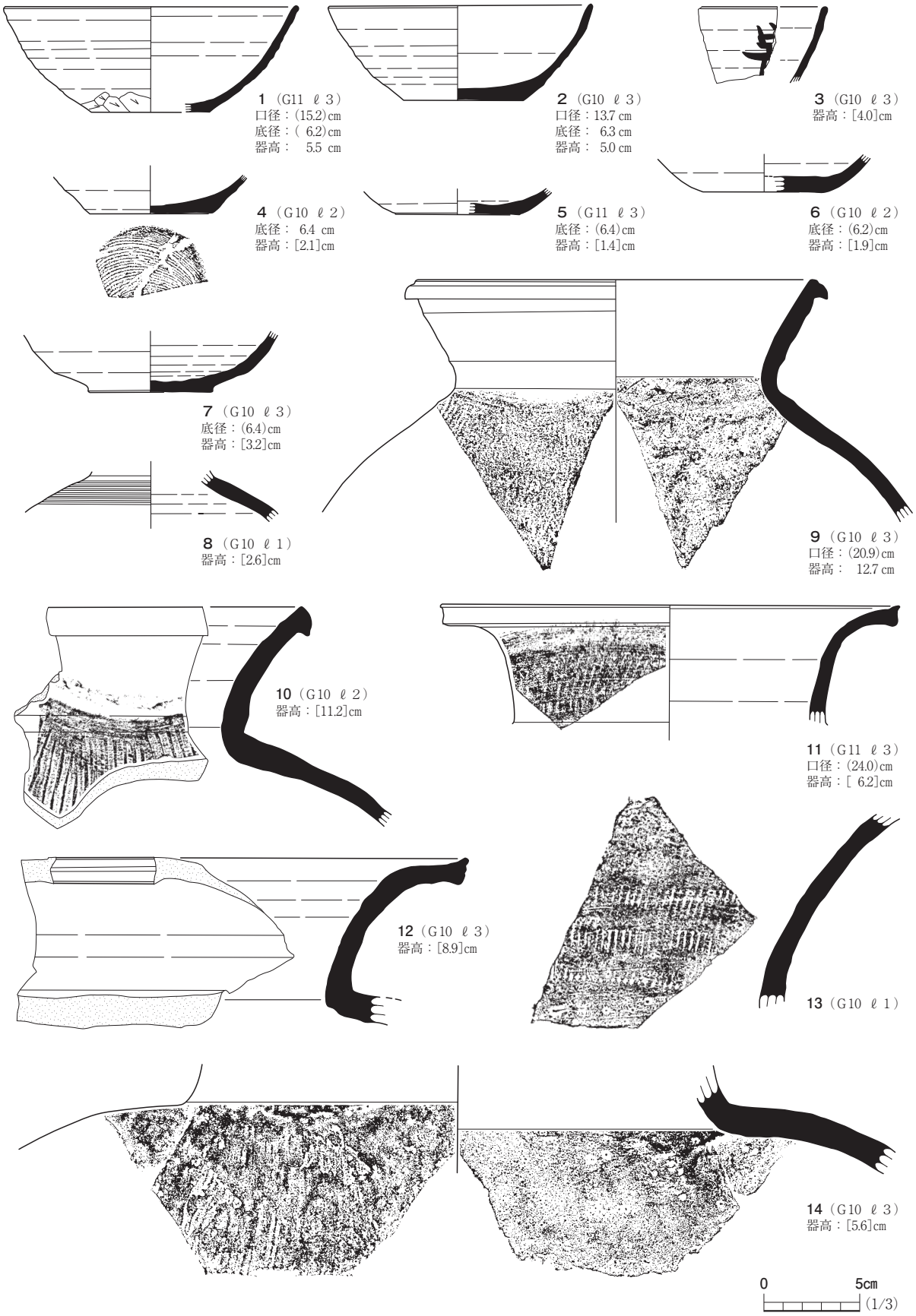


図26　流路跡出土遺物（9）

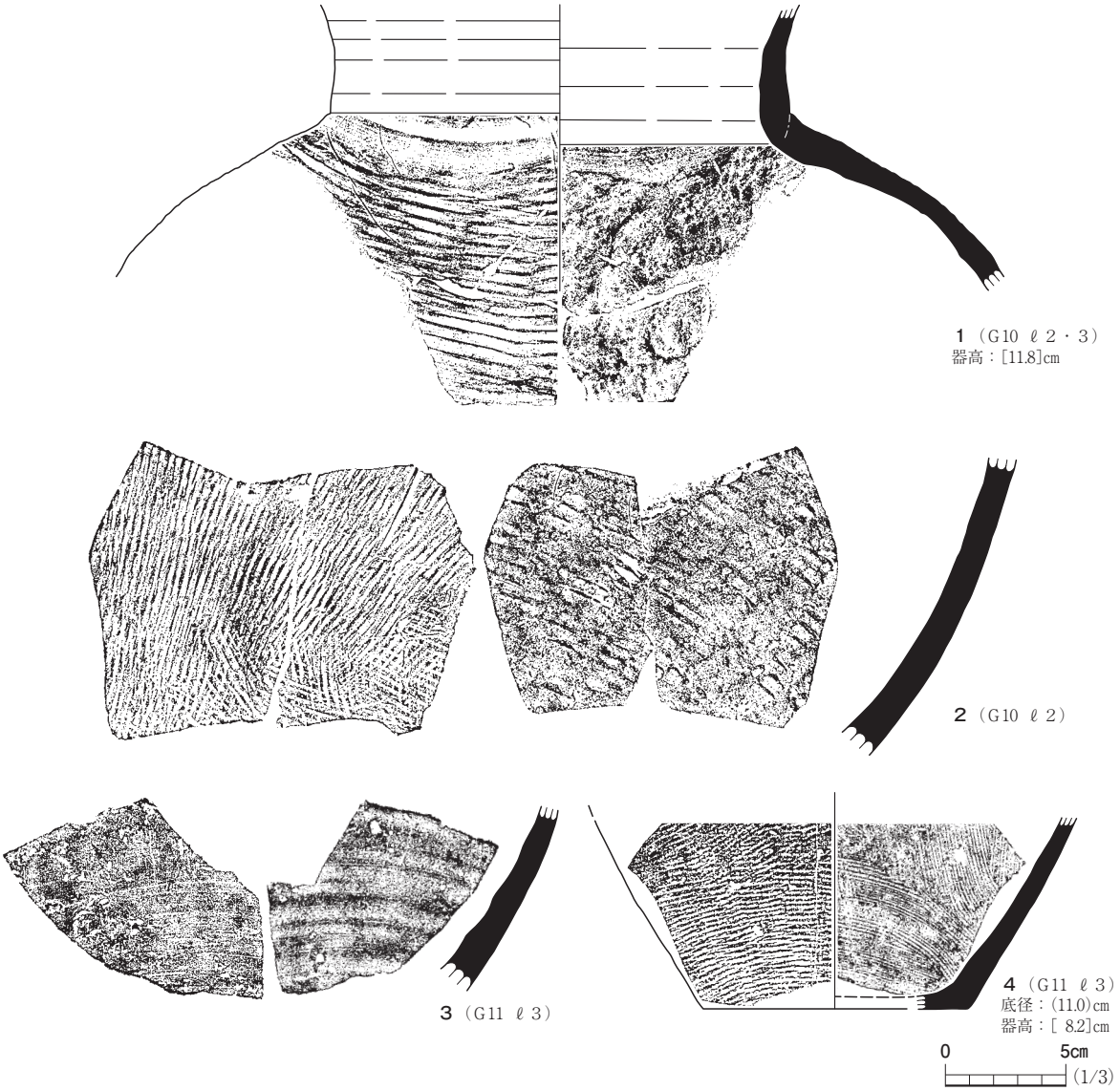


図27　流路跡出土遺物（10）

で区画され、口縁部に隆起する箇所がある。２は地文のみ確認できる。１は後期のものと考えられるが、２は断定できない。

図28－３は球状土製品で、突起が一つだけある。全面黒色処理が施されているが、ヘラミガキは見られない。時期・用途ともに不明である。

図28－４は羽口で、吸気部が欠損している。先端部に溶着滓が確認できる。流路跡の岸辺付近に立地する２号特殊遺構に廃棄された羽口が流出したものとみられる。

図28－５は頁岩製の石核である。端部に微細な剝離が見られる箇所があり、剝片採取後に道具として利用した可能性もある。縄文時代のものと推定される。

図28－６・７は木製品で、加工痕が見られる部材である。６は板状の角材、７は両端に加工痕が見られる。

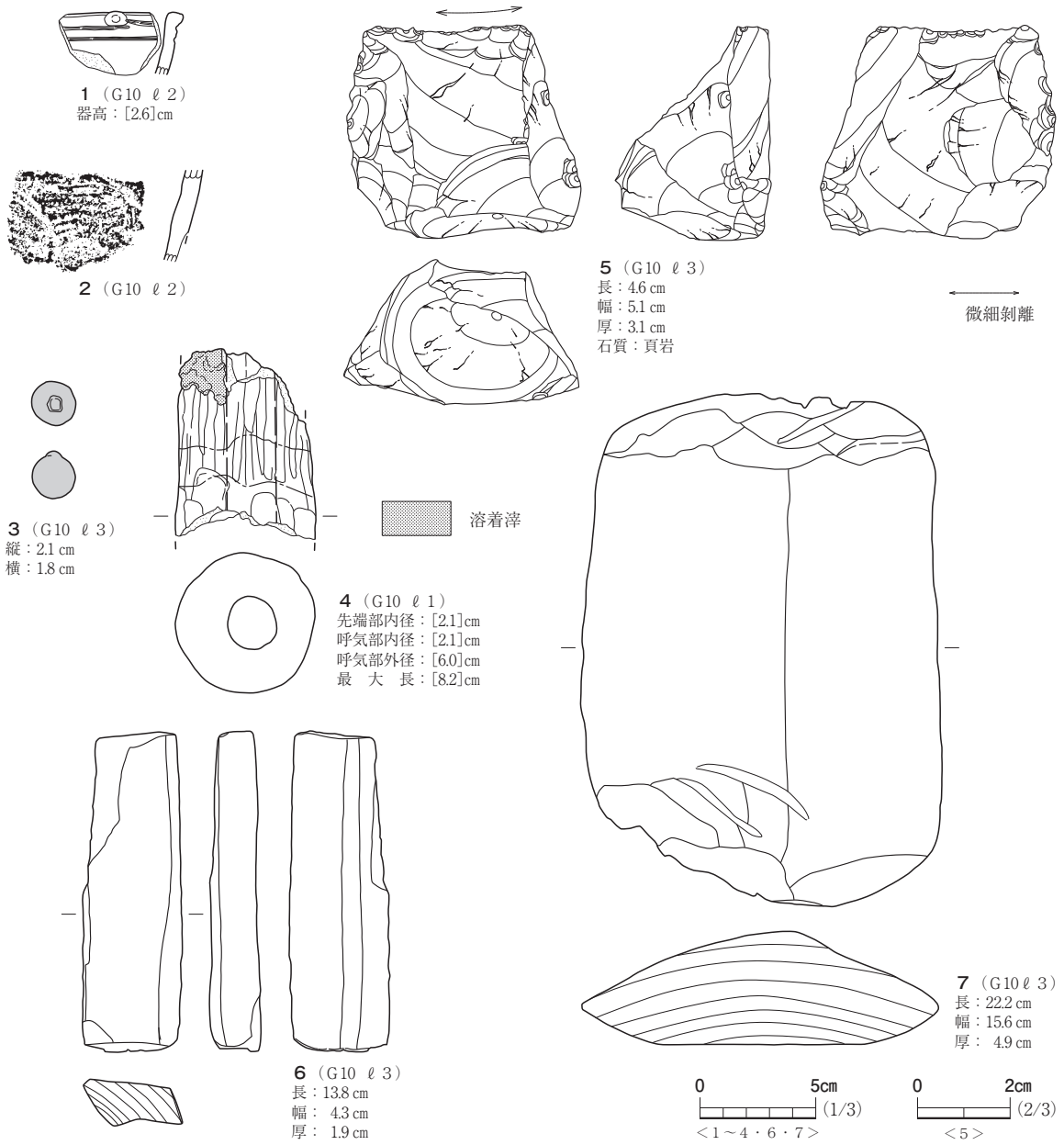


図28　流路跡出土遺物（11）

ま と め

流路跡から出土した遺物は、平安時代の土師器・須恵器が中心である。杯は９世紀後半のものが多いが、前半から中葉頃のものも含まれている。以上のことから、流路として機能していた時期は平安時代と推測される。流路底面で検出した杭列の放射性炭素年代測定結果も、出土遺物の年代観と大きな矛盾は見られない。また、人工的に打ち込まれた杭列があることから、平安時代に何らかの目的で自然流路の一部を利用したとみられるが、機能を特定する所見は得られなかった。

なお、流路跡とその周辺の遺構から平安時代の遺物が多く出土したが、調査区内では供給源となる竪穴住居跡等の遺構が確認されていないことから、調査区外に集落等の存在が想定される。

（鶴　見）

第３章　　総　　括

今回の調査では、掘立柱建物跡１棟、土坑13基、溝跡１条、特殊遺構３基、小穴52基、流路跡１条を検出した。これらは縄文時代、平安時代、中世のものと考えられる。

縄文時代

縄文時代の遺構は土坑８基で、いずれも落し穴と考えられる。平面形が長方形、底面に逆茂木を刺したとみられる小さい穴が確認されるものが多い。隣接する舘ノ前遺跡（本書第４編）や、東へ約200ｍの位置にある川原田遺跡（福島県教育委員会2018）でも落し穴が確認されているが、これらの遺跡は立地する地形が同じ低位段丘で、山裾に沿う様に落し穴が点在している。縄文時代には、周辺一帯が狩場として利用されていたようである。

平安時代

平安時代の所産としたのは、土坑３基、特殊遺構３基、流路跡１条である。土坑、特殊遺構ともに、流路跡の岸辺付近で確認されていて、流路とその周辺を利用していた可能性がある。

２号特殊遺構からは、羽口と鉄滓がまとまって出土した。出土した羽口は口径が小さく、椀形滓が出土していることから見ても、これらの資料は鍛冶に伴うものと考えられる。ただし、２号特殊遺構は被熱痕跡がなく、不要となった羽口等を廃棄した遺構と判断した。なお、今回の調査範囲では、鍛冶炉は確認されなかったが、遺跡周辺で鍛冶が行われていた可能性が高い。

流路跡では、Ⅱ区南部で流路跡の底面に打ち込まれた杭列を確認した。自然の流路に一部手を加えて、利用していたと推定される。３号特殊遺構は、板材を杭で固定した遺構で、その立地から流路跡に伴う何らかの施設であった可能性もある。

流路跡及びその周辺の遺構からは、平安時代の土器・木製品等が出土した。最も多いのが土師器の供膳具で、特に杯が出土遺物の大半を占める。杯は、９世紀後半を中心とする時期のものが多い。また、施釉陶器の皿を模倣したと思われる土師器も出土した。土師器では例外的な器形と考えられるが、高台部のつくりは土師器高台付杯とあまり変わらないとみられ、高台部だけが出土した場合の識別は難しい。

土師器の煮炊具は杯に比べ少ないが、甕と鍋が出土している。古代の鍋は、周辺地域では東北北部や北陸地方で出土事例がある。福島県では会津を中心に出土するが、中通りでの事例は極めて少ない。また、会津では煮炊具として、タタキ調整の長胴甕も特徴的に確認されており、これらは北陸地方の影響を受けた土器のつくり方と考えられている。タタキ調整の長胴甕は、本遺跡ではその可能性のある小片しか見つからなかったが、隣接する川原田遺跡で全体の形状がわかる資料が出土している。このことから、現在の桑折町松原地区では、古代において北陸地方の影響を受けた会津と同じ特徴の煮炊具のセットが確認されたと評価できよう。

流路跡からは、灰釉陶器や鉄鉢模倣の須恵器等、一般集落ではあまり見られない遺物も出土している。特に、灰釉陶器・緑釉陶器などの施釉陶器は、東北地方では官衙やその関連遺跡、寺院跡等から出土する事例が多い。本遺跡周辺では、川原田遺跡でも灰釉陶器・緑釉陶器が見つかっている。また、土師器耳皿も出土しているが、耳皿も官衙関連遺跡や拠点的な集落からの出土事例が多いことが指摘されている（伊東2000）。川原田遺跡では、廂を持つ可能性がある建物跡も見つかっていて、一般集落とは異なる様相を見せている。このような施釉陶器等の遺物が出土する遺跡が近接していることは注目できる。

上記のような特殊な遺物が出土する背景を考えるために、周辺の遺跡を確認しておきたい。福島盆地北部では、福島市飯坂から桑折町を経て、国見町に至るまで、盆地西部の山麓に沿って古代の寺院跡や須恵器窯跡が点在している（図29）。特に、本遺跡の周辺を見ると、南では桑折町成田窯跡、成田前窯跡、伊達市伊達窯跡、瀬戸場窯跡等の奈良・平安時代の須恵器窯跡が存在している。北には平沢寺跡、花水寺跡という平安時代の寺院跡があり、西にも福島市西原廃寺跡、高寺廃寺跡、平野廃寺跡等の古代寺院がある。本遺跡からは少し離れるが、東には国見町徳江廃寺や大木戸窯跡があり、古代の寺院跡・窯跡として知られている。本遺跡を中心に見た場合、半径３㎞圏内に多くの窯跡や寺院跡が集中していることがわかる。

古代においては、福島盆地内には信夫郡、伊達郡という２つの郡が存在していたとされる。その内、伊達郡は10世紀初頭頃に信夫郡から伊達郷、靜戸郷、鍬山郷を分割して成立したものと考えられている。この中で、阿武隈川西岸域にあたる伊達郷は、現在の福島市飯坂町、伊達市の旧伊達町周辺、桑折町、国見町の範囲に相当する。この範囲は、前述の寺院や窯跡の分布とほぼ一致している。これらの遺跡は限られた発掘調査しか行われていないが、現状では10世紀以降に下る古代の遺物は確認されていない。少なくとも古代における伊達郷に所在する遺跡であり、関連も想定しておくべきだろう。

このような寺院や窯跡の周辺には、公的な施設や集落等も多数存在していたと推定され、川原田遺跡で確認された建物跡もその一部と考えられる。本遺跡では、掘立柱建物跡や竪穴住居跡は確認されていないが、今回の調査区周辺に存在している可能性は高い。流路跡から灰釉陶器が出土したこと、川原田遺跡が近接していることを踏まえると、未調査箇所にあるのは一般集落とは異なる性格のものという可能性もあるだろう。

中　　世

中世の遺構は、掘立柱建物跡１棟の他、Ⅱ区北部で確認された小穴群も中世の所産と考えられる。小穴群は、掘立柱建物跡や柱列跡の柱穴とみられ、本遺跡には複数棟の建物やそれに伴う柵等があったと推測される。小穴からは常滑焼とみられる甕が出土していて、13～14世紀頃のものと判断している。

本遺跡と関連が想定される遺跡として、本遺跡の北側約200ｍに松原館跡、西側約600ｍに松原下館跡という、中世城館跡がある。松原館跡では、一部で発掘調査が行われていて、掘立柱建物跡

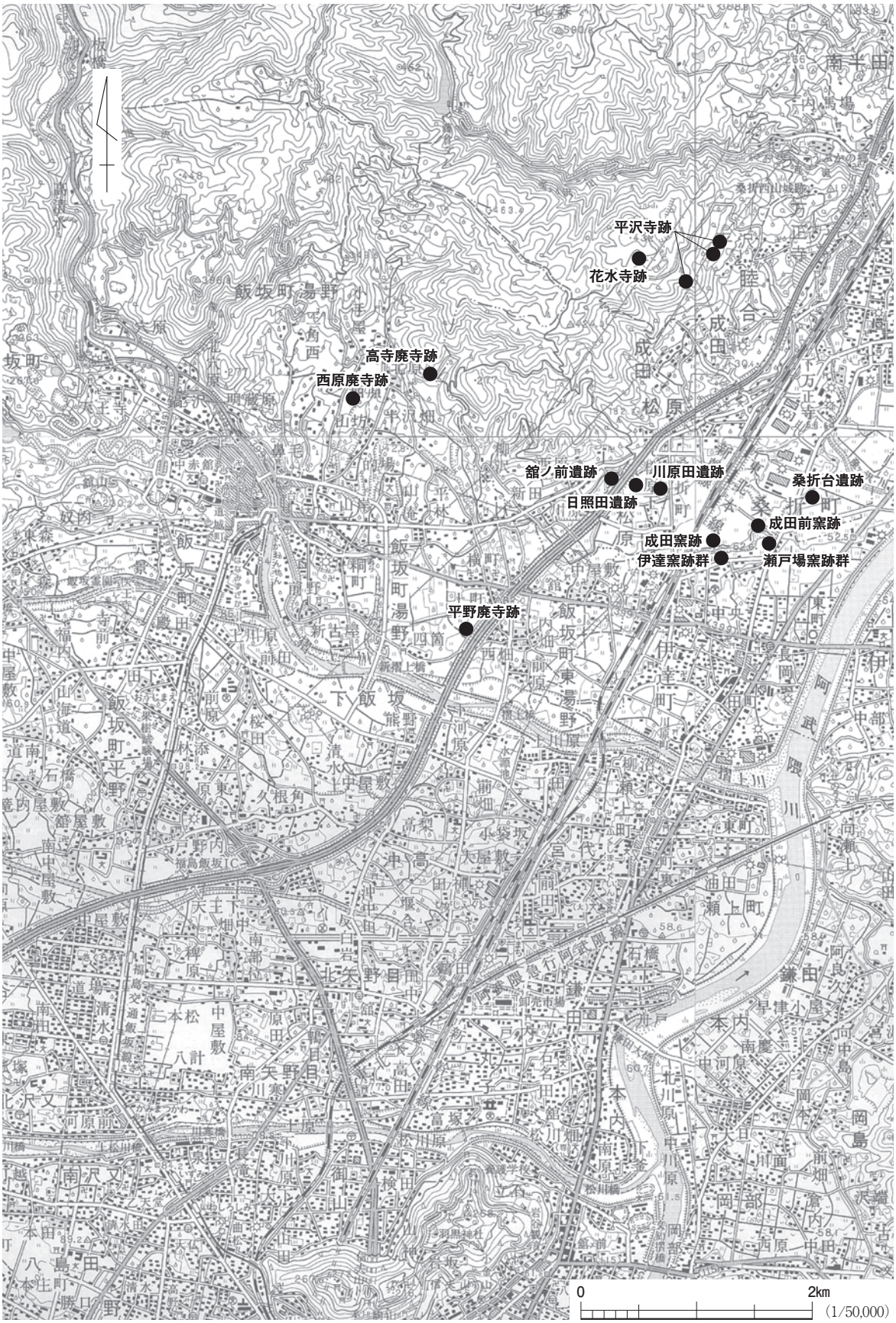


図29　日照田遺跡周辺の須恵器窯跡・社寺跡

や平場等が確認された。出土遺物はⅠ期(13世紀後半～14世紀)、Ⅱ期(14世紀末～15世紀初頭)、Ⅲ期(16世紀)の３時期に分けられている(桑折町教育委員会2003)。このうち、Ⅰ期が日照田遺跡の年代と近い。

松原館跡や松原下館跡は、飯坂から桑折へと通じる街道筋に面していたと考えられていて、街道は松原館跡の南側を走る県道124号に近いルートであったと推定されている。日照田遺跡で確認された中世の遺構は、県道124号からは100ｍ程と近い位置にある。本遺跡の建物跡の立地は、街道を意識している可能性が高く、街道筋に面した屋敷地あるいは何らかの施設であったと想定される。

（鶴　見）

引用・参考文献

伊東正人　2000 「耳皿ノート」『中近世土器の基礎研究』ＸＶ　日本中世土器研究会
桑折町教育委員会　2003 『松原館跡発掘調査報告』桑折町埋蔵文化財調査報告書 16
福島県教育委員会　2018 「第３編　川原田遺跡」『一般国道 115 号相馬福島道路遺跡発掘調査報告６』福島県文化財調査報告書第 523 集

第４編　舘ノ前遺跡

たてのまえ

遺跡記号	ＱＲ－ＴＮＭ
所在地	伊達郡桑折町大字松原字舘ノ前
時代・種類	縄文時代の狩場、平安時代の流路跡
調査期間	平成29年４月18日～５月24日 平成29年８月28日～９月15日
調査員	丹治篤嘉・渡邉春喜・廣川紀子・草野潤平・枝松雄一郎・鶴見諒平

第１章　遺跡の位置と調査経過

第１節　遺跡の位置と現況

舘ノ前遺跡は、福島県伊達郡桑折町大字松原字舘ノ前に所在する。東北本線の伊達駅から、北に約１kmのところに位置する。松原地区は、桑折町の南西端に位置し、福島市飯坂町湯野地区と接している。遺跡より北側の丘陵裾部には、飯坂町方面から桑折町市街地へ通じる県道124号線が東西方向に延びている。遺跡の位置する箇所は、一般国道115号相馬福島道路と東北自動車道が交差するジャンクション予定地となっており、南東側に隣接して東北自動車道が走っている。遺跡のさらに東方には、東北新幹線や東北本線が縦走する。

遺跡は、標高85ｍほどの低位段丘上に立地する。現況では、江戸時代に開削された西根上堰と下堰とに挟まれた緩やかな傾斜地で、果樹栽培等の耕作地となっている。同じ段丘上には、平成

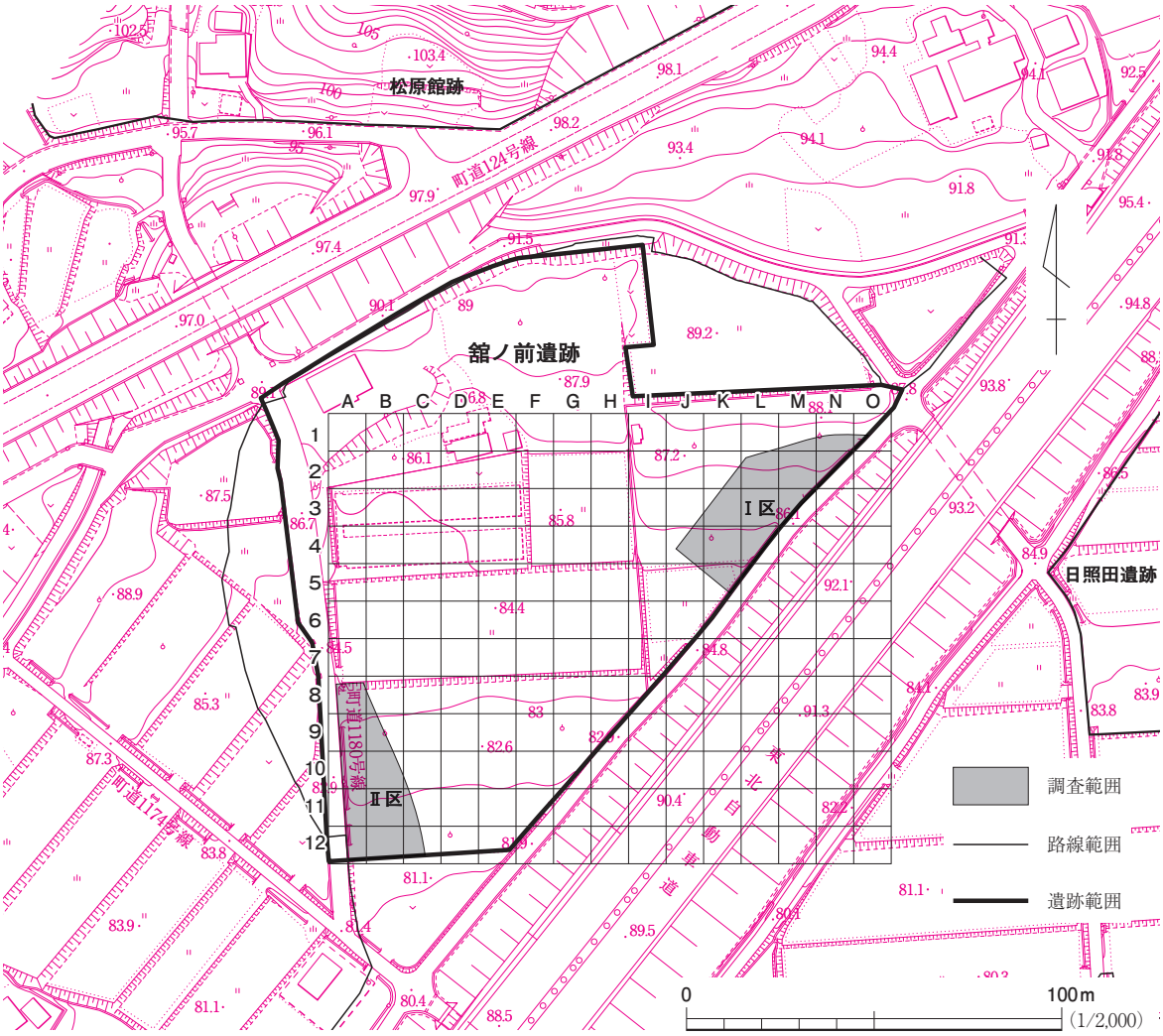


図１　調査区位置図

28年度に調査が行われた川原田遺跡や、平成29年度に並行して調査が行われた日照田遺跡（本書第３編）が存在する。また、遺跡より北側の丘陵地上には、松原館跡、松原下館跡が立地する。

（廣　川）

第２節　調 査 経 過

舘ノ前遺跡の調査は、４月３日付で福島県教育委員会より1,600㎡の本発掘調査の指示を受けて実施した。調査に係った作業日数は延べ38日である。工事計画に沿って優先度の高い舘ノ前遺跡Ⅰ区（900㎡）の調査から着手し、同じく優先度の高い日照田遺跡Ⅰ区（100㎡）とともに先行して現地引き渡しを行った。舘ノ前遺跡Ⅱ区（700㎡）の調査は、優先度の高い日照田遺跡Ⅱ・Ⅲ区（2,700㎡）の調査終了後に実施した。以下に、調査の経過について週ごとに記す。

４月第４週：18日（火）から調査区の縄張り等の作業に入る。21日（金）には、プレハブ・仮設トイレを設置する。

４月第５週：基準杭打設の準備作業等を行う。

５月第１週：１日（月）に作業員の雇用を開始する。２日（火）から遺構検出作業とともに検出された土坑数基の精査に入る。

５月第２週：遺構精査を継続する。９日（火）から基本土層図の作成、地形測量を行う。

５月第３週：降雨により調査区が冠水。復旧作業を行った後、調査区全景写真を撮影するための準備作業を行う。

５月第４週：調査区内の清掃を行って、23日（火）に調査区全景写真を撮影する。24日（水）に器材類を撤収して舘ノ前遺跡Ⅰ区（900㎡）の調査を終了する。

５月第５週：29日（月）に県文化財課及び国交省の立ち会いの下、舘ノ前遺跡Ⅰ区（900㎡）について現地引き渡しを行った。

８月第５週：28日（月）に舘ノ前遺跡Ⅱ区（700㎡）の調査を開始。29日（火）から遺構検出作業とともに検出された１号溝跡、流路跡の一部掘り下げを行う。

９月第２週：遺構精査を継続する。７日（木）に地形測量を行う。

９月第３週：11日（月）に１号溝跡、１号特殊遺構を完掘する。12日（火）に基本土層図の作成、13日（水）に流路跡の断面図作成、14日（木）に調査区全景写真の撮影を行った。15日（金）に器材類を撤収し、舘ノ前遺跡の全調査を終了した。

10月第１週：２日（月）に県文化財課及び国交省の立ち会いの下、舘ノ前遺跡Ⅱ区（700㎡）について現地引き渡しを行った。

（廣　川）

第２章　発見された遺構と遺物

第１節　調査成果の概要と基本土層

調査成果の概要

館ノ前遺跡とその周辺は、北から南へ緩やかに傾斜する地形で、水田や果樹園として利用されている。今回の調査箇所は２箇所に分かれており、東からⅠ区、Ⅱ区とした。

検出された遺構は、土坑４基、溝跡２条、特殊遺構１基、そして流路跡である。それらの時期は、概ね縄文時代、平安時代以降、中世以前のものと考えられる。

基本土層（図２・３、写真３・４）

基本土層は、色調・土質の諸特徴からＬＩ～Ｖの５層に分層した。

ＬＩは、表土及び盛土層である。表土がＬＩａ、Ⅰ区の盛土がＬＩｂ、Ⅱ区の盛土がＬＩｃ・ｄと細分した。いずれの調査区でも、果樹園造成時の盛土が厚く堆積する様子が認められる。

ＬⅡは、Ⅰ区南部でのみ確認される褐灰色シルト層で、層厚は10㎝程度である。Ⅰ区北部及びⅡ区では、果樹造成時の開削によりＬⅡは失われていた。

ＬⅢは、にぶい黄褐色シルトを基調とした層である。基盤層に起因する風化礫を多く含むため、基盤層が再堆積したものと考えている。色調や含有物の違いにより、Ⅰ区ではＬⅢａ、Ⅱ区ではＬⅢｂ～ＬⅢｄと細分した。Ⅰ区ではＬⅢａの上面、Ⅱ区ではＬⅢｂの上面が遺構検出面である。

ＬⅣは、Ⅰ区でのみ確認される黒褐色シルト層である。層厚は20～30㎝で、ＬⅢが堆積する以前の旧表土層である。

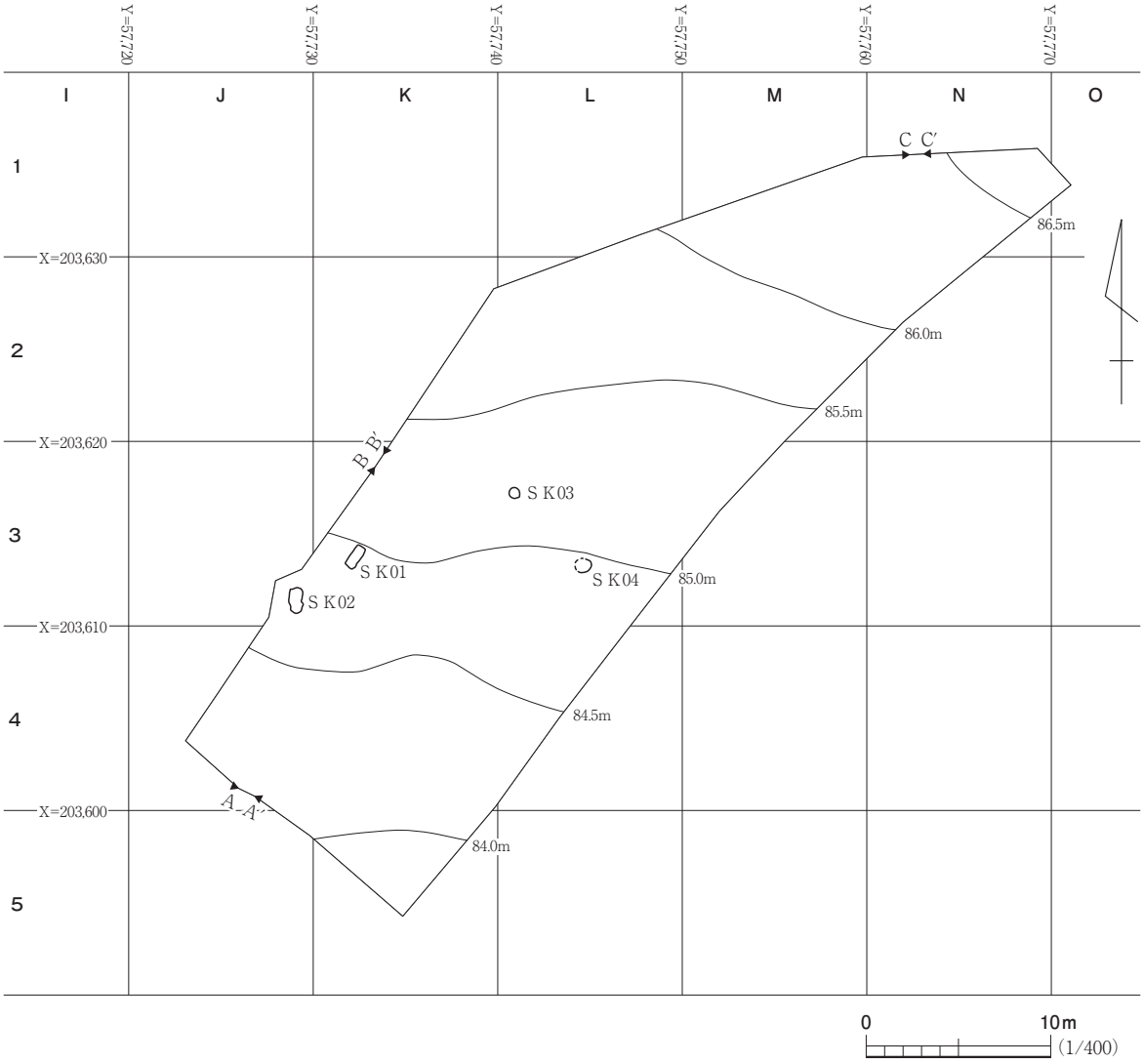
ＬＶは、調査区全域で確認される基盤層である。　（廣　川）

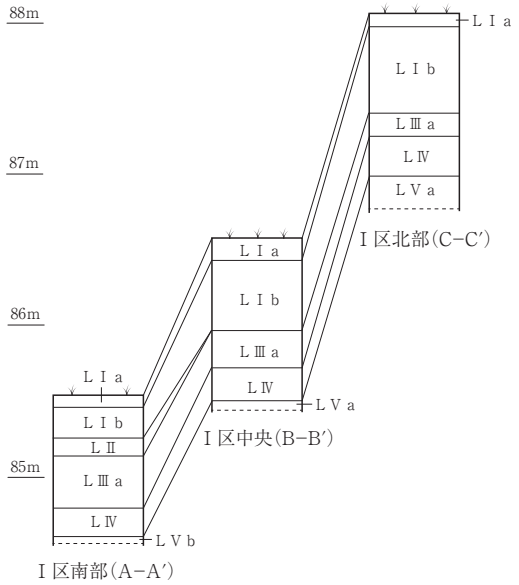
第２節　　土　　坑

土坑は、４基確認した。その内の２基は、形態的な特徴から縄文時代の落し穴とみられる。残りの２基は中世以前のものと考えられるが、具体的な性格等は不明である。

１号土坑　ＳＫ01（図４、写真５）

本遺構は、Ⅰ区南部のＫ３グリッドに位置する土坑である。南西に３ｍには２号土坑がある。重複する遺構はない。表土除去の段階で遺構上部を誤って掘削してしまったため、検出面はＬＶａとなっているが、本来の検出面はＬⅢａ上面と考えられる。





Ⅰ区基本土層

L Ⅰ a　にぶい黄褐色シルト　10YR5/3
L Ⅰ b　灰黄褐色シルト　10YR5/2
L Ⅱ　褐灰色シルト　10YR4/1
（直径１～２㎝風化礫少量、５㎜以下風化礫多量）
L Ⅲ a　にぶい黄褐色シルト　10YR4/3
（２～４㎜風化礫多量、黒褐色シルト塊　10YR3/1少量）
L Ⅳ　黒褐色シルト　10YR3/1
（２㎜以下灰白色シルト粒　10YR7/1少量）
L V a　灰黄褐色シルト　10YR5/2
（褐灰色シルト　10YR4/1少量）
L V b　褐灰色シルト　10YR4/1
（黄褐色風化礫　10YR5/6少量）

0　1m　(1/50)
<柱状図>

図２　Ⅰ区遺構配置図・基本土層

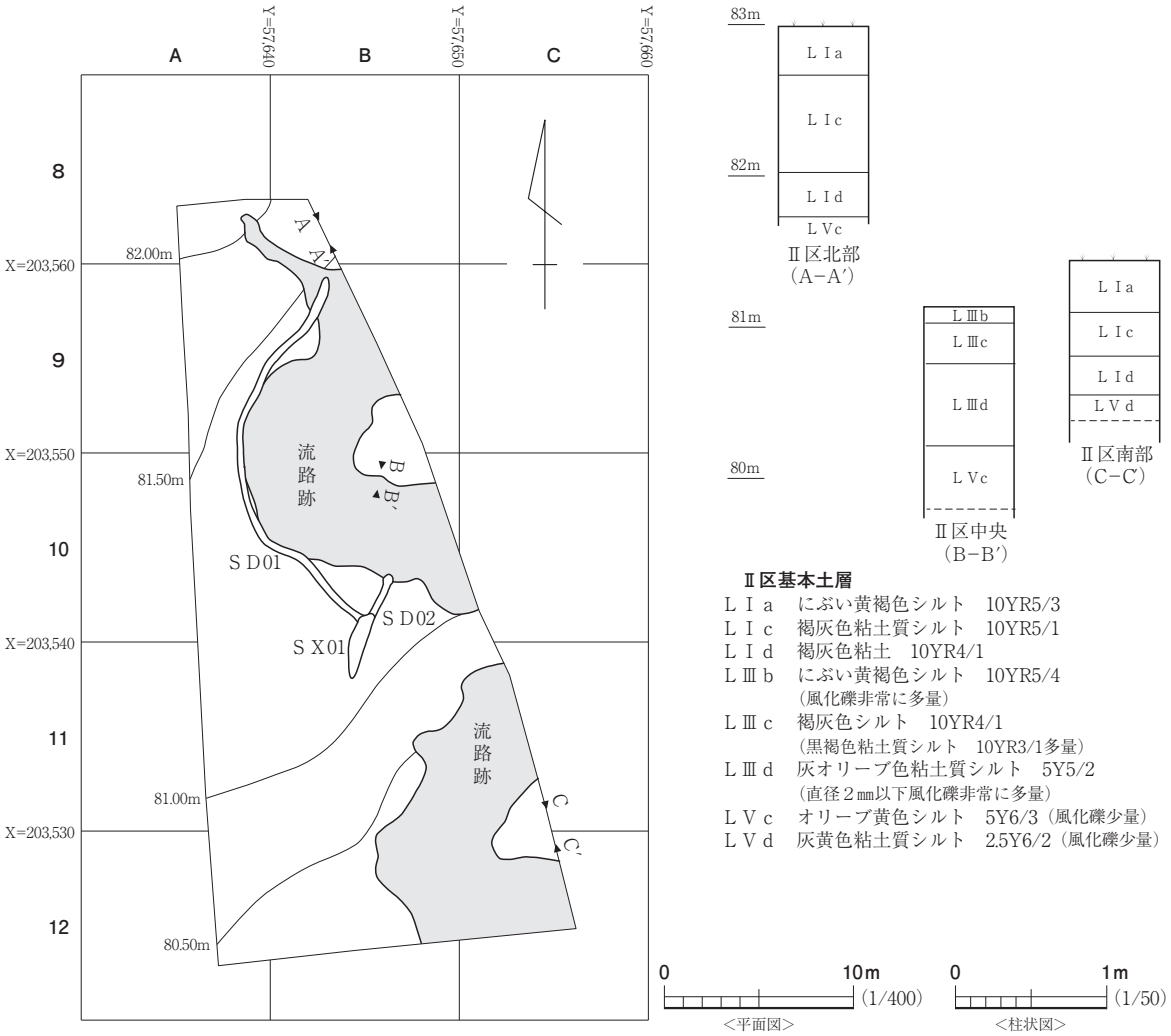


図３　Ⅱ区遺構配置図・基本土層

平面形は長方形で、規模は長軸130㎝、短軸58㎝である。検出面からの深さは16㎝である。底面は平坦で、周壁はほぼ垂直に立ち上がる。

堆積土は黒褐色粘土質シルトで、含有物の違いにより２層に分層した。レンズ状の堆積状況を示すことから、自然堆積土と判断した。なお、遺物は出土していない。

本遺構は、平面形態の特徴から縄文時代の落し穴と考えられるが、詳細な時期については不明である。

（廣　川）

２号土坑　ＳＫ02（図４、写真５）

本遺構は、Ⅰ区南部のＪ３グリッドに位置する土坑である。北東に３ｍには１号土坑がある。検出面はＬⅢａ上面で、重複する遺構はない。

平面形は四隅が丸い長方形を基調とするが、検出面ではやや不整形となっている。検出面での大きさは長軸139㎝、短軸68㎝、底面では長軸92㎝、短軸31㎝と上部から下部に向かって狭くなっていく。検出面からの深さは87㎝を測り、遺存状態は良好である。断面形は、底部から中央付近

まではまっすぐに立ち上がる。中央付近から検出面にかけては、西壁は外側に向かって開くが、東壁ではまっすぐに近い形状である。

堆積土は６層に分層し、いずれも自然堆積土と判断した。ℓ１～３は、周囲から流入したような堆積状況が顕著に認められた。ℓ５は、ＬＶａに起因する壁の崩落土と考えられる。なお、堆積土のうち、ℓ３・４はＬⅡに近似した特徴を示している。なお、遺物は出土していない。

本遺構は、平面形や断面形の特徴から、縄文時代の落し穴と考えられるが、詳細な時期については不明である。（廣　川）

３号土坑　ＳＫ03（図４、写真５）

本遺構は、Ｉ区中央付近のＬ３グリッドに位置する土坑である。検出面はＬＶａ上面だが、１号土坑と同様、本来の検出面はＬⅢａ上面と考えられる。重複する遺構はない。

平面形はやや歪んだ円形で、径は58㎝、検出面からの深さは23㎝を測る。遺構の断面形は、擂

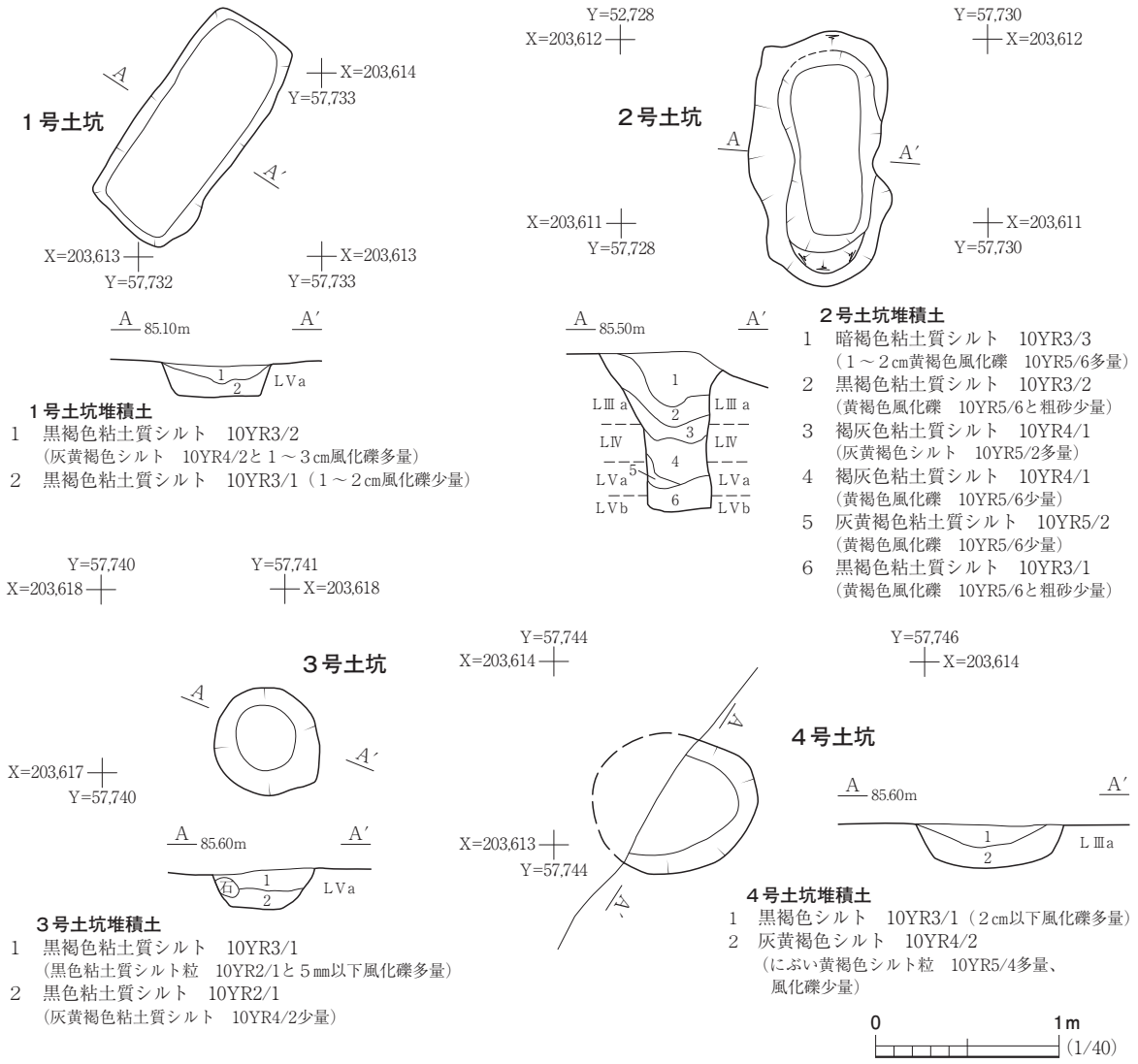


図４　１～４号土坑

鉢形である。

堆積土は黒褐色粘土質シルトで、含有物の違いにより２層に分層した。いずれも自然堆積土と判断した。堆積土中からは、土器等の遺物の出土はなかったが、ℓ１から木片が１点出土した。この木片は、樹種同定及び放射性炭素年代測定を行っている。樹種はクリまたはコナラ属コナラ節、暦年較正年代は1205calAD－1255calAD（64.2％）という結果が出ている（付編参照）。

本遺構では、木片の放射性炭素年代測定の結果では、13世紀頃という測定結果が得られた。年代測定を実施した木片はℓ１出土であり、遺構の埋没過程で流入したものと考えられる。以上のことから、本遺構は13世紀以前のものと考えられるが、具体的な時期や性格等は不明である。

（鶴　見）

４号土坑　ＳＫ04（図４、写真５）

本遺構は、Ⅰ区中央付近のＬ３グリッドに位置する土坑である。検出面はＬⅢａ上面で、重複する遺構はない。

表土除去の段階で遺構の西部を誤って掘削してしまっているが、本来は楕円形を呈する土坑と推定される。残存している箇所での計測値は、東西73㎝、南北74㎝、検出面からの深さは24㎝である。遺構の断面形は擂鉢形で、底面は僅かだがレンズ状に窪んでいる。

堆積土は２層に分層した。レンズ状の堆積状況を示すことから、自然堆積土と判断した。

本遺構からは、ℓ１より土師器甕の破片が５点出土した。いずれも細片のため図示できなかったが、ロクロ成形で、平安時代でも概ね９世紀頃のものと考えられる。また、ℓ１からは炭化物が出土した。炭化物は、放射性炭素年代測定を実施し、暦年較正年代で1182calAD－1217calAD（56.8％）という結果が出ている（付編参照）。

本遺構では、炭化物の放射性炭素年代測定では、12世紀末から13世紀初頭という測定結果が得られた。これに対し、出土した土器は、９世紀頃のもので、放射性炭素年代測定の時期と齟齬をきたすことから、遺構の時期を示すものではないと考えられる。以上のことから、本遺構は13世紀以前のものと考えられるが、具体的な時期や性格等は不明である。

（鶴　見）

第３節　溝　跡

溝跡は２条検出した。いずれも平安時代以降と考えられるが、出土遺物がなく、詳細な時期は不明である。

１号溝跡　ＳＤ01（図５、写真６）

本遺構は、Ⅱ区北部のＡ９・10、Ｂ９・10グリッドにかけて検出した溝跡である。検出面はＬⅢｂ上面である。北端と中央部付近では流路跡と、南端では１号特殊遺構と重複している。流路跡

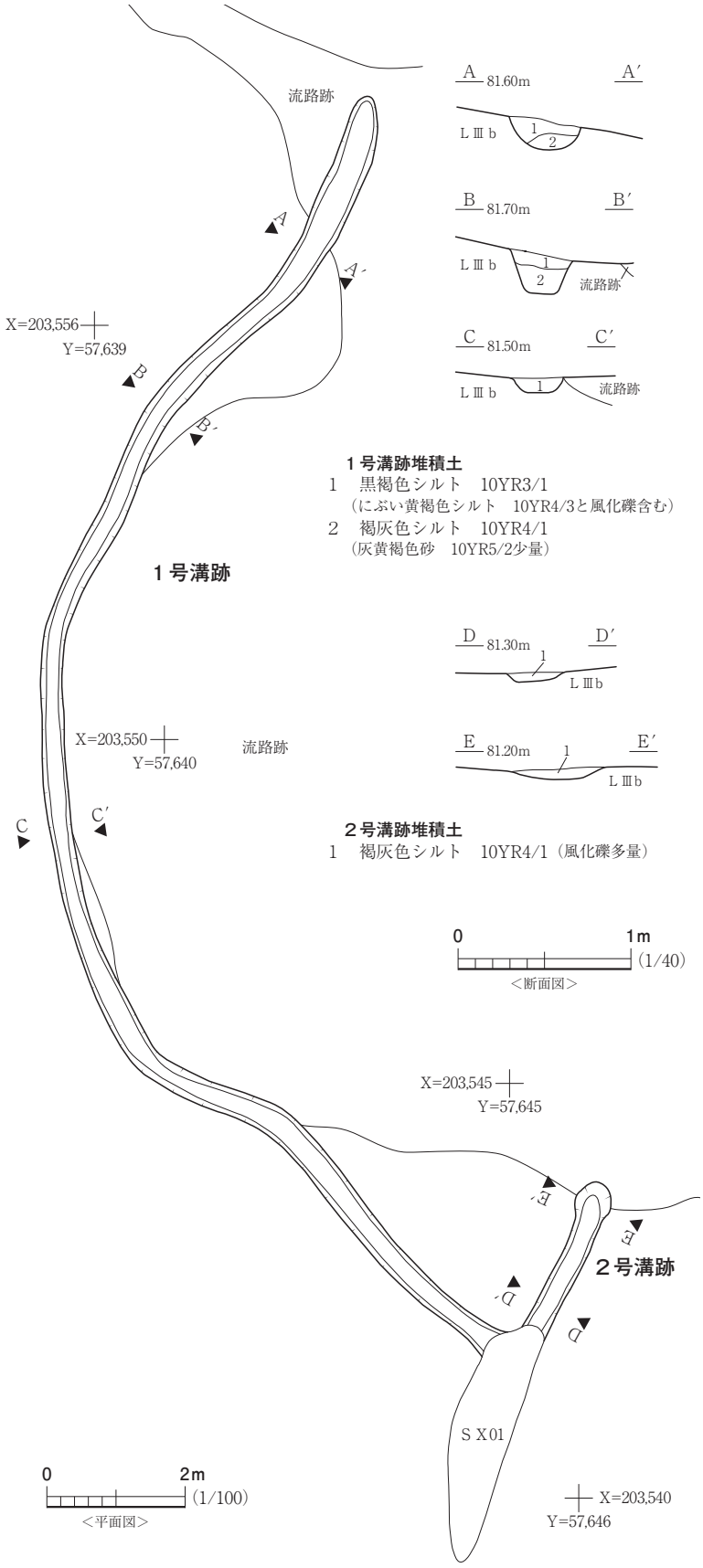


図５　１・２号溝跡

との新旧関係は、検出面及び断面で確認した結果、本遺構の方が新しいと判断した。一方、１号特殊遺構は、検出面では新旧関係は判然としなかったが、断面で検討した結果、本遺構より後につくられたと考えて記録を作成した。ただ、本遺構と１号特殊遺構の堆積土は近似していることや、後述する遺構の分布状況から同時期に機能していた可能性がある。

本遺構は、半月状に弧を描いた溝跡で、流路跡の外縁に沿うように確認されたが、１号特殊遺構と重複した箇所より先には延びていない。全長は22.3ｍ、幅は30～52㎝である。検出面からの深さは８～26㎝で、南部が少し浅い。断面形はすり鉢形で、底面に凹凸はなく、平坦である。

堆積土は２層で、ℓ２はＬⅡに近似した褐灰色シルトである。いずれも自然堆積土とみられる。なお、遺物は出土していない。

本遺構は、平安時代以前には大半が埋没していたと考えられる流路跡より後につくられた溝跡である。したがって、本遺構の年代は平安時代以降と判断される。本遺構の具体的な性格は不明だが、重複する１号特殊遺

構より先には延びないこと、隣接する２号溝跡も本遺構と同様の状況を示すことから、１号特殊遺構・２号溝跡と関連を持った遺構と考えられる。（鶴　見）

２号溝跡　ＳＤ02（図５、写真６）

本遺構は、Ⅱ区中央部のＢ10グリッドで検出した溝跡である。検出面はＬⅢｂ上面である。北端部では流路跡、南端部では１号特殊遺構と重複している。流路跡との新旧関係は、検出面及び断面で確認した結果、本遺構の方が新しいと判断した。一方、１号特殊遺構は、検出面では新旧関係は判然としなかったが、断面で検討した結果、本遺構より後につくられたと考えて記録を作成した。ただ、本遺構と１号特殊遺構の堆積土は近似していることや、本遺構が１号特殊遺構に接続することから同時期に機能していた可能性がある。

本遺構は、直線的な溝跡で、１号特殊遺構と重複した箇所より先には延びていない。全長は228㎝、幅は35～51㎝である。検出面からの深さは６㎝前後で、非常に浅い。

堆積土は、ＬⅡに近似した褐灰色シルトの単層である。自然堆積土とみられる。なお、遺物は出土していない。

本遺構は、流路跡の大半が埋没した後につくられた溝跡であり、１号溝跡と同様に平安時代以降の所産と考えられる。本遺構の具体的な性格は不明だが、重複する１号特殊遺構より先には延びないこと、隣接する１号溝跡も本遺構と同様の状況を示すことから、１号特殊遺構・１号溝跡と関連を持った遺構と考えられる。（鶴　見）

第４節　特　殊　遺　構

１号特殊遺構　ＳＸ01（図６、写真６）

本遺構は、Ⅱ区中央付近のＢ10・11グリッドにかけて位置し、検出面はＬⅢｂ上面である。浅く掘り窪められた土坑状を呈するが、北端部で重複する１・２号溝跡との関連が想定され、単独の土坑とは異なる性格をもつ可能性が高いと判断して特殊遺構とした。

平面形は、長軸3.56ｍ、短軸40～88㎝の南北方向に細長い不整楕円形を呈し、主軸方向はＮ20°Ｅである。北西方向から延びる１号溝跡と北東方向から延びる２号溝跡が交わる位置に北端部が重なり、両溝跡よりも深く掘り込まれている。検出面からの深さは、北端部がやや深くなるものの最深部で14㎝程度であり、全体的に浅く緩やかな掘り込みとなっている。遺構検出作業の段階では、流路跡に接続する１・２号溝跡の中継地点にあって水位を調節する堰跡、あるいは何らかの水場遺構などの可能性を考えたが、杭や木組み等の導水・止水にかかわるような特別な構造は認められなかった。

堆積土は３層に分層した。ℓ１は黒褐色粘土質シルトで、１号溝跡のℓ１に近似する。ℓ２は南東壁に認められるにぶい黄褐色シルトで、壁の崩落土と考えられる。ℓ３は褐灰色シルトで、１号

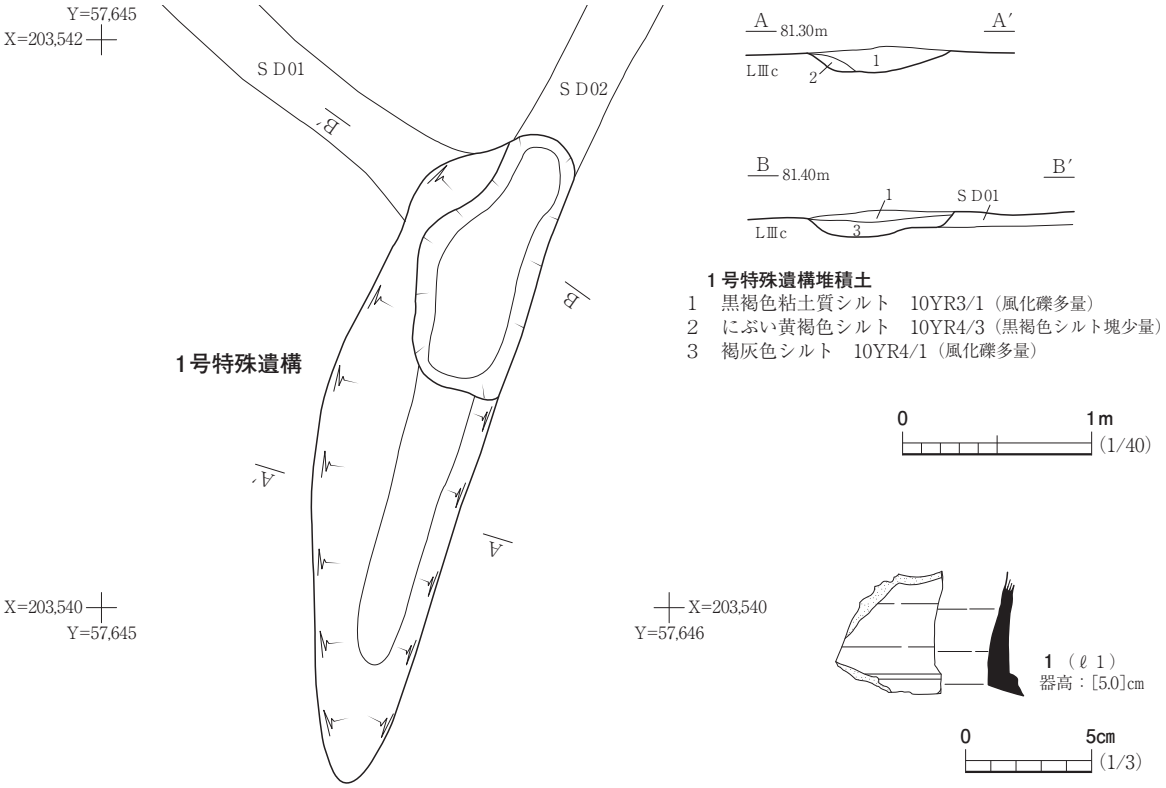


図６　１号特殊遺構・出土遺物

溝跡のℓ２及び２号溝跡のℓ１に近似する。

遺物は１点出土した。図６－１は、須恵器長頸瓶である。頸部の破片で、リング状の突帯が認められる。

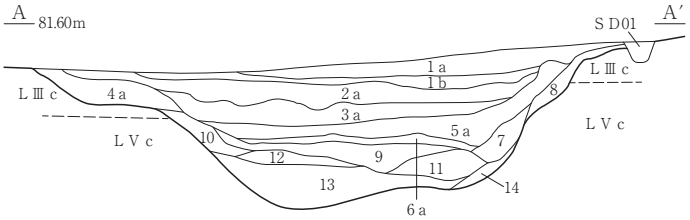
本遺構は、１・２号溝跡との重複関係から、平安時代以降の所産と考えられる。本遺構の具体的な性格は不明だが、重複する１・２号溝跡はいずれも本遺構より先には延びないことから、１・２号溝跡と関連を持った遺構と考えられる。（草　野）

第５節　流　路　跡

流路跡はⅡ区で２箇所確認されたが、それらは調査区外でつながる同一のものとみられる。流路として機能していた時期は不明であるが、出土遺物から埋没時期は平安時代以前と考えられる。

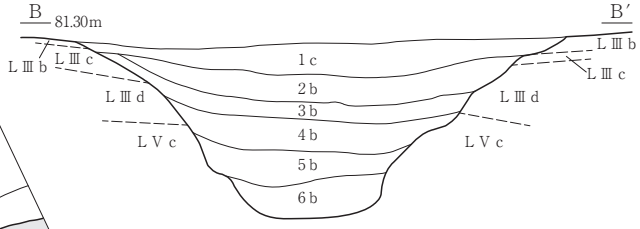
流 路 跡（図７・８）

流路跡は、Ⅱ区のＡ８～10、Ｂ８～12、Ｃ11・12グリッドにかけて確認した。検出面はＬⅢｂ上面である。底面に凹凸が多く見られ、底面上には砂礫層が厚く堆積することから、自然の流路跡と判断した。調査区内の地形は、北西隅で標高約82.0ｍを測り、そこから南東隅にかけて緩やかに傾斜し、調査区北端部と南端部との比高は約1.5ｍである。検出された流路跡も、大きく蛇行しながら地形が傾斜する南方向へと流れていたものと考えられる。なお、同じⅡ区から検出された１・



流路跡堆積土（Ａ－Ａ′）

1 a　黒褐色粘土質シルト（10YR3/2風化礫少量）
1 b　オリーブ黄色シルト（風化礫多量）
2 a　黒色粘土　10YR2/1（泥炭多量）
3 a　灰黄褐色粘土質シルト　10YR5/2（黒色粘土塊　10YR2/1少量）
4 a　灰オリーブ色砂質シルト　5YR5/2（褐灰色粘土塊　10YR4/1少量）
5 a　黒褐色粘土　10YR3/1（黒色粘土　10YR2/1少量）
6 a　灰黄褐色砂　10YR5/2（褐灰色粘土塊　10YR4/1少量）
7　褐灰色粘土　10YR4/1（黒色粘土塊　10YR2/1と風化礫少量）
8　灰オリーブ色シルト　5Y5/2
（褐灰色粘土塊　10YR4/1を多量、風化礫少量）
9　黒褐色粘土質シルト　10YR3/1（褐灰色砂　10YR5/1多量）
10　灰色粘土質シルト　5Y5/1（褐灰色粘土塊　10YR4/1と風化礫少量）
11　灰黄褐色砂　10YR5/2
（褐灰色粘土塊　10YR4/1と直径２㎝以下の礫少量）
12　褐灰色砂　10YR5/1（褐灰色粘土ブロック　10YR4/1少量）
13　褐灰色砂質シルト　10YR4/1（黒褐色粘土質シルト　10YR3/1多量）
14　黒色粘土質シルト　10YR2/1（オリーブ黄色シルト塊　5Y6/3少量）



流路跡堆積土（Ｂ－Ｂ′）

1 c　黒褐色粘土　10YR3/1
（灰オリーブ粘土質シルトブロック　5Y5/2
と風化礫含む）
2 b　黒色粘土　10YR2/1（風化礫微量）
3 b　褐灰色粘土　10YR4/1（風化礫微量）
4 b　褐灰色粘土　10YR4/1
（灰黄褐色砂　10YR5/2多量）
5 b　褐灰色砂質シルト　10YR5/1
（灰黄褐色砂　10YR5/2多量）
6 b　灰黄褐色砂　10YR5/2
（直径1～3㎝の礫多量、
黒褐色粘土ブロック　10YR3/1少量）

0　5m　(1/200)
＜平面図＞

0　2m　(1/80)
＜断面図＞

図７　流路跡（１）

２号溝跡と重複し、これらの遺構よりも古い。

流路跡の堆積状況は、土層断面図Ａ－Ａ′・Ｂ－Ｂ′・Ｃ－Ｃ′の計３箇所で確認した。堆積土は総じてレンズ状堆積を示すことから自然堆積土と考えられる。14層に分層したが、土層観察箇所により色調や含有物が異なるため、必要に応じて細分した。

ℓ１は黒褐色粘土質シルトを基調とした層である。流路跡から確認された遺物の大半は、ℓ１からの出土である。ℓ２は黒色粘土を基調とした層で、ℓ２ａ～２ｄに細分した。このうち、ℓ２ａには層中に泥炭を多く含んでいる。ℓ６は流路内を流れてきた土砂が堆積したものと考えられ、土層断面図Ｂ－Ｂ′・Ｃ－Ｃ′地点では灰黄褐色砂層ないし灰色砂層が最下層に厚く堆積している。一方、土層断面図Ａ－Ａ′地点では、ℓ６の堆積は薄いが、これより下層のℓ 11・12や底面上に厚く堆積するℓ 13は、ℓ６と同様、水流による土砂の堆積と考えられる。流路跡の側壁に認められるℓ７・８・10は、流路の上端付近の崩落土とみられる。

流路跡は、Ⅱ区北部と南部でそれぞれ半円を描くように蛇行して調査区外へと延びている。これらの流路跡は、調査区内でつながる状況が確認できなかったため、厳密には同一のものとは断定できないが、堆積土の状況が近似することから一連のものと推測される。

流路跡の規模は、検出された範囲で全長約33ｍ、幅約５～６ｍである。検出面からの深さは、

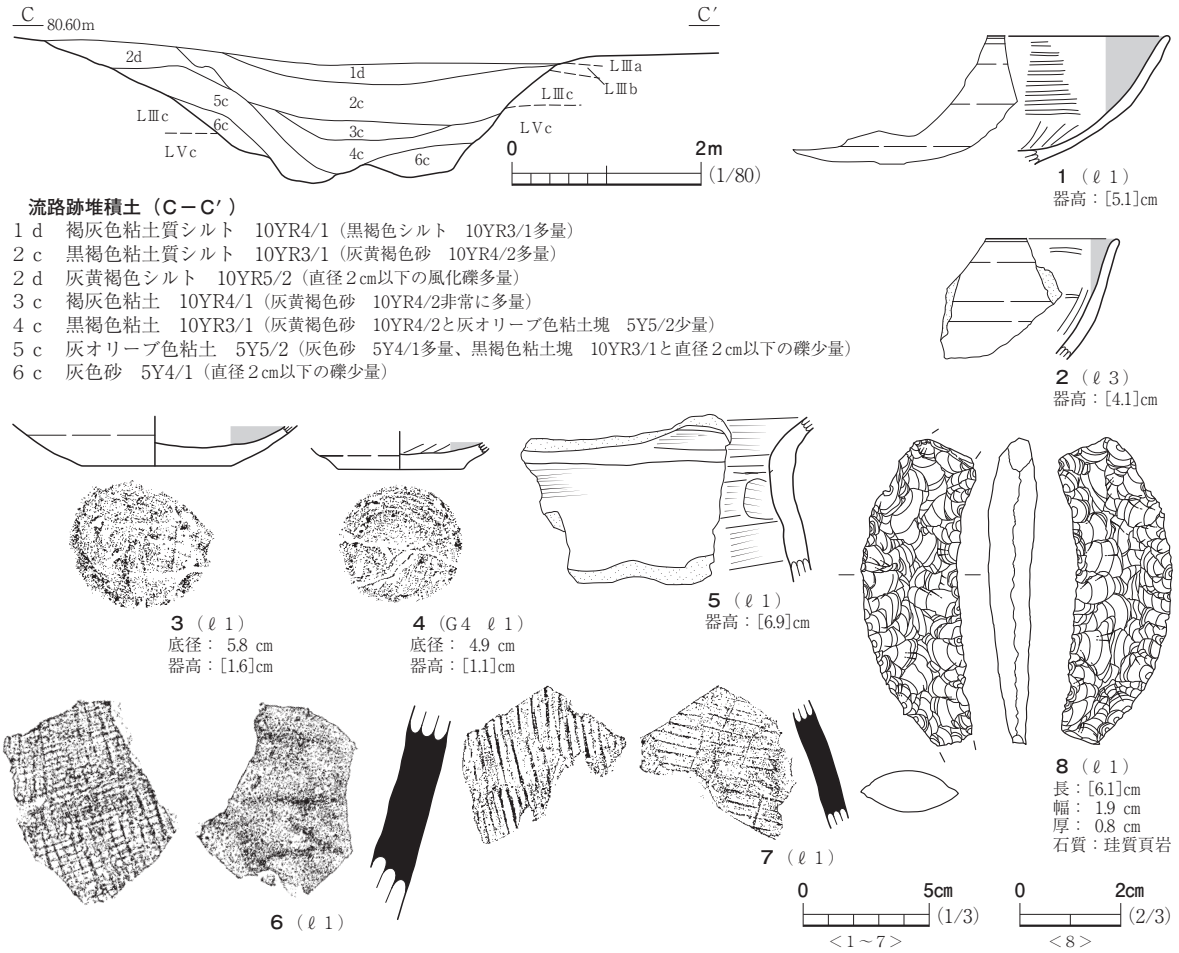


図８　流路跡（２）・出土遺物

土層断面図Ｂ－Ｂ′地点では最深1.9ｍを測るが、土層断面図Ａ－Ａ′及びＣ－Ｃ′地点では1.5ｍ程度である。断面は逆台形状で、底面は水流によって抉られたとみられる凹凸が認められる。また、流路跡の北端部分では、幅約1.5ｍの支流が北西方向から６ｍほど流れ込んでいる。

遺　　物（図８、写真７）

遺物は、土師器杯を中心に44点が出土した。そのうち、８点を図示した。

図８－１～４はロクロ成形の土師器杯で、内面黒色処理が施されている。１・２は口縁部片、３・４は底部片である。３・４の底部切り離しは回転糸切りで、ヘラケズリ等の調整は施されていない。

図８－５は非ロクロ成形の土師器甕で、頸部付近の破片である。内外面ともに調整は横ナデで、内面には粘土紐の積み上げ痕が残る。

図８－６・７は須恵器甕の胴部片である。６は外面に格子状のタタキ目、内面の当て具痕は無文、７は外面に平行タタキ目、内面の当て具痕は長方形格子状文が観察される。

図８－８は両面を丁寧に加工した石匙である。摘み部と先端部が欠けている。

ま と め

流路跡からの出土遺物は大半が最上層からの出土で、中層から下層では認められなかった。そのため、流路跡として機能していた時期は不明であるが、平安時代以前には大半が埋没して浅く窪んだ状態となっていたものと推察される。（廣　川）

第６節　遺構外出土遺物

遺構外から出土した遺物は、土師器４点、須恵器６点で、いずれも平安時代のものである。そのうち３点を図示した。

図９－１は土師器杯で、破片から径を復元している。ロクロ成形のもので、内面黒色処理がされている。図９－２・３は須恵器甕である。２点とも外面にタタキ目が観察され、２は平行タタキ目、３は格子状のタタキ目である。また、２・３とも内面の当て具痕はナデ調整により不明瞭だが、無文とみられる。（草　野）

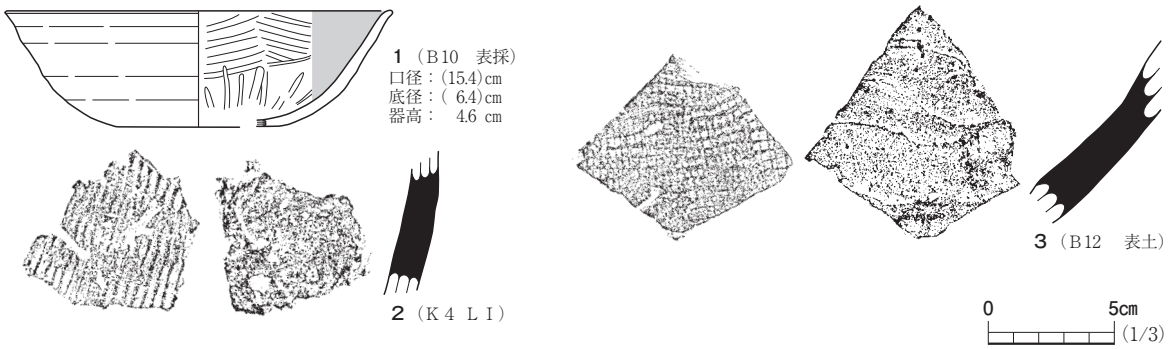


図９　遺構外出土遺物

第３章　　総　　括

今回の調査では、土坑４基、溝跡２条、特殊遺構１基、流路跡１条を検出した。それらの時期は、概ね縄文時代、平安時代以降、中世以前のものと考えられる。

縄文時代の遺構は土坑２基である。いずれも落し穴とみられ、遺存状態の良い２号土坑は長軸約140㎝、短軸約70㎝、深さ約90㎝を測る。日照田遺跡（本書第３編）からも落し穴が９基確認され、この付近一帯が狩り場であったようである。

平安時代以降と考えられる遺構は、溝跡２条、特殊遺構１基である。１号特殊遺構は１・２号溝跡を繋ぐ位置にあり、これらは一連の遺構であったと考えられる。また、１号溝跡が流路跡の外縁沿いに位置し、２号溝跡の北端部分が流路跡内に延びていることから、埋没して浅く窪んだ状態となった流路跡との関連性も想定される。これらの遺構の詳細な時期は、出土遺物がなく不明だが、流路跡の最上層から出土した土器の時期に近い可能性もある。なお、今回の調査区から出土した平安時代の遺物は僅かだったため、平安時代の集落の中心は隣接する日照田遺跡側にあったと推測される。また、この付近の当該期の調査事例としては、館ノ前遺跡の北側丘陵地に立地する松原館跡から平安時代の竪穴住居跡１軒が検出されている。よって、流路跡の遺物の供給源が舘ノ前遺跡より北側にあった可能性も皆無ではない。

中世以前と考えられる遺構は、土坑２基である。いずれも小規模の土坑で、具体的な性格等は不明である。なお、舘ノ前遺跡の名称が示す通り、調査箇所の小字名は「舘ノ前」である。このことから、舘跡に関連した遺構の存在も想定されたが、今回の調査区では確認されなかった。松原館跡が機能していた段階には、本遺跡内において目立った活動痕跡は残されず、その後、「舘ノ前」という地名だけが現代まで受け継がれたようである。　（廣　川）

引用・参考文献

桑折町教育委員会　2003『松原館跡発掘調査報告書』桑折町埋蔵文化財調査報告書 16

付　編　自然科学分析

第１章　日照田遺跡出土炭化材の自然科学分析

株式会社　加速器分析研究所

第１節　樹種同定

１．試　　料

日照田遺跡は、福島県伊達郡桑折町大字松原字日照田に所在する。建物跡や流路跡等の遺構から出土した炭化材FB-HDD-04と杭や柱材などの木材FB-HDD-03、05～11の合計９点を対象に樹種同定を行った。FB-HDD-05が縄文時代、FB-HDD-03、04、10、11が平安時代、FB-HDD-06～09が中世の遺構から出土したとされている。

なお、これら９点を含む11点の試料について放射性炭素年代測定が実施されているFB-HDD-06～11はおおむね推定に近い値となったが、FB-HDD-03は推定より古く、FB-HDD-04、05は新しい結果となった(別稿年代測定報告参照)。

２．分析方法

炭化材は乾燥させた後、ステンレス剃刀で横断面､放射断面､接線断面の３方向の断面を割り出し、粘土でプレパラートに固定して、反射光式顕微鏡で観察、現生標本の形態に基づいて同定した。

木片は、ステンレス剃刀で横断面、放射断面、接線断面の切片を採取し、ガムクロラールにてプレパラートを作成し、生物顕微鏡で観察、現生標本の形態に基づいて同定した。

３．結　　果

同定結果を表１に示す。炭化材はタケ亜科、木材はニレ属、ケンポナシ属、クリ、針葉樹、カエデ属に同定された。以下に同定の根拠を示す。

・針葉樹

横断面では仮道管が規則的に並んでおり、晩材部付近で径が小さくなっているのが確認できる。細胞内に菌類の胞子が多量に確認され、風化が進んでいることがわかる。放射断面では分野壁孔を確認できず、針葉樹と同定するにとどめた。

・クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.)

年輪はじめにやや大きな道管が数列配列し、徐々に径を減じてやや角ばった小さい管孔が波状に配列する環孔材。放射細胞は単列で同性である。

・ニレ属 (*Ulmus*)

年輪はじめに大きな道管が数列配列し、その後径が急減して小さい管孔が接線方向や斜めに比較的規則的に集合して配列する環孔材。小道管内にはらせん肥厚があり、道管は単穿孔である。放射組織は１-７細胞幅程度で、すべて平伏細胞からなる同性である。

・カエデ属(*Acer*)

中程度の管孔が年輪内にほぼ均等に散在する散孔材。道管は単穿孔、道管内にらせん肥厚がある。放射組織は同性で１-８細胞幅である。

・ケンポナシ属(*Hovenia*)

年輪はじめに大きな道管が１-数列配列し、径が急減して、厚壁の小道管が単独ないし数個放射方向に複合してまばらに分布する環孔材。道管は単穿孔である。放射組織は、平伏と直立と方形の異性で、１-３細胞幅で背が低い。道管-放射組織間壁孔は細かい。

・タケ亜科(*Bamboosoideae*)

横断面で確認できる維管束は、向軸側の原生木部腔と真ん中にある一対の後生木部道管、背軸側の師部からなり､その外側を繊維組織が取り囲んでいる。

表１　日照田遺跡出土炭化材・木材の樹種

試料番号	遺構・層位	種　類	樹種
FB-HDD-03	ＳＸ03　ℓ２	杭	ニレ属
FB-HDD-04	Ｆ２Ｐ３　ℓ１	炭化材	タケ亜科
FB-HDD-05	ＳＫ12　底面	木　材	ケンポナシ属
FB-HDD-06	ＳＢ１-Ｐ１　ℓ１	柱　材	クリ
FB-HDD-07	ＳＢ１-Ｐ２　ℓ１	柱　材	針葉樹
FB-HDD-08	ＳＢ１-Ｐ３　ℓ１	柱　材	クリ
FB-HDD-09	Ｇ１Ｐ21　ℓ１	柱　材	クリ
FB-HDD-10	流路跡　杭列 No. 1	角　材	カエデ属
FB-HDD-11	流路跡　杭列 No. 2	角　材	カエデ属

４　考　　察

杭FB-HDD-03はニレ属で、東北地方では比較的入手が容易な樹種であるため、土木材に利用される。木材FB-HDD-05はケンポナシ属で、東北地方の山地に広く分布している広葉樹である。加工材としての出土数は少ないが、東北地方を中心に柱、杭などで利用される例がある。柱材FB-HDD-06～09は、クリが３点と針葉樹である。クリは耐久性が優れていることから建築土木用材として優先的に利用されているため、各時期を通して出土例が多い。東北ではとくに縄文時代以降土木建築材として近世まで多用されており、本遺跡の出土例もこの傾向に調和的であると言える。角材FB-HDD-10、11はいずれもカエデ属である。耐久性がよいわけではないが、山地に多く分布することから入手が容易で利用したと考えられる（伊東ほか2012）。

文　　献

伊東隆夫・山田昌久. 2012. 木の考古学　出土木製品用材データベース. 海青社.

※）本分析は古代の森研究舎の協力を得て行った。

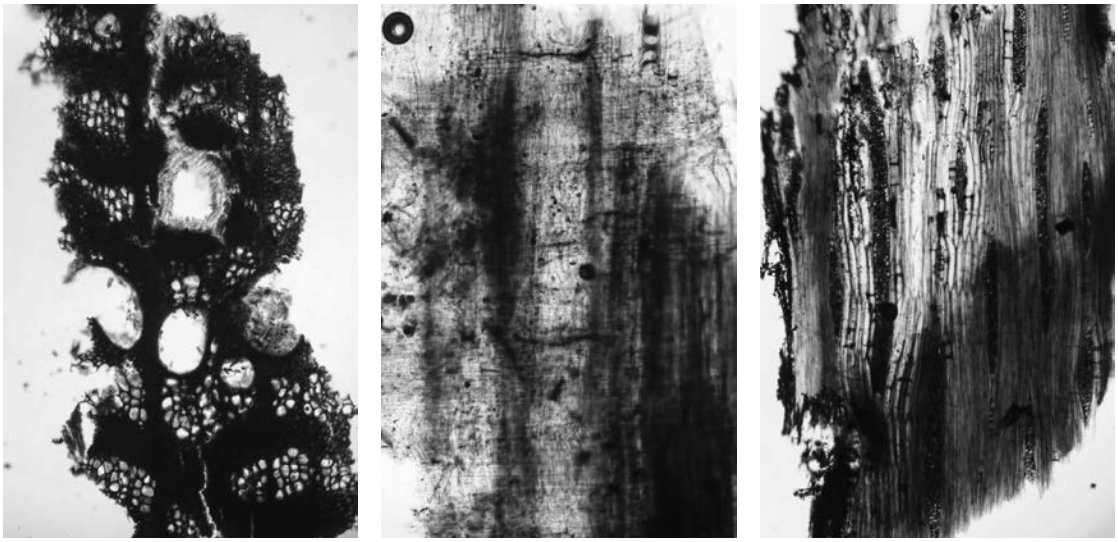


図１　日照田遺跡出土木材の顕微鏡写真（１）

Ｃ：横断面　Ｒ：放射断面　Ｔ：接線断面　スケール：0.1㎜

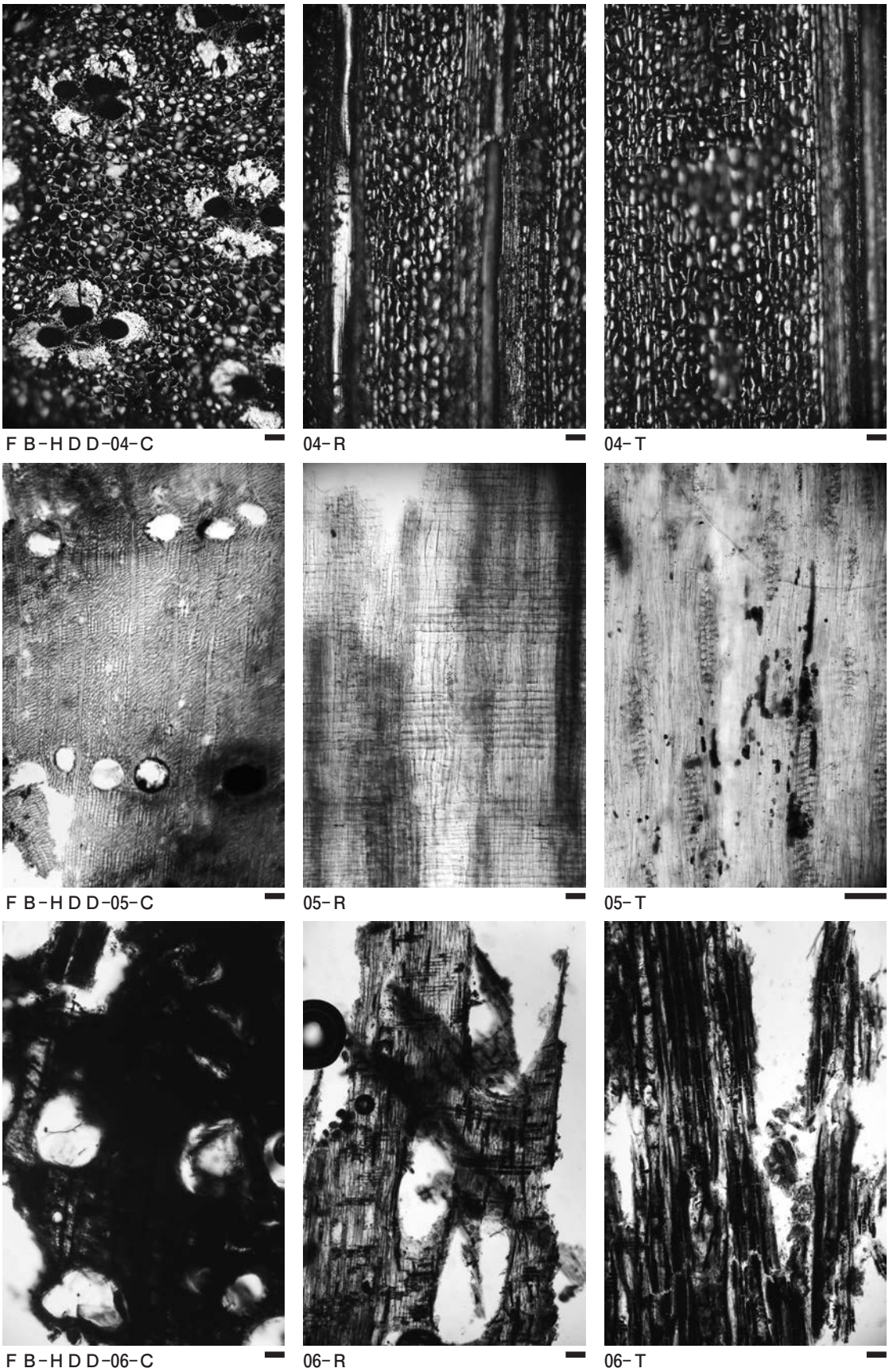


図２　日照田遺跡出土木材の顕微鏡写真（２）

C：横断面　**R**：放射断面　**T**：接線断面　**スケール**：0.1㎜

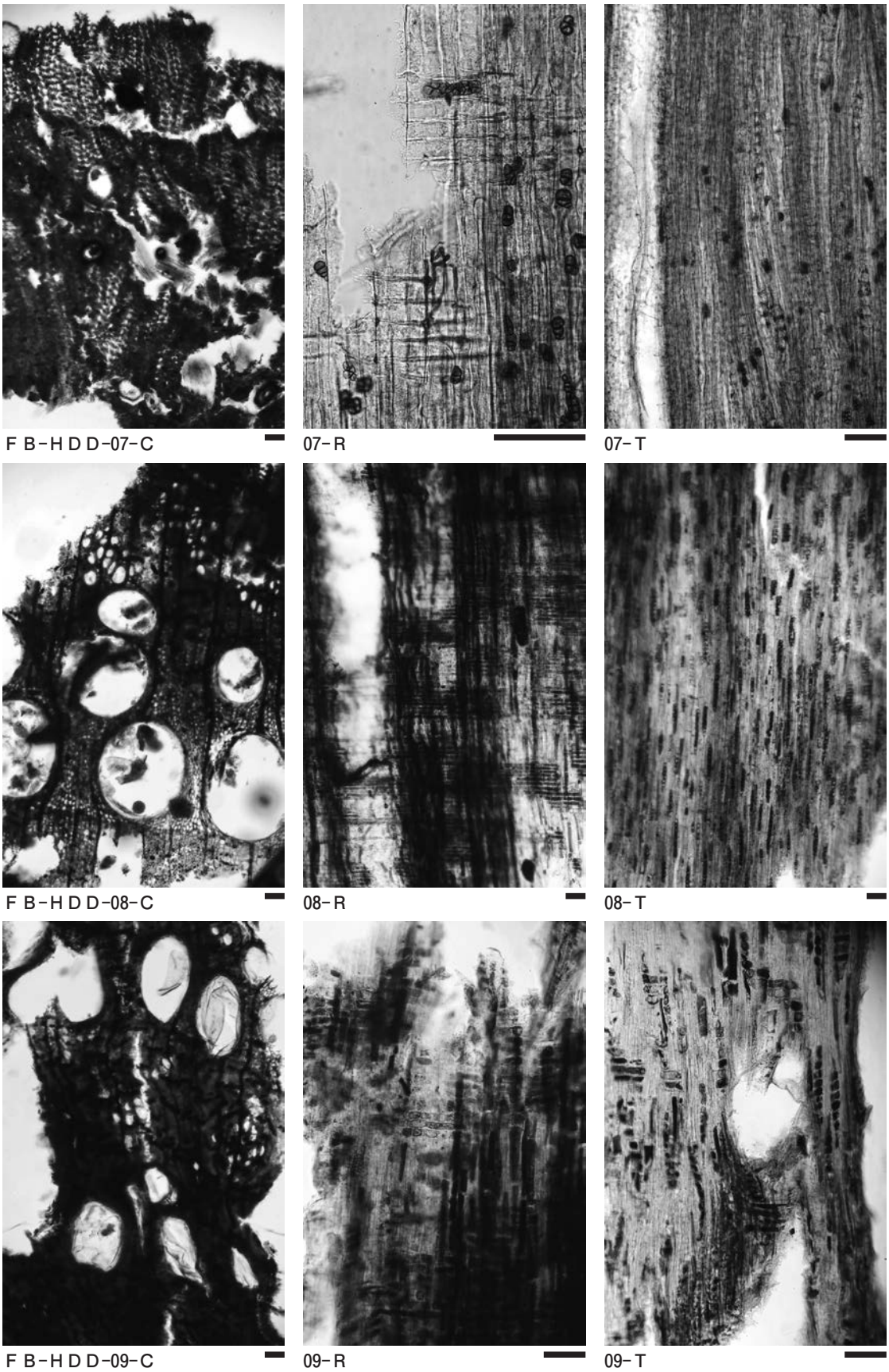


図３　日照田遺跡出土木材の顕微鏡写真（３）

C：横断面　**R**：放射断面　**T**：接線断面　**スケール**：0.1㎜

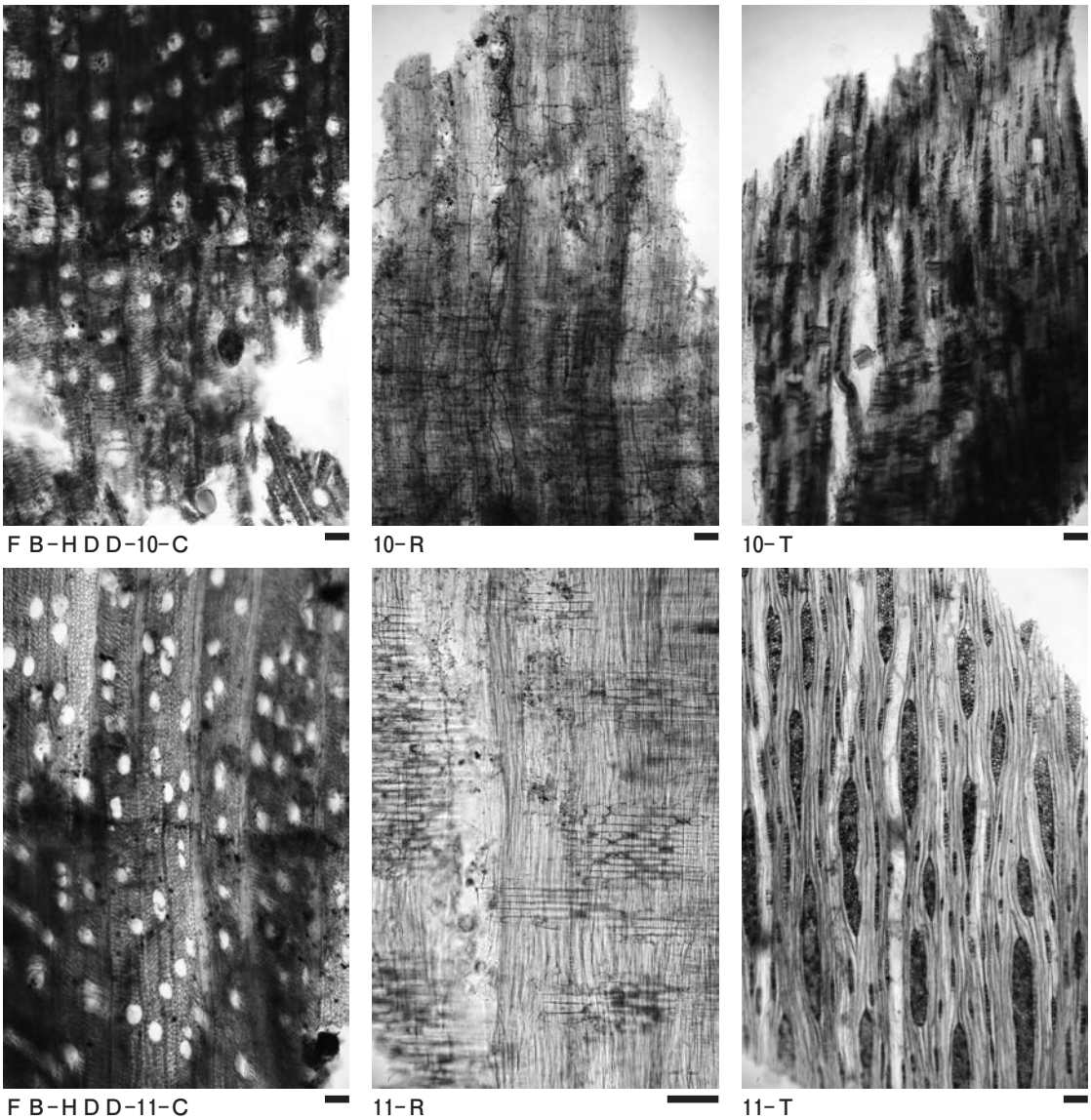


図４　日照田遺跡出土木材の顕微鏡写真（４）

C：横断面　**R**：放射断面　**T**：接線断面　**スケール**：0.1㎜

第２節　放射性炭素年代（AMS 測定）

１　測定対象試料

日照田遺跡は、福島県伊達郡桑折町大字松原字日照田に所在する。測定対象試料は、遺構から出土した炭化材、杭、木材、角材の合計11点である（表１）。なお、試料FB-HDD-03～11については樹種同定が行われている（別稿樹種同定報告参照）。

試料の時期は、古い方から順にFB-HDD-05が縄文時代、FB-HDD-01～04、10、11が平安時代、FB-HDD-06～09が中世と考えられている。なお、FB-HDD-05の測定結果は、後述するように縄文時代より大幅に新しく、４世紀を主とする年代値を示した。

２　化学処理工程

（１）メス・ピンセットを使い、土等の付着物を取り除く。

（２）酸－アルカリ－酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。ＡＡＡ処理における酸処理では、通常１mol/ℓ（１M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001M から１Ｍまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が１Ｍに達した時には「AAA」、１Ｍ未満の場合は「AaA」と表１に記載する。

（３）試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO_2）を発生させる。

（４）真空ラインで二酸化炭素を精製する。

（５）精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。

（６）グラファイトを内径１㎜のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

３　測定方法

加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置（NEC社製）を使用し、^{14}Cの計数、^{13}C濃度（^{13}C/^{12}C）、^{14}C濃度（^{14}C/^{12}C）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx Ⅱ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

４　算出方法

（１）δ^{13}C は、試料炭素の^{13}C 濃度（^{13}C/^{12}C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表1）。AMS 装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

（２）^{14}C 年代（Libby Age：yrBP）は、過去の大気中^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。^{14}C 年代はδ^{13}C によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表１に、補正していない値を参考値として表２に示した。^{14}C 年代と誤差は、下１桁を丸めて10年単位で表示される。また、^{14}C 年代の誤差（±１σ）は、試料の^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2％であることを意味する。

（３）pMC（percent Modern Carbon）は、標準現代炭素に対する試料炭素の^{14}C 濃度の割合である。pMC が小さい（^{14}C が少ない）ほど古い年代を示し、pMC が100以上（^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上）の場合 Modern とする。この値もδ^{13}C によって補正する必要があるため、補正した値を表１に、補正していない値を参考値として表２に示した。

（４）暦年較正年代とは、年代が既知の試料の^{14}C 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過

去の^{14}C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、^{14}C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差（1σ＝68.2％）あるいは２標準偏差（２σ＝95.4％）で表示される。グラフの縦軸が^{14}C年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、δ^{13}C補正を行い、下1桁を丸めない^{14}C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13データベース（Reimer et al. 2013）を用い、OxCalv4.3較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表２に示した。暦年較正年代は、^{14}C年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。

5　測定結果

測定結果を表１、２に示す。

縄文時代とされる木材FB-HDD-05の^{14}C年代は1680±20yrBP、暦年較正年代（１σ）は345～396cal ADの範囲となり、推定より大幅に新しい。

平安時代とされる試料FB-HDD-01～04、10、11の^{14}C年代は、1410±20yrBP（杭FB-HDD-03）から710±20yrBP（炭化材FB-HDD-04）の間にある。暦年較正年代（１σ）は、最も古いFB-HDD-03が622～655cal ADの範囲、最も新しいFB-HDD-04が1271～1289cal ADの範囲で示される。炭化材FB-HDD-02、角材FB-HDD-10、11は推定に一致し、炭化材FB-HDD-01は確率の低い範囲を含めて２σ暦年代範囲で見ると推定と重なる部分がある。FB-HDD-03は推定より明らかに古く、FB-HDD-04は新しい結果となっている。

中世とされる柱材FB-HDD-06～09の^{14}C年代は、960±20yrBP（FB-HDD-09）から890±20yrBP（FB-HDD-06）の間にまとまる。暦年較正年代（１σ）は、最も古いFB-HDD-09が1027～1149cal ADの間に３つの範囲、最も新しいFB-HDD-06が1050～1188cal ADの間に３つの範囲で示される。推定におおむね近いか、やや古い年代値と見られる。FB-HDD-06～08は同じ建物跡に属し、年代値もおおむねまとまっている。

これら11点の試料はいずれも木材であるため、年代値の評価に当たっては次に記す古木効果を考慮する必要がある。樹木の年輪の放射性炭素年代は、その年輪が成長した年の年代を示す。したがって樹皮直下の最外年輪の年代が、樹木が伐採され死んだ年代を示し、内側の年輪は、最外年輪からの年輪数の分、古い年代値を示すことになる（古木効果）。今回測定された試料は、いずれも樹皮が残存せず、本来の最外年輪を確認できないことから、これらの木が死んだ年代は測定結果より新しい可能性がある。

試料の炭素含有率は48％（柱材FB-HDD-06）～72％（炭化材FB-HDD-01）のおおむね適正な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

文　献

Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337-360

Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 55(4), 1869-1887

Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19(3), 355-363

表２　放射性炭素年代測定結果（１）（δ 13C補正値）

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ 13C (‰) (AMS)	δ 13C 補正あり	
						Libby Age（yrBP）	pMC (%)
IAAA-171929	FB-HDD-01	ＳＸ01　ℓ１	炭化材	AAA	−25.06±0.22	1,250±20	85.62±0.23
IAAA-171930	FB-HDD-02	ＳＸ02　ℓ１	炭化材	AAA	−27.87±0.20	1,220±20	85.90±0.24
IAAA-171931	FB-HDD-03	ＳＸ03　ℓ２	杭	AaA	−25.97±0.19	1,410±20	83.92±0.24
IAAA-171932	FB-HDD-04	Ｆ２Ｐ３　ℓ１	炭化材	AAA	−28.32±0.23	710±20	91.50±0.26
IAAA-171933	FB-HDD-05	ＳＫ12　底面	木材	AAA	−29.75±0.21	1,680±20	81.12±0.24
IAAA-171934	FB-HDD-06	ＳＢ１－Ｐ１　ℓ１	柱材	AAA	−23.78±0.23	890±20	89.47±0.25
IAAA-171935	FB-HDD-07	ＳＢ１－Ｐ２　ℓ１	柱材	AAA	−25.57±0.21	940±20	88.93±0.24
IAAA-171936	FB-HDD-08	ＳＢ１－Ｐ３　ℓ１	柱材	AAA	−26.51±0.20	910±20	89.33±0.25
IAAA-171937	FB-HDD-09	Ｇ１Ｐ21　ℓ１	柱材	AAA	−26.25±0.19	960±20	88.77±0.26
IAAA-171938	FB-HDD-10	流路跡　杭列 No.1	角材	AAA	−24.93±0.23	1,120±20	86.97±0.24
IAAA-171939	FB-HDD-11	流路跡　杭列 No.2	角材	AAA	−27.45±0.26	1,160±20	86.57±0.24

［IAA 登録番号：#8865］

表３　放射性炭素年代測定結果（２）（δ 13C未補正値、暦年較正用14C年代、較正年代）

測定番号	δ 13C 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	１σ暦年代範囲	２σ暦年代範囲
	Age　(yrBP)	pMC　（%）			
IAAA-171929	1,250 ± 20	85.61 ± 0.23	1,247 ± 21	694 cal AD - 746 cal AD (57.2%) 763 cal AD - 773 cal AD (11.0%)	681 cal AD - 779 cal AD (83.1%) 791 cal AD - 830 cal AD (7.1%) 837 cal AD - 865 cal AD (5.2%)
IAAA-171930	1,270 ± 20	85.39 ± 0.24	1,220 ± 22	728 cal AD - 737 cal AD (6.4%) 769 cal AD - 779 cal AD (9.2%) 790 cal AD - 829 cal AD (30.5%) 838 cal AD - 866 cal AD (22.1%)	711 cal AD - 745 cal AD (15.3%) 764 cal AD - 886 cal AD (80.1%)
IAAA-171931	1,420 ± 20	83.75 ± 0.24	1,407 ± 23	622 cal AD - 655 cal AD (68.2%)	605 cal AD - 661 cal AD (95.4%)
IAAA-171932	770 ± 20	90.87 ± 0.26	713 ± 23	1271 cal AD - 1289 cal AD (68.2%)	1261 cal AD - 1299 cal AD (93.2%) 1371 cal AD - 1379 cal AD (2.2%)
IAAA-171933	1,760 ± 20	80.33 ± 0.23	1,680 ± 23	345calAD - 396calAD (68.2%)	263 cal AD - 276 cal AD (4.3%) 329 cal AD - 415 cal AD (91.1%)
IAAA-171934	870 ± 20	89.69 ± 0.25	893 ± 22	1050 cal AD - 1083 cal AD (29.9%) 1126 cal AD - 1136 cal AD (5.9%) 1151 cal AD - 1188 cal AD (32.3%)	1044 cal AD - 1100 cal AD (38.2%) 1118 cal AD - 1213 cal AD (57.2%)
IAAA-171935	950 ± 20	88.82 ± 0.24	942 ± 22	1035 cal AD - 1050 cal AD (13.9%) 1083 cal AD - 1126 cal AD (40.4%) 1136 cal AD - 1151 cal AD (13.8%)	1029 cal AD - 1155 cal AD (95.4%)
IAAA-171936	930 ± 20	89.05 ± 0.24	906 ± 22	1046 cal AD - 1091 cal AD (40.5%) 1121 cal AD - 1140 cal AD (13.9%) 1148 cal AD - 1164 cal AD (13.8%)	1039 cal AD - 1188 cal AD (95.4%)
IAAA-171937	980 ± 20	88.54 ± 0.26	956 ± 23	1027 cal AD - 1048 cal AD (21.5%) 1087 cal AD - 1123 cal AD (36.3%) 1138 cal AD - 1149 cal AD (10.4%)	1022calAD - 1059calAD (29.0%) 1065calAD - 1155calAD (66.4%)
IAAA-171938	1,120 ± 20	86.98 ± 0.24	1,121 ± 22	894 cal AD - 906 cal AD (14.0%) 915 cal AD - 931 cal AD (18.1%) 938 cal AD - 968 cal AD (36.0%)	885 cal AD - 985 cal AD (95.4%)
IAAA-171939	1,200 ± 20	86.14 ± 0.23	1,158 ± 22	778 cal AD - 791 cal AD (9.8%) 809 cal AD - 813 cal AD (2.2%) 826 cal AD - 841 cal AD (8.0%) 863 cal AD - 899 cal AD (30.7%) 924 cal AD - 946 cal AD (17.5%)	776 cal AD - 904 cal AD (70.8%) 918 cal AD - 965 cal AD (24.6%)

［参考値］

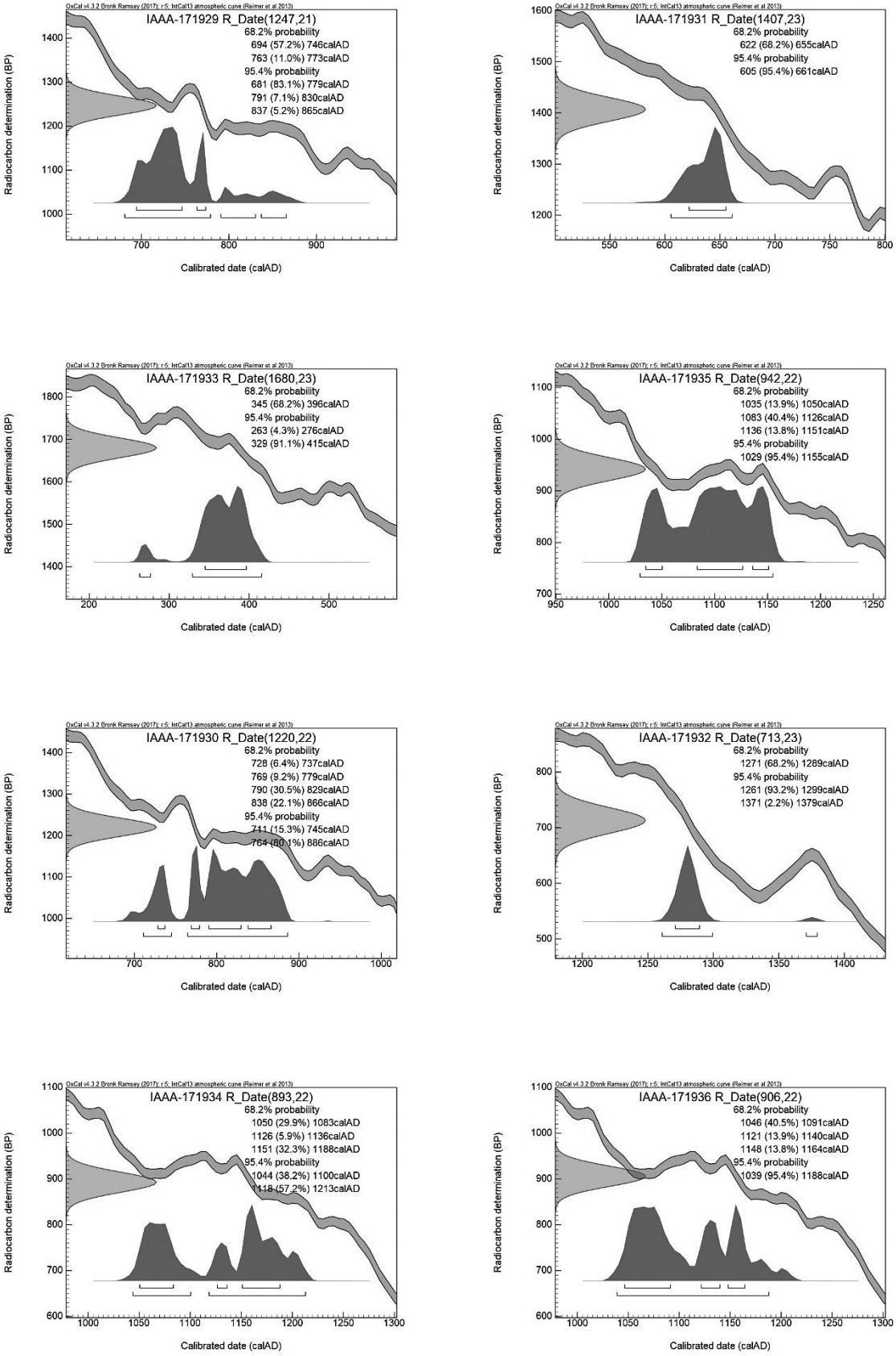


図５　暦年較正年代グラフ（１）

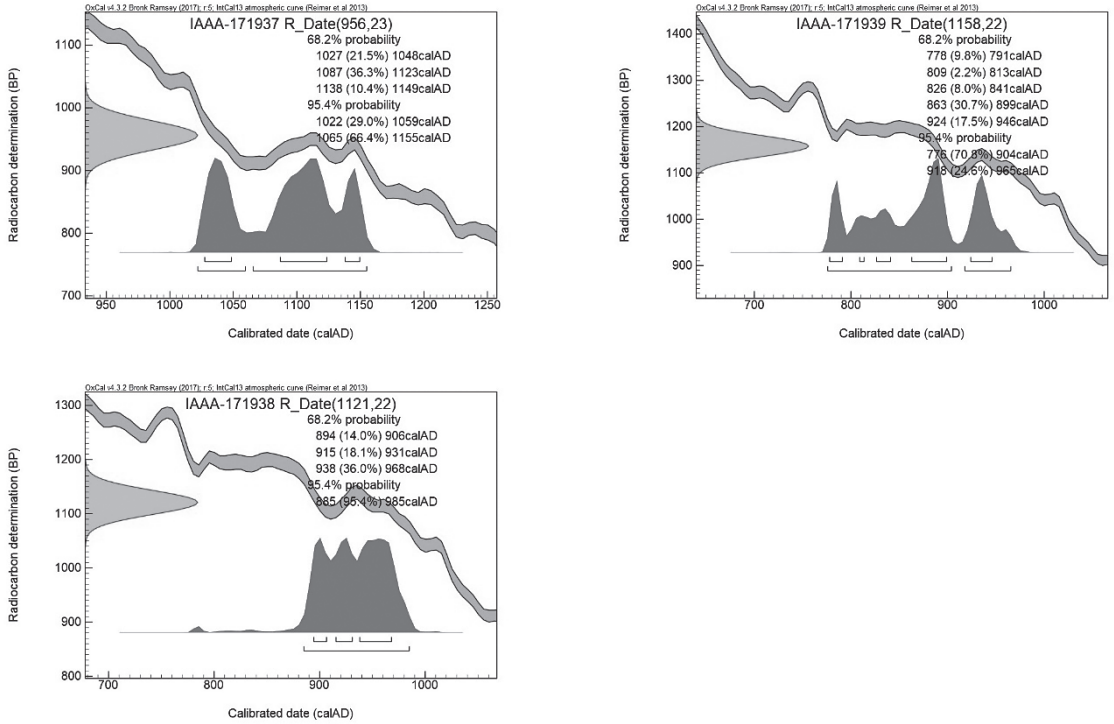


図6　暦年較正年代グラフ（2）

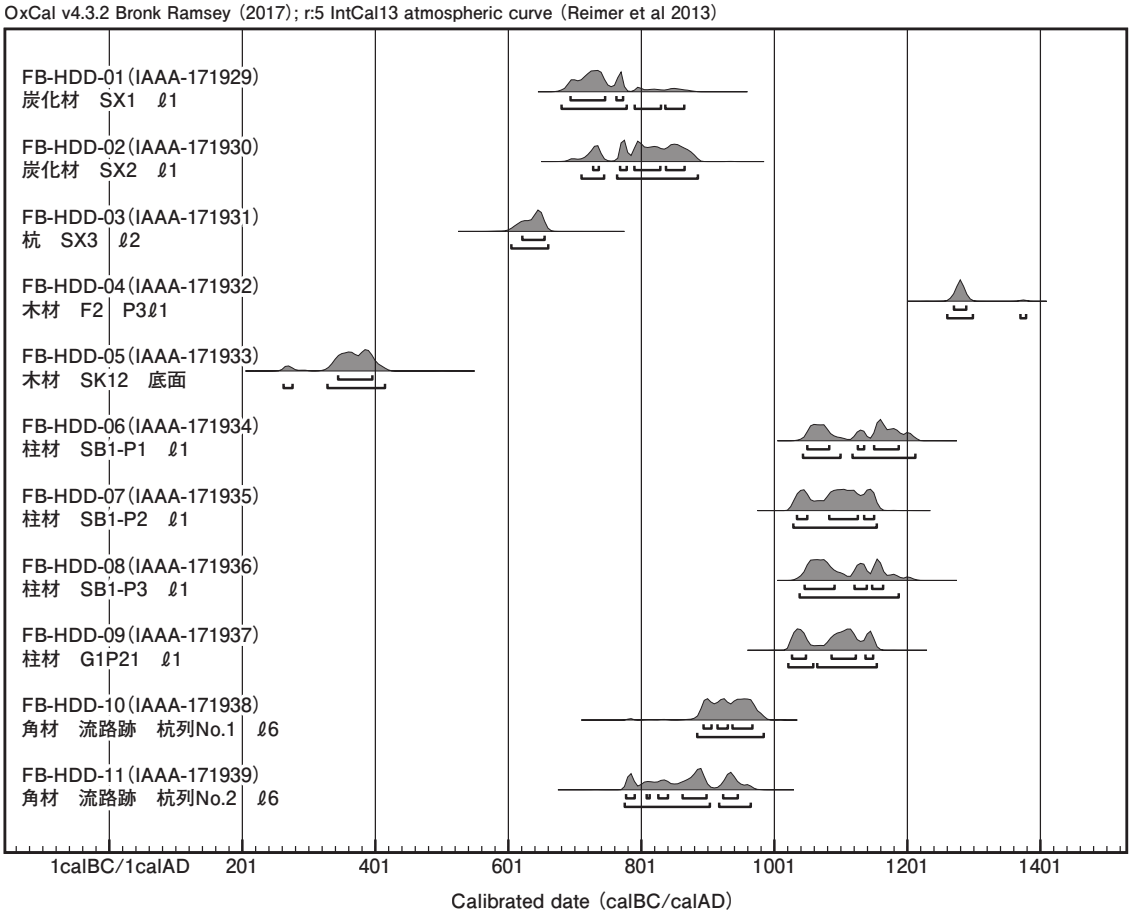


図7　暦年較正年代グラフ（マルチプロット図、参考）

第２章　舘ノ前遺跡出土炭化材の自然科学分析

株式会社　加速器分析研究所

第１節　樹種同定

１　試　　料

舘ノ前遺跡は、福島県伊達郡桑折町大字松原字舘ノ前に所在する。本分析では平安時代とされる遺構から出土した木材FB-TNM-01の同定を行った。

なお、この同一試料を含む２点の試料について放射性炭素年代測定が実施され、FB-TNM-01はおおむね推定に近いか、若干新しい年代値が示されている（別稿年代測定報告参照）。

２　分析方法

木片からステンレス剃刀で横断面、放射断面、接線断面の切片を採取し、ガムクロラールにてプレパラートを作成、生物顕微鏡で観察し、現生標本の形態に基づいて同定を行った。

３　結　　果

同定結果を表１に示す。試料はクリまたはコナラ属コナラ節に同定された。以下に同定の根拠を示す。

・クリまたはコナラ属コナラ節（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc. or *Quercus sect. Prinus*）

出土材は年輪はじめにやや大きな道管が数列配列し、徐々に径を減じて、やや角ばった小さい管孔が波状に配列する環孔材。放射細胞は単列で同性である。横断面においてクリもしくはコナラ属コナラ節の特徴を示す。しかし、試料の木片がかなり小さく、年輪界に直交する幅が狭いため、両者を識別する際に着目する放射組織の特徴を確認できないことから、クリまたはコナラ節と同定した。

４　考　　察

クリやコナラ属コナラ節は、東北地方の古代においては建築土木用材として優先的に利用されているため出土例が多い（伊東ほか2012）。本遺跡の出土例もこの傾向に調和的であると言える。

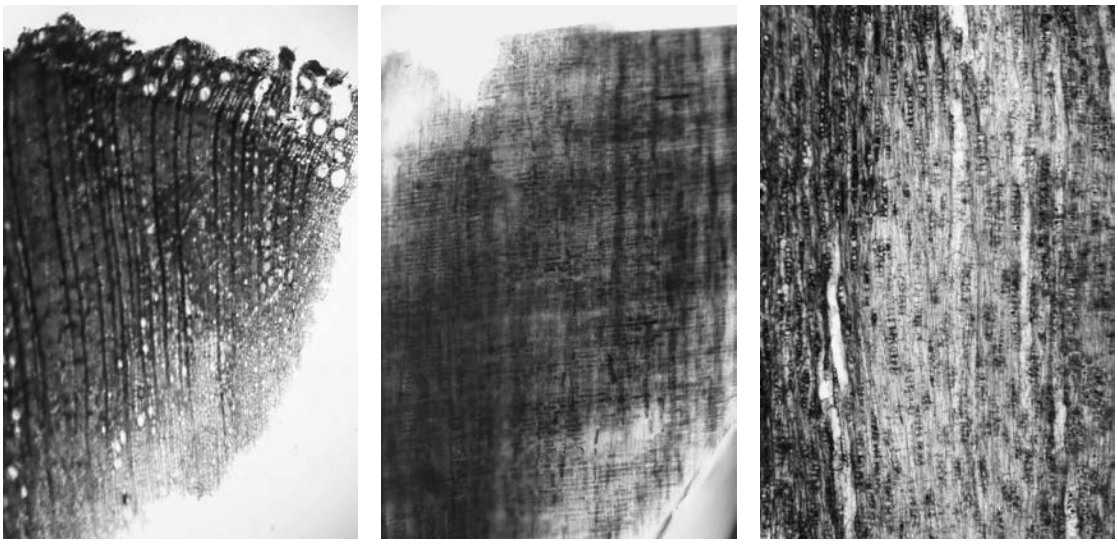
文　　献

伊東隆夫･山田昌久．2012．木の考古学　出土木製品用材データベース．海青社．

※）本分析は古代の森研究舎の協力を得て行った。

表４　舘ノ前遺跡出土木材の樹種

試料番号	遺構	層位	種類	樹種
FB-TNM-01	ＳＫ03	ℓ１	木材	クリまたはコナラ属コナラ節



ＦＢ－ＴＮＭ01－Ｃ　01－Ｒ　01－Ｔ

図８　舘ノ前遺跡出土木材の顕微鏡写真　　Ｃ：横断面　Ｒ：放射断面　Ｔ：接線断面　スケール：0.1㎜

第２節　放射性炭素年代（AMS測定）

１　測定対象試料

舘ノ前遺跡は、福島県伊達郡桑折町大字松原字舘ノ前に所在する。測定対象試料は、遺構から出土した木材と炭化材（枝）の合計２点である（表１）。なお、木材FB-TNM-01については樹種同定が行われている（別稿樹種同定報告参照）。

木材FB-TNM-01の時期は平安時代とされる。

２　化学処理工程

（１）メス・ピンセットを使い、付着物を取り除く。

（２）酸－アルカリ－酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常１mol/ℓ（１M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001Mから１Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が１Mに達した時には「AAA」、１M未満の場合は「AaA」と表１に記載する。

（３）試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO_2）を発生させる。

（４）真空ラインで二酸化炭素を精製する。

（５）精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。

（６）グラファイトを内径１㎜のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

３　測定方法

加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置（NEC社製）を使用し、^{14}Cの計数、^{13}C濃度（^{13}C/^{12}C）、^{14}C濃度（^{14}C/^{12}C）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx Ⅱ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

4　算出方法

（１）δ^{13}C は、試料炭素の^{13}C 濃度（^{13}C/^{12}C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表１）。AMS 装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

（２）^{14}C 年代（Libby Age：yrBP）は、過去の大気中^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。^{14}C 年代はδ^{13}C によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表２に示した。^{14}C 年代と誤差は、下１桁を丸めて10年単位で表示される。また、^{14}C 年代の誤差（±１σ）は、試料の^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2％であることを意味する。

（３）pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の^{14}C 濃度の割合である。pMC が小さい（^{14}C が少ない）ほど古い年代を示し、pMC が100以上（^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上）の場合 Modern とする。この値もδ^{13}C によって補正する必要があるため、補正した値を表１に、補正していない値を参考値として表２に示した。

（４）暦年較正年代とは、年代が既知の試料の^{14}C 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、１標準偏差（１σ＝68.2％）あるいは２標準偏差（２σ＝95.4％）で表示される。グラフの縦軸が^{14}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、δ^{13}C 補正を行い、下１桁を丸めない^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13データベース（Reimer et al. 2013）を用い、OxCalv4.3較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表２に示した。暦年較正年代は、^{14}C 年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。

5　測定結果

測定結果を表１、２に示す。

試料の^{14}C 年代は、木材 FB-TNM-01が830±20yrBP、炭化材 FB-TNM-02が850±20yrBP である。暦年較正年代（１σ）は、FB-TNM-01が1293~1255cal AD、FB-TNM-02が1170～1217cal ADの間に各々２つの範囲で示される。FB-TNM-01は推定におおむね近いか、若干新しい値となっている。

試料の炭素含有率は、FB-TNM-01が59％、FB-TNM-02が71％の適正な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

文　献

Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51(1), 337-360

Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 55(4), 1869-1887

Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of 14C data, Radiocarbon 19(3), 355-363

表５　放射性炭素年代測定結果（１）（δ ^{13}C補正値）

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ ^{13}C（‰）(AMS)	δ ^{13}C 補正あり	
						Libby Age（yrBP）	pMC（%）
IAAA-171940	FB-TNM-01	S K 03　ℓ 1	木材	AAA	-26.88 ± 0.24	830 ± 20	90.23 ± 0.25
IAAA-171941	FB-TNM-02	S K 04　ℓ 1	炭化材（枝）	AAA	-25.00 ± 0.25	850 ± 20	89.95 ± 0.24

［IAA 登録番号：#8866］

表６　放射性炭素年代測定結果（２）（δ ^{13}C未補正値、暦年較正用 ^{14}C年代、較正年代）

測定番号	δ ^{13}C 補正なし		暦年較正用（yrBP）	１σ暦年代範囲	２σ暦年代範囲
	Age　（yrBP）	pMC　（%）			
IAAA-171940	860 ± 20	89.87 ± 0.25	826 ± 22	1193 cal AD - 1197 cal AD（ 4.0%） 1205 cal AD - 1255 cal AD（64.2%）	1169 cal AD-1259 cal AD（95.4%）
IAAA-171941	850 ± 20	89.94 ± 0.23	850 ± 21	1170 cal AD - 1176 cal AD（ 9.6%） 1182 cal AD - 1217 cal AD（58.6%）	1158 cal AD-1249 calvAD（95.4%）

［参考値］

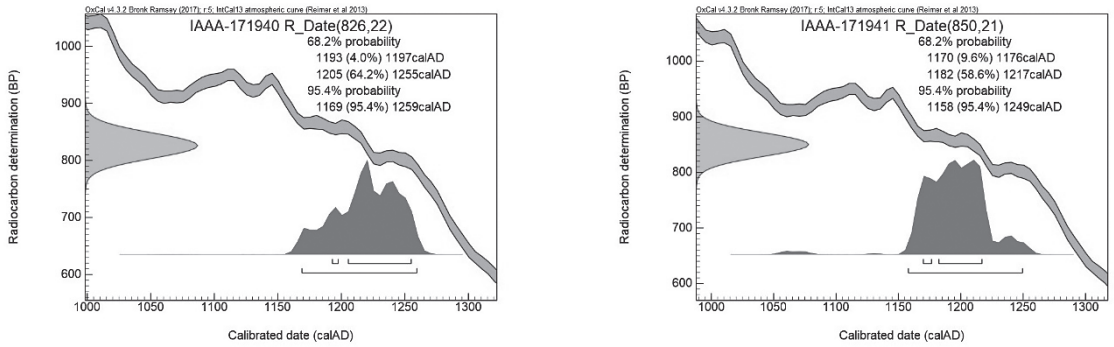


図９　暦年較正年代グラフ（参考）

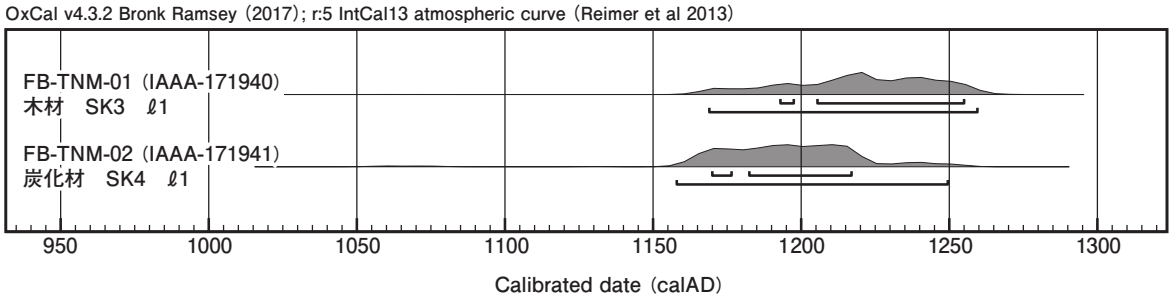


図10　暦年較正年代グラフ（マルチプロット図、参考）